女子文壇

第三巻第四號



明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

菜花



重松世い子筆

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添をこふ

見よ各校の評判を

育成研究會主筆
太田龍東
教育實驗界記者
中田春峰
共著

各校批評 女子東京入學案内 附入學試驗問題集

四六判紙數三百五十頁
定價四十錢 郵稅六錢

空▲前の▲好▲評

徳富蘆花原著 溝口白羊作詩
家庭新詩 **不如歸の歌** 廿三版
木版口繪入 紙數二百餘頁 定價金卅五錢 郵稅金四錢

尾崎紅葉原著 溝口白羊作詩
家庭新詩 **金色夜叉の歌** 八版
コロタイプ口繪 紙數三百頁 定價四拾五錢 郵稅金六錢

田口掬汀原著 溝口白羊作詩
家庭新詩 **女夫波の歌** 四版
三色版口繪入 紙數二百餘頁 定價金四拾錢 郵稅金四錢

宮中御歌所寄人中村秋香氏序 溝口白羊作詩
家庭新詩 **源氏物語** 再版
木版口繪入 紙數三百廿頁 定價金五拾錢 郵稅金六錢

坪内博士序 高須梅溪著
我が散文詩 三版
三色版口繪挿畫 紙數四百頁 定價五拾五錢 郵稅金六錢

發行所
東京淺草區下平右衛門町岡村書店
同 神田區表神保町福岡書店

大賣捌
東京堂、上田屋、大川屋、北隆館、林平
目黒、松邑、文林堂、修學堂、大坂杉本其
吉岡、熊本長崎、久留米菊竹、名古屋星野他

天下景廉の雜誌

中學英語 改題

新英語

第三卷第一號
二月十五日發行
實價稅共三錢五厘

發兌 東京神田表神保町二 自祐社

賣捌 東京堂、上田屋、北隆館、東海堂、良明堂、其他

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

醫學博士ウオーカー原著（最新刊）
醫學士田口貞策譯述 定價金五拾錢 郵税四錢

女子家庭文庫 衛生美容術

此の書は諸種の運動や遊戯や飲食物の注意や其の他衛生上の原則を應用して先づ淑女の身體を健康にして其の美容を養成し維持する所以を說いたものである此の書は身體の健康と美容とを養成する構造的衛生に關する方法と美容を害する諸種の病氣等を治療する矯正的衛生に關する方法とを詳說したものである此の書を熟讀して能く其の說明する衛生法を實行すれば肥滿過ぎたるものは少しく瘦せ瘦せ過ぎたるものは程よく肥えるやうになり坐作進退の擧動も亦優美嫺雅にすることができる◎此の書を熟讀すれば耳目鼻口等の注意は勿論顏面手足の皮膚を美麗に保存し日射凍傷ひゞあかぎれ等總て美容を害する缺點の豫防法と治療法とを知ることができる◎

淑女は身體の健康を維持するの必要なることは固より言を待たざれども亦身體の美容を養成し維持することが肝要であるされば此書を熟讀玩味して衛生法を實行すれば美容を構造すると共に其の美容を實行する缺點は之を衛生より矯正することができる衛生の原則に基きて身體の美容を構造し其の缺點を矯正する方法を正確に說きたるは本邦に於て此書の外に未だ適切最良の書がないされば國民の良妻賢母たらんと欲する淑女諸君は勿論既に國民の良妻賢母たる婦人諸君は須らく本書を一讀すべきである

御註文は振替貯金（本會は第三五五番）が便利です

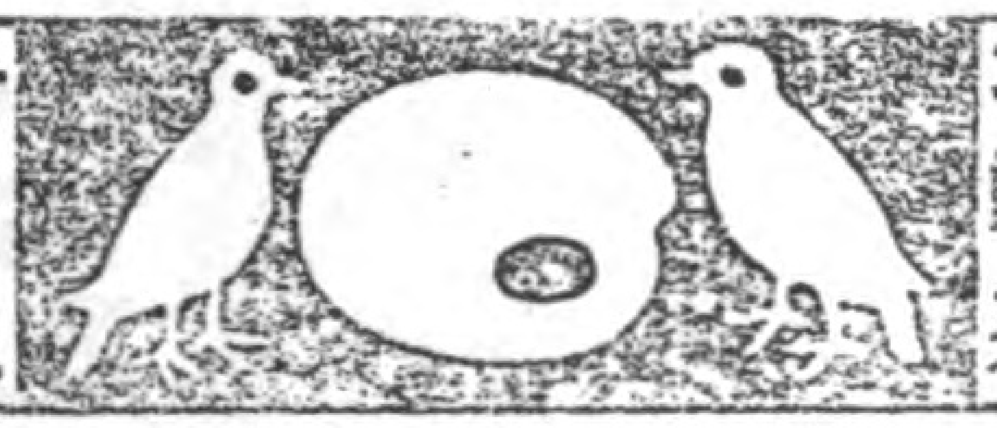
監督ヴインセント原著『簡易生活』譯者布施知足譯

家庭文庫 青年氣質

▲最新刊▲定價金參拾錢▲郵税四錢

青年男女に有りがちなる缺點其陷りやすき誘惑の例證を最も寫實的に指摘して其覆轍を戒め矯正の方法を示したる好著にして眞面目なる教訓の中に小說的興味を有せり自ら誡めんとする青年男女は固より其の教育に熱心なる人々の一讀を要求す

大下藤次郎著 訂正三版



水彩畫階梯

袖珍美本 定價金參拾錢 郵税四錢

堺枯川著（言文一致）**普通文** 第十八版 金武拾五錢 郵税二錢

山田美妙（言文一致）**文例** 第六版全四冊金六拾錢郵税不要

五十嵐白蓮編 新撰**女子文範** 定價金參拾五錢 郵税四錢

山寛著 **英語の手紙** 訂正五版 金武拾五錢 郵税二錢

月刊雜誌 **家庭之友** 羽仁吉一 羽仁元子 執筆 一冊六錢一年（郵税共）六拾錢

月刊文學雜誌 **文庫** 一冊拾六錢 六冊九拾錢 郵税共

版元 東京本郷區駒込西片町十番地 內外出版協會

大和の花



三宅克己先生筆

大日本淑女學會

第四回新學期開始

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

會員募集

規則書進呈す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り進呈す

◎三月三十日限り入會金全免す

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

▲報知新聞評 本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也



近藤廣子女史

（大阪府立清水谷高等女學校教諭）



嘉悦孝子女史

（女子商業學校舍監）



安井哲子女史

（近日暹羅國より歸朝せらる）

（秋月百枝子寄贈）

文藝同好會の餘興

二月十一日（紀元節）東京芝浦大光館にて開催

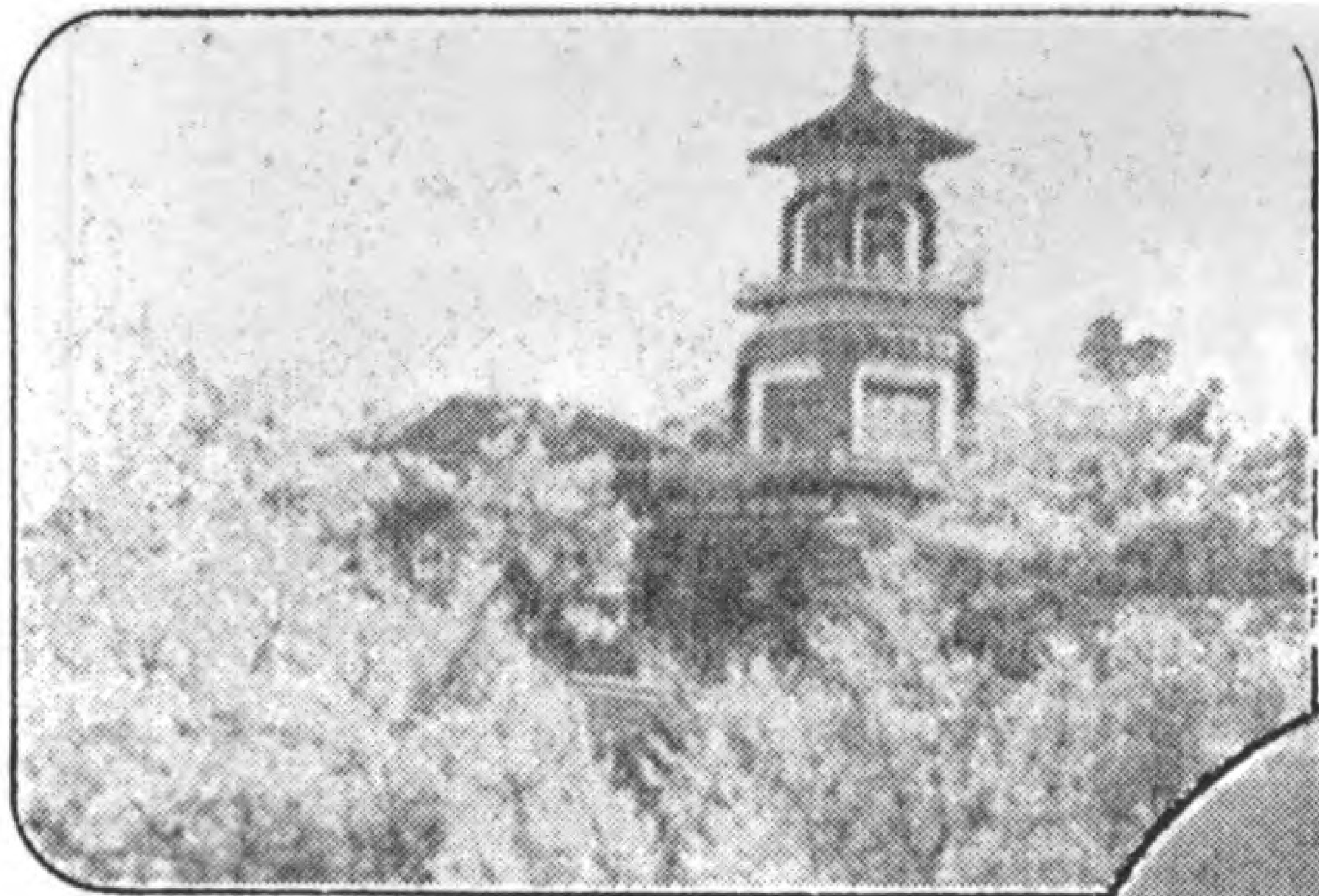


活人畫　白河女　萱野姫



新作喜劇

（野口春霞生夜間撮影）



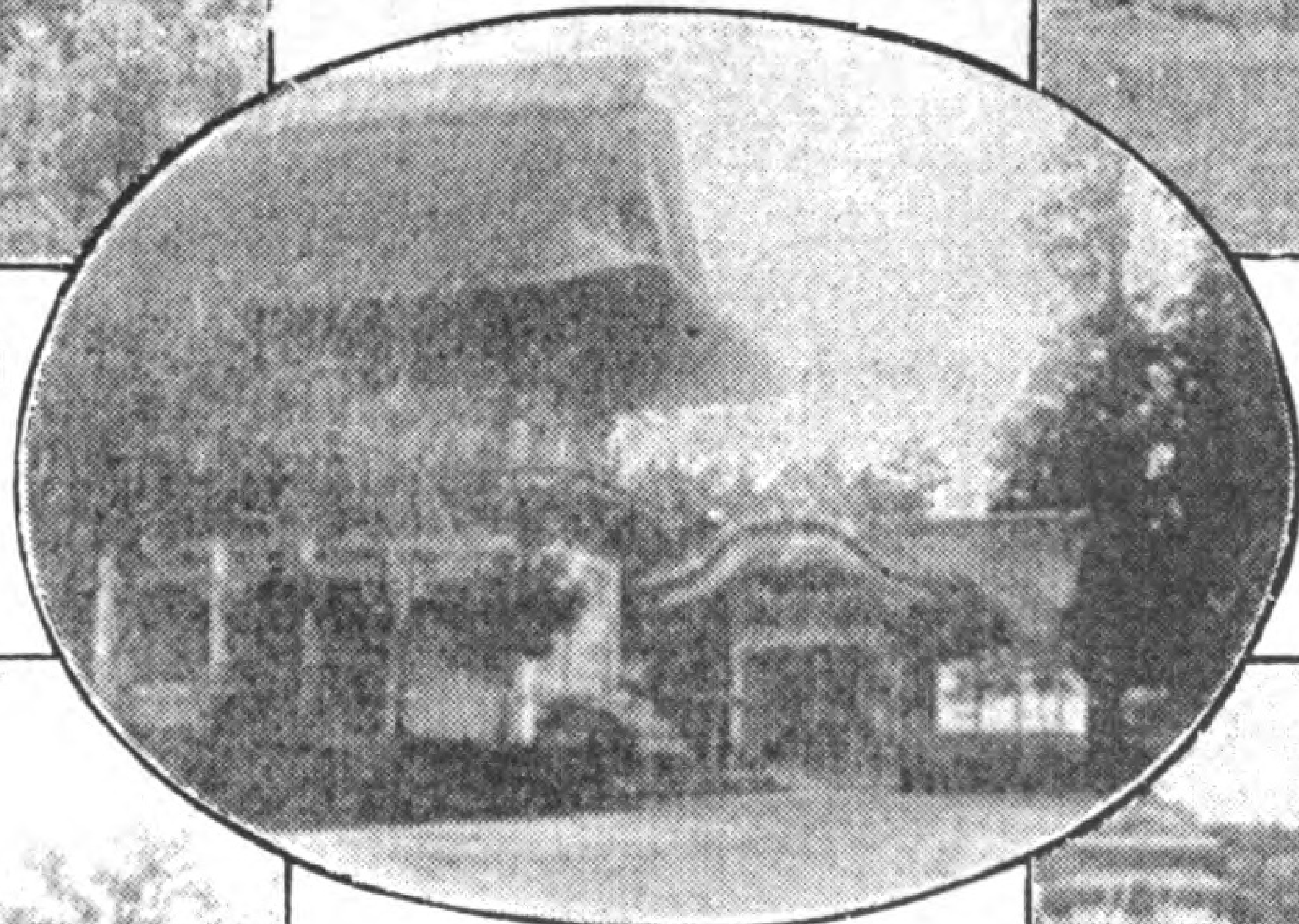
（失名氏寄贈）

加賀金澤官幣社尾山神社の櫻花



（佐藤芳子寄贈）

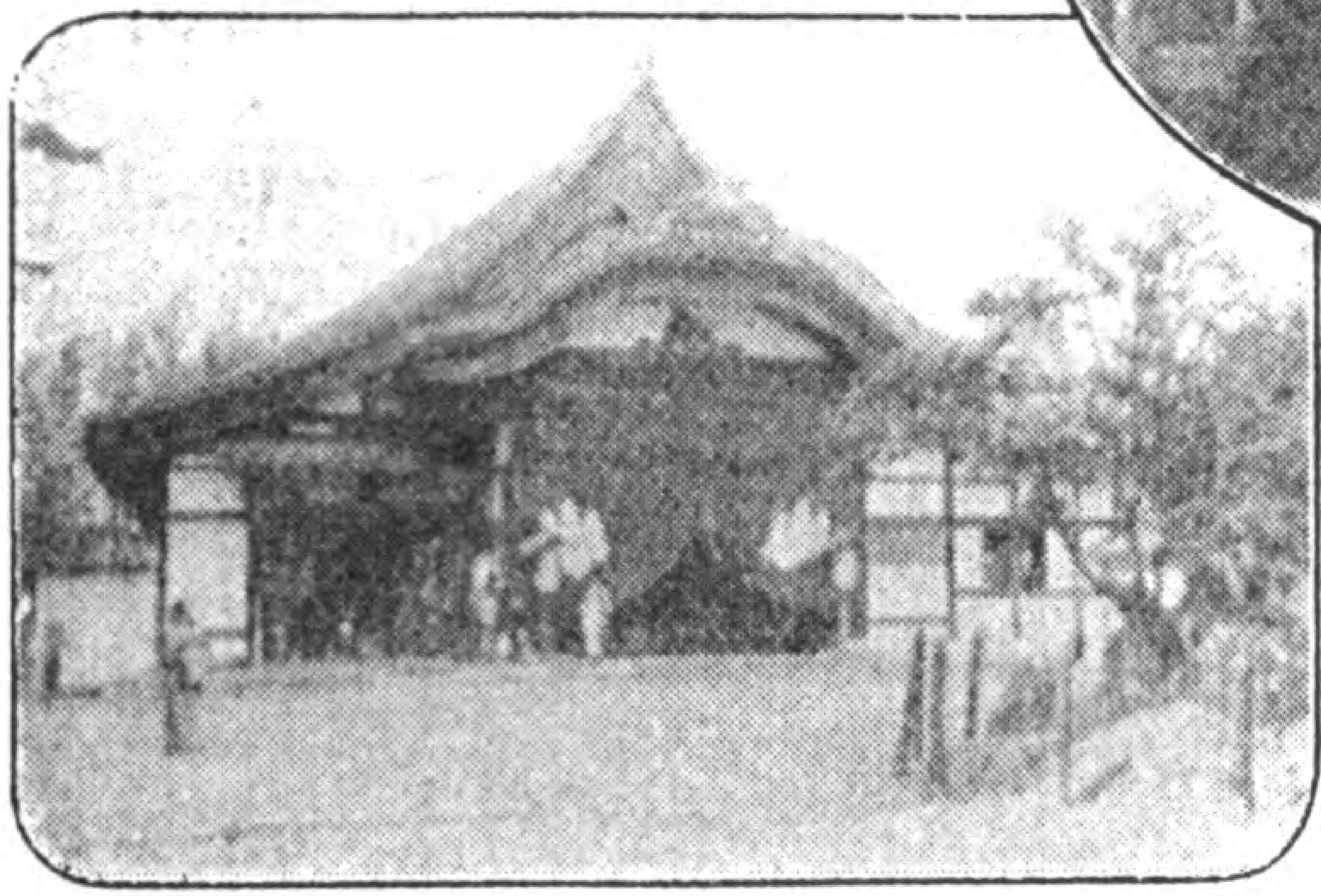
羽前鶴ヶ岡庄内招魂社の櫻花



陸前岩沼
竹駒神社

（武者雪子寄贈）

山城宇治醍醐大本山



（中野玉波子寄贈）

會津柳津圓藏寺虛空藏堂



（横田朝子寄贈）

誌友おもかげ（五）



（下關）國弘きく子



（金澤）美谷薫子



（大阪）野崎住惠子　梅林壽子

（羽後）田中とみ子



（栃木）川島志の子



（記者申す　續々寄贈を願たい御都合でお返し志ます）

女子文壇の廣告に依り御注文の節は其旨御書添を乞ふ

陰萎特効新劑（獨逸新輸入藥）

內服 ヨヒンビン

內服用壹劑 藥價送料共壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授スピーゲル氏の發見に係る男女生殖機不能即ち**陰萎病（陽物無力）**腎虛**神經衰弱**遺精、夢精、早漏、過房、元氣衰弱、老衰無力生殖虛弱手淫に起因する諸症早老者に天下無比**可驚奇効**ある新發見藥也

精力を**增進**し生殖器を强健に**勃興**せしめ人生の最大**快樂**を得んと望む者は早く試みよ峻烈偉大なる特効眞に**電光の如し**

世にありふれたる賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白なり

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日**ほくろそばかす、なまづ、いほ**は**拾日**目に必らず美麗に除去すること**保險附**

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完ふせよ來館者へ全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥▲價は壹劑分壹圓、參劑半分三圓、六劑分五圓、拾貳劑分拾圓、送料各拾錢宛、必ず添送の事郵券代用二割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

器械不要 迅速鮮明 早取寫眞

日進ノ今日化學ノ進步實ニ著シク其照用ニヨリテ得ル處ノ裨益又偉大ナルハ世人普ク知ル處ナリ本館發明ノ早取寫眞術ハ所謂破天荒ノ新發明ニシテ名ノ如ク器械ヲ用ズ二三ノ藥品ヲ混合シ日光ノ作用ヲ以テ人物又ハ風景等其他如何ナル者ニテモ大小論ナク思フ儘ニ速寫シ得ル嶄新愉快ナル大發見ナリ寫シタル者ト少モ異ナラザレバ見ル人ヲシテ覺ヘズ快哉ヲ三呼セシム藥品ナキ地方ハ本館ヨリ送ル、書代及郵税トシテ爲替ニテ金**拾七錢**ヲ送レ教授書ヲ送ル此書ヲ讀メバ誰ニテモ直ニ速復シ得ル也抑モ本法ハ本館カ責任ヲ負ンデ致授スル者ナレバ本書ヲ讀ミテ若シ器械寫ノ通リニ寫ラザレバ何時ニテモ**返金**ス安心シテ注文セヨ尚本書ニハ器械不用鮮明早取印刷法輕便電氣燈蒟蒻版用複寫いんき製法及印刷法紙石盤鍍金術のみ取粉齒磨香水石鹼白粉洗粉鼠ト蠅取藥毛生藥夏日氷ノ製造法リモナーデー蜜柑水ラムネ製法感冒治法頭痛治法肺病治法おこり落藥酒醬油倍增法其他家庭ニ必要ナル料理法四十餘種廢物利用法數件其他發効確實ナル諸種ノ製法百餘種記載ス◉附言珍奇ヲ好ムハ人ノ情ナリ依テ前記早取寫眞術ヲ以テ已レノ肖像ヲ名刺用紙ニ早取シ器械不用早印刷法ヲ以テ已ノ姓名ヲ好ム字體ニ印刷シ**寫眞入リ名刺**ヲ製セバ一層面白ク見ル者誰ニテモ羨ムナラン。本書ノ名ヲ萬物製法秘術寶典ト云フ郵便切手ニテ代金御送附ノ方ハ二錢增（十九錢）ノコト

三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

道具不要輕便 食パン 幷ニ 和洋菓子製法書

道具も熟練も入らず皆さん家にある道具で拵へる事が出來て米より費用少くて滋養多く出來たパンは誰の口にも適し美味で柔く小供や老人の好く事は一通でない其の上一度に三週間分も拵へて置けるから毎朝飯を焚く世話もなく砂糖や卵を入れるとカステラとなり餡を包めばパンとなり其他色々の造り代へも出來るから小供の間食としても安くて滋養は多く脚氣はやらず衞生上安心の出來る食物を得る事が出來ます即ち此書は此パンの拵へ方ゝ饅頭や[illegible]甘やビスケットや櫻餅や砂糖漬其他色々の御菓子の拵へ方を一度讀めば誰でも直に出來る樣に書いてあるから本書を公にして以來大いに世人の歡迎を受け發賣高も非常に多く御買求めの人からは非常に便利で美味で徳用で手垢のつかぬ美しい食物が出來るとの禮狀を辱ふして居ります。此書御入用の御方は郵便切手十六錢を御送りになれば直に送本致します。

三重縣桑名矢田磧 **弘報館**

東京京橋大鋸町十一 女子文壇社出版書目 （振替口座第七一二九番）

報知新聞記者 中村木公君編

卅九年実地精査 女子遊學便覽

全一册並製 正價三拾錢 郵税四錢

▲萬朝報評

都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正増補と號しながら數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば調査は善く行屆けり、尚ほ職業案内及學費の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を皷吹せずして、東京遊學の危險なるを説き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

鈴木文人君著 彩色插畫數葉入

小説美文 朝ばれ

全一册本綴上製 實價四十錢 郵税四錢

「萬朝報」曰く どれ是れも極めて溫雅な文體て女學生の好きさうな册子なり。

「都新聞」曰く いづれも短篇の小説ながら、著者が所謂寂寞の歴史に得たる感興と省察とは、能く此裡に露はれたり。

「女學世界」曰く 新たに發行したる少女趣味の小説で何れも未だ浮世の荒波にもまれない青春の女の幽情を寫したものです。

諸大家選評

女子懸賞文集 （第壹輯）

全四百廿頁洋裝 正價廿五錢 郵税六錢

▲電報新聞評

當選の詩文を一纏めにしたるものにて短篇小説、消息文、抒情文、叙事文、論文、新體詩、和歌、俳句、はがき文、圖畫の諸欄に分てり近頃の青年男女の文章は一體に進み來りしが殊に本書は女子と云ふだけに時節柄歡迎者多からん。

河井醉茗君著 原色刷密畫入

詩と美文 玉むし

色クロス金箔入上製 實價五十錢 郵税六錢

▲婦人世界評

醉茗君の筆のやさしさは、本誌の讀者諸姉が御存知のとてありませう。この玉蟲は君の美文と新體詩とを集めたもので、いづれも婦人のために書いたのですから綺麗なものばかり體裁もなか〳〵凝ったものです。

小森松風君著 （女子文學全書第二）

言文一致文範

全一册大判並製 正價四十錢 郵税四錢

▲中央新聞評

言文一致の起源より發達、種類、作法等を示し文範として諸名家の論説、抒事、抒景、日記等數十編を示したり斯道研究者の歡迎を受くるものならん。

小森松風君著 （女子文學全書第壹）

美文作法

全一册大判並製 正價四十錢 郵税四錢

▲中央新聞評

本書は總論に於て美文の起源名稱種類を説明して抒事文、抒情文、抒景文に關する古今文士の文例を出し次に文體の種類美文作法美文と韻文普通文小説との關係を述べ更に美文飜譯法漢文の素養讀むべき書類、各時代の美文名家文話等を詳説したり美文研究者の一讀すべき良書と云ふべし。

○直接特約賣捌所

東京神田表神保町 東京堂

京橋尾張町 東海堂

日本橋呉服町 北隆館

京橋中橋廣小路 前川文榮閣

京橋鍋屋町 良明堂

神田裏神保町 上田屋

毎號 皇太子妃殿下賜上覽

第三巻第四號目次

(丙の四)

女子文壇

第三巻第四號

明治四十年三月一日發行



自分の才

女子も文藝家として立つ事が出來るか何うかと云ふ事は、しば〳〵繰返された問題で、今更珍らしく論ずるまでもありませんけれど、諸孃の内には未だ引込思案の方が多からうと思ひ、一言しますが、現今、女學生となつて勉強して居られる諸孃こそ、文藝家として立つべく、最も都合の好い方々です。皆が皆、然うであるとは申しません、其中の若干かの方に、志を立てゝ眞面目に文學をやつて頂きたいのです。やると云ふ决心さへ堅めたなら、屹度文藝家として立てるに違ひないのです。諸孃は今迄の閨秀作家を見て、豪いやうに思ひ、迚も自分等はあんなに爲る事は出來ぬ、作を讀むと何うして斯んな上手な事が言へるだらう、迚も自分等には斯んな事が言へないと思ふでせう。けれども他には他の立場があり、自分には復自分だけの立場と云ふものが必ずあるものです、それを上手に引張出しさへすれば、ものになるのです、では何うするかと云ふに、曰く修養です、自分を活かすのは修養です、其點に於て以前の作家より今後の立たうとする作家の方が何れだけ修養に都合好くなつて居るか知れません、それを勘酌かずに、自分はものになるまいと斷定して了うのは早計です、木は植て見よ、種は蒔いて見よです、諸孃よ、幸ひに自重したまへ。

奈良朝の女歌人

佐々木信綱

我國の歷史上韻文の最も盛んであつた奈良朝には、女歌人として勝れた人が多かつた。歌人の多く輩出した有名な大伴氏の一門だけにも、まづ旅人卿の妹なる坂上郎女と、郎女の娘の坂上大孃、田村大孃の三人があつて、いづれも和歌に上手であつた。殊に坂上郎女は勝れてゐて、奈良朝の女歌人の代表者として見ることが出來る。こゝに彼の長歌一編を紹介して、奈良朝女歌人の面影を忍ばうと思ふ。

次にあげる所は、萬葉集三の卷に出て、郎女が理願と云ふ新羅の尼の死を悼んだ歌である。奈良朝の時代は佛教が盛んで、丁度今歐米から基督教の宣教師が多く來てゐるやうに、朝鮮などから宣教師が來てゐた。理願と云ふ尼もそれであつて、かねて大伴家に寄寓して、已に數年になつたが、聖武天皇の天平七年に、病氣で世を去つた。その時郎女の母石川命婦（大伴大納言大將軍安麿卿の妻君）が、攝津の有馬溫泉に入浴に行つた留守中で、郎女ひとり家にをつて、葬式の事などもした。その時にその悲しびを詠んで、溫泉地なる母に贈つたのがこの歌である。

栲角の新羅の國に人言を吉しと聞かして問ひさくる親族兄弟無き國に渡り來まして大君の敷きます國に內日さす都しみゝに里家はさはに在れども何方に念ひけめかもつれもなき佐保の山邊に哭く兒成す慕ひ來ましてしき妙の家をも造り荒玉の年の緒長く住ひつゝいましゝ物を生るれば死ぬちふ事に免ろえぬ物にし有れば憑めりし人のこと〳〵草枕客なる間に佐保河を朝川渡り春日野を背向に見つゝ足引の山邊を指して晩闇と隱りましぬれ言はんすべせんすべ知らに徘徊りたゞ獨して白妙の衣手ほさず嘆きつゝ吾泣く淚有間山雲居たなびき雨にふりきや

反歌

留め得ぬいのちにしあれば敷妙の

家ゆは出てゝ雲隠りにき

歌の意は、遠い外國の新羅から、日本の國はよい國であるからといふ人の言葉によつて、はる〲と海を渡つて、話をする親類兄弟もない國にいらつしやつて、此日本の國の都の中には、里も家も多くある中を、何と思ひなされてか、これといふ事もない此佐保山のそばの、自分の家を慕つて、御出なさつて、邸内に家をも造り、幾年の長い間住まつていらつしやつたのに、凡そ命あるものは死ぬといふ、世の中の習ひて、頼みになさつてゐる自分の母の命婦はじめ、人々が皆温泉へ旅に行つて留守のうちになくなられて、佐保川を朝渡つて、春日野をあとにして、夕かげのくらい山かげへ葬られてしまはれた。何ともいひやうもなく、又しやうもなく、何も手につかないで、唯一人ぼんやりして、衣の袖の乾く間もなく泣く自分の涙よ、有馬山に雲がたなびいて、雨と降りましたか、如何ですといふ意である。反歌の意は、とゞめる事の出來ない人の命の事である故、この家を立いてゝ、遠く雲にかくれて最早此世にない人となられた事よの意です。

萬葉集を御覧になる諸嬢の爲に、大伴氏の系圖を擧げて御參考に供しませう。

大伴安麿 ＝ 石川内命婦
- 旅人
  - 家持
  - 書持
- 田主
- 稲君
  - 胡麿
- 坂上郎女 ＝ 大伴宿奈麿
  - 坂上大嬢
  - 田村大嬢

從妹の轉校をいましむる書

文學士　枯林生

昨夜毋堂來訪せられ、御こと同級に二三名某校へ轉校するに就て御こと儀も心動き候由にて、如何せんとの御相談に及ばれ候が、私は大反對に候。

指折り數ふればはや三年前、御こと父上逝去せられて

より、御こと等兄妹の教育に就ては私何處までも御引受申す由、父上の靈にも誓ひ、いろ〳〵の學校をも考へ、只今の學校に入學の手續をすましたることに候、以來既に二年生となり、來月は三年級に進むことゝ相成、成績もよく級中の俊秀と教師間にも認められ望を囑せられ居る由にて、私も安心して居りしことにて候、然るにほのかに聞くところによれば、私御ことを今の學校に入れしめしことに就て、「兄樣は私を私立學校に入れちやつた」と喞たれ候事もある由、いみじき心得違に候。

一躰御ことは何の爲に學校へ通學して學課作法を修めらるゝや、よく〳〵考へらるべし、他日他に嫁しての上は、一家の主婦として夫の事業を解し、之をなぐさめ、之を勵まし、家事を充分に取捌きて、夫をして内顧の憂なくして、而も樂しく勇み進んでそのかゝづらふ事業に向つて全力をそゝがしめ、又子女の母としては、愛に溺れず善に導いて倦まざる所謂賢母良妻となるべき素を養ふため、基礎をつくる爲めの修學には候はずや。

校規紊亂教授不親切ならば、隨つて如上の如き素を養ふに由なきは勿論なれど、學校にも種々あり、官立府立私立を問はず、評判の多少に關せず、校舍の大小に係らず、要は唯その學校の校規教授方法の如何教師の人格如何に注意すべきことに候、御ことの學ぶ學校は私立とはいへ、校舍小なりとは云へ、校長に碩學の士を戴き、その他の教師皆熱心にその職に當り、生徒各自に對する注意監督もよく行屆けるに、私立なるといふ名を厭ひ、校舍の小、生徒の數の少きを喞ち候事は、女子に普通の虛榮心より來る感情よりかと存じ候。

ひとり御ことをのみ責むるにては無之候へども、總じて今の女學生は當面の目的を閑却して餘事に心をなやますことに候、云ひ替ふれば御こと儀轉校を望むは、某校生徒となる時は、名高き學校の事とて、肩身が廣し面白しといふ事にあるかと存じ候、然かり某校に入らば、肩身も廣かるべく、運動會の折など、見物人も多く來て、極めて賑やかに花やかに候べし、而も之等

を理由として轉校したしといふ考は、誤の甚しきもの、所謂當面の目的を閑却したる次第に候、男子と違ひ女子は修學の時代極て短く候を、當今一般女學生の如くさながら春花見の宴をひらけるが如く面白をかしく浮々と過ごさんとするは、誤の甚しきものに候、肩身が廣し運動會が花やかなりといふよりは、敎師の如何、敎授方法の如何、監督の如何等の事共を考へて學校の優劣如何を考へみるべきことに候。

御こと學べる學校は、これらに就て欠點有之候や、設立以來日なほ淺き事故、生徒の淘汰意に任かせず、玉石混淆の氣味は或はなきにあらざるべきも、御こと當面の目的なる賢母良妻となるべき素を養ふといふ點に於て、欠點有之候や如何、篤と考究すべきことに候、若しこの當面の目的に達するに就て欠點有之候はゞ、欠點なき他の學校に轉校することは必要と存じ候、私は御こと學べる今の學校に就て、是等の欠點をば認めず候。

私は決して某校を譏るにては無之候、某校は府下女學校の第一流と信じ候、然し乍ら御こと儀の學校も、名は私立、校舍は廣からず、肩身はよしせまく、運動會などは極めて花やかならずとは申せ、實質の上に於て同じく第一流と私は信じ候、殊に御こと儀一昨年より足掛三年、校長敎師は既に御ことの性質才能を知り居られ候、是れ御ことに就て極めて悦ぶべき事と存じ候、敎育の効果を充分にせんとせば、先づ被敎育者の性質才能を知るにあり候、御こと儀は既にその性質才能を師に知られたり、當面の目的に達せしめんとする導者は如何にして御ことを導かんの手段を知り居られ候、されば御こと儀は唯師の云ふがまゝに進めば可、かくして今後三年をへば、自ら知らぬまに彼岸に達し得らるゝにて候。

御こと今轉校しえたりとせよ、多くの師は多くの生徒中よりして御ことの性質才能を知り、御ことをよく導き敎へ得る迄には、一二年を要するやはた知るべからず、よし一二年は經ずとも、被敎育者にありては自己を知らぬ師に假令暫時なりとも接することは、好んで

すべき事にはあらず、且や授業方法に至りては、各學校各異り候、從來と異る方法によりて教授を受くる時は、智識の開發上大なる妨をなす事あり、他校より轉學生徒の學力優等なるものも、一時學力劣等の觀を呈するを常とすることは、この原因に外ならず候。

私は御こと是等の不便ありとも轉校したしと云はば、唯肩身廣し運動會花やかなりとの虛榮心よりとしか思ふ能はず候、かゝる女子は將來望なきものに候、私は御こと儀かゝる考はゆめ〳〵持たざることゝ信じ候、殊に父上を失ひ下に一妹一弟の姉として、將來立派なる女子として、仰がれ慕はるべき覺悟を有する御ことの、かゝる浮きたる考は持ち得べからざることと信じ候、唯年若きことゝて親しき友達の誘ふがまゝに、ふとかゝる考を起したることゝ存じ候、終りに私は御こと儀の家の事情よりして、轉校するよりも只今の學校に在學することの心安かるべき由をつけ加へたく候。

御存じの如く、某校は當代名士富豪の子女の通學少からず候、學校にては勤儉質素を守るべき由をしきりに申聞かし候へども、あまり立入りても世話を燒きかぬるところも有之、又友達として交る上は、華美贅澤なる風俗習慣も目擊すること多かるべく候、御こと儀の今の家の事情は、兄上一家を肩に擔ふ迄は、出來得るだけ質素簡易の生活を營む必要有之候を、之等友達の華美の風俗を見贅澤なる習慣を思ひては、心安からぬ事もしば〳〵あるべくと存じ候、榮華は浮べる雲の如しと、富貴なるものに對して冷然たる態度を取りたきは勿論に候へども富貴の外に超然たることは、堂々たる六尺の男子もなほ且つ難しとするところ、殊に女子の身にありては心細き思にうたるゝ事少からずと存じ候。

以上述べ來り候ごとく、當面の目的に對して只今の學校と某校との優劣これなしとせば、たとへ暫時なりとも自を知らぬ師の教育を受くることゝ、異る教育の方法により學ぶことゝ、心亂すべき恐あること等をも厭はず轉校を試むる必要は決して認めず候、御こと儀幸

に級中の俊秀と目ざゝれたるなれど、私の目よりみれば、そは同級生と比較しての事にて、未だ極めたる俊秀とは認められず候、自負は女子の常にして學習の妨げ極めて厭ふべきものに候、研く上にも研きて立派なる女子となられんことを切望いたし候、早速私面晤の上委曲申述べたく候へども、昨今俗事蝟集閑話を許さず、而もかゝる事は早き程よしと存じ候へば一筆認め御送申候、繰返し／＼熟考せられたく候、草々。

感情に訴ふる色彩

文學士　沼波瓊音

色彩の配合の、目より入る美術に於て必要なるは固よりなれど、感情に訴ふる詩に於ても、讀む者の腦裡に色彩を感ぜしめて美を助くるとあるべし、さてこの色彩の配合なるものは幾分か變遷のあるものならむ、又心理上古今を問はず人は必ず或る配合を好むといふやうなる規則のあるかも知れず、兎に角或る歌集をとりてこの調査をなさば何か珍らしき結果を得るともやと思ひ立ちて、それにはかの古今より金葉、詞華に至り、遂に技術として成功したる新古今和歌集こそ恰好ならめと考へて試みしなり。

色てふもの、むつかしくいへば、物の、太陽の光線を吸收しておこるもの丶外、其の接する他物の色と相映じて「メランジオプチック」をなし、またかく相映ずるにも其色の性と其物の表面とによりて度の差を生じて、其の色なるもの丶種類は殆んど窮むべからず、されど詩に於ける色彩などは、極めて直覺的に見たる方適せんと思ひて、その分別は成るべくおほまかになしたり。

同物にても、時によりて色の變化あるものは勿論別にしたり、例へば秋なほ淺き頃の淺茅は綠に入れ、暮秋頃のは赤にしたるが如し、又一物にて二以上の色あるものにて強いてその一色のみを擧ぐる能はざるものは二以上の色に別ちて入れたり、例へば萩（勿論普通

のものをいふ）を白、赤、とし、山鳥の尾を黄赤色と黒斑とになしたるが如し。

何物にても色なきは無けれど、すべて直覺的に色彩の感をおこすべきものを採りたり、もとより遺漏を免れざれど、まづ左に示す如く、大躰は知るべし。

「綠、白、」四十四首、

笹、露、(四)　槙、露、(三)　草、露、(三)　若草、雪(三)
杉、雪、(三)　松、雪(三)　杉、落花(三)　淺茅、露(三)
笹、霜、(三)　榊、霜(三)　若葉、雪(二)　芦、浪、(二)
鶯羽、雪、(二)　柳、白雲(二)　柳、露、(二)　苔、落花、(二)
新樹、白衣、(二)　草、月、(二)　稻田、月、(二)　蓬、露、(二)
槙、氷、(二)　樫、霰、(二)　芝、露、(二)　松、月、(二)
槙、月、(二)　蓮、月、(二)　忍、露、(二)　荻、露、(二)
松、浪、(二)

「白、白、」二十二首

露、月、(五)　露、尾花、(三)　霜、月、(三)　白雲、櫻、(二)
露、夕顔、(二)　霜、鶴、(二)　霜、尾花、(二)　波、月、(二)
氷、月、(二)　川瀬、月、(二)　砂、鶴、(二)　霜、雪、(二)
白衣、露、(二)　白髪、花、(二)　洲、月、(二)　木綿四手、雪、(二)

「赤、白」十三首

紅葉、浪、(三)　常夏、露、(三)　入日、浪、(二)　紅梅、雪、(二)
朝日、櫻、(二)　入日、尾花、(二)　柞、浪、(二)　紅葉、月、(二)
紅葉、霜、(二)　紅葉、雪、(二)　蔦、霜、(二)

「黄、白、」四首

「青、赤、」三首、

山吹、波、(二)　楢葉、雪、(二)　芝、霜、(二)　女郎花、露、(二)
深川、紅葉、(三)

「綠、紫、」二首

松、藤、(二)　松、紫雲、(二)

「綠、赤、」二首

常磐木、紅葉、(二)忍、紅葉、(二)

「紫、白、」一首

藤袴、露、(二)

「青、黄、」一首

海、枯芦、(二)

「青、白、」一首

海、富士の雪、(二)

「白、黒、」一首

雪、炭やく煙、(二)

「赤、赤、」一首

夕日、淺茅、(一)
「紫、紫」 一首
紫蘭、あふちの花、(一)
「青、黑、 一首
螢、闇、(一)

「白、白、綠」 六首
月、露、荻、(一) 月、露、笹(一) 雪、月、榊、(一)
砂、鶴、松、(一) 露、月、草(一) 露、月、蓬、(一)
「白、白、赤」 四首
露、萩、(四)
「白、綠、黑」 二首
露、笹、夕立の雲、(一) 露、桃、墨染の袖、
「黑、青、綠」 二首
闇、螢、草、(一) 闇、螢、芦、(一)
「白、白、白」 各二首
露、霜、月、(一) 洲、鶴、月、(一)
「赤、赤、黃」 一首
入日、柞、落葉、(一)
「白、白、黃」 一首
月、霜、枯草、(一)
「白、白、褐」 一首
霜、月、朽葉、(一)
「白、赤、黃」 一首
露、淺茅、落葉、(一)
「白、白、青」 一首
月、氷、山藍の袖、(一)

「白、白、白、青」 一首
月、波、鶴、海、(一)
「黃赤色、黑、白、白」 一首
月、霜、山鳥の尾、(一)
「白、赤、綠、綠」 一首
霜、朝日、山、草、(一)

色の不適當なるは改め給ふべし、

以上擧げたるうち、二色配合に於ては「綠、白、」最も多く、三色配合に於ては「綠、白、白」最も多し。かく綠色に白色との配合最多にして、其の白色はまた綠の他の色とも配合せられ、白色を含みたるもの最も

多し、

白色を含むもの	十七	黄	五
赤	八	黒	五
緑	七	紫	三
青	六		

重なるものを數れふば斯くの如し、

又同色を集むることは極めて稀なり、たゞ白色に於ては三色配合の部にまであり。

動物の色を配したるは甚だ少く、鶯、鶴、山鳥、位にしてその中鶴第一位にあり、而してそは白色の鳥なることも注意すべきか。

邦人の趣味の淡泊なることはこの調査によりても甚明なり、殊に色に於ては淡泊の極なる白を最好むと云傾向も自然なりと云べし。人造物、人事上のものに於ては、山藍の袖、墨染の袖、白衣、木綿四手、白髪、炭やく煙あり、その數多からず。

知名夫人の職業

明治當代の上流に位せる夫人が如何なる職業を有せるかを調査し夫君の職業と共に觀察するも興味が多い。

◎文藝

三宅雪嶺（文學博士、日本及日本人主筆）花圃女史（著述家）▲篠田某（醫學士、開業醫）せい子（女醫、開業醫）▲水ノ谷藏也（彫塑家、美術學校助手）秋山もみち（彫塑家）▲福田多儷（畫家）瀾月女史（畫家）▲大塚保治（文學博士帝國大學教授）楠緒子（小説家）▲岡田三郎助（洋畫家、美術學校教授）八千代子（小説家小山內八千代女史）▲正岡藝陽（新聞記者）秋子（著述）▲中村樂天（新聞記者）鈴子（女學世界記者）▲伊藤銀月（著述家）政子（著述家）▲羽仁吉一（新聞記者）もと子（雜誌記者）▲森篤二郎（醫學士、歌舞伎主筆三木竹二）眞如女史（劇評家、雜誌記者）▲與謝野鐵幹（新詩人、明星主筆）晶子（詩人雜誌記者）▲山根吾一（雜誌主幹）千代子（小學生主筆）▲飯島榮太郎（雜誌記者）かれ子（雜誌記者、亞米利加婦人技藝協會主幹）▲三星庚吉（官吏）千代田登代子（看護婦會長）▲千葉秀浦（外國語學者）若柳燕孃（女俳優）

◎教育

武田英一（學習院教授）錦子（女高師教授）▲戸野周次郎（東京市教育課長）みちゑ子（深川女學校長）▲辻村延太郎（東京美術學校助教授）靖子（女子英學塾教員）▲後閑政（官吏）夫人菊野（女高師教授）▲茅原廉太郎（新聞記者）富士子（雜誌記者兼教育家）▲小池政吉（實業家）みち子（女高師教授）▲中村春雨（小説家）とう子（女高師音樂講師）▲斯波貞吉（新聞記者）やす子（女高師教授）▲馬上孝太郎（學習院教授）てる子（女高師訓導）▲佐々木吉三郎（高等師範教授）君代子（第二高等女學校教諭）▲西島政之（經濟雜誌記者）富壽子（第二高等女學校教諭）▲富永謙治（官吏）その子（跡見女學校教員）▲湯瀨禮太郎（官吏）とし子（日本女學校教員）▲塚本道遠（農學士韓國財政顧問附）はま子（家政學者、教育家）▲檜山鐵三郎（政治家）齋藤春代（裁縫女學校長）▲川邊治七（慶應義塾教師）みち子（女子大學教員）▲佐藤潔（ユコヴアーサリスト教會牧師）ため子（成美女學校英語教師）▲村松山壽（辯護士）なほ子（小川女學校教師）▲賴母木桂吉（新聞記者）こま子（音樂學校助教授）▲安藤喜一郎（文學士、音樂學校講師）幸子（音樂學校教授）▲武田秀雄（海軍武官）貢子（學習院女學部助教授）▲倉辻白山（新聞記者）富貴子（音樂學校助教授）▲穗積（二十銀行取締役）銀子（教育家）▲杉浦貞次郎（哲學博士）ちか子（音樂學校助教授）▲川井芳太郎（瓦斯會社員）稻子（三輪田高等女學校教員）▲鳥居龍三（人類學者）きみ子（教育家）▲田添鐵二（雜誌記者）幸枝（米國文學士、美術家、教育家）▲秦敏之（文學士、實業家）利舞子（シンガー裁縫女學校長）▲山脇玄（行政裁判所長）房子（女子高等實修女學校長）▲佐藤進（醫學博士、順天堂病院長）靜子（女子美術學校長）▲內海靜（廣島高等師範學校教授）壽子（跡見女學校教員）▲福田錠二（牛込教會牧師）とし子（成女學校教員）▲吉岡荒太（至誠學院長）鷲山彌生子（東京女醫學校長）▲瀨下清通（辯護士、ドクトル、オブロー）てつ子（第二高等女學校教諭）▲大久保高明（愛國婦人會事務員）みち子（前日本女學校教員

東京だより

▲東京も本月二十日から博覽會が開かれるやうになつたら嘸にぎはふてあらう、全躰地方の人は東京を買被つたり、東京を恐れ過ぎたりするが、東京は恐ろしい處でもあり、樂しい處でもあり、要するに都會として複雜なには違ひない、それだから東京を恐れるも恐れないも、其人の人格次第で、如何ほど誘惑が來ても其人格さへしつかりしてあれば、少しも恐るゝに足らない、却つて自分の修練になる、それを頭から東京を恐れて、折角勉強すればえらくなる才を抱きながら、山奥にひつこんで居るのは、又時勢に後れた人と云はねばならぬ、斯う云ふのは現今の若い女の方に多いやうである▲さて其の東京を恐れて居る人も、居ない人も機會があれば、東京を見物すると云ふ事は甚だ必要である、東京は兎に角、見るべき都會だ▲懸賞文に應ずるのを毛嫌いする人と、懸賞文に限り應ずる人とは双方も偏頗であらう、懸賞は一つの奬勵法であつて、何か努力に對して報酬があると思ふと張合になる、賞品を欲しいと云ふ一點張で物を作つた處が其作がつまらなければ落第する、選評さへ公平であれば懸賞も大いなる文藝の奬勵法である、近頃千圓二千圓と賞を懸けて脚本や小說を募るが、是も好い事で賞に大小こそあれ、出來る人は應ずるが可からう▲女子は兎角内氣になり易いが、今後新しい教育を受けた者は、追て活動的になるであらう、はねかへりも困るが、今の日本に欲しいのは、はつきりした女、換言すれば今少し感情も銳く、而して意志の堅固な女がどつさりあつて欲しい▲奥村五百子は永眠した、而も愛國婦人會の事業は永遠に其生命を保つてあらう、女史の如きは事業家としても模範とするに足るべく、一世の女傑として其名を永く殘すであらう▲文藝同好會は紀元節の午後芝浦で開かれた、集つたのは多く文藝を愛好する青年で、講演もあり新躰詩朗讀もあり、活人畫、喜劇なども愛嬌を添へた、當日は雪催ひの極く寒い日であつたに拘はらず八九十名の來會者のあつたのは熱心に文藝を愛する人のある事が知れる▲今や陽春三月、女子で云へば花の如き少女時代、四月は更に長閑に、うらゝかに一年の好時期、諸孃も此の百花爛發の好期を卜し、詩歌文章、或は圖書其他百般の思想的方面より觀察を下して、三春行樂の時を過されるが宜しからう

○全國高等女學校一覽

新學年も參りましたので、諸孃始め御姉妹は新に入學すべき學校の御撰擇に就きまして、いろいろ御計畫もあることとおもひます、本表は皆樣の御參考にもならうかといふ處より、ここに掲ることとしました。文部省の調査で昨三十九年十二月末日迄に高等女學校令により設置認可されました日本全國府縣、郡、其他私立一切を網羅してありまして修業年限、位置、沿革等一目して分明に且つ正確であります。

設立別	學校名稱	修業年限 本科	補習科	專修科	研究科	位置	沿革其他ノ事故
東京 官立	女子高等師範學校附屬高等女學校	五	—	—	二	本郷區	十八年八月設置
東京 府立	東京府立第一高等女學校	五	—	—	—	淺草區七軒町	二十一年十二月諸學校通則第一條ニ依リ東京府高等女學校トシテ神田區錦町ニ設置三十三年二月東京府第一高等女學校ト改稱三十二年四月ヨリ府經濟ニ變更三十三年二月更ニ改稱三十四年八月位置變更ノ認可
東京 府立	東京府立第二高等女學校	五	—	—	—	小石川區竹早町	三十三年二月設置同年四月開校
東京 府立	東京府立第三高等女學校	五	—	—	—	麻布區北日ヶ窪町及材木町	三十四年十二月設置三十五年四月開校三十五年九月鳥居阪町假校舍ヨリ移轉
東京 私立	私立日本女子大學校附屬高等女學校	五	—	—	—	小石川區高田豐川町	三十三年十二月設置三十四年四月開校
東京 私立	私立三輪田高等女學校	五	—	—	—	麴町區四番町	三十六年四月設置開校
東京 私立	私立東京高等女學校	四	一	二	—	芝區三田四國町	三十六年三月設置四月開校
東京 私立	私立日本橋高等女學校	四	—	二	—	日本橋區蠣殼町二ノ一四	三十九年三月設置同四月開校
東京 私立	私立淑徳高等女學校	四	—	—	—	小石川區表町	三十九年十二月設置四十年四月開校
神奈川 縣立	神奈川縣立高等女學校	四	一	二	—	横濱市西戸部町	三十三年十月設置三十四年四月開校
神奈川 町組合立	横須賀町豐島町組合立横須賀高等女學校	四	一	二	—	三浦郡横須賀町深田	三十九年三月設置同四月開校卅九年十二月廿七日同町谷町ヨリ同町深田ニ住
神奈川 私立	私立横濱高等女學校	五	—	三	—	横濱市	三十八年二月設置三十八年四月開校
新潟 縣立	新潟縣立新潟高等女學校	四	一	—	—	新潟市	三十三年二月設置三十三年四月開校三十九年四月新潟縣立高等女學校ヲ改稱
新潟 郡立	新潟縣中頸城郡立高田高等女學校	四	—	—	—	中頸城郡高田町	三十三年四月設置同月開校三十五年十一月縣立ニ代用
新潟 郡立	新潟縣古志郡立長岡高等女學校	四	—	—	—	長岡町	三十五年六月設置三十六年四月開校三十五年十一月縣立ニ代用
新潟 郡立	新潟縣北蒲原郡立新發田高等女學校	四	—	—	—	新發田町	三十五年十月設置三十六年四月開校三十五年十一月縣立ニ代用
新潟 郡立	新潟縣刈羽郡立高等女學校	四	—	—	—	刈羽郡比角村	三十六年四月設置開校

埼玉	縣立	埼玉縣立浦和高等女學校	四	一	｜	｜	北足立郡浦和町	三十三年三月埼玉縣立高等女學校トシテ設置同年四月開校三十四年八月改稱
	町立	川越町立川越高等女學校	四	｜	｜	｜	入間郡川越町	三十九年四月設置開校
千葉	縣立	千葉縣立千葉高等女學校	四	｜	｜	｜	千葉町	三十三年四月設置同月開校三十四年五月千葉縣立高等女學校ヲ改稱
茨城	縣立	茨城縣立水戸高等女學校	四	一	二	｜	水戸市	三十三年三月茨城縣立高等女學校トシテ設置四月開校三十六年一月茨城縣師範學校內ニ併置四月ヨリ改稱
		茨城縣立土浦高等女學校	四	｜	二	｜	新治郡土浦町	三十六年二月設置四月開校
群馬	縣立	群馬縣立高等女學校	四	一	｜	｜	高崎市	三十二年三月群馬縣高等女學校トシテ設置同月開校三十四年六月改稱
栃木	縣立	栃木縣立宇都宮高等女學校	四	｜	二	｜	宇都宮市	九年二月栃木縣高等女學校トシテ設置三十四年五月改稱
	郡立	栃木縣下都賀郡立栃木高等女學校	四	｜	二	｜	下都賀郡栃木町	三十四年三月設置同四月開校
靜岡	縣立	靜岡縣立高等女學校	四	｜	｜	｜	安倍郡南賤機村靜岡市片羽町	三十六年二月設置四月開校
	町立	靜岡縣濱松町立濱松高等女學校	四	｜	｜	｜	濱名郡濱松町	三十四年三月設置同四月開校三十四年七月靜岡縣濱松高等女學校ヲ改稱
	郡立	靜岡縣田方郡立三島高等女學校	四	｜	二	｜	田方郡三島町	三十四年四月設置同月開校
	私立	私立駿東高等女學校	四	｜	二	｜	駿東郡沼津町	三十四年四月設置同月開校
山梨	縣立	山梨縣高等女學校	四	｜	｜	｜	甲府市	三十四年四月設置三十五年四月開校
長野	市立	長野縣長野市立長野高等女學校	四	二	四	｜	長野市	二十九年四月設置三十三年四月縣立ニ代用三十四年九月長野高等女學校ヲ改稱
	町立	長野縣松本町立高等女學校	四	二	四	｜	東筑摩郡松本町	三十三年八月設置三十四年四月開校三十四年七月ヨリ縣立ニ代用松本高等女學校ヲ松本町立高等女學校ト改稱三十九年五月十六日ヨリ更ニ改稱
	郡立	長野縣小縣郡立上田高等女學校	四	二	四	｜	小縣郡上田町	卅三年十月設置卅四年四月開校卅四年七月ヨリ縣立ニ代用
		長野縣下伊那郡立下伊那高等女學校	四	｜	四	｜	下伊那郡飯田町	三十四年三月設置同四月開校三十四年七月ヨリ縣立ニ代用
北海道	廳立	北海道廳立札幌高等女學校	四	一	｜	｜	札幌區	三十五年二月設置同年四月開校
		北海道廳立函館高等女學校	四	一	｜	｜	函館區	三十七年十二月設置三十八年四月開校
		北海道廳立小樽高等女學校	四	一	｜	｜	小樽區花園町	三十九年三月設置同四月開校
宮城	縣立	縣立宮城縣高等女學校	四	一	二	｜	仙臺市	三十年四月市立トシテ設置三十三年四月縣立ニ變更ノ上改稱三十七年告示第百十八號ニテ宮城縣高等女學校ヲ改稱
	私立	私立東華女學校	四	｜	｜	｜	同市	三十八年四月一日設置四月開校
福島	縣立	福島縣立福島高等女學校	四	一	｜	｜	信夫郡福島町	三十四年十二月設置三十六年四月開校

岩手	縣立	岩手縣立高等女學校	四	一	四	ー	盛岡市	三十年四月市立盛岡高等女學校トシテ設置三十三年八月縣立ニ代用三十五年四月ヨリ縣立ニ變更改稱
青森	縣立	青森縣立第一高等女學校	四	一	ー	ー	弘前市	三十三年七月青森縣高等女學校トシテ設置三十四年一月青森縣第一高等女學校ト改稱三十四年六月更ニ改稱
		青森縣立第二高等女學校	四	一	ー	ー	三戸郡八戸町	三十四年十月設置三十五年四月開校
山形	縣立	山形縣立米澤高等女學校	四	ー	三	ー	米澤市	三十一年四月市立トシテ設立三十三年四月ヨリ五箇年間縣立ニ代用三十五年四月ヨリ縣立ニ變更改稱
		山形縣立鶴岡高等女學校	四	ー	三	ー	西田川郡鶴岡町	三十年六月町立トシテ設置三十三年四月ヨリ五箇年間縣立ニ代用三十五年四月縣立ニ變更山形縣高等女學校ヲ改稱
		山形縣立酒田高等女學校	四	ー	三	ー	飽海郡酒田町	三十一年五月町立トシテ設置三十三年四月ヨリ五箇年間縣立ニ代用三十五年四月ヨリ縣立ニ變更山形縣酒田高等女學校ヲ改稱
		山形縣立山形高等女學校	四	ー	三	ー	女子師範學校內	三十四年七月山形縣立高等女學校トシテ設置三十五年四月開校三十六年六月改稱
秋田	縣立	秋田縣立秋田高等女學校	四	一	二	ー	秋田市	三十三年十月秋田縣立高等女學校トシテ設置三十四年九月開校三十四年七月改稱
京都	府立	京都府立第一高等女學校	三	一	三	二	京都市上京區	五年四月設置京都府立高等女學校ヲ三十七年四月ヨリ改稱
		京都府立第二高等女學校	四	一	ー	ー	同上	三十七年一月設置三十七年四月開校
	郡立	京都府南桑田郡立高等女學校	四	一	ー	ー	京都府南桑田郡龜岡町	三十七年三月設置同年四月開校
		與謝郡立高等女學校	四	ー	二	ー	與謝郡宮津町	三十九年四月設置開校
		京都府加佐郡立高等女學校	四	一	ー	ー	加佐郡舞鶴町	三十九年十二月設置四十年四月開校
	私立	私立京都淑女高等女學校	四	一	三	ー	京都市猪熊六角町	三十九年四月ヨリ私立京都淑女學校ノ組織ヲ變更シ高等女學校令ニ依リ改稱開校
大阪	府立	大阪府立清水谷高等女學校	四	ー	三	ー	大阪市東區	三十三年九月大阪府第一高等女學校トシテ設置三十四年四月開校同年同月大阪府清水谷高等女學校ト改稱三十四年六月更ニ改稱
		大阪府立堂島高等女學校	四	ー	三	ー	同市北區	三十四年三月中ノ島高等女學校トシテ設置同年四月開校三十四年六月大阪府立中ノ島高等女學校ト改稱シ三十五年四月更ニ改稱
		大阪府立島之內高等女學校	四	ー	ー	ー	同市南區千年町	三十九年三月設置同四月開校
	郡立	大阪府泉南高等女學校	四	一	三	ー	泉南郡岸和田村	三十四年四月設置同年同月開校
	市立	大阪府堺市立堺高等女學校	四	ー	三	ー	堺市	三十三年三月設置三十三年四月開校
	私立	私立相愛高等女學校	四	ー	三	ー	大阪市東區本町	三十九年三月設置同四月開校

兵庫	縣立	兵庫縣立高等女學校	五	—	五	—	神戸市	三十三年四月兵庫縣高等女學校トシテ設置三十四年四月開校同年五月改稱
	郡組合立	津名郡三原郡組合立淡路高等女學校	四	—	—	—	洲本町	三十五年九月設置三十六年四月開校
奈良	縣立	奈良縣立奈良高等女學校	四	一	四	—	奈良市	廿九年三月奈良縣立高等女學校トシテ設置同年四月開校三十六年四月改稱ス
	縣立	奈良縣立櫻井高等女學校	四	一	—	—	磯城郡櫻井町	三十六年一月設置三十七年四月開校
三重	縣立	三重縣立高等女學校	四	一	三	—	津市	三十四年二月三重縣高等女學校トシテ設置同年四月開校同年六月改稱
	市立	四日市市立高等女學校	四	—	三	—	四日市市	三十四年三月設置同年四月開校
愛知	縣立	愛知縣立高等女學校	四	—	二	—	名古屋市	三十六年二月設置三月開校
	市立	市立名古屋高等女學校	四	一	—	—	同市	二十九年六月設置
	町立	豐橋町立高等女學校	四	—	—	—	渥美郡豐橋町	三十四年十二月設置三十五年四月開校
	私立	愛知淑徳高等女學校	四	—	—	—	名古屋市東新町	三十九年五月設置同九月開校
滋賀	縣立	滋賀縣々立彦根高等女學校	四	一	三	—	犬上郡彦根町	二十八年七月彦根町立トシテ設置三十五年四月ヨリ縣立ニ變更改稱
	縣立	滋賀縣々立大津高等女學校	四	一	三	—	大津市	二十二年私立大津高等女學校トシテ設置三十二年八月市立ニ變更三十五年四月ヨリ縣立ニ變更改稱
岐阜	縣立	岐阜縣立大垣高等女學校	四	—	三	—	安八郡大垣町	三十五年四月設置三十六年四月開校
	縣立	岐阜縣立岐阜高等女學校	四	一	三	—	岐阜市	三十五年九月設置三十六年四月開校
	町立	岐阜縣惠那郡中津町立高等女學校	四	—	二	—	惠那郡中津町大字中津字上金	三十九年四月設置開校
福井	縣立	福井縣立福井高等女學校	四	一	—	—	福井市	二十五年四月福井縣高等女學校トシテ設置三十四年六月改稱
石川	縣立	石川縣立高等女學校	四	二	—	—	金澤市	三十一年四月市立トシテ設置三十四年四月ヨリ縣立ニ變更石川縣高等女學校ト改稱シ三十四年五月更ニ改稱
富山	縣立	富山縣立高等女學校	四	—	—	—	富山縣師範學校內	三十四年四月設置同年同月開校
和歌山	縣立	和歌山縣立高等女學校	四	一	三	—	和歌山市	二十四年三月市立トシテ設置三十四年四月ヨリ縣立ニ變更和歌山高等女學校ト改稱シ三十四年六月更ニ改稱
	町立	東牟婁郡新宮町立高等女學校	五	—	—	—	東牟婁郡新宮町	三十九年四月設置開校
鳥取	縣立	鳥取縣立高等女學校	四	一	五	—	鳥取市	三十年三月設置三十四年四月鳥取市立ヲ縣立ニ變更鳥取高等女學校ト改稱シ三十四年六月更ニ改稱

島根	縣立	島根縣立高等女學校	四	一	—	—	那賀郡濱田町	三十三年四月設置三十四年六月島根縣高等女學校ヲ改稱
	市立	松江市立高等女學校	四	一	—	—	松江市	三十年四月設置三十四年六月松江市高等女學校ヲ改稱
岡山	縣立	岡山縣立岡山高等女學校	四	—	三	—	師範學校內	三十三年二月設置三十五年二月岡山縣立高等女學校ヲ改稱三十五年四月ヨリ師範學校ト併置
		岡山縣立津山高等女學校	四	一	三	—	苫田郡津山町	三十五年一月設置三十六年四月開校
	町立	西大寺町立高等女學校	四	一	三	—	上道郡西大寺町	三十九年一月設置同四月開校
	私立	私立山陽高等女學校	四	—	四	—	岡山市	十九年十一月設置
		私立玫瑰高等女學校	四	一	—	—	同市	三十七年四月設置開校
廣島	縣立	廣島縣立廣島高等女學校	四	—	—	—	廣島市	三十四年十二月設置三十五年四月開校
	私立	私立廣島高等女學校	四	一	三	—	同市	二十七年一月設置
山口	縣立	山口縣立山口高等女學校	四	一	二	—	吉敷郡下宇野令村	三十年十二月私立毛利高等女學校トシテ設置三十三年十一月縣立ニ變更改稱山口縣山口高等女學校ト改稱シ三十四年五月更ニ改稱
		山口縣立徳基高等女學校	四	一	二	—	厚狹郡厚西村	二十四年四月郡立トシテ設置開校三十五年四月ヨリ縣立ニ變更改稱
		山口縣立三田尻高等女學校	四	一	—	—	佐波郡三田尻	三十六年一月設置三十八年四月開校三十七年六月告示第百三十號ニテ當分開校延期
	市立	市立下關高等女學校	四	—	二	—	下關市	三十八年四月設置同月開校
徳島	縣立	徳島縣立高等女學校	四	一	二	—	徳島町	三十四年三月設置三十五年四月開校
香川	縣立	香川縣立高松高等女學校	四	一	二	—	高松市	二十四年十月私立香川縣高等女學校トシテ設置三十五年四月ヨリ縣立ニ變更改稱
		香川縣立丸龜高等女學校	四	一	—	—	丸龜市	三十八年三月丸龜市立トシテ設置同四月開校三十九年四月縣立ト爲シ改稱
愛媛	縣立	愛媛縣立今治高等女學校	四	一	二	—	越智郡今治町	三十三年六月設置三十四年四月開校
		愛媛縣立宇和島高等女學校	四	一	二	—	北宇和郡宇和島町	三十三年九月設置三十四年四月開校
		愛媛縣立松山高等女學校	四	一	二	—	溫泉郡雄群村	三十三年九月設置三十四年四月開校
	町立	町立大洲高等女學校	三	—	二	—	喜多郡大洲町	三十九年七月設置同九月開校
高知	縣立	高知縣立高等女學校	四	一	—	—	高知市	二十六年四月高知縣高等女學校トシテ設置三十四年五月改稱
	私立	私立土佐高等女學校	四	一	二	—	同市	三十七年三月設置同年同月ヨリ開校
長崎	縣立	長崎縣立高等女學校	四	—	—	—	西彼杵郡上長崎村	三十四年六月設置三十五年四月開校
		福岡市立福岡高等女學校	四	一	一	三	福岡市	三十一年五月設置三十三年五月福岡高等女學校ヲ福岡縣高等女學校ト改稱三十五年四月ヨリ縣立代用三十四年五月更ニ改稱

福岡	市立	小倉市立小倉高等女學校	四	一	―	企救郡足立村	三十一年五月設置三十二年二月學校組合ヲ郡立ニ變更三十三年四月市立ニ變更改稱三十五年四月ヨリ縣立代用
	市立	久留米市立久留米高等女學校	四	一	―	久留米市	三十年六月設置三十五年四月ヨリ縣立代用三十四年五月久留米高等女學校ヲ改稱
	郡立	山門郡立柳河高等女學校	四	一	―	山門郡城內村	三十三年四月柳河高等女學校トシテ設置シ三十三年五月改稱三十五年四月ヨリ縣立代用
大分	縣立	大分縣立大分高等女學校	四	一	三	大分町	三十三年三月設置三十四年五月大分縣高等女學校ヲ改稱
佐賀	縣立	佐賀縣立佐賀高等女學校	四	一	―	佐賀市	三十四年四月設置三十四年五月佐賀縣立高等女學校ヲ改稱
熊本	縣立	熊本縣立高等女學校	四	―	―	熊本市藪ノ內町	三十六年二月設置四月開校
	郡立	熊本縣八代郡立高等女學校	四	―	―	八代町字長町	三十四年七月設置三十五年四月開校
	私立	私立尚絅高等女學校	四	一	二	熊本市	二十一年二月設置
宮崎	縣立	宮崎縣立高等女學校	四	一	二	宮崎町	三十二年一月設置三十四年五月宮崎高等女學校ヲ改稱
	私立	私立延岡高等女學校	四	―	―	東臼杵郡岡富村	三十九年八月設置同九月開校
鹿兒島	縣立	鹿兒島縣立高等女學校	四	一	―	鹿兒島市	三十四年五月設置三十五年四月開校
沖繩	縣立	沖繩縣立沖繩高等女學校	四	―	―	當分沖繩縣師範學校內	三十六年三月縣立沖繩高等女學校トシテ設置四月開校改稱

〔備考〕

本標で大抵全國高等女學校程度の學校は網羅してありませう、勿論此外各專門の技藝、音樂躰操、語學、家庭抔いろ〳〵の學校があります、凡て此等各學校の詳細しい内容に就きましては、本社發行の報知新聞記者中村君著『實地精査女子遊學便覽』といふ書を御覽になれば、何もかも親切に説明してありますから、よく分ります。一度學校の撰擇を誤りますと非常の不幸を來しますから、充分御注意の上方針をさだめ、一旦決心の上は自己の人格を自重して東京へても何處でも御出掛けなさい。

懸賞當選圖畫（四）

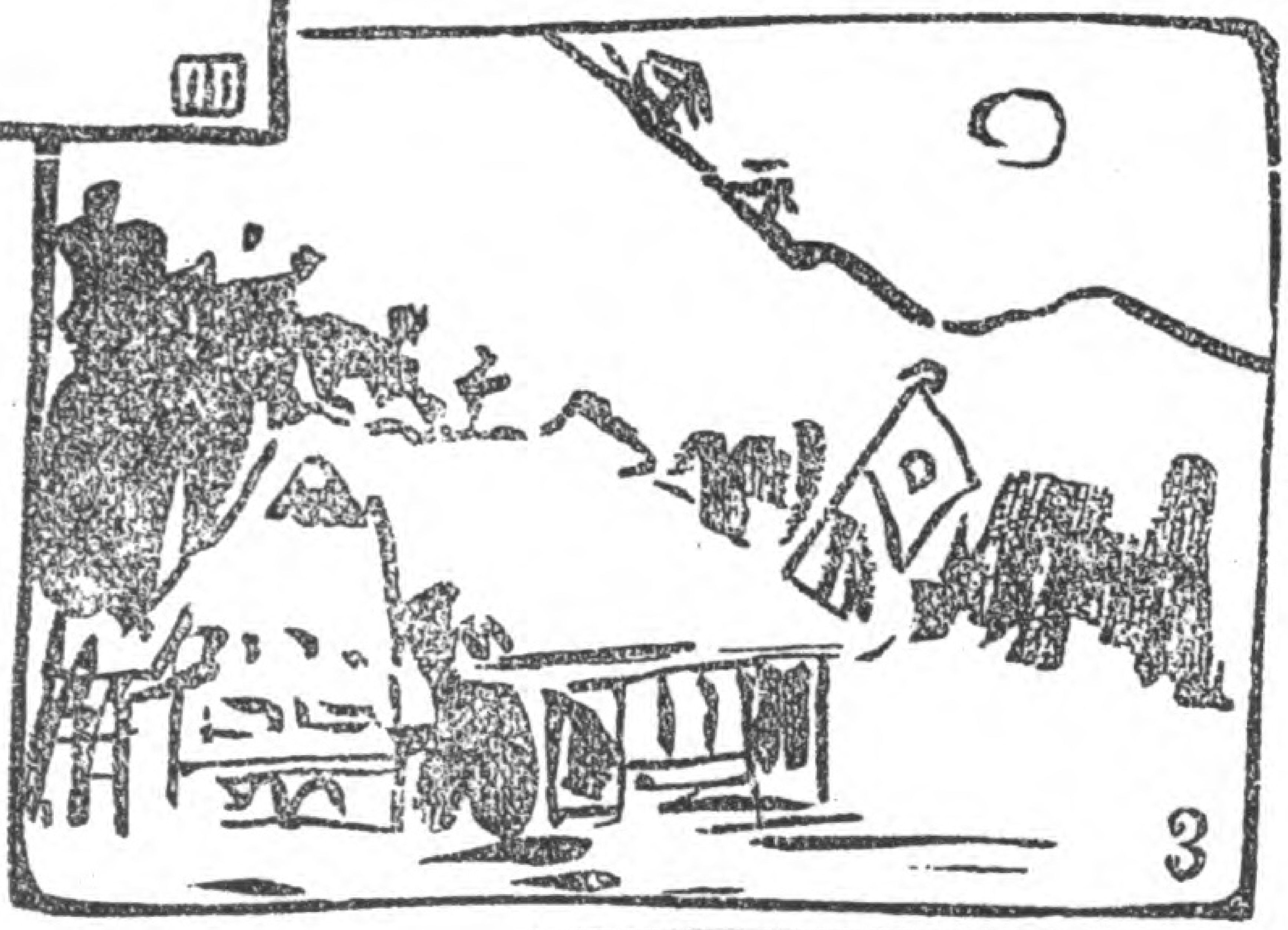
山中古洞先生選





(1)競爭（二等）　八王子町停車場前　乙幡もん子

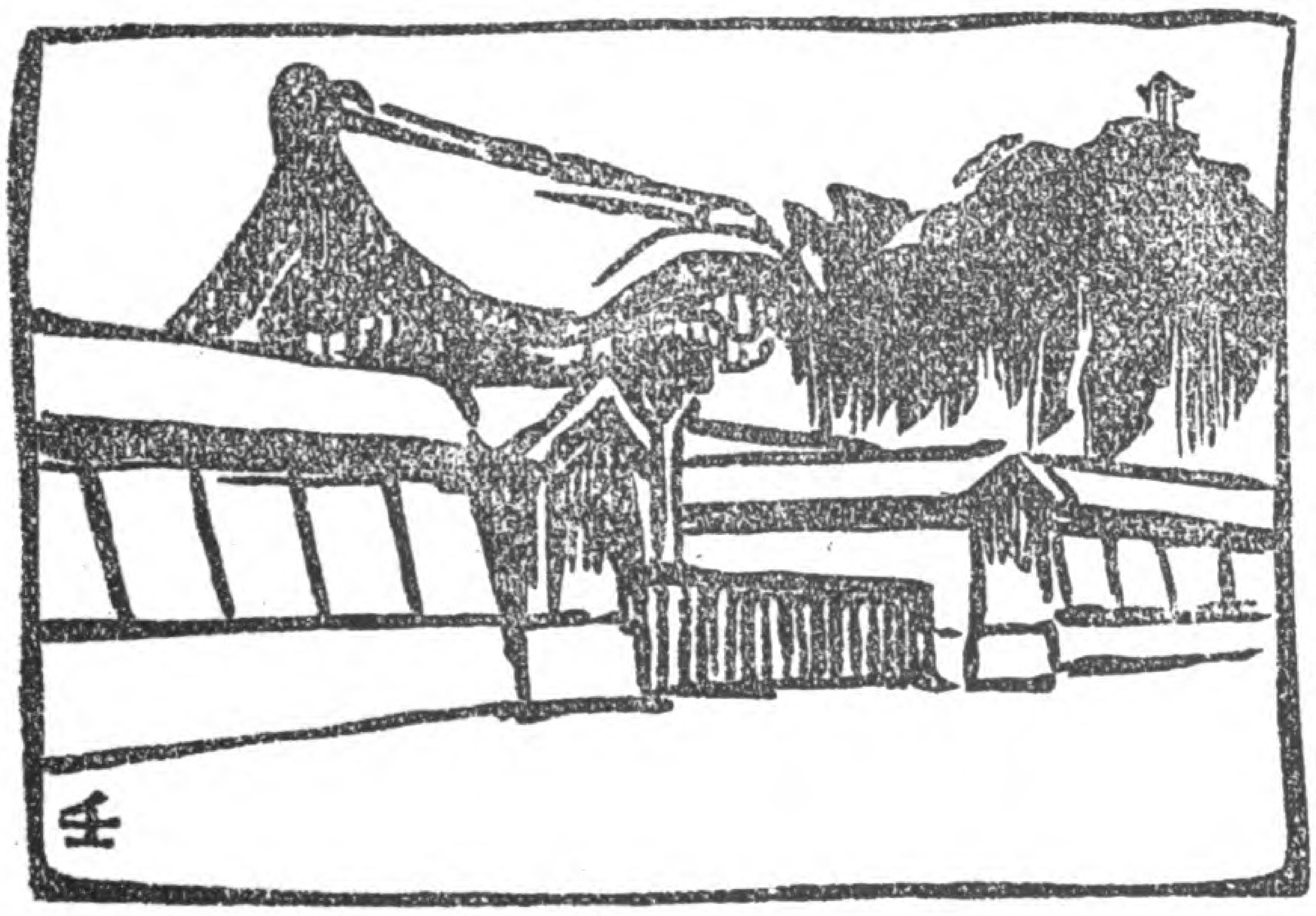
(2)年の市（三等）　茨城縣古河町杉並町　小堀みち子



(3)祝日（四等）　赤坂　成瀬靜水

(4)御所（五等）　麹町幸町三ノ二　前田民子

(5)水くみ（五等）　失名氏





叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

○村の名物

信濃上伊那郡中箕輪村澤　有賀まさ子

美篶刈る信濃路。此處は浮き世に遠ざかつた片山里の汽車もない、電車も電話もない、文明の餘澤として眼に映るは、只一條の電信線、先づ是れ位なものであらう。雅びな華やかな都の光景は知る由もないが、住めば懷しい我が郷土の、奢侈の風も荒まねば、浮薄な輕佻な濁りにも染まず、神代ながらに天眞な頁を繰つて眞白い眞白い人の心は、さながら春の潮の如く濃まやかに、流れて霑ひて長閑な此の麗しい我が村に溢れて居る、春が來れば花が咲き、秋が來れば月が澄む、綠滴る夏や、白銀降りしく冬や、自然の曆は美しく明かに絶えず吾等が前に展べられて何事かを暗示して居る。家は五十、高い山と險しい河とで劃られた、土地こそ狹いが、それ相應界隈に名物もある、それが三つ。

一つは櫻。村の西に沿うて南へうねつた丘の端に、蒼苔一面に包んだ神さびた古い石の祠がある、年代も解らねば祭神も解らぬ、人は呼んで『花のお宮』とばかり、此の祠をだいて大きな、七抱も有らうかと思はれる老いた櫻の、幹は半ば洞になつたが梢頭に鏤く萬朶の彩雲は、千歳の芳芬を吐いて路行く人の袂に薰る、けれども天さかる鄙には綺羅を飾り紅を匂はせて練り歩く者も無ければ、況してや、瓢簞に三昧、繪筆を手に、色紙へ歌を書き流す、そんな風流な眞似は誰も知らぬ、朝、夕、管笠に鍬かたげた扮裝甲斐々々しい、吾等田夫、野娘の往き復りを、暫く此の樹蔭に憩つては散りくる花瓣愛でながら樂しい過去や現在や希望饒く未來を談じ興ずるのが例で、芝原は日に二度の集合所、和氣靄々の樂園となるのだ。

一つは山葵漬。山家の、これは曇らぬ心の鏡となる、岩の間や樹の根からは、水晶のやうな淸冽な水が湧いて、汀に煌めく砂の、眞珠を鏤したかと疑はれる美々しさ、小波は輝よ

ら日光に燦々と輝いて五彩の紋を織つたり、碎いたり、散らしたり、こんな泉は到る所に不斷の樂を奏でゝ流れ、聽てはみづ〳〵しい山葵の園をはぐゝんで年々の產出額もなか〳〵多い、味噌漬と粕漬との二種、風味好く長く保つので旅人の手に提げられ、西は京、東は房總の果まで行くさうだ。

も一つ。是れは觀るものでも喰べるものでもない。人が若し我鄕土を踏んで其の流露せる人情に觸れたらば、一たびは未開の域、野蠻の地と驚くだらう、けれども再び仔細に驗したならば、必ず掬すべき質樸率直な氣風よと、感嘆の聲を發するに違ひない、人は皆野に勞働の鋤鍬を揮つてこそ居れ、怒ひに書籍を嚙る不生產者はない、茲にたつた一人遊學して居る庄屋樣の息子、最早大學の二年だといふ、何時飯省した時も昔の儘の五分刈頭で、眞つ黑い顏には髭もない、無論白粉も匂はねばチックも光らぬ、人に對して深切な、驕慢らない言葉つき、はき〳〵した動作、誰が逢つても春のやうな心地がする、これは慥だ、また休暇の時は同じ樣に畑に出る、田にも出る、併し土堀りは學校に在る間許りだといふ話、卒業した曉はどんな事業を行るか、語つた事も無ければ尋ねた者もない、どこがえらいか未だ解らぬが、人は一齊に村の名物として其一つに數へて居る、七月も近い、また歸つて來るさうだ。

（評）伊那に電車の開通するも近き將來にありときく、無情の二名物は益々其價値を高めん、れがふは有情の一名物をして愈々其光彩を發揮せしめんことにこそ。

◎春の朝景色

常陸國久慈郡西小澤村內田　西野はる

暗は漸くうすれ行かむとして、夜の空たかく煌めきし星かげも、稀らになりゆく頃、試みに高きに登りてあけぼのゝ春のすがたを見よ。

藁ぶきの家五つ六つ花にいだかれて、人の子の魂はいまだ聖きその夢路よりかへらず、風もなく音もなし、母いく億萬の星の子は父なる晝のひかりに怖ぢてか、母なる夜のふところに隱れて、いづこともなく落ちゆきし。天も地も森も川も野もみな、おぼつかなき吐息のやうなる靄氣にうち薰じて、模糊たり縹緲たり。かくて天も地もわれも一に歸して、こゝに、夢の如き春のあけぼのは生れたり。

すでにして日は東山より出てぬ。

その金色のひかりは始め柔かに次第につよく、山谷の朝かすみを貫きて內にみち渡れば、聖靈初めて悉なる心に下れる如く、にぶき鉛白色の山は見る〳〵透きとほり、今し東山はうすき桔梗色のひかりを帶びて

その清麗いはむ方なし、遠山は猶ほのかに麓の谷は未だ朝がすみにねむる。

このとき日は下界にみち家々に吹煙起り、晴を喜ぶ雲雀の早くも九天をさして上りゆく、眼をあぐれば櫻花の淡紅も、菜花の黃も、麥浪の綠も、はた十里二十里の遠山まですべて東に向つて朝日をむかへつゝあり。

あゝ麗はしきかな春の朝げしき。

（評）文亦縹緲、春の曙の如し。

秀逸

○蘭燈

成田　夢の舍濱子

雨細うおはしまの梅にそゝぎて、かすかなるさゝやき花神の秘めの言の其れか、花の氣そゞろに搖れて、春の夜しめやかに更け行くなり。今しがた琴の音やみし小亭、此は姫君のおはします紅樓にこそ。見るもまばゆききらびやかなる金屏の、吉野の山の花盛り、こぼれんばかりに描かれたるが、引きめぐらされて、其にうつろう白銀の蘭燈、一と間を輝かして影明う、香爐より吐かれてのぼる一と筋の煙、床の牡丹をめぐりくて、やゝに消えゆく末にひろごる香の匂やかに漂ひつ——。

姫が纖手にさらくと、口紅のうつりが床しうも、歌筆細う染められたる短冊、そは何の思ぞ、文箱の底深う秘められて、紫の紐かたく結ばれつ——。

やがてめされたる寵愛の侍女、雪洞に火入れて、此夜深きを何處への御使ぞや。

そと開きし戸のひまより吹き入る夜風に、燈火一ときは明るう燃えて、文机により給へる姫君のかんばせ何とのう面はゆげにこそ見られしが。

さても懐しの文箱よ、心ありげに結ばれたる紫の房、そも誰が君の御手に解かれやすらん。

玉水の音樓をめぐりて、寂たる春夜はいよく深う沈み行きつ。

（評）濃艶。



午前八時　大阪　倭文子

○豆腐やまて

須賀川　服部水仙子

何はなくともまあ一杯と、久し振りての兄樣がお歸省に、にこ〳〵顏の父が言葉。雪の下圍ひの葱は母樣がとつて下さる筈、どれ私は一寸豆腐やまてと、去年の今日の兄樣のお土產、今は、燃ゆるやうであつた鼻緒の色も褪せ、漆は剝げて、草履のやうになつた下駄つきかけて外面に出た。松並木を洩れくる月あかり、野も、山も、家も木も、あたり眞つ白の雪あかり、思はずも我身なりを振かへらさせる、榾火に上氣した頰に、束ね髮がハラ〳〵、悚然と身に染む風に襟を縮めて、袖かき合して、さて小走りに一丁。八百屋の角を右に曲れば、出合頭の荷馬車一臺、馬子はひたと唄を止めた。見返りもやらず、つと傍すり拔けて五六間、また右に折れての三軒目、とうふ、油揚け、と太い大きな字の障子が半ば開け放してあつて、中からさした燈火が食桶に首つき込んで卵の花の御馳走に餘念ない馬のからだを半面照らして居る。今晩はと躰を現せば、焚火のそばに氷豆腐を編みながら、高聲に馬子と話をして居た嫉さんが、拇手拭の顏を此方に向けて嫣然。オヤマアお寒いのによくと例もながらのお愛想も、今日は程よく挨拶して踵をかへした。歸は籠に豆腐が載つて居るので、さすがに驅けもならず、暫くの間に隨分𨀉りましたねえと先程仰言つた兄樣の言葉に、今更ながら邊り見廻してゆく。村全躰舊暦の、今日は六日、家々門々の七五三繩風に搖めいて、嚴めしく門松をかざつたのは村長の家、大きな洋犬が一匹番をして居る。村役塲と、派出所と、村で三つの湯屋の瓦斯燈、雪を戴いてショッポリと立つて、今男湯の戸をガラリと勢よくあけて出たのは背の高い職人一人。短い股引から現はれて居る脛のまだ湯氣のたつて居る赤さ。やがて小聲に鼻唄をうたつてゆく。其肩の手拭は家に着くまでに凍るであらう。二つ並んで居る村長の庫の右手の空地は、晝間松井源水の獨樂廻しに人の集ふところ。其また次には、建てかけた間口三間の家が雪の中に白くつつたつて居る。ふと草鞋の音に振かへれば太皷を抱へた年若な猿曳一人、急ぎ足に早や二三間越ォ去つた。赤の陣羽織を着た大猿は、頻りに何か喰ひながら意氣揚々と背中に乗つて居る。我家に近い家のない道を、この雪と、この豆腐と、どちらが白いだろう？などゝ考へて、物好にも立ち止まつてくらべて見たが、天の女神が降した白銀の雪にはくらぶべくもない。オヽもう木影に灯影が見える。さぞ母樣が待つて居らつしやるだらう、明朝は早く軒の吊し柿を取つて兄樣にあげて見やう、都の空にゐますとはいへ、貧書生の身の燒芋に馴れた兄樣のお口にはどんなにおいしく召上らるゝやら、さぞまあ召上つて母樣を驚せるであら

う、など、心急げば足も急ぎ、足が急げば凍りたる道に響く我下駄の冴え。いつしかもう我家の前である。砂壁に高く積んだ薪の上に白い丸いものが一つ、はて何だろう、鳥はもうとつくに小屋に入れた筈と、うかと歩けば足許の馬つなぎ石に躓いて危くも前にのめらうとした。呀つと思ふ間に、籠の豆腐は一ゆりゆれて角が丸くなつた。其途端、薪の上の白い影は動いて、ニャーンと優しい玉が一聲。『はゝゝ』折も折、俄におこつた笑ひ聲に思はず顏を赤くして見遣れば、背中の丸い父樣が頭を撫でる影と大きな躰をそりかへつて笑ふ兄樣の影とが障子にうつつた。

（評）春は室に滿ちて和氣融々。

○春の樂

徳島縣　堤　菊惠

折節の移りかはるこそ物毎にあはれにをかしくはあれど、一際心の浮き立つものは春の氣色にこそあめれとやうに、吉田のひじりのいひおかれけんもげにさる事ぞかし。

久方の天つみ空に春たちかへる日より何となく人の心ものどかに、薄霞も共にうき立ちて野邊にうかれ、雪間の若菜たづぬるはまづ春の初のたのしみなり、こち吹く風のまに〳〵待つ人の袖の香とあやまたれつゝ匂ひくるは梅のほゝゑみ初むるなり、やみの夜にも香はかくれず、枕々かをりくるに、立ちかへり古のことも戀しう思ひ出でらる、まして梅かをる軒端に鶯の初音きゝ得たる、めでたしとは世の常なりや、窓近きくれ竹に宿しめて、ふしをかしう歌ひ出たる、何にかはたとへん、柳の眉も開けそめて、日數とゝもにのび行き、朝風にくしけづるもゆかしく、川邊にうちけぶりつゝ水の面になびくはこよなうのどけし、柳のみどり梅の香、鶯の初音とり〳〵にまた春淺きころのたのしみなり。



寺島の風景　寺島　稻富つる子

しめやかにふる春雨は色もなきを、野邊を緑に染めかへしつゝいつしかも燒野の小草わかやかに萠え出るに、日はいとうらゝかにて、長閑に渡る春風もいと心地よく緑の煙かと疑ふばかりなる霞の奥に妻こふ鹿の聲も聞え、紫匂ふ菫の床離れ

て雲井高く上る雲雀には、見る人の心さへ大空にとぶめり、これ春の野の樂なり。

やう／＼白くなりゆくあけぼのゝ空こそ又なく艶だちて見ゆれ、山際すこしあかりて紫だちたる雲のたなびきたるを清少納言のめでけんも、げにさるものにて横雲のたち別るゝ外山の霞にかけ消え行く春のかりがねの三行ふたつら鳴き渡る聲のみなるも亦をかしからぬかは、照りもせずくもりもはてぬ春の夜の月こそげにしくものはなけれ、おぼろ／＼としてかすかなる影は、佐保姫のかすみの衣につゝめる珠にやとこそ疑はるれ、まして花の上をてらす光のかすめるは何とかいはまし、うべもいにしへのもろこし人は春宵一刻千金と詠じ、ともし火とりて夜の遊びをばしたりけんかし、あはれ紫だつ雲おぼろの影、これ春の曙と夜半とのたのしみになん。

春もやう／＼深うなれば野邊に山邊に櫻のさき出づるこそ樂しきが中にもたのしけれ、貴きも賤しきも老いたるも少きも心ひとつにあくがれて、今日はこゝ明日は彼處と、更に心のどけからぬ人もあらじ、只匂へる雲の中に終日さまよひて、しばし憂世をはなれて住む心地ぞすめる、夕の風にはら／＼とちるはひたすら雪とも見えて、我も共に消ぬべきかとぞおぼゆる、やよひの樂は只櫻にこそ。山吹のちりて流るゝ里川の面に蛙のくれゆく春を悲しみて鳴き出でたる、藤のおぼつかなげに春の名殘をとゞめたる、くれ行く春もあはれに樂しかりけり。

あはれ野邊にかすみに、はた鳥に、月に、花に、見るもの聞くものとり／＼にをかしきは、春にこそあれ、樂しきは春にこそあれ。

（評）三春の樂悉く筆に上りて餘す所なし。

○轉宿の記　大阪　村瀬蔦子

可愛い／＼妹と、五十路を二つ踏出された母樣とにお別れして日夜勤勉、親子三人無事に早う暮される樣に成たいと、我業を勵んだ懷しい此宿へは今日限り歸らないのだと、思ふと何だか名殘惜しい氣がする。

うらは障子の硝子越しに一面の野原から新淀川の堤、右に左に本庄大仁のこんもり茂つた鎭守の森が見え、四季折々嬉しい景色が寫眞のやうだし、取分て宿の人人が厚いもてなし、決して富に不足は無いが隣の小娘のいぢらしい樣を見ては種々な想像に耽つて、宅に居る間はちつとも勉强が出來ない、何も人樣の宅の事迄心配せないでも宜いやうなものゝ、これが私の性分だから仕方がない。

十四の娘を頭に四人も子供があり乍ら何と云ふまあ不了簡な氣を起したんでせう、四十近く成てゝ廿位の男

と飛出すなんて、嘘の様だが眞個なんてすもの。亭主は却て子が可愛相だつて、後妻を貰はないから十四の娘が朝早く父を商ひに出して四人の同胞を遊すのよ、幼い兒は日に一度お母様はつて聞と、大人しくして居たら直歸られると勢つて、さあ〳〵姉ちやんと毬つきませう、歌うて頂戴よ、一イ二ウ三イ四ヲ四方の——と歌ひ出されては、私は堪らなく、妙に氣が滅入て了んです。

此お正月だつて、同じ年配の娘達が美しい衣物を着て、面白く遊んで居るのを見て、眼に一杯の露を泛べてゐました。

眞個に彼娘は不幸だと、思ひ出したら果しがない、また二年間も勉強しなければ成らない私、其娘の姿、聲をせめて、聞き度ないので思切つて、轉宿するのです、あゝ神よ彼娘が行末さち多れと祈りつゝ！

（評）神經質ながら其の同情に富めるはゆかし。

○湯の月　松山壽美禮子

今日一日の煤掃きの、垢を落さうと、私は風呂へ入りました。傍に置いたカンテラのはだか火が、幽かにまたゝきつゝ邊りをほの暗く照らして居る、と見ると板戸の隙間から、サと流れてこんで居る月あかり。おゝ今日は十五夜、私は火を吹き消して、誰も居ないのを幸に半ば戸を開けました。まん圓い月は、早母家の屋根の上に登つて、湯の面に其美しい姿を落して、植込の二三輪笑み初めた枝垂梅と、石燈籠の影をあり〳〵と洗場にうつしました。私の胸のあたりには恰ど其梢を畫いて居ります。室内には薄い湯氣が夢の樣に立ち罩めたのに、石鹼のバイオレットの香がフハ〳〵と漂つて湯は恰ど好い加減。折から遠い母家から弟がすさびの明笛の音が、木々の繁みを通じて響いて來だしました。曲は私の大好きの落花の譜。あゝ何と云ふいゝ心地でせう。私は何時迄も〳〵せめて月の傾く迄かうして居たい。長湯の爲か顔がほてつて頭が朧になつて來ましたが、若し動いたら此美しい月が碎けるでせうに。月を碎かうか月を碎くまいか。明笛の曲は漸く進んで「金波銀波の水の面に散るや櫻の」と云ふ所へきた時、サと障子の破れ目から吹きこんだ風に月は碎けて此處にもさながらの金波銀波、いい機と私は出ました。後には又美しい月の影。

（評）師直今の世にあらば、危し々々、呵々。

○霜夜　鳥取市　上山千重子

さえわたる霜柱、夜は早や更けたらしい。利鎌によう似た月の光に窓際の寒紅梅三枝二枝、破れし障子に影

を投げて、さながら一幅の畫繪のやう、何處ともなくかもめの聲が絶え〱に、夜寒を洩れ來るは、定めしうきねの床に霜の結ぶのであらうとおもへば、我身ひとつの冬ならずと、しみ〲考へられて、うつゝなに障子を押すと、さつとさし入る寒月半輪、物凄さにおもはずも慄ふのであつた。「美いちやん、まだお休みでないの、夜風は躰の毒よ」。はつと顧り見ると、六疊の部屋の隅に、虹色の艶糸織りかけて、我がためにひたすらをさ取る姉樣の、月を浴みた顏の半面、目馴れし私でさへ、今更恐ろしさに双袖で眼を蔽うたのであつた。ア、姉樣は何といふ哀深き身であらうと思へば、いまは昔姉樣は十四、私は十二の春を迎へたばかりの頃であつた、美しう揃うた姉妹と、ゆきかふ人々にはやされて、振りの袂に樂しさをつゝみ兼ねたが、月にむら雲花に嵐のたとへに洩れず、誰が呪ぞ、ねたみの流矢はかなしくも姉樣に命中して、或る夜四五の客人と打興ずる折しも如何したはづみかランプが覆りて、傍に笑みし姉樣の顏から肩へ石油一面、はつと驚くまもあらせず　泣き狂ふ姉樣はさながら猛火の中の不動尊のやう、あやうく消し止めはしたが、花の顏は名殘りを僅か片頰に留めて、見るも物憂き一面の燒跡、人並越えて美かりしだけ一しほ憐さのまさりて、何の因果と打しほるゝを見れば、私のみ恙なく美しう生ひ立ちし事のつらさ切なさ、其上私には婚家定まりて月變らばと洩れ聞きしものを、それかあらぬか我がために夜の間もいそぐ姉樣の絹機は、いはずとしれた嫁ぐ晴衣に私への賜物、ア、夜風は誰が身にも堪へがたきを、それを妹が上ばかりおもふ姉樣の御情、勿躰なくて勿躰なくて、いつそ我身と更る事が出來たらば何んなに嬉しいだらうと、はかなき運命に歎かれる。一しきり夜の寂寞を破つて陰にひゞくをさの音。裏庭あたりに凍えるやうな犬の聲がする。

（評）運命の神のそれみ受けて、生れもつかぬかたはとなれる、無慙といふも愚かなりや。

○賣花翁

小石川　君子

鶯の聲に立ち出でし椽の前、昨日の賣花翁は、通りかかりぬ。今日は、紅梅をさへ、一枝そへて。

柴折戸より招けば打ち笑みて。

「孃樣紅梅が、やつと、咲きましたて」

とさし出す一枝、鶯の心も知らで折りしや、これ。さらば今の初音は、この花を、慕ひ來しにはあらざるか。

「おぢいさん、花ちやんは如何？」

「はあ、昨日から、大きに、よいのでございます、孃樣の御ことづけ、下され物、あの亂れた髪に、さしまして、喜びました顏、めつきりやせた此頃に、見られない顏でした」

我病の身を、こゝ片田舍に、養ふに至りしより、朝な朝な此花賣女を唯一の友として、天の賜ひし淸き友として、日頃の淋しさを、忘れ居しに、やさしき歌の、きこえずなりて、はや、七日。かれが持て來し梅は殘り少なうこぼれたり。

昨日、ふと、翁さびたる花うりの聲するに、そゞろなつかしうて、よび入るれば、老いさらぼひし翁にて、きけば、我まつ友の父なりき、彼女が口より度々洩れて、わが腦裏にゑがゝれ居たりし父なりき。

娘は先の雪の日、病の床につきしより、いまに枕あがらずと看病する人もなき、あばらやの內、しばしも、一人おくべきにあらねど、さりとては、立ち兼ぬる家の煙に、隣の人に暫を賴みて、今日は代りて出てしとのあはれなる物語り。

「旦那樣每度有がたうございます、早くかへらねば、あれが待つて居りますから……さよなら」

「ではよく氣をつけてね、花ちやんに、はやく全快なつて、いらつしやい、私まつてますつてね、」

「ありがたう！」

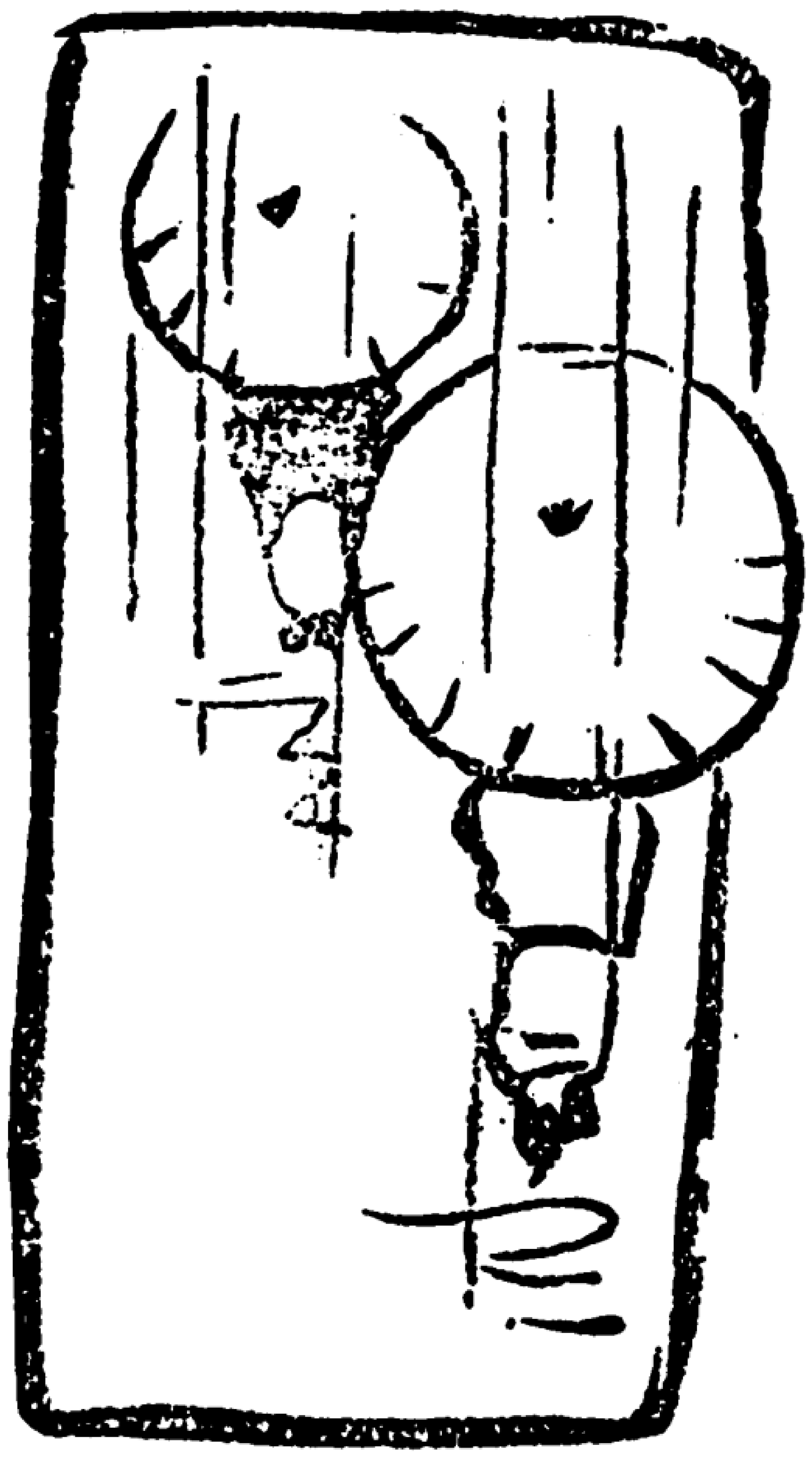
老の眼に淚うかべて鼻汁すゝりつゝ出てゆく麥の小道

「めせやめせ　花めせ……」

また袖寒き朝風にいとゞ其聲もうちかれて。

あはれあはれなる翁のうしろ影や。

（評）情の罩れるを採る。



春雨　出雲　山本靜子

○金山路　上野國　大沼微音子

大光院の裏門を出ると、こゝはもと　皇后陛下の茸狩りを召させられた時の御徒歩路で、金山への新道である。兩傍には寶來芝を植ゑ小砂利などを敷いた跡が能く現はれて居る。右は曠々とした麥畑を抱いて、地を甜るやうな老松の堤が取り圍んで居て、左は大光院の御墻に添うて居るのである。

あかくと秋の日影に映えた西山の松は、大凡そ三百年來のもので、妙にくねつて居て、恰も大蛇の天に登らんとしてあせる樣である、其の端の桑畑はむかし陸尺の住んだ處とかで一段高くなつて居る、其處に桑をしばつて居る赤い襷に白い手拭姉樣かむりにした小娘はやうやう十五六の、ふつくりした頰に零れるばかりの愛嬌を湛へて歌ふのである、「妾しや太田の金山そだち外に木はない松ばかり、」おゝやさしい歌、妾は何時も此の歌を聞くたび、只ならぬ感にうたれるのです、今年十八歲の暮まで松の金山の淸水を掬んで育つた身の、都の

花の如何に匂ふかはまだしらないのである。

小娘の歌は次第に遠く、三四の萱屋も後ろにして茶臼山の麓についた。深川に架した、形ばかりの丸木橋を渡つて行くと、左手に金龍寺が見える。彼の寺こそ新田義貞公の靈を祭るかと思ふと、敬慕の念がむらむらと起ると共に、ありし昔しの辛苦を偲び出てゝはそゞろに涙を催さしむるのである。松の樹の間に現はれた、葵と中黑との紋をつけた棟のなか／＼に懷かしくて、見返り見返行く程に、いつしか第一の休場に着いた。立止まつて見下すと大光院の大建物は松の中に見え隱れして居る、と程近く石をきる音の聞えるのは八王寺山の石堀場であろう。

これからは稍急勾配で、帶を直し草履に付紐などして、何の見る所もなく道端の芝に腰おろしては、休み／＼、やうやく第二の休場についた、此處は極く無趣味な所で、前には八王寺山が高く峙立し、東も西も皆一樣の松ばかりで取り圍んで居る。此處を出てゝ、いさゝかの勞を慰めやうとして、唱歌など高聲に歌ひながら松の樹の下を小雀のやうに潜り行けば、江戸澤のあたりで百舌鳥の聲がする、可愛さに足を止めて靜かに聽くと、小聲になつて歌聲を眞似るやうである。

第三の休場に着くと、涼しい風は一しきり傍らの樫の葉をそよがせて居る、こゝは誠に心地よい所で、西南から東へかけて一目千里とでも言ひたい程の眺望である、八王寺山も西山も東山も、少しも遮るものはない、點々黃金の敷物を敷いたかと思はれ、村々を抱いてキラキラとした大利根川には白帆三つ四つ六つ、小春日の長閑さにうかれて鷗が舞ふかと思はれた。上流には武州新井橋の烟突が四本盛んに黑煙りを吐き出して居るその先のコバルト色をした秩父山の上に、白妙の衣着けたのが富士の高嶺である。好奇心に驅られた妾は去年數多の村人と共に、先達に導かれてあの山の頂きに登つたのであつた……、東には紫色をした筑波山が懷かしい乙女の樣な姿して立つて居る、あゝ！あの山の麓には妾の最も慕はしい君、薄倖な詩人が自然を友として居られるのである。

人の話し聲がしたので心づいて見ると、書生が二人寫生板をかゝへて語りながら下りて來る。

こゝを立つて少し登ると二重の石段がある、此の石段を登りつめれば廣々とした梅林であつて、春でなければ花はなくて、梅花折るべからずなど書いた制札ばかり古びて立つて居る。

此の梅林の奥に、新田神社と御嶽神社とが安置されてある。

（評）好寫生。

○麓の小川

箱根山　霜葉

はなれに隣れる破れ戸を押し出づれば、そこは山添ひの小徑である。こゝをすこしく下ると、黄金の鈴ふるが如き水のせゝらぎが聞えて、水晶をといたやうな流れがある。底は一面の白砂で、靜かな小波は絶えず岸の美しい古苔の鬚を洗ふて居る。

私は今畫筆を洗ふべく楊柳の下の石に腰かけた、それは姪の綾ちやんにせがまれ、菫と蓮華草とを畫き終へたので……。

筆を水に入れた儘ぢつと見ると、紅と紫とが鏡のやうな水面を、すこしも色を亂さず流れて行く。思はず微笑んで眺めてゐると、不意に頭上で鳥の聲がした。ハツとして打ち仰ぐと、鳥は向ふ岸の松の木に止つて、私の方を見下して居る。何だか恐ろしうもあり、氣味惡くなつたので、叱ッと聲をかけると、バタ／＼と羽ばたきして岩成寺の方へ飛んでいつた。

川上の方で馬の聲がするので、見ると葉櫻へ白駒がつながれてある。きつと此の馬が何かに驚いたのであらう、すると、今までかたへの若草の中に眠つてゐたらしい馬子は、此の聲に目がさめたのか、起き上つて勇む駒の手綱を取つて引き立てゝ行つた。

向ふからつり芋を持つた八つ位の男の子が二人、魚を取り乍ら來た、馬のゆくのを知らないのか一心に水面を眺めてゐる、と一聲馬が嘶いたので、吃驚したやうな顏をして振り向いた。



長閑　下野　入江靜子

ふと空を仰ぎ見ると、巨人のやうな白雲がゆつたりと動いて行くので、寫つてゐるかと水面に向ふと、綿の様なのが、同じやうに川を越えて東へ／＼と行く、と思ふと何だか此の白雲の上に赤いものが見えるので、よく見ると美しうかゝつた鞠である。大方其の姉が可愛いゝ妹のために、かう綺麗にこしらへて呉れたものであらうが、今日あたり野遊びに來て、蝶か何かを追ひまはつて居た時に、其の振り袖からころげ出たのであらう、あゝ可愛そうに氣がつけばさぞ探して居るだらう、私もかうして大切な鞠を捨てゝ了つた事もあるのに：：などゝ幼い歴史をくり返して、此の可愛らしい主は心配してゐるだらうと、其の子の姿も見たし、何となう懐しくなつたので、つと走りよつて其の鞠を拾つた、そして私は返してやらう

と踏めば音ある板橋のまゝ中に立つて、彼方こち見廻したが、更にそれらしい人がないので、仕方なくかたへの綠濃く萌えた柳の枝に鞠を結び、再び可愛いゝ主の手に入らん事を心密かに祈りつゝ家に戻つた。

（評）柳の枝に鞠を結びたる、詩心あるやうにて面白し。

○深山がくれ

大分縣　や　ま　川

我は僧なり。

人跡絶えし此深山にいりてよりすでに二十年。茲は浮世の外、暦日なければ、雛の梅の匂ひて鶯のとひ來るを見ては春と知り、あたり燦めく若綠の梢にかゝる弦月に深山時鳥の聲聞きては夏と悟り、峯の楓葉燃えそめて小鹿の曉毎に妻戀ふるを聞きては扨は深山がくれにも秋は訪ひきしと思ひ、曉の霜前庭に白きを見ては冬と悟るのみ、かくて我が黑髮はいつしか霜とぞなりにける。

一

實にや三界は火宅、誰か五塵の中をまぬがるべき、功なり名遂げてより身を退くをこそ君子とは言ふべけれ。かく悟りて我や一度功成り名を擧げてより世を捨てゝ此山奧に草の庵を結び聖き娯をとるなり。憂苦悲哀怨嗟は世に捨てられし者にてそあれ、世を捨てし我には只聖き娯あるのみ、茲より三里にして里あり、春風薫る櫻花のもと蜜より甘き囁きあれば、秋面冷たき扉につきぬ恨あり。彼は俗里是は仙郷仙郷と俗里は只一武の差あるのみ。

二

思へ西行も嘗つて山に庵を結びしこともありき、キリストも昔亦山に登りてそが信ずる徒弟をあつめ神に祈りしこともありき、釋迦も前には親をすて妻を遺して山深く分けいり法を修めしとかや、實にや山は幽寂にしてエデンの園なり。されば岩石聳えて叉語絶ゆる所、戀なく恨みなく嫉妬煩悶なし。樹茂り聲閙く所虚僞窃盜、姦淫惡計を聞かず、是黃金てふものゝなければなり。

三

山をおきて何所にか仙郷を求むべき。颯々たる松の嵐、潺々たる溪水、異鶴杖にありて友を呼ぶ聲いづれか俗塵を洗はざる。此人跡まれなる深山こそ尊けれ。

我や此處に隱れてより訪ひ來る者は朝な〱の鳥の聲、夕べ冷たき秋風の柴の扉を叩くのみ。外に誰と語るべき友もなければ、晨、山鳩の東へ飛ぶときわれは西の里に錫杖つきて託鉢に出で、或は弓嶺を攀ぢては白雲脚下に徂徠し、下りて谿に百合の花をたづぬれば松籟耳にひゞきて空翠衣を濕ほす。溪流白雪を吐く斷岩のもとに立ちては造花の鑿の跡に感じ、獨興きはまりて高聲に經を誦せば木精に冴えて物凄く、入りて佛前の木魚を叩けば深夜野狐の眞似るもおかしく、黃な

る落葉を搔きて點火すれば、白煙濕らて上らず樹間を搖曳する様は白旗を靡かすが如し。寂しき風葎の軒におとづれては裏の竹林自ずからなる笙を奏し、明星匂ふ夕べ淀む溪川に足をすゝげば、天なる花を水底に見る。

かくして我や六十路を越えぬ、そが二十年の星霜短きものにあらず、細雨霏々たる夕べ點滴の音を聞きながら座禪を組めば、靑春當時の悲歡交々胸をついて騷しうも出づるに、少し眼を開けば悲なく歡なく前庭十歩の外に樹なく山なく只白雲の濛々たるのみ。

（評）悟り顔なる趣味あり、野狐禪のそしりや免るべからず。

○竈門山

福岡　松枝女史

汽車にて九州を南下し給はん人は千代の松原をすぐるこなた車窓遙かに恰も甲を逆にしたる如き山を見給はん、之ぞ尊くも神武帝の御母神を祀れる靈山かまど山なり、之を仰ぎ見る人誰か尊敬の念を起さゞらん、朝に夕べに妾の軒端より仰ぎ見るに屹然として天外遙かに幾千年の風雨に堪へ泰然四方を瞰下し、總ての悲哀を知らざる如く常に微笑み、何となく床しくなづかし、山や晴れては美に、雨には奇に、奇岩怪石千態万狀、低徊顧望去るに忍びざる者豈に雅人墨客のみならむや、脊戸續き菜の花咲き亂らるゝ春の曙、今醒め出でし計りの遠山姿、立罩めし霞の幕次第に淡れ行けば曉鴉斜に飛びて山はほの〴〵と明けて行く、吁如何にやさしき其姿たとへば乙女のよそほひてらせる如くさても温容なる春曉の竈門山、檢の梢に蟬のなきしきる眞夏日に魔に似たる雲の見る見る彼方より寄せ來て忽ち夕立の沛然と山の靈のぬけ出てたると思はる、鳴神の最と凄く黑雲に山は見えたり隱れたり、されども軒端に露の滴る時山は洗ひ出せる如く從容として雨の降りしも知らざる樣に悠然と浮み出て七色の橋は凉風を隨へて麓より麓へと掛け渡す、吁豪壯なるは夏のかまど山。

尾花越し淋しく秋の日は入りて今や暮れ行く筑紫平野世は蕭々と枯れ行けども山の姿は常に變らず。夕彩雲の岫よりわき立つ時そこに默示の聖訓は秘まれたるなり、ふもとの邊りそばの花一入風情を添へて觀世音寺の鐘の音高し、やがては山深く分け入らば此方の峯彼方の溪に錦とまがふ楓の美はしからんに妾が軒端より見しかまど山、秋天高く秀でゝたとへば管笠詫しく枯野辿る老僧のそれに似て氣高きは秋の夕べの竈門山。

冬の夜の月物凄く遠里の燈火消えて朦朧と雪の野に浮み出てたる竈門山、峰より下る風の最と寒く窓に嵐の聲すなり、吁落寞なる哉冬の夜のかまど山。

貝原益軒の筆の一節に『雲霧常に深く立ち罩めて恰も烟の立つに似たり據て竈門山と言ふ』と以て其高きを想ふべし。吁居ながらにして見るかまど山、妾の悲し

き時淋しき時悔しき時いたつきの時、慰藉者たることよ無き友よ。春風秋雨幾千年の後迄も千古不變の姿は永刧に變る事なけん。世の人々よ一度は此靈山に登り古へを思ひ其美はしき風光に接し給はずや。

(評)遊想そゞろに動くを覺ゆ。

○廢家　長崎縣　山田くに子

取りかこみし塀も半はくづれ、靑葉杉垣のひまあらみ、庭は外より透き見ゆる廢家、手入する人なければとて、こは又庭石の間より、名なし小草のばら／＼とはえたる、あゝ此廢家!

鎖せぬしをり戸をくゞりて、内に足をうつし行けば軒は崩れて雀の巣となり、柱ゆがみて戸はくち果てつ、見るもあはれなる家の樣よ、足にまつはる草ふみわけて、裏に廻れば、草間を分けて何鳥か、サットばかりに飛び立ちぬ。

見やる彼方に石の手水鉢、中なる水は枯れてこゝに幾年、苔靑々とむして鳥の糞のみ白く、濕氣を帶びて崩れず立つも淋しや。

こは昔さる長者の、榮を誇りし家の後とか、五村かけての唯一の富家、行き來の人の足を止めし程なるが、ある主が庭の眺め深ふせんと、鎭守の森の寶木を、銀の鍬もてほり出し、こゝにうつし植ゑしが始めにて、不運は年毎につゞき／＼つ、つひにはあはれ此樣と化しぬとか。たゝりを恐れて借る人もなく、人氣絕ゆること早六十年!あゝ其かみの昔は知らず、かくまで荒れん人の世の富ぞしばらくの誇りのみなる。

うつし植ゑにし其寶木とやら、今も濃綠を語りつゝ、天隣の矢に抗うて、怪精こもるかとばかりに、天に向ひてのびにのびたり、

見上る我が瞳に何物か映ぜし如く、我にもあらで恐れつゝ、薄き冬の夕日をうけつゝそが木の下にすゝみぬ。寺の鐘はゆるう人訪はぬ此家まで音づれ、草木は色に夕を現はしぬ。さらばと立ち上る木の下蔭、何とはなしに幽寂の氣躬をめぐる心地して、ふむ足重く歸途につきぬ。

(評)盛者必滅。

○一たばね　紀伊　增美月子

○雛子

さいつ日孵りし雛子六つ七つ母鷄に護られて冬の暖かき日向を撰りて樂げに遊べる、まばらに殘れる菊の根のあたりあさりて芋虫一つ掘り出しぬ雛はいたくも驚ける樣、集ひては啄みまた逝ぐる其愛らしさ。

○南天

榮えし菊花も一朝の霜に衰へて見る影も無う哀なり、其全盛の折には誰一人も目もくれざりし垣根の南天の此頃になりていたくも頭をもたげたる、霜は益あつうして葉はいよいよ緣に雪はますます深うして實はいよいよ紅。

(評)應接の繁。

新體詩

河井醉茗先生選評

一等

○灯火（賞品銀側懷中時計）

長野縣諏訪郡下諏訪　山田くに子

闇の香迫る閨にして、
今消えなんの灯火や、
沈點の光ゆら〳〵と、
射すに力の弱き哉、
例へば終焉の罪の子が、
魂の負傷に耐へかねて、
沈思の底に泣きやつれ、
陰府の首途のしばらくを、
悔の祈禱にまどう如、
さゝゆらめきつたゆとうよ。
あゝたゆたへる其光に、
いかなる思殘るらむ、
逝きては歸らぬ地球の萬物、
さだめは同じ我も亦、
冷き陰府を億劫の、
ゆくてと急ぐ身にしあれば、
末裔思ては今更に、
憂愁の頸うなだれて、
消えゆく夜半の灯見たり。

好詩題、穩かに迫らず、急がず、一派の長所を採つて吾物にし、人に新らしい感興を與へるのは、茲し將來名を成すの詩才かも知れません。（醉茗）

二等

○我齡老けぬ

德島　眞洲子

日一日の、營みにつかれて、
醉ひざまの、行者ぶりか、
はた、希望も幸福も安逸も、
うせて、よろぼひの憧憬れ人か、
あらず此世の、あまりか廣くて、
朝ゆく風のささやきに醉ひ、
ひれもす、海、山の行脚につかれ、
いと衰への窶身にして、
西天の山路に夕つく日―かな」？
あゝ我齡かくも老けぬ――。
「夕ばえも束のまにして、仄にうすれ、
さて日は葬の、鈍に沒れて、
夜の墓塲の道ぞ暮れぬ」、
（あゝ我齡今は老けぬ）
さばれ我「齡の日」は僅かなりしよ、
われ死の神に克つ能はずして、
我幸福と、しかも榮華との、
此渺茫たる版圖も去るならめ、
あゝ「死」、願はじな―（我齡老けぬ）―。
さばれ我齡、永久にはあらじな、
やがて來ん、生者必滅の法、
幸福も、榮華も、はた純樂も、
運命の、車輪と廻りては、
あゝ現在の我が心よ、
勝れることも誇る勿れな、
まさに生ゆ、黽勉勤勞の樹は、
たゞ悲愁と、貧苦の實を結ぶのみ、
あゝ我は、むしろ「死」を
願ふ――（我齡老けぬ）。

我齡老けぬ、人生の悲痛、誠に此の一語に籠つて居ます、此作新彩あり、生氣あり、文壇得易からぬ詩てす（醉茗）

三等

○乾薔薇

德島市助任橋南詰坂田在　白樺子

乾びぬ薔薇あかねさす、

花の若さはおとろへて、よき香もうせて今は、はた、
悲愁ふかく沈默すかも、(いざ、とりさらむみだれ花)。
魂もそはざる息づきに、遲れ咲きなる萎み花、
あゝ凋落のさまにしも、消えんとはせし「榮燿の、
あはれ終生悲しびに、いとあてやかの安逸や、
端緒」をもとめて蘇生り、
美しそよ香の花の醉。
さあれ、生前戀人の、てよなく愛でてみ手づから、
うゑにしかたみの薔薇なれば、色は褪せたれ花うてな、
何とはなしに殘り香の、燻ゆるおもひに身にしめど、
手にはとりたれ乾薔薇花、
あたかも君が靈魂の、人知れぬまに、そと化して、
こゝにやつれてある如く、捨つるにも憂く、懷しう―、
また、悲愁に憧憬れて、血たぎる紅き唇に、
とけよとばかり接吻けぬ。

乾いた薔薇によそへて、魂の人を慕ふ情、詩にして善く歌へば勿論成功します、假に點數をつけると此作は七十點(酔茗)

○春の賦

長崎縣佐世保市相生町二三　初瀬みつゑ子

春の女神がうるはしき、歡樂のみ眉あげまして、
冬にあれたる天地に、天降りたまへば一夜に、
野に力づき、行く川は。希望滿ちたる音たてつ、
かくてぞゝに春はきぬ。
寂びたる面振りあげて、冬の男神が御使と、
聲も荒らゝに野を西へ、走り去りたる風に、
花も蕾も冷やけき、地に落されし八千草は、
雲雀の聲と、鶯が、「神の樂師は我ぞよ」と、
高うも誦する歌の音に、沈みし面、もたげたり。
あゝおそろしき魔の神の、掌深くなぶられし、
世は今よりぞ暖けき、春の女神が優しげの、
腕に深く抱かれて、樂しき夢に笑みもせん。

春の賦は多くの人が作るでせうけれど、此れ迄に格調の妙を盡く事は、一寸むづかしいでせう、諸嬢よ、幸ひに愛誦したまへ(酔茗)

○なきがら

茨城縣眞波郡北條町字北條　大塚きな子

われは野の人、草枯れし、堤に立ちてはるぐゝと、
雲流れ行く遠ち方に、戀しき人の影思ふ
河原撫子もゝいろの、小さき花を手折りては
戀する人に送りてし、花はみどりにおほはれぬ
籬をもるゝ月影に、握りあはしゝ掌

いかに吹くらむ秋風に、　胸をいたむるわが身かな
あゝひとりのみ野に立ちて、うつろとなりし侘人の
雲に寄せたる心をも　知らでか、草の緑なる

老成、優に作家の域に入るもの、詩調太だ夜雨に肖て居ます（醉茗）

秀逸

○悔悟

京都　しらまと女

童のまなざしわづらひの、
おもきはとざしはてぬらむ、
葉ごしにもるゝこもりづの、
低きささやぎぞたへやらぬ。

愁哀迷ふ廣野原、
甲斐なき身をば打ふせつ、
神に禱を捧げむに、
胸顫ふてぞ怪しけれ。

闇に閉えし小羊の、　美さは夢のさりぞとも、
牧場をてえしわがこゝろ、　それよ盲ひぬ欺きて。



花ちやんの守り　盛岡　久保ともゑ子

あゝをふけなき我こゝろ、　神の恵にもれつとは、
あらじを、さては偽りの、　自から棄てし我こゝろ、
神のみ膝にかへりせば、　せめては夢も安からむ。
悔いてやみなむものならば、　星よ耳をばすませかし。
童のまなざし煩ひの、　重きはとざしはてぬらむ、
葉ごしに洩るゝこもりづの、　低きささやぎぞ堪へやらぬ。

暗愁を帯びて、而かも光明にあこがるゝ悶える人の聲か之れ（醉茗）

○冬の大宮

市ヶ谷　しづ子

星まばら銀斑なす、
聖し宮母の胎内に
生花の憩をうけて
安眠する冬の帝王。
玉髓の野だかき草は、
薫り灶く夢の浮彫
鳥のごと水仙花かな。
瑠璃の扉に白き姿の
垂氷する古驛の甍
凍てたれど葉の廂に
霜白の大路の土は
殘月の光はありき。

清白の氷を割りて　遂春の精をぞ呼ばむ
朽葉いろ梅の木原に　月波へと雲いざよひぬ。
言ひ知らず野は淋しけど　水流る雑木の影
白樺の冬の立木は　底宮にまろ柱して。
雪ふれる雲のひまなる　驚栄、東風ははらへど
薄月の仄めかすなれ　仰げ——冬の大宮。
どよもして春の姫らの　かよひ路に光はやがて
花青丹、紅搖れつ　綠朧は空に燃ゆるらむ。

(盛んに新しい詩語を使ひ、想像の翅、自在にかけりて、詩國の人にならうとする、技巧に於ては大いに努めた方でせう(醉茗))

○新潮

越後　中村淑子

底の宮居に宮姫が、　奏づる朝の祝ぎ歌の
調べよ、あまり清らして、　渚にもどる波のはな。
春うら若かき紫や、　金色にほふ彩雲の
彩の舞衣ふりさけて、　新潮まねく天の戸よ。
あこがれ心地貝ふみて、　歌よむ人や夢むらむ
白鳥むるゝ島見ては、　神話おもほゆ朝かな
るり色波の底ひそは、　とこはの春のうるはしき
わがあこがれの戀の國、　美と平和の國の領。
ひとり罪の子うら若かき、　魂はすまふに安からむ。
うたふく貝の側にして、　眞珠の如く藻に抱かれつゝ、

(實に新潮の香あり(醉茗))

○つぼ菫

周防　小藤

緋瑠璃碧瑠璃灯に映えて、　玉、琅玕の目もくらむ
廣寒宮の春の夜を　妙樂の音搖く花の香や。
そと立ち上り小扇を　翳すも若きはぢらひに
強いてと許り名指れて　常久平和の舞ひすがた。
外れては苑の小散歩を　言ひ寄られたる美まし男と
嫉む罔象がつげごとに　觸れては悲し御いかりや。
解くべき術もあらかねの　下界に貶されいさら川
隔てどもゆる胸の火の　蝶となりては睦みあふ。
噫たへがたき當時の　一夜樂しきうま言に
憧憬——偲ふなだれを　相撲草とは誰ぞつけし。

(之れ亦、野に捨てる才ではありません、多くの作を拜見して行くうちには屹度上達なさるでせう(醉茗))

○自然の歌

熊野　木村とし子

虚榮の心すてざれば、　「自然」は何物も與えぬぞ
驕れる心すてざれば、　「自然」は何物も與えぬぞ
悶える者よ悲しめる者よ、　謙遜りたる心もて
「自然」を推理ぞ「自然」に願へ、　小鳥が歌ふ霞める森

あなたに聲なき眞理あり、若草纒ふ汀の小石
そこに默せる敎訓あり

少し理づめにはなりましたが、輕率ではありませぬ(醉茗)

○山火事

新潟　しらゆき

樵夫がすてし煙草火の
落葉の下にひそみゐて、
夕べあらしの神使に、
時を得たりと燃え出しぬ。

明かきに又も空恍けて、
來ては身をやく山烏、
怪禽キヽ！と野に鳴いて、
「警」つたふらし天災の。

あゝかゝる夜に巣離れて、
親うしなひし雛はしも、
火食の鳥と身を化して、
恨愁や人にうつすらむ。

あゝ改めよ罪の子よ、
滅亡のときは來りけり、
大火は山の彼方より、
醜のこの世を燒かむとす。

山火事、實に壯烈な詩題です、相應に力もあつて、決して捨てた作ではないと思ひます(醉茗)



墨谷の森　京都　辻あい

○梅樹の下に立ちて

下野　新井琴子

白光落つる庭なれば、
冷き莟に玉よびて、
月を抱きぬ老梅樹。
天平の香に息づきて、
緇衣の學生さながらや、
透影は袂に浮びたり。

夜なればこそ愧らひも、
嫖色に消ぬ可けれ。
若き悶えの十八や
我身少女の名を持ちて、
幻影なる戀を憧憬ては
寒にも躍る血汐哉。

夢かの想ひ薄弱の、
琥珀に迷ふ夜の宮の、
神秘の扉そと押して、
緋房搖めく亂れ箱、
矢書一卷に得し詩の、
あまり聖うて我にふさはぬ。

おとなしい作です、無理もなく、おどかしもなく、おちついて一つの情が善くあらはされて居ます(醉茗)

○黑鳥

滋賀　辰井花泉

冷氣凝りたる山霧に、
葉漏の光朦ろかの

終日幽暗き山なれば、　自然がきざむ鑿のあと、
木皮まだらの彫刻も、　冥府の暗扉の蝕模樣。
さば眞夜中ぞ木枯は、　諸木精等が一齊に、
今ぞと呪咀の大息吹、　陰靈暗にうめく如、
冠、梢をふるはすや、　時ぞよけれの奇し光り――、
毒藥たゞよふ隱沼に、　蠱の罔象女そよろいて、
魔殿くづるゝ響して、　怪し目ひからせ高呼べば、
死の香漂ふ木空洞に、　あゝ黑鳥ぞあらはるゝ。

黑鳥と云ふ鳥がありますか知らん、單に黑き鳥と云ふのてはありませんか(醉茗)

○せせらぎ

陸奥　加藤美枝

そのみなかみは岩ひばの　葉のしたたりの集りて
岸の小草にさゝやけど　蝶のねぶりを妨げず
その行末ははてしなく　河伯も迷ふ大海原
鯢鯨吼ゆる巨浪の　花斗を洗ふ雄姿かな
ここの枕瀨そこの淵　行きぬ淀みぬ渦卷きぬ
かくてしばしも止まらず、　綠をわけて野中ゆく
茜さしそふ大空の　希望の色はうつせども
夢をのせてや暗の　小川の水の音もなく
里の眞晝の日の光　流るる水に命あり
いづこ垂髫兒がさゝ船に　胡蝶の夢に揺られ行く
むらさきにほふ夕づつの　霞に消ゆる鐘の聲
夢にや入らむ夕暮の　小川の水の音もなし

平和の氣、詩は未だ初歩と見ました(醉茗)

○春の海

能登　天浪女史

鳥は百花におほはれて、　そよ吹く風に亂れ散る
花の吹雪よ―さそう香よ、　若き男女を醉はしむる。
空はみどりにうらゝけく、　鷗の夢はのどかにて
微風そよろ―わが少さき、　帆舟は霞に杳く消えゆく。

少しあつけない(醉茗)

○梅月夜

四谷　河野紅露子

見ゆる限りしろ／＼と、　冴えわたる月、夜は深し
灰色の小さき冷たき、　魔の影は掠めてゆきぬ
ふくいくと漂う風の、　肌寒み窓をとづれば
湯のたぎる松風の音、　野邊たねてふと夢の見し
花と風のさゝやきのごと　胸琴の絃をみだすよ。

愛すべき詩才はほのめいて居ますけれど、此作は餘り傑れて居ません、更に眞情の作を寄せたまへ(醉茗)

○寶船

相模　ふみ子

玉藻の香匂へる、　けうらの渚に、
南國の島より、　睦戀の歌秘め、
椰子バナヽ滿して、　詩の國に貢ぐと、
眞帆張りてしづ〳〵、　寶船いりくる。

岸に咲く紅梅、　ゆるう吹く東風、
小唄して入る來る、　船の上にみつよつ、
蝶の如ひらひら、　一片は砂地の、
花菫かすめぬ。

事もなう着落しと、　寶、澤つみあげ、
持て來にし酒汲み、　祝ぎの宴や、
松の彈く小琴も、　女波打つ皷も、
船人の興呼ぶ。

美くしい字を並べる事が得意らしいですが、今一段と美くしい意味もおつけなさい(醉茗)

○はつ空

兵庫　岸本桂子

旗手の靡き　東の空に
輝く火ほこ　女神の寶珠
玉の御殿を　武裝のまゝに
雲にかくれつゝ　雲てらしつゝ
萬の神を　あとやさきにも
羽音きびしく　天を掩ひつ
松にてりそう　はつ朝あけを
行幸のはじめ　三百餘日
あないさましき　よろづの羽袖
あれ玉摺れか　きぬさく音か

崇高(醉茗)

○かげの曲

下總　川島ふぢ子

天かけりする歌神の、　抱ける琴の響かや、
悲しく細く絶えんとし、　怒るか太くなほひゝく。
朗らかにして近づきつ、　微かになりて遠ほのきつ、
あゝ夢の如いづくにか、　微かながらに朗らかに、
朗らかながら微かにて、　世にも妙なるかげの曲。
ては古への名匠が、　彼れの命をこめてしに、
樂しき春の氣に逢ふて、　拔け出て鳴るか琴の精。
あるは舞殿の舞姫の、　輕らのひゞき足どりか。
面ふりあげて眼ひらけば、　あな怪しくも音はなく、
頭かゞめて眼とづれば、　また耳ちかく響くなり。

終りの四句のやうては細工が過ぎて、をかしいやうてすけれど、なか〳〵侮り難い上手なところもあります(醉茗)

○うれひ

麹町　田中小夜子

なかば捲きたる靑簾、　顏は見えねど玉琴の

十三の弦かきならす、　淸き音に夜櫻のちる
……君の情の薄櫻、　よしや思を桐が谷……
み聲に月もうすぐもり、　しばしとだゆる春風のひま

瀟洒（醉茗）

○高尾山

麴町　山下里子

光をつゝむ南の、　山より出でし村雲は
まわりの山をめぐり來て　高尾の峰にかゝやかむ、
峯の上なる楓葉に、　かゝれる雲とのみならで
紅葉うれしき月かげに、　夜も美し高尾山
美し花を手にすれば、　山の社や思出む
やゝともすれば瀧に入る、　其夕ばえに散るらむと、

詩格は分つて居さうに思はれますが、未だ何處か力の拔けたところがあります（醉茗）

○山の子

播磨　自然の子

名なし花の香野にゆらぎ、　さゞり滯るゝ朝ぼらけ
聖光の征矢もつ神は、　小暗き夢戸うちゆりぬ。
自然の色ににほひつゝ、　太古のまゝに窈然と
靜けく立てる秀峰を、　朝とく起きて仰ぎつゝ
柴木をかるよ山の子は。
永劫に流れて濁りなき、　背戸の小谷の眞淸水を
むすぶよ今朝も山の子は、　自然の岸をもとめつゝ。
いつはり多きうつし世に、　「人とし生きぬ」山の子は
自然の光りに對ふたび、　おどろのもとを蹈みわけて
自然の精を吸ふてゆく。

初めの方は今一いきです（醉茗）

○伏姫

麴町　船津康子

夜も更け初めし二月の、　深山淋しき小笹路に、
都育ちの伏姫が、　身にふりつもる戀の雪。
經を力に日は經れど、　自づと落る涙かな
まろぶ坂路に紅袖を、　留め顏なる八房や。
小松かくれの銃音に、　そのゝく姫を前にして、
小さき足跡こぼれ梅、　血にしたゝりし戀の花びら

○春興

淺草　冬野雪子

花の宴

金絲に縫ひし紅梅の、　五枚襲のふり袖に、
あら、ひら／＼落花して、　舞へよと强ふる春の人、
銀泥薫ゆる舞扇、　さつと舞ひ立つ八つ口を、

まろび出でける絹手毬、をかしと笑みし春なりき。

歌合せ

紅梅月夜金屏の、廻りて更けしをばしまに、
秀歌案ずる美くしき、あゝ慕はしき人の面影。
召されしをよき折りとして、
行幸源氏の巻繪せる、
小櫛に添へて戀歌を、
短冊にしてまゐらせぬ。

構想は新派の短歌より來る（醉茗）

○月を讚ず

上總　さゝ舟

天山の南崑崙山の地
青き湖の湛ゆるところ
野に紫の菫咲いて
春の夜おぼろ朧ろの月
神仙の樓閣金玉の臺樹　清き光の輝やくところ
廣寒殿に夏立ちて　滴るや水夏の月
月宮の仙女名は知らず　羅衣粧なる秋の夕
靜に靜に奏するところ　聞けや霓裳羽衣の曲
白し千山の雪のあした　遠し萬岳の月のゆふべ
天寒く地冷やかに聽かず　聖者の教のうたを
月は透明空寂々　色なく香なく玲瓏々
そこにあらむや人の生の戀
况んや迷はた惱。

漢詩を讀むやうですが、餘り感嘆すべき調子てはありません（醉茗）



夜なべ　　和歌山　津田久子

磯邊によする大波は、
船は波間にたゞよひて
げにたか波の恐しき

○蓮

ゆふべおろせし夜の神の
毯は暖きそが中に

○海

廣島　今西初野

あゝ海原ののどけしや
雲か山かの沖あひに
捕鯨の爲に漕ぎ出てて
踊る波路の勇しさ
煙をはくは蒸汽船
釣なす舟のそば走り
かなたに進む帆かけ舟
走る姿の面白さ
あゝ海原の恐しや
みづちはなどりわにいかる
われてくだけてさけてちる
たちまち高く又低し
げに荒風の凄じさ

上毛　意磨子

帳はたれてあけやらず
神の腕にや眠るらん。

光明與ふるアポロンの
み神はいまだあらはれず。
風は靜かに氣は沈み
池の面は靄罩めて
ハタとばかりに此時に
わが眼の前の池の面に
天津空よりあもりたる
玉を捧ぐる優しの佳人
先驅すなる曉の
萬籟默して聲もなく
只暗冥なるばかりなり。
暗冥を裂く聲高く
神姿凝らして立てる讃。
エンゼルの如と笑はしき
星を捧ぐる氣高き遊女。

上總　森　久子

○新　春

ぬばたまの夢より夢に、
天つ琴不斷の音たえば、
けふあすの空のあはひに、
まそ鏡きよしや霞の、
たまがつら絶ゆることなき、
天鼓は二つに割れ、
西東四方にみたして、
踊るゝ新春少女。
こき藍は平和のしるし、
紅の笑は救どころ。

大阪　なでしこ

○妹を失ひし友に

（よべ妹の夢見つといひおこせしかば）

燈火暗きあかつきの
寢る身にしむ國の中
ありしその世を偲び出て
永久に薫ずる花の香や
罪の世遠き國のうち
蝶をおひつゝかけめぐる
來れと宣らす御神の
いつしかゆきぬ母のそば
慈愛の聲にむすぼれし
枕はしとゞ打濡れて
夢路に逢ひし妹の
またもちりくる露の玉。
世ならば讃美の鳥の聲
綾羅の衣の袖ながら
少女の姿美しきかな。
慈愛の御手に抱れて
二人がともにさゝげたる
夢の醒めしと君は知らずや

紀本　たけ子

○初　日

新らしき、み國與ろと、
潮の音、高遊ぅ鳴りて
ひんがしに、瑞しき雲の
大八洲八十島かけて、
去年の夢、音なく落ちて
海原の、漲溢さくみて、
黃金波白銀波の、
ゆらゆらと、紫すれば
春かすみ棚引きにけり。
東雲や、見ろ眼もまぶに
さし登る、朝日子のかげ
讃えの譜、さんざめくかな

奈良縣　中宮　よしみ

○溪のほとり

遙きみ山の頂に
うらゝに晴れて空高く
たゞ溪の邊に現れぬ。
流れに添へる白梅の
訪ふ鶯の聲はせず
水の流れのゆるやかに。
籠負ひ來し乙女子の
たゞずむおりよ一陣の
花の吹雪はしきるかな。
花の幾片くれなゐの
あはれやさしの花筏
靜かにゆる〳〵流れ行く。
積る白雪消えれども
春の女神のみ姿は
花笑しくほゝえめど
讃美の歌をさゝやくか
清きかほりに憧れて
風は忽ちおそひ來て
乙女のほゝをうちし時
ほめ歌やまぬ溪川を

上野國　關口　初子

○ひな祭り

錦のとばり霞みえて
緋桃花咲く川添や
彌生の春の雛祭り
瓔珞はえん女夫雛
花や二人のあてな主
さゝやき風の薫り緻
ほから〳〵と暖かき
南の窓に諧そえし
光りまばゆき金屏や
立てるすはれる雛あまた
ほつれ鳳立つ古び雛

福島縣　三浦　たい子

○新　綠

山に野に今は綠り、
艸のみどり木々の綠。

あゝ緑り――見さむる色、
雨降りて烟むる緑り、
草木に緑り飾る、

○その日

藥のかをり――
看護婦の母が主とよ、
黒き服にエム字かゞやく。
看護婦は身上語りつゝ、
若き人の聽へする程
やがて終りぬ、さと立ちて
卓上の眉掛取らんと腕伸せば、
夢ならず、若き人の
我が手頸ゆるく摑れる、
刹那、胸もおどりぬ
打ふるふ手よ熱かりし、
やがて、口惜しと見つめぬ
知らじ、知らぬ人よ
强き手に力こもらば……、
されど笑みぬ、
「なさな心」に返りて我れは、
若き人は病をとひぬ――、
たゞ慰めぬ、
氣もすゞろ、扉を押しつ、
「たくまぬ情のひらめきに

○賤ケ嶽

あらしを孕む、黒雲に
陣雲迷ふ、賤ケ嶽、
吹くや東の夕嵐

吹く風に戰ぐみとり。
あゝ凉しわが好く緑。
眞夏神生れけり。

京都　露草

カーテン白き室の眞中、
頬白く齡二十五六
我れはたゞ爲すに任せて、

一山ゆるがす瀧の音は
音物凄き松風は
鼓をせんどゝ戰いし
思へば此所に戰死せし、
一山染むる秋ながら
其跡とはんも白波や

○渡れる雁



田舍　栃木　白藤史女

星の光の自然あり」

大分縣　やま川

郡山、愁愁の風吹けて
昔の標はまぼろしか
よするや西の雲の波。

崇き默示に似たらむか
深き眞理の光にて
さても尊き日の光――。

○漁村の夕暮

天つ日西に沈みては、

挑む力士の、喊の聲、
追いくる、敵の矢叫けびか
丈夫、武夫は、いまいづこ
鮮血の名殘紅ないに
樵歌牧笛の音も絶えて
余吾の湖、はるかなり。

小石川　中村秀淨子

眞砂の霜にみづかきも、
裂くる如くや覺ゆらん
蘆吹く風はこゝろなく、
つばさ寒けく通ふなり
つまに後れて唯ひとり、
朽ちたる船の舳の上に
とまれる雁の哀れさよ

○七色の光

周防　岡部佐保子

昇る朝日の七色の
紅きは君が稜威なり
黃なるは父母の惠みなり
橙色は友どちの
情にも似て藍色は
趣味の光に譬ふべく、
青きは自然の御神の
又空色は學問の
菫は愛の輝きよ

府下　鵠澤きん子

紺青の空に星一つ、

香も高き白波の、
はるかに白帆三ッ四ッ
白銀の砂もてあそぶ、
千鳥を追ひてすべりくる。

夢路に入れる妹の、
冷き眠そとふれて、
泣かず微笑む唇に、
そか紅のやさ頬に、
圓かなる夢やぶれしか
ほろりとこぼる松の露。

吹きくる風は松が枝に、
我も笛竹とり出てゝ、
まはらぬ口に歌ひつゝ、
妙なへる琴を奏づれば、
調べ初むれば妹は、
こゝに暫は巴の曲。

紺青匂ふ海面には、
光いみじき新月の
立ち去り解れてたゆたへば、
漁火しづかに瞬たけり、
女波男波のさゝやきや
遙かの沖に海士の唄。

越前　新保房子

○曙の海

磯の松原霽はれて
さゝべり紅き紫の
今か開けん東に
黄金漂ふ千潮の涯
風吹きわたる曙や
雲の雌の彩にしき
天つ日影は上るなり
海の眺ぞ遙かなる。

男浪女浪のよろ環の
磨にさすらふ人の子の
入日潮汲ける和田の潮
奏づる朝の觀き歌の
松の木陰に吾れ立ちて
歌になさんもはづかしく。
底の宮居に宮姫が
調べよあまり高ければ。

久留米　中原鐵子

○おもひ

靈のみどりはふかくして、
水の流れはものさびし、
あした五彩のよそほひも、
うするゝ光背にはして、
暈かげ遠く身はひくゝ、
こもるは形と色のみか、
夕日ぶだうの葉ににじみ
岸吹く風の身には泌む
夕べあとなき天雲や
無限のやみに入りしあと
もろくみだるゝ細のつゆ
遊子のおもひ麻のごと

花を抱ひて古を忍び、
山河百里のおもひなば、
月をのぞみて今に泣く
いまふるさとにもたらして

誰にかたらん相かな、
光りもうせて十七年、
かはらぬ松のみどりさへ、
秋風はやく花もなく
露うるほはぬみとせごし
いづれ情の友ならむ

相摸　中里雪花

○月姫愁

夢の蕭れゆく銀波に
秋行く風にもつれては
ほろりと冷ゆる雫かな
ぬらせし鬢の髪の毛も
解く手もつらく組む胸に

瑠璃飾る高殿に
はらりとちりし桐の葉
顔なき野にさまよひぬ
虫の小琴の夜な夜なも
調べの絃のふときれて

憂を抱きて關越せば
吐息も疎く覺束な
悲しき空に招きけり
つめたき石につまづきて
塔に立つ鐘の子の

母が織りたる薄衣の
夕べ藥打つ里子等が
短かき袴のいと寒し
色さへ香さへ褪めはてゝ
粗の響の身にしみて

野末に咲ける草花の
笑みも小さき片頰の
彼せし姿に思ひ亂るゝ
花の一つを訪ふて
下逝く水にうつりては

名古屋　四脇富子

○淡雪

やへだつ雲のゆき空を、
風もこそふけ谷あさく、
おほぢさびしき人通り、
つもるとみてし淡雪の、
もれくる日影とほしくて、
いとつめたかるあさぼらけ。
土さえいてゝみちばたに、
きえてしまふや石の上。

短篇小說

廣津柳浪先生選評

○藪入

小石川區原町一〇　明石光子

お母さん、恁う呼びかけたのは、髮を桃割に結つた色白な目鼻形の揃つた友禪の丸帶もうつりの可い十五六の娘、今日は正月十五日の藪入、今日の一日を樂しみに憂き辛さを忍ぶ奉公人の身、雨が降ろうが風が吹かうが懷かしい父母妹弟に合ひ度一心に昨夜はまんぢりともしないで明方になつてとろ〳〵とした許、今朝は早く起きて御用もすませ早く支度しておいでと奧樣のお言葉嬉しく、頂いた着物の似合ふのをオヽよくうつつたとほめられて嬉しそうに顏を赤くする、鈴やいつ歸るの？早く歸つてお出でねと傍へ來て可愛ゆくまつはる今年六才の孃樣、孃樣には大の仲よしの侍女の鈴はさも可愛らし相に、鈴やは早く歸つて參りますから溫和しく遊して入らつしやい。鈴は情深い奧樣孃樣に送られ邸宅の門を出て夢中で今お母さんの處へ來たのである。アヽ鈴ちやんかいと家から細い聲はお鈴に只一人の母親、オヽお母さんと障子を開けて轉げる樣に家に入れば先づ淚が先にたつて口もきけないのである、オヽ鈴ちやん奇麗になつてお母さんも何時來るかと樂しみにして居たのだよ、春も敏も何んなにか待つて居たと四十前後の人柄な母親、三年煩はれた夫に去年死なれてから女の手一つで三人の子供を育てゝ苦しい思ひの重なる處から何處となくやつれた樣も見える。總領の鈴子は其でも小學校だけ卒業させて其からは人の親切によつて小間使ひに出したのである。邸宅ではお障りもないかい、お前も丈夫で何よりです。エヽお母さんもお丈夫で嬉しうございます、奧樣は本當におやさしい方でお父ちやんのないのを大變不愍に思召して下さるの、而してお孃樣のお召しになつたのだけれど春ちやんにつて下すつたの。かゝへて來た風呂敷包を開けばメリンス友禪の綿入。母親は手に取つてまあ奇麗な春が喜ぶ事だろう。二人の聲を聞きつけてか赤い鼻緒の吾妻下駄を見つけて其と悟つ

てか、今し方迄外に遊んで居た二人はガヤ〳〵と爭ひながら這入つて來た。まあ騷がしい事と叱ればまあいいわお母さんとお鈴は制して二人を手招けば、妹は傍へかけて來てお鈴の着物に見とれて居る。弟は今迄の元氣は何處へやらはづかしさうに母親の膝にもたれる。二人とも大きくなつてねお土産持つて來てよ。お鈴は今一つの小さい風呂敷包から妹にリボンと花束弟にラッパと自分の小遣ひの幾分で買つたやさしい心の送り物。二人は交る〳〵姉さん有難うと喜べば此方も嬉し相なお鈴。母親はいつか立つて火鉢の火をなをし始める。三人は暫く他愛なく話し合つて居たがお鈴は思ひ出した様に敏ちやんも春ちやんも上野へ行きませうと云ひ出せば僕動物園大好きと大よろこび。お春は久しぶりてお鈴に髮を結んでもらひお土産のリボンをかけてもらふ。につこと笑へば姉さん奇麗だねと弟も口をそへる。



半時許で支度も出來上つた、お鈴は右に妹左に弟の手を取つてカラコロと可愛い〻兄弟は早くも露路を出る母親後からぢや氣をつけてね今日は人出が多いからよく姉さんの手につかまつて迷兒にならない様にねと其處にあつた下駄をつゝかけて表通り迄見送つて出る、子供達は二三度ふり返つて見たがもうそこの角を曲つて了ふア〻可愛い〻子供達お父さんが入らしつたら……もう思ふまいに其より早く好きな物でもこしらへて待つて居ませう。其の眼からは早情深い涙があふれ出るのであつた。

評は輕快の二字で足りる、別に趣向に苦心したとも見えないが、是だけ書けるのは、能文の人で、又小說を書き得る資質を有して居る（選者評、

○憐れの姪より

越後　長澤ふく

筆こま〳〵と、眞情こめられし御手紙、涙さしぐまれつゝ、有難く御懐しく、幾度か拝誦致し候ふ。

足らぬながら、叔母の意見と思つて、容れ呉れよとの御頼み、あまりに畏れ多き御言葉にて候ひき。亡き母の妾が身をきづかはれて又も、此世に來ませしかと思はるゝまて、母の懐を放れて以來、今におぼえなき暖かさに、嬉しとて存じ候ひしに。

父は御身の婚期を急がるゝとの由、それも亡き義姉が只一人の忘れがたみなればこそ、まげても、父の意に從へよのお諭し、忝じけなしとは存じながら、何とも致し方なき身を、如何で、御言葉に從がはれ申すべき。

實は先便に、ちらと申し上げし、結婚の事は、確かと承知致せしには、之なく候。いつぞや、父の、幸は誰も貰ひ人なき故誰やらの嫁にせんと冗談に仰せられしを、疚しき身の胸の痛さに、堪へ兼ねて、何處とも寄るべなき身故お叔母様のお情にすがらんと、上京を思ひ立ちしにて候。

成れぬと思ふはせぬからの事、神の與へ給ひし好時期を、取り逃すなとの御導き、お叔母様なればこそかくも、御情をこめらるれど、最も深く最も強く妾が胸をいられしは、此お言葉にて候べき。

されど〳〵神は未だ妾に、妾がひがみ心を飜すべき新生命を授け給ふまで、寛大におはさぬを、嗚呼如何にせん。誠、神のあづからせ給ふ縁ならば、一度そられ候ふとも、まだ捕へられ申すべくと存じ候ふが、如何にあせればとて、歎けばとて貰ひ人なき身を如何に致すべく候ふや、あゝ容貌や、黄金に代へても、尊とかるべき、德操の、あゝ、德操の、妾には、既に既に、半錢の價なきものにて候ふを。そを何故と、なじらせ給はぬやう願上候。

お叔母様なればこそ、かゝる、恥かしき事まで申上げて、不從の、お免しを願ふなれば、何も心一つに、御秘め下され度候ふ。

妾事、漸うもの心づき初めし頃、思ふも、憎くき、魔の、魔の妾を襲ひしにて候、其魔こそ、後生、妾が終生の幸を斷つべき、恐ろしき、斧にて候ひき。

あゝ假令、婚姻を濟ませし、夫たる方に、過去の罪惡を免され候とも、世の競爭場裡に疲れ悩まされて歸る夫の唯一慰藉者として夫は滿足致し候ふや、斯るひが

み心強き妾の世のすべての情を知らぬ妾が、一家和樂の中心者たる、主婦となられ申候や。

それをまして、義理づくめかのやう押しつけらるる其人の、如何に辛らく、情なく覺され候はん、又母ともなりし後、妾が、最愛の子たるべき其人に、母の無情を悟られて、怨まるゝも、如何に苦しき一生にて候はん。

今は、よく／＼、幸うすき、運命の下に、生れし身とあきらめ申候。

此後、世の荒浪にもまれて、如何樣に、心變り致し候やも計り兼ね候へども、妾が人がましき心あるうちは、世の貴かるべき最とも美しかるべき樂しかるべき家庭に入らんと思ひ浮び候折は、身も心も世にあるべからざる身と、幸なき一生はかねて覺悟の上にて候ふ。

お叔母樣、戀に容れられざる憐れの性は世にも容れられ申さず候や、誠さる身に候はゞ、叔母樣のあつきなさけの御意見は、死すとも忘れ申さず候、あゝ運ばんとする筆は、うごかず、胸中千々にみだれて、最う思ふまゝになり不申叔母樣何卒よろしく御推察下され度候

故郷にて

幸子

東京にて

叔母樣御許へ

全文、手紙から成る小說は西鶴の『文反古』以來、隨分あるので敢て珍しい態ではないが、此一篇身の薄運を嘆いて叔母に答ふる一書、委曲周到、意到り筆隨ふ、得易からぬ文字である（選者評）

五等

○大晦日

麹町土手三番町二十二　山下里子

蕭然と透き通つたやうに眞白い夕暮の雲が、悠々と西へ流れる、丁度其の姿が北國の山によく見る雪崩に似て居るので、私は一種の興味を以て、暮れ行く空の寒さうな色合を仰ぎ乍ら、門邊に佇んでゐた。

大晦日の事で、腸へ沁み込むやうな寒風が、今朝結うた許りの束髮を亂して、向ふに立つた土手の松を搖つては、轟々と瀑布のやうな響を起す、道行く人の誰しもが、何れも忙しげな足並の、右往左往に走せめぐるのは、定めし今宵を安らけく過さんとするのだらう。洋燈も點けて、夕飯も終つた、比較的平和な私の家ではもう、靜に正月のくるのを待つより外に、何も用は無い。それで私は少し遠近を散歩して見やうと思つて、そろ／＼と市ケ谷見附へ出た、玆は又一層の困難である、俥を走らせる者、電車へ乘る者、荷物を抱へて小

走りに走る者、それは〱時ならぬ賑さてはある。暫らくすると、帯坂の方から下りて來た二人の、一人は四十二三、一人は十五六の女連があつた。如何にも親子らしい容子て、二人共小脇に可成な包みを抱へて私の傍を通りかゝつた。その刹那、實に瞬間てある、悲慘な短い會話が、電氣のやうに私の耳を襲つた。

「御母様、寒くはなくつて?」

「汝こそ寒ひてせう、堪忍して頂戴よ、此の寒空に袷など着てねえ……眞に情無くなるは、私はもう……」

鼻懸つた涙聲の、おろ〱泣きに泣いてゐるとは察せられる、そして案の如く母子てあつた事も察せられる、私は眞に他事とは思へないやうに悲しい思ひが胸の中に漲つてきて、いつしか釣り込まれて、二人の後を追うて市谷停車場の待合室へ這入つた。そして娘が切符を買つてる間母なる人の傍に立つて、何の氣なしに時間表など眺めてゐた、軈て娘は歸つて來た、二人は茲て別れて母は家へ歸るらしい、母は手にした包みを娘に渡して、



源平屋島　紫芳女

「それては中野の叔母様によく譯を話してね……或とするとあの叔母様の事だから……」

と一層聲を低くして、四邊を見廻しながら、

「何といふかもしれないが、其所の所を宜しくね……そうして成る丈早く歸つてきてお呉れよ、お父様も御忙しいのてすから、私はもう歸ります」

と立ちかけたが、又振りかへつて、

「なる丈、早く歸つてきておくれよ!」

再び念を押して母は歸り行く、娘は輕く點頭いて階段の方へ向つて行つた、その時の二人の感慨は如何てあつたらう、青白い電燈の光を浴びて、悄々と昇降場へ向ふ娘と、それを遙に見送つて歸る母の思ひと――思ひ見るだに、同情の涙がはら〱と止め度もなく飜れてくる、況してや二人の心の中は……?

私は母なる人の後影が、夜霧の中に沒する迄、遠く見送つて、何ともしらぬ妄想に耽つて居た。すると悲慘なる彼等の家庭が、眼前に散らついて、父なる人が思案に餘つて悶々としてゐる傍に、飢を訴ふ

る子供等の姿が眼に見えるやう、と又娘が中野の叔母なる人の前てすげなくも斷られてゐる姿が手にとるやうに浮んてくる。あゝあの風呂敷包み、それは抵當とやらに持つて行つたのてはあるまいか、父なる人それは高利貸とやらいふ者に攻められつゝあるのてはあるまいか‥‥など、種々の幻影が、吐胸をついて出る。終ひには堪へられなくなつて、人のゐぬのを幸ひに、待合室の食卓の上に泣き伏して了つた。

停車場の觀察、時は大晦日、眼の着けところもよし、書き方も新らし、殊にわざと大人ぶらないところは此小說の眞價てあらう（選者評）

秀逸

○めぐり合　　安藤みどり

「左様なら」、校門前て二人は左右に別れて私は思はず、「おゝ寒むッ‥‥」、と身振いした、仰げば日はすつぷり西山に落ちて其殘光が僅に向ひの山頂を照して居る、私は又しても空想に耽るのてした。

今日新たに裁縫敎師として被在つた遠山秋子様、私はどんなに不思議に又嬉しく思つたてしよう、兼ねて校長からお話があつた時若しやと思つたけれど眞逆あの秋子様てあろうとは思ひませんてした、吁秋子様の名は片時も私の腦裡をはなれた事はありません、七年振の今日偶然めぐり合つたのてすから其驚きと喜びとは一通りてなく、前世は姉妹てあつたのてはあるまいかつて、二人は嬉しなきに泣きました、積る話は眞砂の數つきずそれ故こんなに遅くなりました。◎

思へば七年の昔しかもこんな晩てした、私は學校の歸り叔母様の處に寄つて例の通り一人遅く歸つて居ますと翌日が大雪だつたものてすから、其の風の烈しい事と云つたら一通りてありません、向ふの藪の下迄歸ると足袋もはかないて十一二の乙女否秋子様が寒そうに立つて被在つて私を見て懐しそうに、「一寸此所は何つて云ふ所てすか」、私は不審てよく見れば旅の方らしいから、「此所」、「山田つて云所」、「左様ー宿屋はありませんの」、「宿屋はあるけど未だ遠いんてすよ貴女何所へ行くの」「私原村つて云ふ所へ未だ遠いてしよう」、「原村つて聞た事ないわ、貴女獨て」、私の問ひに無言てうなづかれた秋子様の目には露が宿つて居ました、何か深い理由がありそうなのてだん〳〵尋ねて見るとこうなのです、幼い時父母を失ひ直に叔母夫婦に引取られ、子なき故か實の親も及ばぬ程愛されしが、只一人のお婆様、意地悪く何に彼につけて小言の絶ゆる事

なく大方は我故と思へば叔母夫婦に氣の毒で其都度斷腸の思ひ、今朝は又お婆様の大切なお茶呑を破し、不調法幾重にもおわび申てもおきゝ入れない遂に出て行けとの事、原村には實の叔父あれど叔母なる人は見し事さへなければいと心細しと涙を以て語つた。

私は氣の毒でたまりませんから、「今夜は私の家にお宿んなさい私が母様に願つて上るから」其夜秋子様は私の家に宿られました、翌日は大雪が降つたものだから下男に村境迄送らせましたら秋子様は泣いてお禮を言ひました。

七年目の今日同じ職務を以て同じ所に奉職しようとは夢にも思ひませんでした。

何時しか自分の家の前迄歸つたのでふと心地付くと門前にはいつもの通母様が立つて被在るので嬉しく、今日事をかいつまんで話しますと、母様も大變不思議に思はれました、二人は連立て門内に入る頃雪がちらちら降り出しました、此の勢では翌朝は一尺位積むと母様は云ふのです。

たがいれや

名古屋　久保千代子



一種の美談とも云ふべく、話の筋の美くしいのは、一方ならず讀者の感興を惹く、只書きぶりの幼い爲に、文章が讀みづらい、正直に書かうとして居るが、未だ能く思ふ事が書き現はれて居ない（選者評）

○その涙

下谷　太田あきつ子

「然し僕は全然不贊成さ」椽の柱に身を凭せて微笑み乍ら云ふ兄の顏を、島子は默つて瞶つた。黄昏て早四邊は薄暗く成たが、地面のみ仄白く見へる十歩の庭の萩の亂れて、夕風訪へばさら〱と葉摺れの音。軒の風鈴が淋しい音を立てる。

「不贊成だなどゝ云ふと大きに御機嫌損じるかも知れまいが、實際僕は不贊成なんだ。僕をして云はしむればまあ畢竟儚ない虛榮心と云ふのさ。虛榮心、此虛榮心と云ふ奴は女に附物で殊に島さん頃、云謂靑春の血燃えて身も心も燒盡さんと云ふ時期にはだ」

「あら兄樣！だつて妾のは其樣な！」突然語を挿む。

「まあ可いからお聞きよ、そこでだね。女には定まつた本分がある。元來女と云ふ者は先天的服從性に出來

でるんだから仕方がない。夫を補助して幸福な家庭を作り、立派な國民を生んで少しでも國家に貢献する所あらば、夫れてこそ女としての本分を全うした者と云つて可いだろうと思ふ。生んだ子が社會に偉なる人物であれば、報酬たる名譽尊敬は直ちに其母なる人が受けるのであるまいか。島さんの獨身主義——斯道の尼と成つて藝術の爲に飽迄盡さうと云ふ——それも可かろう、雖然それては女と云ふ者の性質に背きは仕ないかと僕は思ふが。島さんの文才のあるのは元來知つてる。が、地躰強健な質じや無いじやないか。若し半途て殪れたら什麼する。又たとへ成功した所で餘程の天才ならばいざ知らず、喩へて見れば大海の一粟で、獨水上に浮んだ所が大局の上から見て、遂に幾何の益があるだろうか。出てゝ社會に花と唱はれるのも、退いて家庭に身を結ぶのも考へて見れば五十歩百歩さ!」兄は語を止めて庭に目を遣つた。夕闇の中に仄白い面を擧げて、島子は云はうとして躊躇たが、

「ですけれど」と云淀むで、「家庭が平和に行かないで涙と侶に暮すよりは、女の性質には違ふかも知れませんが‥‥藝術に一身を捧げて了つた方が好いと思ひますけれど」其語を遮つて、「いや島さんの樣にそう悲觀計りしちや不可ない。よし又一時は圓滿に行かず共耐忍は最後の勝利だ、僕は女として家庭の眞味、即ち家庭に於ける總ての愛を知らぬ女は實に憐むべき者だと思ふ。女の生命は愛だもの。女は畢竟人の妻たり母たるべく生れて來て居るんだからね—。妹に目を移したが優しく「ねえ島さん、獨身者、殊に女の獨身者は終ひには必孤獨の寂寥を泣くがねえ。それでもう女の弱い、情の人と云ふ事が現れてるじやないか。だから僕は島さんに孤獨の寂寥を味はせ度無いんだ。僕は惡い事は云はないよ、まあ能く考へて御覽!」

島子は何をか思ふらしい。兄は仰向て其感情の眼を閉ぢたが、冥想暫時。「僕は今でも恁やつて居ると、お母樣のお死去の時が歴然見える。彼時何と仰有つたか島さん忘れは爲ないだろう」。聞くとえゝと頷いた。二年前の悲しかつた時の光景は、島子の眼にも顯然と浮ぶ。是後は兄樣を親と思つて仕へ、何所迄も女と云ふ事を忘れない樣になさいと、妾の手を取つて示された、其語は短い乍ら意は長い母の遺訓、女、女、人の妻たり母たるそれが本分、先天的の服從性。獨身の處世難。愛が生命。そして妾は女。島子の胸には種々な語が繰返される。

「僕は强て島さんの意志を飜へさせ樣とは云はない。然し島さんは僕の只一人の妹だろう。此至難な浮世の大海を渡つて行くには途中で種々の迫害を受ける必順風に帆を上げる事計りはない。風も起ろう。浪も捲かう。又鰐や鯨の窺ふのもあるだろうもし最愛の島さんが舵の取樣が惡かつて一生の方針を誤て御覽、全く僕が亡い御兩親に濟まないからねえ……」

十八の若血燃えて、藝術の華の香に醉ひ理想の影に憧れて居た島子、今大なる覺醒の聲に接して女の身の弱さ儚さを思沁みると共に、處世難と云ふ事を犇と胸に覺へる。日は全く暮れた。澄んだ空には星がきら〳〵と輝出した。流石は秋、蟲の啼音が厭に冴えて聞えるのも淋しい、垣根を洩れて隣の燈火がちらり見へる。島子は立て臺所へ洋燈を取に行つたが、持て來ると程好い所へ置すえ乍ら、

「眞に兄樣、女つて詰まらない者ねえと思沁みた聲、

「うむ、何故？」「何故つて……女は實に弱いんですもの……妾……」と云辛相にしたが、

「妾、今迄の主義は全然捨てゝ了ひます……」。島子の語に兄は默つて其顔を視守ると、灯影に脊いて俯向いたが、淸しい其眼には慥に露が燦いて居たのであつた。

此篇の眼目は理論にあつて感情よりも、意志の衝突を描いたのであるから、小說としては感興に乏しいかも知れぬが、亦之れ一個時代の反映、作者の考へは徒勞でない（選者評）



新年の初　越後　佐藤紫星

○愛子　大阪　牧山久子

「花ちゃん如何したの泣ものじや有りませんよ、」脊に手を廻して言ふた。花子は私の姪で今年とつて八歳、父なく母もない一人子、いや母は有つても居ないのである、自分は母の居なくなつてから三月程、花ちゃんのお守かた〳〵來てるのだ。

「如何して、」

「泣くのじやないわ、母樣ごと最早いやなの、そうお話しましようか、カチ〳〵山、桃太郎、り、なに……いえ……」

尚しく〳〵泣て居たが、突然

「伯母さん。」面には沈痛の色が現はれてる、

「エ、如何して、」

「あの……あの━お祖母さんね謝つたら罪は許して下さるつて、仰言てよ神樣がつッてね眞實━、」「エ、」「祖母さんね先刻も泣てゝよ惡かつたつて、何が惡かつたのでしよう、而して花には學校へ出して上げるから、溫順子になつてゝよ……て其したら母樣の罪も神樣が許して下さるのだつて眞實、伯母さんエ、……」

あゝ罪、此樣可愛い小供にまでわかるのだろうか……思ふとわけもなく咎たくなる、あゝ光子さん何故花ちやんをのこして、家出なにかしたのだろう、たとへ一時のまよひ心とは言へ夫の死後一年も立たぬまに、之が敎育ある人と言へようか、よくも〳〵……不孝！不貞！不埒！怒の字は眼のあたり見ゆる心地するに引かへ花ちやんの可憐な心かくまで母の罪の薄らく事を、小供心にいのるのかと思ふと思はず淚がこぼれる。

「オヽ花ちやん好子になつて頂戴よ！」確り抱上げた、「お伯母さん必好子になるわ、」自分の乳のあたりに面をうづめたまゝ。」

あゝ此の誓よ永久も續いて何卒母に似ぬ、好子になる樣にと神にいのつたのである。

母に似ない好き子になれと神に祈つた一段、殊に哀を覺えしめる信仰心の件うて居る作だから、何となく文字の清らかな心持がする（選者評）

懸賞品發送濟に付社告

新年號に發表いたしました當選諸孃て故障なきお方へは規定の通り二月五日を以て左の通り懸賞品を送付しました到着次第自今御受取の報知を願ひます

婦人持銀側時計　高仲菊子

上等絹張洋傘　根本松江

新柄反物

○わか菜子○藪智子○しのぶ子

流行帶止

○山田くに子○村山よし子○戸張とめ子○前田民子

縮緬半襟

○有賀まさ子○宮島なみ子○赤倉とみ子

◎化粧品＝酒葉貞子○丸山たつ子○平谷たつゑ子○岩谷綠子

◎輕便圖書切符（七十錢）房枝子○石川潔子○田中常子○山田沖子◎（仝上五十錢）＝○金子れん○川島たつ子○齋藤茂子○紅薔薇○翠婆◎（仝上三十錢）＝磯雅井菫子○乙部菊子○朝井松子○岩淵國子○山本とし子◎（仝上十錢）＝鏡花女史○齋藤さわ子○尾崎雅江○ゆき子○中島縫子○江原とり子○大島きよ子

◎實用裁縫全書　相原壽美子◎料理手引草　井澤菊江子◎園藝各論　高山浪子◎茶の湯と生花　村林やす子◎明治名家々集　井上靜枝◎佐々木先生肉筆短冊　今西初野◎水彩畫一組宛　中川浦子○森部蝶子◎ヴアヰオリン手ほどき　齋藤茂子◎琴曲獨稽古　傳田しか子

▲發送未濟の分京都の椽子、周防の内山美子、德島の紫漪子三氏は住所姓名を詳報して下さられば送ることが出來ません

和歌

佐々木信綱先生選評

（三等）

白き花かつ散る宵は世にあらぬ
君見るごときなつかしさかな

麹町土手三番町二十二、山下方　大村絹女

〔評〕幽艶。

（四等）

まとゐして埋火かこむ雪の夜に
解き得ぬ謎を云ふ翁かな

成田　三橋達哉

〔評〕おもしろき着想をとらへ得られたるかな。三句原作冬の夜とあり。冬の意は一二の句にこもるべし。雪の夜といふ方まされり。

（五等）

春の夜や小琴に掛けし綾衣の
美き香沈みて春雨のふる

越後　中村淑子

〔評〕小琴にかけしは再考を要す。四句すぐれたり。

秀逸

○薄月夜緒琴調らべて君待てど

弘前　華枝

君は來まさで桃の花散る

久留米　中原鐵子

○縣の長ほめまし〻かと捧げさりし
村長の門の梅咲きにけり

京都　星見菫村

○天の原年をことほぐ鈴の一つ
落ちてはこゝに響く鶯

飛驒　萬殘月子

○銀燭に榮ゆる衣桁の晴衣見て
人知れずこそ泣く今宵かな

三河　柳子

○かりそめの仰せに涙おとすまで
心よわくはいつなりにけむ

兵庫縣　永島豊子

○蘆笛に込めて吹きつる一節は
現世を去れと胸にひゞきぬ

北海道　くれなゐ子

○三年ぶりわが故郷にかへり來て
都の風の冷きを思ふ

筑前　菫坡子

○亡き君が瞳の如き星ゆれぬ
白梅苑のしのゝめ時を

○梅さける里をはづれの小さき岡
岡を背にして瓦やく家
下野　江面柳花子

○見るまゝに闇に消えゆく夕虹や
をとめが春にさても似たりな
鰺ヶ澤　加藤美枝子

○辛き世に堪へて歸れど故郷も
父在りてこそ母ありてこそ
播磨　古月女

○縫物をかたへによせて訪ひましゝ
友をもてなす姫桃の窓
上毛　菫花女子

○水けぶる遠山けぶる蛇の目けぶる
菜の花の道春雨けぶる
上毛　綠笛女史

○桃咲ける新藁屋根の家戀ひて
辿る夕べの菜の花の道
上毛　關口女史

○世に合はぬ秀才送りて江の岸に
別るゝ夕べ蘆の花ちる
上毛　かるかや

○和歌山縣　增見月子
年經なは今日のうれひの思ひ出をかたほに笑まむ時もあらなん
○福井市　吉村とみを
いざ兄子よ櫨の手をやめて夕榮の空に歌謡せわれ擧彈かむ
○四日市　濱田邦子
野路山路百里あまりを霜白き石碑見んと辿りしや吾
○群馬縣　和田興志子
祖父君の世になきしらで此春も尋れきたりしめがれ賓哉
○上毛　關口梅子
朝明やあまがすさびの唄のせて大利根下る白帆むしろは
○群馬縣　和田季子
うなづきつ共に何をかかたるらし床の小瓶の緋桃白桃
○小石川　明石光子
母こひし父なつかしと思ふ間に今年は我も人の子の母
○京都府　野菊女人
緋桃さくひなの小村をうちすぎて駒を急がす春の夕ぐれ
○長崎市　小笹かほ
秋の寺經の聲きく夕ぐれを庭にしをれししら菊の花
○熊本　たけ子
峠越えし馱馬は麓の霧に消えて月に殘れる追分のこゑ
○福岡縣　松枝
すげ笠は尾花の末に消え行きて筑紫野たとる旅の僧かな
○小石川　うた子
君の病またく癒えぬと聞きしより花もうれしく月もうれしき
○美作　性全紫女史
たゞされし涙をそれとあかしかれて夕淋しき星の笑み見る
○佐世保　初瀨さわ女
灰色の雲にかくれて世を呪ふ魔の神見たる舟の夕や
○淡路　伊東君頂
吹く風に此歌反古をやきすてゝ君すむ空に行けと祈らん
○飛驒　秀子

み情の千束の文はやき捨てぬなにを忍びて泣かむ憂き身か
○　福山　工藤以津子
春若う白梅かをる茶座敷に緋袱紗さばく姫美しき
○　丹波　吉田里よう
溢れ出づる涙も涸きよ血も枯れよこよひ一夜を悶えに泣かむ
○　横濱　落花一片
愛らしき御歎使とゆきあひぬ梅に月ある渡殿にして
○　羽後　前田久子
とび石にかざしの落るひゞきして花の廣庭月おぼろなり
○　渡邊穆哲子
雉子鳴く麥生に月の影おちてほの〱しらむ春の山畑
○　鹿兒島　橋口靜子
乞兒とも知らで生れし稚子見れば吾が世は更に憂しとしもなし
○　しら雪
去年の春都の姉に笑はれてとりし肩あげまたあげて見つ
○　美濃　傍島みゆき
秘めし事云はじ語らじ吾れはたゞさめて悔なき夢をこそ見め
○　高岡　北本歌子
聖堂の鐘の音響く丘に立ちてパリーの町の朝景色見る
○　紀伊　阪本春江
夕日影魚釣る人のせをこえて玉藻刈る子のやさ頬に照りぬ
○　西播　酒見村子
南椽に小猫れむれる冬日和京の友より繪葉書つきぬ
○　尾張　愛子
山こえて歸る兄上今いづら風吹き荒み雪降り出ぬ
○　成田　小倉澄
朝な夕な子羊を追ふ我身には吹く春風のいと嬉しき


水邊　一ノ瀨　阿部とみ子

○　美作　性全寮女史
くれの鐘そゞろ撞く手のたゆたふになぞ黑染の袖顋ひけむ
○　岐阜　泉しげき
うつくしき神のさゝやき野に落ちて菜の花畑游靄こむる
○　福井縣　上原嘉子
もみぢ葉の錦はちりて山の端に雪より白き月を見るかな
○　常陸　仲田百合
草もゆる園生に雪はのこれども春としりてやうぐひすのなく
○　信濃　藻の香
森を出し車の窓ゆ菜の花のなみよろうへをゆく白帆見る
○　廣島　つれ子
梅が香を袂に受けて姫君の美くしうゑむ朧夜の月
○　赤坂　森英子
花の香にむせびてかへるおぼろ夜や月さへ匂ふ月ヶ瀬の里
○　石川　つむ雪
こゝにしてわかれし君をしのぶかな時雨みたるゝ野はつれのみち
○　吉敷　里子
木枯の寒き夕を戸によりて鐘なりひゞく御寺見るかな
○　下總　藤崎美奈子
琴の音を戀ひ慕ひてか鶯の庭に來て鳴く春の日長き
○　磐城　もみぢ
丸窓につもろみ雪はかはられどすゝむ人ぞかはりぬるかな
○　日本橋　神部けい
遠國に旅立つ友を送る身の一きはさびし冬の夜の月
○　南多摩郡　金子信子
ほの〱と東白らむ門松に世を千代〱と祝ふ小すゞめ
○　安房　梅の家

和歌

冬の日はみるまにおちて竹村に霰なく聲寒く聞ゆる
房州　金木ふみ子

○

初春の花とし見んと眠ふ間に積りもあへぬけさの淡雪
千葉縣　安房子

○

一つ一つ星きえ行きて河添の柳に白む有明の月
紀伊　島もと子

○

わが行かむ故郷遠く森見えて茅の軒端に梅白う咲く
木所　田中久子

○

悲しみを愁とはせて今日もまた一人の母をいつはりしかな
久留米　中原毅子

○

咲つぎて歌がたりする霜の夜を物かなしげにさを鹿の鳴く
鋸山　紅白女史

○

見送りし小島の畔は雲に入りて腐き枯野は只だ風の聲
林　婦美

○

神さびし御堂に入りて奉納の歌を獻ずる小春の日かな
千葉縣　小金清子

○

小雨晴れて夕日美はし神の庭花の吹雪に白鳩あそぶ
横濱　江島すゑ

○

ねやの戸をあくればやかて梅の香を吹きおくり來る春の朝風
下谷　燕雨子

○

今年又去年の儘にも咲きにけり亡父が墓の白百合の花
はりま　自然の子

○

我身なば春にみちびくしろべすと笹舟ゆるう北へながるゝ
紀伊　岡田なみ子

○

少女子のたもとに香る梅の花いづこの春の光なるらむ
柳河　初香

○

松しげき木立まじりのひともとの梅ほゝ笑みてうるはしきかな
備後　磯月

○

月影の猶に殘る山の端に花もかすめる春の明ぼの
福岡縣　松枝

○

君去ると聞きし夕べの戸によりて悲しうひゞく鐘の音きく
岡山縣　一安君子

○

牛引きて出つる童の宿ならん桃咲くあたり朝烟たつ
飛騨　千代子

○

ほのぼのと雲の高峯も明けそめて初日ゆたけくかゝる松ケ枝
高知縣　田内いれき

○

夫婦して引きわづらへる荷車や霜とけかけし畷かげのみち
渡島　工藤士峰

○

鷄のコヽと餌拾ふ聲はして日はうらゝかに山吹の散る
濱田　田儀志衛子

○

夕べ又君なば待ちて有明の月にかこちし袖しぼりぬる
上毛　塩原幹子

○

梅の花春風そよとそよぎなば匂ひやるべし筑紫の國に
下總國　たか子

○

鶯はなかぬ日あるも君戀ふる我にはあらじ涙せぬ日の
南多摩　加藤百合子

○

なつかしき君と語りし夢覺めて窓ごしに見る冬の夜の月
大阪　神田信夫

○

夢なりきさはれ覺めての今我をそゞろ思ひのなきにしもあらず
群馬縣　芳山房子

○

年を經て師の君とへばすぎし日の面影うせて御身のけだかさ
高濱　裕女史

○

詩興すゞろ十疊の書間に菊活けて小雀捕へて詩集誦す日哉
山口縣　川濱式部

○

神代よりうごきなき世は門松の色にも見へて芽出度かりけり
兵庫縣　永島豊子

○

憂きことを何と語らむなぐさまん一つ庵に獨住む身は
伊勢　蘆の舍女史

○

家雞の聲にひらく霞のあけの帳春を粧ひて女神ほゝ笑む
名古屋　西脇富子

○

海沿ひの山は夕日に色榮えて空に輪を貫く金色の鳶
岐阜　谷川すみ子

煙立つ賤ヶ伏屋のゐろりばた霧姫は昔語れり
○　秋　花月女史

朝日影さやかにさして新しき年の光の松にかゝれり
○　神田　濱田狂美

降り積る松の梢の白雪を千歳の花と人は見るらむ
○　四日市　邦子

霜の舞に召されて出て立たす白衣の姫かおぼろ夜の梅
○　下總　内藤とし

はつぼるの雲の内よりさきいてし若木の梅の花や榮えん
○　京都　登久子

董咲き蝴蝶たわむる野ら小路さも似たるかなよべの夢路に
○　船津　芳子

鉢おいたつき重き枕べに室咲き梅の花散りかゝる
○　石川　あけぼの

たらちれと語りし夜半の夢さめてそゞろに戀しふるさとの野邊
○　周防　岡部佐保子

やは風にみぐし吹かして砂の上に貝の小さきを拾ひたまふよ
○　鎌本　もくづ

夕つ方そゞろ歩きの池の邊にくれ殘りたる白つゝじ花
○　小石川　中村秀淨子

刈り果し霜のおくて田秋たけて殘る案山子の影ぞ淋き
○　埼玉　和久井きん子

おぼろ夜に嫁を送りし一群れや庄屋の垣根梅の香高き
○　本所　すみれ

うちわたす時雨の末は霽ばれて初雪白し三越路の山
○　茨城　小島時雨女

雪は消え氷は解けて梅が枝にうら稚き音の長閑なりけり
○　茨城　天谷雅子

山僧のならす木魚の音すみて雨に聲なく椿散るなり
○　京都　吉津川かず

あれはてし吾がふる里に唯ひとりむかしながらの秋の夜の月

春若く緋桃花咲く一つ家に機織る少女うたのどかなり
○　柳河　名なし草

武士が赤き心をしめしけん砦のあとにふきのとうもゆ
○　和歌山　彩子

月の夜を銀龍すはや雲を卷き天騰けらんず大那智の瀧
○　和歌山　あや子

流れゆるき青芦のかげ小魚はれて春の大川眞晝靜けき
○　攝津　和久薫子

うち霞む山畑つゝぎ梅さきて鶯うたふさとの春かな
○　山口縣　山本ゆり子

仙人のすまいしあとかそこ澄て流れさやけき春の里川
○　牛込　和田てる子

鐘の音のしづかにひゞく朧夜にわが歌なりぬ花かげにして
○　伊豫　曉子

君乘せし汽車は遠く消え行きて黑雲はやく西に流るゝ
○　能登　天涙女史

うす霞むかなたの山を仰ぎつゝ故郷戀ゆれば雨細うふる
○　佐世保　蒼生子

破戶もる風寒く埋火の白う崩れてうらさびし夜や
○　備中　佐藤蕾子

夕月の野道に語る君と吾れ朧にうつるかげ法師哉
○　上毛　柳淨愛子

松立てる小島が陰に舟よせて屠蘇汲み居れば朝日昇りぬ
○　大島町　鵜澤銀子

いや茂る松の齡にたぐへつゝ君かみ代をば祝ふ今日かな
○　京都　朝顏

河原道何にを笑むらん狂ひ女がふりの袂に朝風寒き
○　上毛　金岳女史

こがらしや赤城の峯を眺むれば火を吐く如き夕榮えのして
○　上毛　銀峰
○　紀伊　とし子

小栗栖に生ふる桔梗に置く露は過ぎし昔の涙なるらん
○　大坂　北川種子
七彩の襷はなりて日のみ子の出御をつぐるあかづきの鶏
○　津市　川村なみ子
梅咲きぬ霜とけかゝる山の家の朝あけ時を靜こゝろなう
○　奥市　桑原せい子
松かうへにつはさ並へしあしたつの聲をかきりに千代よほふなり
○　大和　森本あさ子
ひらひらとちる白梅のほのみえて朧ににほふ春の夜のつき
○　萩　孤董女史
うつむきて何思すらん姫宮の御眠うるみぬ紅梅のまど
○　熊本　八並喜美
春の夜の月はかすみておぼろなれと心ばかりはすみて眺むる
○　牛込　和田てる子
夕月の影を浮べて春川の清き流れに桃の花散る
○　阿濟　加藤ゆき子
鐘の音のしみて咲きぬる白梅やうす靄ゆらぐあけぼのゝ嵯峨
○　秋田縣　千葉みつ子
吹き荒ぶ吹雪まじりにきこゆるは彼方の村のばんざいの聲
○　飛　奈久枝
家毎の年にむかふる門松にかゞやきわたる初日かげかな
○　福島　花野興志
わが窓は初音をもらす鶯の梅にほろ酔ふうれしきところ
○　長門　伊藤紫董子
瑠璃島の低う縫ひ行く鵆はざま夕日さびしく人かへりゆく
○　備中　都花子
夕べ鐘ひゞきの長き雲の峯や寺坂くだる菅笠の人
○　上毛　磯具露惠子
栄なきも人のそしりもつらからずわれに君ありわが望たる
○　上毛　眞砂露子
こゝにしてつばらに海の景色みむ朝霧はれよ松島の沖

○　上毛　和田興志子
惜しらぬ千人百人そしるともわれはしのばん只君がため
○　上毛　關口みどり子
咲きつゞく菜の花の道春雨のけぶりて蝶のかげも老たり
○　上毛　關口初子
花の香に酔うてまふらし春雨に蛇の目さす人したふ胡蝶は
○　伊勢　無知女
今年こそ心やましき雲晴れてしたしき友とうちつどひけり
○　豊後　江口香尾
柿葉ちる窓に夕日のつめたくて運命の秋を鐘音にきくかな
○　相模　ふみ子
花の夜香にあくかれて行く人の皆君に似し月朧にて
○　若松　みどり子
道とへばをさの手とめてゆびさして梅さく園を右へゆきませ
○　八王子　井澤菊江子
浦風の未だ身に染むる此朝を春告げ顔に薄霞たつ
○　豊后　溪の月
紅梅は庭にこぼれて野の家の小窓にもるゝ梭の音哉
○　呉市　藤涙女
観る月は去年も今年も變られど戀しき君の亡きぞ悲しき
○　麹町　田中小夜子
遠く遠く遠く船路は水に明けて三ッ四ッ白帆彼方行く見ゆ
○　大坂　伊藤淺子
菅笠に紅の緒つけて少女子が都の旅や春の風ふく
○　高濱　酒葉良子
春の村平和しめす夕暮の鐘に星の子み空に生る
○　高濱　響子
梅月夜君にかへしの文書けば小窓のあたり清き香ゆらぐ
○　神田　小林ひさ子
何となく吾身見らるゝこゝちしてうらはづかしき初島田かな
○　日向　山元しなり

大八洲初日のかげにつゝまれてひかりみちたりひなも都も
〇　　群馬縣　大島げん子
眺むれば濡るゝ袂に宿りけり月よ雲井の物語せよ
〇　　下總　大崎山櫻
利根川や白帆張る船數多見え船人の歌に舵の音の和す
〇　　茨城　矢口はつ子
汲み上し釣瓶の水に影落ちて雲のゆくへをふと仰ぎ見ぬ
〇　　宮崎縣　濱砂まさよ
風わたるかなしき秋の夕ぐれは草にも露の涙おきけり
〇　　出雲　倉橋薫子
紅梅の花のかゆらぐわがやどにやさしき君よ早かへりませ
〇　　茨城　前原琴子
新玉の豐けき年にあいおひの松をかざりていはふ今日かな
〇　　伊豆　山口もん子
鶯の姿も見えず葉かくれの聲もかすかに春の暮れ行く
〇　　岩代　岸野菊子
藥うる家の板戸をたゝく子の息吹白くも見ゆる朝かな
〇　　下總　川島ふぢ子
胴行けば夕日は寒う空に消て冬枯木立すこし霧しぬ
〇　　よれ子
しら雪に埋れてこそ常盤木の千代のみさをは世に知られけれ
〇　　兒玉華溪
天か下櫻開けど梅咲けど君なき春のたのしくもなし
〇　　箕岡ちと子
音に聞く武士滅びし江の島の磯の小船にはるの雨降る

舞子　播摩　國重きみ



〇　　常陸　西野はる
名なし川流はゆるう春ふけて三里のつつみ花さきみだる
〇　　南越　額信子
天つ日の影も烟れり春立てば空の緑も萠えまさるらむ
〇　　大阪　村瀬篤子
又しても悩みに堪て窓おせば君の心か夕ばえの色
〇　　成田　波曉女天波
水汲むと妹の開きし裏戸より霧ふき入るゝあかつきの風
〇　　豐後　藤園舎曉嬌
磯菜摘む蜑の少女の影消えて霞に暮るゝ浪の色哉
〇　　上總　森ひさ子
しほ浴ふるわれに白鳥みだれまひて神話ににたる朝の海かな
〇　　秋田　ちゑ女
窓たゝく吹雪の音に幾度かなれぬ枕の夢をさましつ
〇　　箱根　霜葉女
三年ぶり乳母がいほりを訪ひにけりかすみ立つころ梅かほるころ
〇　　靜岡　鈴木多歌美子
思うどち霞分けつゝ來て見れば鳥も鳴くなり花の白山
〇　　神戸市　今田櫻町
人の世の榮は言はじ羨まじ茲にも春とふ江南の村
〇　　群馬　中山ふさ子
四方山もかすみのうちにとぢこめてゆたかにのぼる初日の出かな
〇　　上野　光蓉女史
秋雨や日暮て歸る人一人山路淋き入相の鐘
〇　　常陸　中西よし子
鶯の初音ゆかしみ蕁ひきて御園の奥に迷ひぬるかな

○　常陸　白ばら女

咲きにきと人づてきゝて來てみればなかば散らしぬ春の山風

○　越後　村山芳子

垣は破れ庭は枯生に埋れども春を知れとや梅のかをれる

○　熊本　島田たけ子

鐘の音はひろ野たゞよひ水すべり白帆にかすむ江の南かな

○　富山　比佐與秀子

春霞野山はるかに立ちこめて夕食の煙のぼる淋しさ

○　相模　相樂なでしこ

亡き友とかたりしゆめのさめ果てゝ涙にむせぶ木枯の音

○　紀州　來錦公

月の夜をさまよい來れば琴の音のもるゝも床し白梅の宿

○　加賀　幸女

止めあへぬ母のみ魂よせめてたゞ神の園生に安居し給へ

○　京都　信子

紅葉のちるや一ひら書に挿れて來ん年けふの思ひ出にせん

○　但馬　春蝶女史

この日頃積る愁を晴さんと古りにし琴を調べても見る

○　豐前　川さき

けふの雨に萩もをばなもうなだれて僧一人行く山沿の道

○　大分　やま川

糸をまく手のおかしさを猫の子は何と思ふらん首かしげつゝ

○　磐城　山川玉林子

うゑになく乳子をかゝへて一人泣く母なき宿の秋の夕暮

○　筑後　梧桐露子

早や六年胸に秘めたるこのおもひ永久に抱きて死なん運命か

○　三河　長坂よし子

山かげに積みし白雪消えれども鶯なきて世は春立ちぬ

○　神奈川縣　萩原あさ子

すみ渡る月の光に文よめば青葉がくれに杜鵑なく

○　能登　つる子

亡き父を戀ふ文窓の夕暮にかすかに聞こゆ遠寺の鐘

○　備後　松本蓋子

花の精ぬけ出てゝ今宵佐保姫のお伽するらん朧夜にして

○　德島　坂野白露

若松の緑も深きそれの如と健なれと祈りまつらん

○　浦和　小宮とめ子

初音まつまどのほとりの白うめにやぶうぐひすの聲ぞうれしき

○　紀伊　糸川みち

はりさしのもみ色ふりし萩のとやわびしときゝぬ初かりの聲

○　神戸市　高橋栄峰

友禪の袂かざして少女子の藤棚み上ぐ午かざり哉

○　奈良　中富よしみ

あれ果てし寺の枯木になきさわぐ小鳥の群に木枯の吹く

○　信濃　とき子

三年ふるなやみも癒えず十八の春は栄なうくれにける哉

○　岡山　とき子

鳳凰の羽風にたへて散りそめし桐の葉さむし明け方の月

○　岐阜　川出愛蓮史

人知れぬ花盗人の少女子を心ありてか蝶の追ひ行く

○　常陸　酒樂つれ子

大原や桃咲くあたり霞こめて牛飼ふ人のうたかすかなり

○　上毛　關口波津子

棲くむ人に春風あたゝかき多摩川つゝみ櫻ちりちる

○　加茂　たき子

高殿のことのね絶えて月もなき霧の夜のまち笛かすれゆく

○　四日市　郷子

たゞ旅のかりれの宿に生れ來て何嘆かむや何怨まむや

○　南葛飾郡　中村夢香

毛糸をば編む手やすめて菜の花を離れし蝶の行へをぞ見る

○　茨城　山下ふく子

紅椿今を盛りの山里や鶯なきて晝靜かなり

○　仙臺　古川よし子
あはれとは見よや心もつみそへし君とすみれの此の濃むらさき

○　奈良縣　中富よしみ
木枯にどよめく森の木の間より赤き鳥居のほの見ゆる哉

○　美濃　志波多道子
牧童の笛の音遠く黄昏れてこがらし寒う秋の日逝きぬ

○　松江市　古志ます子
里がへり馬のせにつむやまざくら君みますまでちるなちらすな

○　近江　藤野靜子
廣庭の牡丹くづれてときめきの春の三月は夢とすぎぬ

○　印旛　芳子
なやみなく雪のふりつむ夕まぐれ森のあたりに鳥あまた鳴く

○　神田　三木眞子
誘はれし朝を妹ほゝゑみて人形つくると呼びに來しかな

○　大阪　陰山謙子
友もなき我に見よとて梅の花春をもまたで咲きやそめけん

○　麻布　大永柳子
門松の枝にかゝりし初ゆきは年のかざりとなりにけるかな

○　安藝　みどり
心なく散る紅葉をながめつゝ何處ぶらん旅のみひじり

○　磐城　いつみ
つぐみ啄む薔薇の實あかう夕日はえて欒干ぞり葉からくくとなる

○　徳島　瀾みれ子



木枯の夕

なみ

きぬくくのかすみの袖のわかれをも雲路に惜しむ春のかりがね

○　釧路　今　蕾子
眞珠散る月の裾野をふみわけて虫にたゝすむ我兄の君や

○　わか山　さと子
萬年をなれてや久し久かたの松の梢にすくう友鶴

○　上毛　河内とめ子
新しき年を迎への松竹に寒梅にほふ村長の門

○　滋賀縣　藤野しず子
春興や鳩の翼に筆のせて花の女神にうたまゐらせん

○　茨城縣　山下麗子
春雨を硯にくみて夜もすがら思ひを染むる我心かな

○　小石川　山崎ふさ子
少女子が機織る庭の袖垣に綻び初めぬ紅梅の花

○　宮城縣　金村しん子
そらはまた霞もやらす風さえて雪氣にくもる春の夜の月

○　宮城縣　金野隆子
朝ぼらけ梅の立枝をしるべにて今年もきなく鶯の聲

○　秋田　比良多旭明女
露の稼虫聞く人の亂れ髪やせたる頬にてる月さむき

○　青森縣　三浦愛子
花白き蘆の湖行く船の行衛烟りぬ狹霧ながれて

○　福岡縣　田中とよ
亡き母の愛でし扇子ゆくりなう今日奥津城に見出つるかな

○　弘前市　關野はな子
わがなみだ三途の川の水を増せ戀しき人の歸りくるがに

和歌

○　下谷　飯雨子

朝まだき起出てみれば八千草を貫く玉は露にぞ有りける

○　近江　田中紅雨子

朝げたく烟も風になびきつゝやまと國原年立ちにけり

○　周防　小藤女

彩虹や歡樂ふかく萠え出づる緑り小草の淡夢と見ぬ

○　古河　小照みち

吹く風をうらむ色なく散りはてし花の心ぞ思ひやらるゝ

○　上總　山田神子

春の月山刈りぞめの酒汲みて父と子とれる草ぶすまかな

○　渡邊稚哲子

行く水に柳の露の散る見えて春雨霞む川面の里

○　船津　鈕津殘月女史

うす墨におぼろ〳〵のふるひ字や戀の日記は終了となりぬる

○　安藝　すみれ子

なつかしき君が玉章手にうけて一人ほゝ笑む文机のもと

○　備中　井上直枝

月影は横雲の上に出にけり天のみとこに玉denote

○　伊豫　伏見圭子

戀ひし君逝きてゐまさす朧宵こがれさまよふ花岡の墓所

○　伊與　伏見圭子

たそかれて山紫に霞む宵滊車の一列花田過ぎ行く

○　周防　内山笑子

男子我くぬちにのみや老ひ果てん海は功を立つべき庭

○　秋田　比良多慶子

森かげに白光ゆるゝ朝あけをやさし小鹿の夢まださめぬ

○　秋田　華櫓女史

そのかみの事とひますな昔夢よ今日の現も夢と消えなん

○　羽後　前田久子

立双ふ梅の林のあたりよりこほれて細しうくひすの聲

○　下野　溝井よし子

初雪の降りしく時はみよしのゝ木々の梢の花と見ゆらん

○　高槻　赤松春子

玉たれの小簾の内まで許されて通ふもゆかし梅の朝風

○　陸奥　目時濵子

去年のけふ逝きにし友を思ひ出て袖しほる夜を木枯の音

○　羽後　三浦霞溪子

鄙歌の聲もかすみて河添ひの桃咲く小みち馬遲々と行く

○　沼津　渡邊とよを

山さとの賤が伏家も大御世をことほぎ祝ふ松かざりして

○　高濵　大和田清子

畦道を唄流し行く少女子の聲も長閑き春日和哉

○　深川　大川おり江

このまゝに秘めておかんの夢なれば君問ますな我もかたらし

○　上總　春山みどり

をちこちに梅咲く家のほの見へて家鷄の聲する江南の村

○　淡路　伊藤栄濵

聲のかぎり只君がみ名をよべと答ふるものはあらなみにして

○　淡路　伊藤綾子

なつかしみ君すむ空をながめてはいよゝ思のまさる夕や

○　山口縣　澤わたる

木枯しの風に草木は枯果てゝ淋しき野邊に初雪の島

○　小倉市　井上朝枝

亡き妹が手づから植ゑし白梅の花咲きそめて母病みましぬ

○　米澤　高橋ぬい子

雪は消えぬ花は開きて鳥はなきぬさはれ君まさずあゝ春の野邊

○　弘前　桂花女史

孝子二人ぬれし裾野の白露は尾花の末に今も宿りつ

○　山口縣　後根美子

益良夫の奥津近く立よれば匂ひ香ばし八重櫻花

○　埼玉縣　西田壽惠子

あら波のさわきも今朝は跡絶えて秋霧ふかし遠江灘

○ 春も猶空寒むければさほ姫の霞の衣月やきるらん　千葉縣　伊志法貝淼子

○ まばゆくも晴れたる今朝はとかへりの花かと見ゆる松の雪哉　成田町　渡邊清子

○ 春深く卯の花かをる山里のかすみかくれに鶯のなく　北總　文家菊枝

○ 根にかへる花とは云へとまのあたり散るを誰かは惜まざるらん　成田　石原ぶん子

○ 千代いはふたづの聲こそうれしけれ峯の松原色増すはるを　成田　石原せき子

○ かるたよむ聲たえはてておく露のいやさえかへるにはの柴垣　長野　はな子

○ 引くしめの景さえ消き我が門に千代の榮えも見ゆる松かな　長野　村山よし子

○ 今朝みれば淡路島山影もなく霞の中に船歌聞ゆ　若狭　津田汐汀

○ 家の海をへだてゝ能登の山丸うならびぬ春の夕ぐれ　高岡　土岐靜子

○ 紅き花さゆらぐ森のしたかげに月ながらふる春の雨かな　美濃　市川覺子

○ さま〳〵の草花にほふ其うちにげにやさしきは女郞花かな　安房　すみれ

○ 風さむく沖に白帆の一つ見へて秋の入日に雲のみだるゝ　長崎　天ヶ瀬さだ子

○ 打ち出てゝよも山々見渡せば紅葉も今ぞ盛なりける　大分縣　田原秀子

○ 母逝きて淋しと泣ける夕ぐれを涙そへ行くあまつかりがね　滋賀縣　四村悦子

○ 時雨ふる枯野の末の楓の木に夕べ淋しく烏なくなり　廣島　友江

○ 戯れし子等は歸りて信濃川堤の柳月おぼろなり　越後　五十嵐美津

○ 歌ならず紅絲かみて欄に倚れば庭の小池に緋鯉給つくる　濱田　三明千鳥子

○ かぎりなき君が世祝ふ家々の松葉の葉ごとに千代のこもれる　陸奥　堀口ふじ子

○ 野の森の草まきて歸る美しき牧の童にそと花なげん　大分縣　後藤さへ子

○ 緋牡丹の花くづれては朝の庭のつめたき地もおごりて燃ゆる　大分縣　工藤たまき

○ うつらなく七尺尾花ゆれゆれて猪野の月夜風の音さむき　大分縣　後藤たか子

○ さくらばなからのやまべにちるとてもかぐはしきなはちよにほはん　莊内　辰野子

○ 君逝きて一人淋しき春のくれかきなす琴も調みたれて　水戸　重子

○ あとけなくうまいせる子の朱き口ゑめるに似たよ何をか夢みる　神田　小澤みつ枝

○ 村はづれ霧塩の酒うれる伏屋のまがき桃の花さく　さぬき　しげこ

○ 折りつれど我は贈らむ人もなしほころび初めし梅の一枝　茨城　小堀とし

○ 落葉して狐鳴く夜を淋しくも母病む我は鎭守の社へ　埼玉　江森露江

○ 都には君をのみこそ思ひ出れ紅葉の折も花のさかりも　大分　直子

○ 萬代の春をちぎりて大庭の花にのどけき鶯の聲　山口縣　中津江照子

○ わが宿の雪の垣根に美くしく春まちあへず梅咲きにけり　瀬戸町　津金糸子

○ 新玉の年立歸るあしたより待たるゝものは君か玉章　山口縣　萩　式部

和歌

○　若松市　静香

暮春の霞野原の夕くれて駒の月毛もおほろなりけり

○　松坂　垣内克代

世にそまぬ我は廣野の羊飼ひ樂なう詩に憧るゝ身よ

○　福岡縣　山内乙女

鐘の音を慕ひつゝ籔垣を忍ひ／＼に踏みまよひぬる

○　伊勢　中村てつ子

見渡せばさすがに廣き野邊の畑川より外に色のなくして

○　田野廣子

清く澄みて鏡の如き水の面に夕日に染ゆる秋の雲見る

○　安房　忍足藤子

ひもながう煙りくゆらす韓の民白衣ゆら／＼牡丹くづるゝ

○　京都　樋口波間女

月うつる池の畔の櫻花月にやこがる水にちりちる

○　米澤　縫子

此の冬を如何に暮さん山住みの降絶えたる雪の一つ家

○　秋田縣　佐々木貞子

母にさへ別れしわが身いかにせむ此世にたのむ人もなくして

○　秋田縣　佐々木岩子

やう／＼に山を越ゆれば日は午かふもとの里に鶏のなく

○　秋田縣　佐々木圖子

登らむと日毎おもへる富士のねに今朝ふりつゞく庭の白雪

○　越後　五十嵐よしの

生花の師許行くなる妹の右手に提げたる梅の初花

○　近江　北川花枝女史

風車まはれとうたふ幼子の袖吹き返すそのゝ春風

○　薩摩　玉利し茂子

星月夜寒むき書院の窓に倚り君がすさびの琵琶の音を聞く

○　滋賀縣　松ヶ枝

背なの子はまだ泣きやまで日はくれぬ待てどかへらぬ母や戀しき

○　備後　中山八千代

流れ寄るあきつがむくろ捨ひ上げて暫し眺むる夕映の空

○　越前　佐野よし子

如何にせむ庭の姫松惱めとも拂ふは惜しき初雪の朝

○　沖繩縣　荒卷よし子

月見れば朝夕物こそ悲しけれ去りにし昔はたのしかりしを

○　茨城縣　綿引波哉子

四海なみ靜けくめぐる敷島や春を浮べて新潮よせぬ

○　金澤　高柳そと子

待ちえたる初み雪かと思ひしよ声につもれるほわたなりけり

○　靜岡縣　おくみ女史

冴えかへる月面白くなぎさべをはなれし小舟海人歌きこゆ

○　豊前　秋吉初枝

白書院勅使まつ間の金屛の牡丹の花に蝶たはむるゝ

○　薩摩　水仙

時雨して秋のけしきをそへにけりからすとまれるかきの枯枝

○　芝區　森亭女

初日の出門の若松ひとしほにみどりますらん心地こそすれ

○　后志國　池野沖の石

おん餞に泣きて別れし思ひすと秋行く頃の雲眺めけり

○　本郷　萍花女史

羊呼ぶ笛の音高う天になり十家の孤村今宵暮かれむとす

○　岐阜　泉たつの

柳かげ酒賣ろらしき掛小屋のともしび淡き宵月夜かな

○　福島縣　まき子

うた人と語らう夢の破られてたゞ見まもりぬ厂の行衛路

○　本郷　朝井松子

朝月夜しはの戸開けて菊の畑に一枝折れば袂露けき

○　千葉縣　鶴岡かつ子

星冴ゆる夜を欄に燭消して白蓮かをる池をながめぬ

○　奈良　島田業子

美しき彩雲迷ふ山の端に夕日うすれて時雨降るなり

○ 磐城 鈴木むらさき
花ちりて思ひ亂るゝ夕まぐれ鐘の音寒く春くれて行く

○ 中村町 菀倉子
夕つく日金色流す川くまに白き薔薇の花たゞよひよるも

○ 磐城 花子
初聲に歌もやあらんと隣なる詩人とへる朝ぼらけかな

○ 磐城 遠藤勵
窓押せば椿こぼれて夢にみし歌うしなひぬ朝窓にして

○ 磐城 鈴木静子
天地に一人と君に胸に秘めそゞろうれしむ春の夜の月

○ 白檞この華
馬洗ふ里川堤たそがれて白玉椿しづみゆく見ゆ

○ 山形縣 鈴木とく
故里の母病みませる知らせきぬもみぢ散りしく夕ぐれのまど

○ 山形縣 鈴木女史
さを鹿の鳴音かなしき朝夕に紅葉色そふ秋の山里

○ 常陸 翠子
來し方はかつふる雪に跡消えぬおくるゝ人い野をまよふらめ

○ 千葉縣 伊藤壯子
梅の花花ほの白う燈籠の火影うすれて夜はあけむとす

○ 埼玉縣 高山ふく子
ほがら／＼と東しらみて鷄一聲鳴きて新年たちぬ

○ 淀橋 須貝はな子
ゆらぎ／＼父輿じます秋祭りたま／＼膝の崩れ見たりな

○ 若松 花里胡蝶女史
雁なきて野路の伏庵しろうてらす月影寒く夜は更けにけり

○ 近江國 小川花枝女史
貝ひろふ磯べつゞきの小松原霞の奥に鷸のなく



御飯 信濃 小林みつゑ

○ 登米町 鈴木乗子
待し間のかことも今日は忘られて文のはやしの花を見るかな

○ 埼玉 乙女
あら玉の年たつ園の姫小松かはらぬ色に操みゆるも

○ 安房 内代信子
さきそめし乳母がさ庭の梅が枝に小雨そぼ降る春の日寒き

○ 安房 木村ひさし
しめ／＼と小雨そぼふる此の夕母がみ墓の三十萩の散る

○ 富山 小林よし枝
行末を思ひ廻せどいかにせん流るゝ水の定めなき世ぞ

○ 湖出散史
數ふれば早や一年の旅の空我ふる里も雁わた頭

○ 香川縣 鎌田みつ
幾千とせ重れ來しとも白雲の上にぞ見ゆるみさの老松

○ 南豐 藤の家瑠璃子
楓ひろふ里の童の聲たえてすさぶ山風いと物ごき

○ 薩摩 前田苗子
筆はじめ歌の初めを我が君に送るとかきし此葉書かな

○ 滋賀縣 辰井ふみ子
長き日を琴にも倦みて牡丹咲く椽に鸚鵡と語りけるかな

○ 大阪 齋藤芳子
島山の松に夕日の影落ちて霞にくるゝ涙の色かな

○ 明石すみれ子
世の中に我れのみひとりおくれ水あるかなきかの流れなりけり

○ 福岡縣 古賀貞子
秋の蝶の冷たき夢のわが夢に入りぬる如き淋しきおもひ

○ 岐阜市 泉しげき

眠られぬもだえのはての曉を柳に白む有明の月
大阪　野崎麻須子

○

咲きそむる軒端の梅に鶯のうた面白う春静かなり
常陸　馬場とし子

○

琴の音は低う霞のおばしまを流れて更くる花の朧夜
岡山縣　龍門光子

○

山寺の鐘も淋しく更る夜に月のみ渡る春の夕暮
岡山縣　光子女史

○

何となく樂しみ多き春の日を野道たどれば夕の鐘なる
靜岡　竹泉女史

○

思ひわび西のみ空を眺むれど山をへだてゝたゞ雲のゆく
茨城　背柳愛子

○

うぐひすよその一枝を手折せよ植ゑて愛でにし父に手向けむ
舞鶴町　上崎こ須宇子

○

夜もすがら一人衣ぬふ芝の戸に風吹きすさむ心細さよ
岐阜縣　山中はぎ子

○

ふるさとも母よにまさてさびしきに花の香になく朧夜の月
岡山縣　坂東須美子

○

夢さめて君忍ばるゝ小夜中にかすかに聞ゆ山寺の鐘
奈良縣　島田清子

○

のき近く落穂をあさる群雀聲も淋しき秋の夕暮
岩代國　松山薔薇

○

心つよく國を立ちにし身ながらも思ひ出多き秋の暮かな
岩代　莘薔薇子

○

道たま〳〵蕉月が庵の跡に出でぬ梅にとて行く西の京の山
相州　森きん

○

若菜つむ都少女の前髪に花と飾りて春の雪ふる
下野　鈴木雪子

○

沼の邊を君と語りて逍遥へば眞鴨靜かに閑古鳥なく
下野　宍原のぶ子

○

舟着きて河原に投くる棹の音に洲崎の蘆間白き鳥立つ
紀伊　濱口さち枝

○

さらぼひし六部子つれて鉦の音も時雨にさむき鄕街ゆく
三重縣　帆山靜子

○

夜もすがら落葉みだれて亡き母の御こゑと思ふ板戸うつ風
松江　長谷川信子

○

新玉の年の初の大空に千代に八千代と歌ふ田鶴むら
豐前　工藤粂子

○

ひとしきり柿の葉落つる音のして又も時雨のふるさとの夜や
鹿兒島　水仙

○

波いかる岸の巖に荒鷲が小鳥裂き食ふ冬の暮れがた
秋田　角川女史

○

將軍の墓詣うて詩は死せりひんがし竟にバイロンなきか
秋田　松田せい子

○

さすらひや海路五千里島にきて海士がいとし子妻にむかへぬ
近江　秀葉

○

秋の夜のさやかに澄める月見ればくもるは己が心なりけり
尾道　すゑ子

○

あたらしき年の始めはめなれたる松のみどりも色や增すらん
下野　阿部ちい子

○

岩かげに今しも釣絲とるわれをあやなさんとや小鳥飛びくる
下野　安生きみ子

○

櫻ちる木の下かげに酒くめば花にゑひぬる心地こそすれ
栃木縣　三品えい子

○

なき母の賞でましゝ庭の紅梅もかたみの花となれるかなしさ
下野　菅谷とく子

○

雨すぎてあたりすゞしき松が枝に光さしそふ十六夜の月
下毛　雲葉女史

○

城は畑濠は稻田とかはれどものこる垣にぞしのぶそのかみ
信濃　有賀まさ子

○

冬姫がわが領めぐると乘る駒の銀の鈴ひゞき雪降りにけり

文藝遊戲 女子新聞

論說

○學問の勸め

農家の男は、家に居る事が少ないから、勢ひ始終內にある女が、諸事を辨じなければならない、殊に現狀の樣な迅速を要するものは、勿論であるが、其外家政の內助と云つても敎育の有無には非常に關係する事であるから、政事に關する程の學問はしなく共、普通學は是非學ばせなければならぬ。但し政事學の樣なものは、女賢くしてと云ふ譬もあれば、自分は勸めないのである。

是は今でも村長を續けて居る七十六の翁の二十年前に既に云はれた說である（神奈川縣とよ子）

○家計簿の必要

私は昨年の終から家計簿記法を習つて居ます、又宅でも此法にしたがつて日記を作つて居ますが、中々趣味が深くあります、そして浪費を誡め、節儉を奬むばかりではなく、決算が明かで、現在の經費がよく知れます。故に修業上つゝしむ所が出來ます、其上に成長して一家を整理する頃の經濟の練習ともなり。次には家計簿記法に熟知して、よい嫁であらうと考へます（岡山、靜子）

短歌

○ 越後 五十嵐よし
わが愛てし庭の白梅咲きいてぬと其一ひらを妹送り越しぬ

○ 土佐 野の人
詩などて想ひ亂るゝうらぶれの我れに默禱の夜よながかれな

○ 伊勢 垣內かつ代
京に居ます君がうつしゑ花に飾り灯ともして見る春の宵かな

○ 兵庫 難波あいの
おもひ離せぬ落つる涙に心づけばいつ凍りける雪の日の袖

○ 牛込 川上清子
笛の音汽車の響の遠く近く都大路の霞の朝あけ

○ 近江 藤野靜子
花散るや小井戸につどふはした女の人の噂に春の日ながき

○ 豐前 秋吉初枝
日のぼるや白尾の雛の鷄の朝鳴きはじむ草堂の冬

○ 大坂 山田いな子
めぐり來し都名所あれやこれや旅の日記書く六條の宿

○ 赤坂 吉田ゆみ子
樂しき春の夜、人はれもやらず草紙の繪のみ見て在すかな

○ 大和 辰野はま子
桃ふゞき櫻ふゞきに埋もれて影失ひし女の雛かな

小說

亡き姉（六） とく子

「いゝえ他人の空似と云ふ事もずい分あるものですよ、それに寫眞だつて浦濱て見たのか寫眞屋でゞも見たのだか分らないではありませんか」

露子は母にこう云はれて成程そうかとも思つたが、まだどうしてもうたがひがはれない。

「では私明日花子さんに聞いて見ますわ、いゝてしよう母樣。」

「お前は毎日そんな事ばかし云つて、もし人ちがいだつたら如何します、そんな事をお前から云ひだして、お友達にくわしい事をきかれたら、話さればなりますまい。それも人の惡い事を云ふのは罪です、もうそんな事は思はないで、今まで通り花子さんと仲よくしていらつしやい」

と母に云はれたので露子はたゞ「え」と云つてうつむいてしまつた。

「もうをそいから、露さんおやすみなさいよ、朝が早いのだからね」

「では母樣お先へ御免下さいまし」

露子は自分の居間へ歸つて涙に咽んで、あゝ姉樣さぞ殘念でしよう、春江さん故に情ない御最期浦濱さんもひどいわ、あのをしかけ女房の春江さんの爲に、幼い時から許嫁の姉樣を捨てゝまで。露子はねもやらず考へてると折柄母の聲

「露さんまだねないのかい」

各地通信

○石鎚館の落成（愛媛）　木村凱旋軍人一同の紀念として氏神に奉納せし石鎚館は昨日落成せるが高さ一丈余石質亦良好にして好個の紀念たり夜は數十の篝を炬きて「地固め」の神樂ありき（豊前秋吉初枝）

○雨を待つ（岡山）　わが地方は、雨長く降らず舊八月十二日大降ありてこの方今日初めて大降せり（舊十二月一日岡山縣林有情子）

○諏訪湖のスケート（信州）　信州の諏訪湖、冬期は氷結して其上を人馬往來す。昨年よりスケート會なるもの開れて内外の紳士淑女を迎へて一大遊樂場たらんとすことに今年は、英國代理大使ローザー氏同夫人一行の來觀あり、一月十四日休憩所落成式を兼ね第二回の會場式を擧行せり（信濃さとなみ）

○さゆり會同窓會（愛知）去る一月三日午前九時より小學女學校裁縫塾にて同窓會を開きました總會員四十五名の内出席者三十二名一齊に合圖に君が代の國歌を唱へて　陛下の萬歳を祝し次に校長先づ開會の辭と共に子女教育に就てのお話がありました續て會員各自のお話がありました終て紀念菓子の分配後福引と活人畫の餘興がありまして中々の盛會でした。

同會員の現在種別を擧ぐれば

嫁ぎて妻となれる者　九人
女教師となれる者　六人
遊學中の者　廿一人
獨身在宅の者　九人

出席者中年長廿八才年少十五才（愛知、紫雲女）

○小學談話會（山口）　我校には昨日二組人員八十名一所になりて午前九時より小學談話會を開けり始め會長の開會の辭二唱歌君が代三選手の談話讀方唱歌等あり終りて校長他の先生の批評あり副會長の閉會の辭をのべ午後三時散會す（山口縣、梅子）

○大相撲の千秋樂（京都）開場以來大人氣なりし京都大相撲は明日いよいよ千秋樂（取組左の如し）

雷	電氣	三笠	春日
火力	水力	嵐山	吉野
苦學	遊學	東山	西山
萩花	桔梗	鴨川	桂川
清水	東寺	健康	疾病

（京都、登久子）

○新聞記者の雪中行脚　今回女子文壇に新設せられたる「女子新聞」の記者は全國各地に雪中行脚を派出し民情風俗の視察をなさしむる事となり、來る廿五日奥州地方へは大山雪子を初め外三名東海道地方へは富士峰子を初め外四名出張する事となり本日午后一時より日本ホテル樓上に於て送別會を開く都合なりと。（靜岡縣、雪見竹葉女）

○女子判任官の採用　昨年より採用されたる女子判任官は大阪貯金管理支所にて最初は中井ゑい子、堀場とく子の二人にして何分初めての事とて隨分人目を驚かせしも追々増加なし當春は拾人の多きに及びて珍らしくもあらず、又本年よりは大阪郵便局にても數名採用なせりと、因みに彼等は何れも月給十三圓なる由（大阪、松田都喜子）

○縣道の修覆を望む

此頃當地方の縣道が人の歩行が多いのか兎角道が悪いのです、殊に大藏養父邊が一番悪いのですが、天氣の五六日も續いた時はさもないが、雨露の降つた後はまるで田植をしてもよいような道になるのです、それに道の大變に掘れて低くなつている處があるのですから、こんな所でよく車が覆るので、此間も美しい婦様が車に乗つてきたら、そんな泥田の様な所へ車が覆つて、大さわぎ、車夫は平身低頭てお詫びしていた、實に其婦さんは氣の毒で目もあてられんかと申して車賃は安いかと云へば中々高い、此頃では一里を五十錢以上取ります、それで私は一日も早く道の好くなるのを祈つています（懸賞當選　但馬、早崎芳月）

○好個の貯蓄法

北海道石狩國夕張郡登川村字夕張炭山の學校の生徒で、降校後新聞配達をして居る者が少くありません。これは、家が貧しくてしてゐるのではなくて、專ら運動としてやつてゐるのです。大勢ですから配達する部數も少ない爲めに、給料も又安くありますけれども此生徒達は得たところのお錢は、無駄に費やさないで、皆貯金して居りますそして月々其殖えるのを樂んで居ります。何んと感心ではありませんか。（山姫）

短評

▲我等婦人中オハグロを以て齒を染める風習の未だ全たく消滅せざるは慨歎すべし▲子女の教育は兩親健在して初めて健全に行はるべし我等は所謂ゴケヤモメ育ちの子女を見る毎に同情を禁ずる能はず▲廂髮は決して優美ならずされど其經濟なるは衆人の認むる所なり右二者を調和すべき結髮の發明こそ待たるれ（滋賀縣辰井ふみ子）

雜報

○賴母しき少女

奥の細道つきなんとする磯川と云ふは七戸の村、今年十一の少女ありて、早く父と母とにわかれ、一人の祖母に、忠實に仕へて孝養怠りなく、日毎二里餘ある町まで山のもの畑のものなどを賣りに來ては、歸りに何時も祖母の好む物をもとめて、餘あまりあれば古本など買ひ行き、その村の尼樣より毎夜讀書と習字を教はり居るとはさても感ずべき話ならずや、折りもあらばかれを訪ひて委しき事を報道せん。（失氏名）

○雉の鳴き聲

青森縣ト某村にて近年獵師增加の爲め、雉山鳥の類は一時殆ど其の影を沒せしが、此の頃に至り人里近くに於て頻りに雉の鳴き聲を聞くより、界隈の者は皆不審に思ひ居たる處、物知りの古老達は此れを以て何か變事の前兆ならんと言ひ囃し、益す迷信家を脅かし居たるが、其の原因を尋ぬるに、多數の獵師は日々競ふて野となく山となく殘る隈なく跋渉する故、雉は居所を失つて斯る始末と知れ一同漸く安堵したりと云ふ（懸賞當選）陸奥、菊地みつ子）

○珍しき病氣

世には珍らしき病氣も有るものかな、玆に伊豫國越智郡岩城村字濱村のオコトと云へるは三十路を五ツ六ツ越したる者なるが四五年前よりふと奇妙なる病氣を引起したり、普通の病氣とは事かわりて毎日石油を三四合宛呑むを以てこよなき樂みとなす事恰も酒呑みが酒に醉ひて歡樂を極むが如しと云へり酒の爲めに身を忘るゝ者は世に數多しと雖も石油が無ければ其日が暮れぬとは近頃珍しき話ならずや（伊豫、稲井さゆり）

○古池より泣聲

昨日午後四時頃明神前の古池より悲鳴をあげて、子供のなきさけぶ聲せり、折しも通りかかりし巡査これを聞きつけ救上げて神邊署につれゆき取訊ると唯まゝ母がつきおとしたとのみふるえながら答へたり。されば何處の小兒にや判然せず、女兒にして年頃六歲ぐらゐなり（廣島縣、今西初子）

○老女の入學願

埼玉縣比企郡小川町大字安土百三番地竹内梅造長女おまつ（八十）は諸方より書面來れども無學故大いに不便を感じ去る十日女子大學校へ入學出願せりと（埼玉縣、秩間きく子）

○八日堂の祭

信濃上田町にては一月八日に八日堂と云ふ賑かなお祭りがあります、それは千人に一人の授福者があると云ふので雪の途路を詣づる人約五萬人、て歸りには皆大きい〳〵達磨に目の無いのを買て行きます、そして其年に蠶がよく出來ると目を二つ入れます、半分出來ると片目入れます（信濃、さゆり子）

運動界

○我が校運動界の現狀

私の通學してる學校では大きな大きなグラウンドがあつてテニスコートが七つ周圍には青い木や草が生えて居ります、午食後生徒は思ひ思ひに此所へ出て行き二、三、四、組の選手はそれ〳〵コートでし、その他の人はあいてある所でしますからさしもにひろい大庭も未だ狹い位皆熱心です、去る一月四日大阪の毎日新聞主催の聯合マッチが中の島公園でありました時女子部では第一番に我が選手が出場いたしまして萬目環視の中でをめずをくせずやりましたて、他校に其の模範を示しました、又時々校内でマッチをします、草があまりのびて來ますと暖い日に生徒一同が草引き、をいたしますその他ピンポンも盛だし、シップも熱心だしクロッケも隨分やつて居ります（懸賞當選）大阪、小山漣子）

寶家廣告

一建築　和洋折衷式別莊向
一坪數　三百三十三坪三合三勺

東に渺茫たる大洋を控へて遙かに沖津島山を望み西に富士ケ根の英姿に對する東海は絕好の地位夕陽西に春く頃、軒頭の燈火チラ〳〵と影を落す屋上を越へて鏡の如き水に浸す逆富士の趣き妙なり

右至急賣りたし　但し影ばかり。。。。

（懸賞當選　小石川、翠子）

眼ある者は見よ

月刊雜誌 **女王**　毎月一回一日發行　年四回定期增刊

定價壹部金五拾錢六册前金貳圓五拾錢拾貳册前金九圓。增刊壹部壹圓宛。萬國郵稅不要。

明治四十年三月第八百號發行

特別大懸賞文募集

一募集文種　文藝に關する萬般
一原稿　世界標準語たる日本文一行三十字詰半紙二十行の事
一賞與　壹等金壹千圓。貳等金五百圓、參等金參百圓以下八百等迄人員二千五百六十七名。

詳細は本誌を見よ。

發行所　大日本帝國東京京橋區大鋸町　世界之女王社

（福島縣、齋藤さわ）

病院開業廣告

妾儀多年醫學研究の爲め獨逸國へ留學中の所今般歸國開業來院者の求に應ず

院長診察毎日午前自九時正午迄

院長　女醫學博士　小林野菊

婦人科小兒科專門　小林病院

銀杏城下の名物

私事此度兩親に許可を得獨立獨行の目的を以て「勞働は神聖なり」と小資本にて出來得る甘藷即賣並に燒芋屋開店致し候に付何卒諸姉樣方よ御寒さ凌ぎに遠近にかゝわらず御ヒイキの程伏して奉願上候

○求むる方

身の丈一丈二尺位にして、色は濃赤色の、眼は二つ共縦にして、鼻は横に、口は奈良の大佛に劣らぬ位て、常に土を喰ひ人に笑はれず小兒にかしづかれる如き青年あらば、御世話下されたく、好んで聟に貰ひ申べく候

上野國新田郡金山の住人　松皮の娘

詩神湯

廣告

本劑の功能は今更喋々する迄もなく詩的思想ある諸姉間に愛用噴傳せらるゝ奇藥にして如何なる初心者と雖一週分を服用せらるれば詩想湧出し三週分を服用せらるれば詩文自在となり投書せらるれば當選すること疑なし。

本舖　松山屋藍姉妹商會
藥價　御服用後孃諸の御考に委す

天狗丸

私事多年苦心の結果鼻ひくきを憂ひ給へる婦女子の爲にこゝに天狗丸を發明仕り候

爾來數多の藥劑師の如く利益を得るを目的とせず單に博愛を元とす

正價一日分十錢一週間分六十錢

尚詳しき能書を得んと欲する人は郵券二錢を御送附これ有るへく候

廣島縣賀茂郡仁方町　旭櫻堂

最新發明 雅風丸

一粒金貳錢

詩才に乏しき士女は速に一丸を試みよ忽にして詩想湧くが如きを保證す（僞物あり藍と屋の商標に御注意あれ）

埼玉縣北埼玉郡大塚村
本舖　江森雪江謹製

解雇廣告

小猫お玉

右は頃日來より再三再四勝手もとに出沒し鰹節及び鯉等を窃取候に就ては解雇致し候間自今ニヤンと申出候とも當方には何等關係無之候に付此段及廣告候也

三月一日　京都神泉苑　英香

（懸賞當選）

浪子孃紀念碑建設廣告

今般浪子孃第五回忌を期して妾等「不如歸」派同人申合せ紀念碑建設の儀發起致し候就ては御同情の御君達は多少に不拘御寄附被下度尚詳細は本日以後の本紙に連載致し候へは御一報相願候也

東京青山
於浪子孃紀念碑建設事務所
不如歸派同人

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

○波の音

三河　柳子

茜さす夕づく日、伊豆の山に落ちて、雲美しう彩られて燃ゆらむばかり、海の面も眩ゆく輝きて、漕ぎ歸る舟に、かこが追分の一ふし、波の音にまじりてさびし、憑る時、われ一人逗子の磯邊に立てば、五とせの昔の夢、胸に浮びて忘られず。

* * * * * * *

露子樣、好い眺めではござんせぬか、とわれは遙かに暮れ行く海の面を見つ。あれ、漁火が見えます、といへば、露子樣はいらへさへ、涙ほろりの顏上げて、芳子樣、妾はあなたがお羨しうございます。

沖には薄暗を籠めて大島も見えず、伊豆山の紫黑う、養神亭のあたり燈火見え、松の下蔭早暗く、紺青の波岸を打つて碎くるが、時なれば、卯花かと見えてほの白きのみ、蜑の子も家に歸りて、寂しき磯に彳むは、露子樣とわれとばかりなり。

あなた何を仰つしやいます、妾が何で羨ましい事がございます、厭な病に罹つて居るものを、と言へば、いえ、いえ、あなたは肺病ではないとの事、其中に屹度御全快なさいます、私はもの思ひが絶えませんもの、いつそもう誰にも逢はない、山の奥へでも入つて、獨りで泣きたうござんす、と仰せらるゝ聲も涙に曇りて、いつもの快活なる露子樣にてはなかりき。

聞かして下され露子樣、それ程悲しい事があるなら、何故早く打明しては下さいませぬ、とても御力にはなるまいけれど、膝とも談合とか申します、日頃から同胞のやうにして居りますのに、さりとは餘りな隔て方、とわざと少し怨ずれば、涙押拭うてあなた聞いて下さいますか、と言ふ聲音打ちふるふ。仰せまでもなし、さあ早くと言へば、耳の根少し紅うして、父にも母にも言はねど、あなたばかりに申します、妾は初めて、初めて人に想ひを懸けました、後は言はせて察し給へ、とさしうつぶく横顏、逗子の山を離れし月に映りて、ついに見

ぬ媚かしさなり。

貴に忍ぶれど色に出づるが此道の習ひ、此程よりも素振訝かしと思ひしが、さてこそと頷かれて、そしてどなたをと問へば、あなたも御存じの信夫様……をとばかり我れに取縋り、胸に顔を押當てゝ、熱き涙に咽び入りたまひぬ。

ほんにそれは良い御縁でござんす、と口には言ひしかど胸の動悸は高まりぬ。芳子様、あなたも然う思召して下さいますか、それなら何卒妾を助けて下さいまし一生御恩にきます、とは愈々堪へ難し。

信夫様とは遠縁の君、行末はわれてこそと思ひ居りしものを……、あはれ何とせむ。

いつそわが心を打明けて、信夫様とは愆う〳〵と、つい言ひ出さむか、さりとて今良い縁と言ひし口にてそれもなるまじ、あゝなまじひに聞かざりせば、愆る思ひはせざりしものを、と悔みても今更詮なく、露子様の嘆きをよそに、信夫様の妻とならむ事、如何に鬼になりても忍びがたし。

殊には病さへあるわが身、其病も不治の名ある肺病！人は包み給へどもわれはよく知れり。此病軀を抱きて人に添ひ遂げむ事、所詮恊はぬ願なるべし、さらば、あゝさらば、二とせの戀も今宵此海に葬り終らむ。

露子様必らず〳〵案じ給ふな、父母にも願ひて、好き返事を聞かせまゐらすべしと言へば、言葉はなくて雪のやうなる手をば合せ給へり。其手を犇と取りし時、わが手はわな〳〵と顫ひぬ、堪へかねて空を仰げば、月も星も空に見えず、寄せてはかへす波の音のみ、脆かりし戀をとぶらふ樂かと、亂れに亂れし胸に響きて、今も耳に殘れり。

二人は急ぎて不動堂に近き別荘に歸りぬ、短き一夜を遂に眠る能はざりき。

* * * * *

はかりがたきは人の運命よ、覺悟せし身は病も癒えて今も逗子の浦和に長閑けく越し方を偲びつゝあるに、盛りの色見むと待ちし露子様は、御名の脆きにそむかで、二十の春の初産に無慘や雑司ヶ谷の土と成らせ給ひぬ、欣譽妙刹大姉の法號記せし墓標、雨に黒みし頃には、信夫様滿洲の地に入らせ給ひしとのみ聞えて、雁の便も絶え果てたり。よどみに浮ぶうたかたの、人の身はたまゆらも定まらぬ世に、かの波の音のみぞ五とせ前泣きて聞きし夜のそれにも變らで、今もわが胸に響くなりけり。

（評）いひ古りたれど、ゆく河の流は絶えずして而ももとの水にあらず、はかり難きは人の行末なり、戀を得し露子が幸か、戀を失ひし芳子が不幸か、之を知るものはたゞ天のみ。

○人の子

本所區向島中の郷町三十一、小林方
小林とみ子

例のだら〳〵坂をのぼるともう堤。常にはもう此所迄來れば身體が暖く成るのに、四邊の淋しさにつれ寒さはいよ〳〵加はる、冷い風がショールから上を鋭い刀てえぐるかと思はれる程に吹きつける。振り返つて見ると隅田川は靄に煙つて鳥が一羽二羽かうと鳴いて千住の方へと消えた。一寸時計を出して見ると六時半。傍の家はまだ起き出た氣配も無い。「あゝーべらぼうに寒いなア。」と傍に車を並べた車夫の一人が膝掛けにくるまりながらあくび交りの聲。少し行くと自分の前を姉妹らしい娘が行く。形ばかりのショールはして居るが見るからに見すぼらしい姿。ひしと寄り添うて話すのが聞くとも無しに耳へ入る。「伯母さんは其樣にわるいのかい。」とは姉らしい方の。「あゝどうかしても一度姉やに逢ひたいつて、私困つちまふの。伯父さんは少しもお酒が止まないし、そつちも忙しいだらうけどつて」「困つたねえ。けれどもよくお前を此方へよこしたねえ、せめてお母樣でも生きて居れば……。」と聲はしめつて居た。まア氣の毒な。兩親もなく伯母の家に賴つて居るらしいが其の人が病氣ではさぞ心細い事であらう。其上話しの樣子では何所へか務めて居るらしい同じ通ふのでも不自由なく身は濕い父母の御情けのこもつた衣をつけて……あゝ勿體ないと思へば思ふ程いとしい人等、どうか曲つた道を踏まずに今はどうあらうとも行末は立派な女と成つてくれるよう自分は此の二人の身に必ず幸あれかしと祈つたのである。「皆運一つさね。」と一言、つと左へそれた。

と身はいつしか吾妻橋へとかかつて居た。電車の音も忙しさうに牛乳新聞を配つて歩くもの！あゝ是も人の子。色々の想にふけつた自分はふと前を見れば其所にはもう親しい友の自分を待たれつゝ樂しさうに打ち笑みながら「お早う！」。


若水治子

（評）作者が實際に目擊したる事實なるべし、美しき同情も親を思ふ心も見えてゆかし。

秀逸

○悲しい宵　上毛　かるかや

ある月の寒い夕、私は古道具屋の店前に立つて見ました。此店は古物が主で幾段にも並べられた品物の、いづれ悲しい運命を語つてゐるやうなのに、昔は月の霞んだ春を誰が白魚のやさ指に、彈かれたかと忍ばるゝ小琴の、琴柱も失せて淺間しいのや、これも益荒雄が魂と共にすたれた、業ものの朱鞘もあり、靴や花瓶や藥罐や繪額や、哀れ不用とのみで拂はれたもの計りでもあるまいに、別けて此悲しいものゝ中に、恨みずニコ〳〵と在ますみ佛の、金の箔少し剝げたのが例へやうなく哀れで、あゝ誰故に賣られたお身かと思ふと、たゞもう恨しくつて、悲しい眼に思はず冴えた月影を見上げました時、あまり頰の冷たさに、そつと手をあてゝみますと、あゝ涙はもう既に流れて居たのでした。私は堪へられなくなつて、店前にあつた女子文壇の古いのを求めて歸つて、すぐ繰り返して行ますと、不遜の少女を弔ふ文の上に、優しい水莖の跡鬱げに、

「……今は早常春のみ國に、溫かう夢みて在す少女の君よ、哀れ十八の春秋いかばかり悲しかりけむ。さあれ君世には猶幸なきものも侍るよ、魔に誘はるゝとは知りながらも、死ぬに死なれぬ辛さを思ひたまへ。羨しきお身、君は戀の悲しさを知らざりき、あはれ玉の緒の絶ゆる今はも、……戀……悶え……

この胸よ朽ちても花と咲かざらむ
悲しき日なり雨ほそうふる……」

と書かれてありました。あゝ失戀！病臥!!!この筆の主が眼に見えるやう……、よせばよいのに、私はなぜ此樣なものを讀みましたらう、また泣かねばならないのですもの。あはれ涙に曇つた瞳に、燈火があやしくまたゝいて、冬の夜は更けたのか、時計の刻むセコンドの音のみ淋しく、按摩ひとり通らない。月影が窓に流れて、障子に浮いた一輪の、冬薔薇の影もそのまゝ凍るやう。こんな時泣く人はありはすまいか。まあ何といふ悲しい宵でしやう！私は涙のつくるまで泣いたのでありました。

（評）古道具屋の店頭を寫せる條を採る。

○あゝわが友　本所　田中久子

路のべの眞萩白萩、露ふみわけて色濃き紫の桔梗、一枝手折りつ、さて手向けんとてみ墓あふげば、白き卒塔婆に墨色新らしう書きつらねられたる幾その文字や、あはれなつかしき露子の君!!!

思へば〳〵長からざりし仲らひなりしかな。

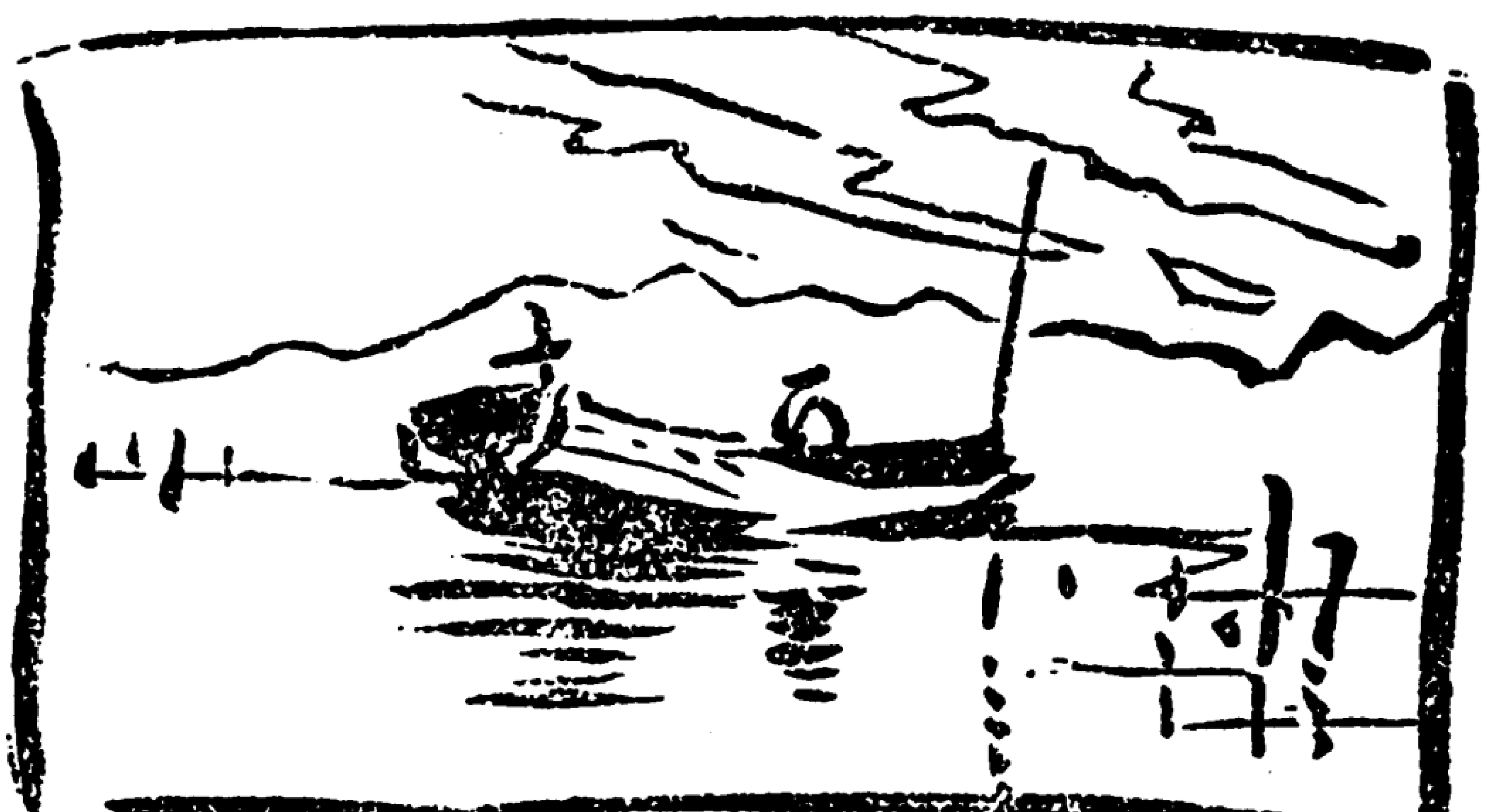
例へば此胸にときめきの絶えて溫き血潮の通はずなれ

ばとて二人の靈のあらむ限りはゆめ〳〵心たがへじとて、長閑けき春の宴にもあるは又さびしき秋の月の夜にも浮世を外の樂しきまどゐには、いつとて二つの影のはなれし事はあらざりしが。

かくても世は月に村雲の例へ言、乙女子五の榮ある身の限りもなき幸を羨ましとてか、つれなき世の憂風はまさなうもかの君のみ胸に入りて去年の春よりの御なやみ、月の滿つるまゝに缺くる程にいよよ重りなり給ひしが、先つ日の月清かりし夜、あはれはかなくも此世をぞ去り給ひぬる。

あなうたての世や、蝶は二つの翼を持ちてこそ花に樂しく戯れもすれ、一つの翼破られて何を甲斐なの片羽なる！小さき二つの袂にはしぼりかねなる我涙も君故にこそ干しもしたれ、今日より後は分たん友の袖もなくては、たゞ徒らに朽ちて朽ちて朽ち果てむとも何の慰め言一つ聞かんすべも長へにあらじな、缺けたる月のやがては滿つる時は來れど。

樂しき春も君故にこそ、友なき身は花咲けばとて鳥鳴けばとて何をか樂しみ何をかよろこばむ、月さゆればとて虫なけばとて何をか嬉しとは思ふべき、只徒らに思ひの種の增すのみなるを。



舟行　名古屋　佐野鐙子

あはれはかなきは友失ひたる身、翼破られし片羽の蝶の身なりけり、あゝ今日よりは又誰も慰めらるべき我身ぞや。

忍び餘りては心もしどろに打ち亂れつ、持てる桔梗を花筒にさせば香の煙りも立登りて、涙の目には定かにもわかず、夕がらすの一羽、悲しげに鳴きてすぎたる、あゝそもまた、はかなき思ひ出の涙の種や。

（評）平凡なれど文は整ひたり。

○朧月夜

磐前　鈴木よし子

いつ昇りけむ春の夜の朧月は夢の如く淡く庭の松が枝にかゝれり。よべの雨にやや色あせし櫻は、月影に照らされて、いよいよ白く、折々は梢よりはらはらと露のこぼれつ。前の植ごみはたゞ一面に黑き影をながく引きて、處女の嬌羞の如しなど今朝友とめでにし紅薔薇は、又見るによしなし。我は月にあくがれてひとりさまよひ、いつしか後園の運動場にと來りぬ。それよ彼方は日毎に友と爭ひしテニス塲よ此方は朝毎に走り廻りし楠よ、願ふ其三年の春秋、なれにし此學びの庭、こひしき此庭、花の春月の秋、野邊のあはれも山邊のゆかしさも知らず、たゞ此の寄宿舍の庭を小天地小樂園として樂しく學びし三

とせの春秋、あゝ樂しき三とせの月日、寄宿舍の生活も、早今宵にて終らむとせり、實に我は今日卒業のしるし文を得しなり。うれしきかな、今日の日。明日は早遠く故山の空に歸り行かむとす。げに故鄕はこひしきなり、なつかしきなり、我卒業を日毎に指折り數へて待ち給ふ母君もあり、一生の苦樂を共にすべき未來の良人もあり、流れゆるき小川にかげうつす櫻花若草萠ゆる野邊の菫、いかにやさしき色香なるらむ。飛ぶ胡蝶、揚る雲雀、いかにのどけき春のけしきなるらむ。我めてにし垣の白桃今年はいかに、我を慕ひし彼の小犬今はいかに、憶へばこひし故山の空。想へばなつかし故園の景色、あすは此なつかしき故鄕に歸り行かむとす、思へばうれしからじやは。戀し、懷し、故山の空、我一度故鄕へ歸りては、たゞやさしき母君の御もとにて、新らしき浮世の生活に入らむのみ。人目もうとき片山里に、平和なる生活を續けむのみ。高き理想は我のぞむ所にあらず。遠き希望は我欲する所にあらず、想ふ我望みはホームの團欒のみ。理想低しと笑はば笑へ、希望なしとそしらばそしれ。我にはなつかしき故山あるを。

されど〳〵此三年なれて遊びし學びの庭、此三年なれてつとめし學びの窓、今ぞかぎりなるらむ。都の空には早や思ひ絕ちし身、此園生の花、いつか又ながめん、此御空の月いつか又仰がむ。

夜や更けぬらむ、天に聲なく地に音なし。たゞ冷かなる夜風の折り〳〵頰のおくれ毛をなぶるのみ。時に聞ゆる遠寺の鐘の音一ツ、暫し搔やんで又つゞきぬ。

（評）身は都に在りながら、魂は遠く故山に飛べるさま、想ふべし。

○或る夜

長野縣　山田くに子

ヒユーッ!!!と叫んで吹いてくる夜風、森の魔鳥が夢呼んで、怪しきものゝ精を追つて行く樣な風の音である。バラ〳〵と戶うつ音に、さては地の雪を吹き上げて、外は吹雪となつて居るだらうと思ひつゝ、細くまたゝく灯のもとに、晝は忙しうて讀みもやられぬ、慕はしの女子文壇を開き見て居つた。すると表の鎖した戶をホー〳〵〳〵と氷る樣に、冷くたゝく音がする。

もう夜も十二時、家內一同ねしづまつた今頃、そも誰の業であらうと、何とはなしに危ぶまれて、立ちもやらず戶の方を見て居ると、此度は優しく「お賴み申ます。」私は夢中で立つた。立つて戶をガラリと開けるとチラと漏れた灯の光に、一人の僧らしき人が悄然と立つて居るのが見えたのである。「誠に夜分て失禮とは思ひましたが、今宵の宿にさしつまりまして……イエ宿る家は有りますれど、只名前だけ存じて居るきり、どこの家ですか知れません、聞き度にも人家は皆ねしづまつて……御宅一軒灯の光が見えたので、之こそ佛の御導きと失禮をもかへり見ず、御呼び立て申まして…

……」「イエどう致しまして、それよりも御見受申せば長の御旅に勞れた御樣子、して其御宿の名は？」「ハイ鳥田竹雲樣と云ふ御方と、師のぼうから聞いてきました」「鳥田竹雲？」と私は二三度胸にくりかへしましたが、一寸も知らぬ人の名である。

「少しも聞きませぬが……御住所は？」「たしかに梅若村と……」あゝお氣の毒な、私は一寸も知らぬ。「私は存じませんですが……」「左樣で御座いますか、誠に御迷惑をかけまして、有難う御座います。では」と立ち去らうとするので、私は「一寸」と呼びとめて、お宿がなくて御困りでせう、宅へ御泊め申度は山々ですが、少し事情が御座いまして、私の思にまかせませぬ。て此さきへ一町ばかり御出遊ばすと、右に曲る道が有ます、其道を曲つて又十間ばかり行くと、白蓮寺と云ふ寺が有ります、そこに今宵はお泊り遊ばせ」と、細やかに敎へると嬉しそうに私を見て、「何から何まで御深切樣に御恩は忘れませぬ。南無阿彌陀佛々々々々々導き給へ御佛」と小さく珠數をすり合せて、云つて居つたが、やがて何やら手にのせて、「心ばかりの御禮ですが」といなむをむりに握らせつゝ、一禮して出て行つた。「有難ふ御丈夫で」と云つた聲が聞えたか否か、忽ち行手の吹雪に包まれてしまつた。

何となくさしぐまれた涙をはらつて、バッタリ戸を鎖し家に這入つて、又つく〴〵と思に沈んだ、あゝ此家にかゝりうどの身でないなら」と……。小聲に亡父亡母の戒名をとなへ、始めて手にした物を見ると、それは手ずれした經の本が一冊!!! あゝ今頃僧は宿にいつたであらうか、外には風の音が益々高い。

（評）少しく物足らぬ心地す。

○恨めしの曲

大阪 山内糸子

夜はいたくも更けぬらし今宵は何となう物淋しく庭の芭蕉の音さへいとゞ身にしみ雲間を漏れし弦月は梅の枝にかゝりて光り靑くしていと悲哀を極めたり「隈なき月に鞭を擧げ男鹿鳴く此山里と詠じけむ」何處よりか一曲琵琶歌風につれてさと妾が耳に入りぬ、嗚呼其主は何人に在すらん妾にとりては小督の曲程悲しき物は又と他にあらじ、そも妾が兄君なる人は琵琶歌を好める人にてありき中にも小督の曲は殊に好み給ひしなり、さるを一日かりそめのいたつきより病の床に就き給ふ其時の妾の心は如何なりしや幼なき時父母に分かれそれより一人の兄君を賴みに今年十五歲の秋迄成ひ立ちし身、今一人の兄君の病の床に臥し玉ふを見しより如何に心細かりしよ兄君の病は醫師の診斷によれば肺炎とか、熱に浮かさせ給ふにや樣々の痴言又は琵琶歌など口詠み給ふ、かくて六日を過ぎし夕べなりしよ醫師の話を洩れ聞けばあゝ痛ましや悲しや兄君はとても全快の見込なしと?!

されど妾はそを信ぜざりき……其夕べ十二時過の頃なり兄君は頭に乘せたる氷嚢をばかき除けつゝ急に起

直り給ひ妾に向ひて宣ひき「噫辛なき糸子よ汝はいかなればかくも不幸なるぞ父母に死に別れ頼みの兄さへ今宵は迚も覺束なし余の云ふべき事は多からず余なき後は汝にはなし難きならんなれ共獨立自營して勉强せよ他に云ひ置く事あらず、さらば今生の別れに日頃好める琵琶の曲奏でむ程に疾く琵琶とれ」と命じ玉ひき妾は其時胸も裂けん思ひなりしよ「何云ひ給ふ兄君醫師も近き日には全快せむと申させ給ひしにあらずや何故かゝる心弱き事を宣ふらむ心たしかに持たまへ」と云ふに「否とよとても余命長からじいざ琵琶を」との重ねての仰せに心もとなくも琵琶をまゐらすれは四の緒の調べもすみやがて嘈々切々として或は高く或は低く或は急く或は緩く村雨の如く私語の如く「頃しも秋の半の空詠めがちなる御袖の………」と語り出し給ひし小督の曲は病める人のとは思えざりき曲も漸く進み行きて「隈なき月に鞭を擧げ男鹿鳴く此山里と詠じけむ、一撥高く四の絃諸共バッチリ、!!! 打ち給ひし刹那兄君の躰は前に倒れしが………呼べと答へ玉はず、噫かくて兄上は逝きませしなり?!

（評）實際にあり得べからざる事とて人を感動せしむること少きは口惜し。

○薄命の人

尾張　愛子

伊吹颪身を切る許り激しき夕暮、柱に倚りて門を眺むれば、六十路餘りの女、十二三の乙女に手を引かれて佇み居る怪しさ、妾はいぶかしさに堪へ兼ね、たらちねの君に告げばやと、思ふ折しも彼の乙女一人入來りていと行儀よく首を下げ、一夜を門の軒に明させ給へと訴ふるいぢらしさ、老婆は乙女の祖母にて目しいとかや、世慣れぬ優しげなる乙女のやつれし面わの涙を見れば、いつはりとも思ほえず、いざ父母の君に願ひやらばと起つ折しも障子開きて母君出ましぬ、言葉短かに物語れば、快よく許し給ひぬ。

食事終りて火鉢かこみつ、老婆の物語るを聞けば、あゝげにも哀れ。

元は名古屋のある武夫の娘にて、思ふ事なく生ひ立ちし花の盛りの十八の年、重き眼を患ひしが、悲しや醫師を初め、神佛の祈禱も遂に甲斐なく人目も草も枯るるてふ、霜月仲の八日、父母の慈顏を拜する能はずなりき。

明治の御代となりて、富の榮えたりし我が父は、何不足なく好める業して暮しゝが、運命にや二度まで類燒し去る二十四年の震災には、火を失して居るに居られず三河なる、豊橋町に移住して妾は藝が身を助くる琴曲の指南して辛くも煙を上げたりしが、三年前父母逝き、續いて當主も之の子を殘して流行病にてみまかりき。

實に嬉しきは人の情――。其れより敎へ子の數增してうゑもせて暮しゝが、此度京都御本山へ參詣の念禁じ

難き爲、少しの家財賣拂ひ、漸くてゝ迄辿りつきぬ、と語る折柄軒の呉竹にはら〳〵と、霰たばしる音いと寒し。

○懷舊

長門　孤菫女史

寒禽の聲絶えて更けゆくまゝに木枯寒う、折々聞ゆる竹の友ずれ、淋しく身にしみて後となう物思はるゝ夜、破窓の下、机によつて、久しく手にせざりし藤村の詩集取出し、好めるふし〳〵誦しもてゆくに、ふとそこに挾まれたる色香あせにし菫の花一つ、あゝ君が紀念の此の菫！

胸の血潮は新たに湧いて簇々と浮ぶ涙の古事、あゝ忍ばんかな。淀みなき月日は早くも三とせを過ぎたりけりな、世は花鳥の長閑き春戀しの君と別れの夕、離愁の涙そゝぎし彼の花野に、君が自ら摘んで又遇ふ日迄妾と思して愛してよ、色褪せずばわれ無事なりと、暖かき唇にキッスして賜はりし此菫、妾は嬉しと其儘好める詩集に挾みぬ、あゝ思はざりき永久のかたみにならんとは……

別れし後はせめてもの忍び草、心淋しき折ふし思ひ出ては取出し、君があつき情に浴しつ、再び遇ふ日を樂しみに、隔ての海山怨みつゝ、忍ぶにあまる其時は互にかはせし文の一たば、あゝ仇なりけりな。兼ねて健かなりし君が身に如何なるまがみのみいりてか、一朝病魔の襲ふ處となり、にくや無常の嵐は遂に希望にみちし君を拉して白雲郷の人となし果てにき。人生は夢か幻か、朝の紅顏夕の白骨、何れは蜉蝣の人の身の上とは云へ、あまり惛きさだめの神。

悲報に接せし其時、われは殆ど心を失し報を疑ひぬ、而して震ふ手さきに彼の菫ひらき見れば、あゝ如何せん色は全く褪せ果てゝ、當時の面影更になきを。われは頻におしあて泣きに泣いて涙はかれぬ、あゝ此菫かたみにとて賜ひしにはあらざりしを、さても情なの花や。いつかは又樂しき彼の花野に、暖かき手を握らんと誓ひしは夢か只一片の煙と化して白骨にわが無限の涙注がんとは。絶えぬ思ひにかき亂されはふり落つる涙は滴々と悲哀をこめしいとしの菫の上に！



まつて項戴よ

本郷　栗原ふみ子

折から聞ゆる犬の遠吠、夜や更けぬると窓の戸おせば利鎌の月空に氷りて木枯さつと樹をならしぬ。

○忍び音

鳥取市　上山千重子

夢の間に五七日は過ぎた、母樣の亡骸はもう冷い石の下に葬られて仕舞つた、と思ふと一種なさけないやう

な、つらいやうな感想が小さな胸にわきかへりて、兎角涙のみがさきだつ。「よく泣く奴だねえ。」一度は父様に叱かられたが矢張り泣きたい、泣いて／＼涙の泉が涸れたら止めやう。アヽ全く涙の子なんだ！が姉様も僕を抱きしめて、いぢらしいつて泣いたつけな、して見ると姉様も矢張り泣虫だ。さて香の烟もやゝうすらぎし今日此頃、姉様は僕を庭の四阿につれだした、私は何んでも姉様の言には服從する、實の所、父様よりなつかしさ一層なので……。春はやよひの若草小草を庭石づたひに蹈しだきて、さて一本櫻の萬朶の花かげに、漓う結んだ小亭に入ると、姉様はキユッと私を小脇に、その温い唇を僕の冷めたい頰に接吻しつゝ、「勇さん姉様の云ふ事をよく聞いてお吳れよ」つて、私は只首肯した。すると姉様は優しい眼ざしに私を見つめて、「姉様はね、いつまでも勇さんと一所に居たいけど、明日は如何しても婚家に歸らなければなりません、いづれ近くによい御母様が入らしつて、勇さんの世話をして下さいませう、勇さんは如何な事があつても決して／＼我まゝを云うてはなりません、口返答をしてはなりません、姉様は……姉様は遠くはなれて居ても勇さんの幸福を祈ります、ね御母様によく事へるのですよ、了解りましたの……。」ホロ／＼と熱涙は雪を欺く双の頰から落ちて、しがみついた私の手に碎けた、私は泣いた、姉様もないた。翌日姉様は車にのつて歸つてしまつた「勇さん昨日の事忘れないで下さい」と云ひつゞけて……、仕様がないや、姉様は餘所のお嫁さんだもの……。やがて第二の御母様は花花しく僕の宅に入らしつた、始は至極やさしい方のやうに覺えて、好きだつたけど、だん／＼恐い母様になられた私は幾度かないた、併し姉様と小亭で誓つた言葉を思ひうかべて、何と仰せられても只ハイ／＼とひれ伏すのである。アヽ御父様はお留守がち、かなしさのやるせがない。地下の母様や、遠方の姉様は如何にお過し遊ばす事やら、あいたい！見たい!!

○羽根の果　　伊豫　三浦すみれ

青春の血は、躍らざるを得ざりき、初めて羽子板の君と睦みし時、おゝそは、一月一日の事なりき、其頃はいかに此の世のたのしく、いかに嬉しく、月日の過行く事のいかばかり早しと覺えしか、噫、されどそは、唯夢の間なりき、まぼろしの如かりき、須臾にして、其樂み、其嬉しみは空の一角に消え行く浮雲のそれの如くに、今は果敢なくも世に捨てられ、失望の淵に沈みて、憂き日を送る身の、あゝ、思はざらましと思へば、思ふ程の、胸の煩悶はいやまして、有りし昔の偲ばれつ、世を恨むには有らねども、かばかり儚なき者とは、露知らざりしよ、……月日の樂しかりし頃はいかに我身の美しかりし事よ、其裝ひ、其姿、春花の如き家庭に出入して、やさしの姫達にいつくしまれ、花の莟のそれの如き口もて、いと暖き接吻をさへ受くる事常なりき、仲よき羽子板の君と、いと樂しく暮

しつ、他目にも羨まれし事よ、其達者なりし翼は、思ふが儘、心地よく晴れ渡りて長閑なる大空高く、其姿は、空舞ふ鳶の心をさへ、迷はしたりしものを、時とは云へ、羽は抜け、姿やつれ、あはれ昔の俤は、我身乍らも驚くばかり、抽出の片隅に佗しくも照る、日の光りさへいと暗きを、嘆ちつ……さるにても、心もとなきはなつかしの羽子板の君、噫今頃は？

◎我が喜憂　長門　谷　清水

人間萬事塞翁が馬とか。妾は投書しぬ。

其の始め沖子の君と、俳句の事にて知り初めしより、互に仲よく詩に歌に遊びしが、遇へば直ちに本誌の事にて、誰がお上手、誰が上手との噂のみにて、其の都度、沖子の君が妾が投書を勸め給ふが例なりき。

妾も投書せんかと思ひし事も一再ならねど、拙きものもて、記者樣の御目汚さんも心なき業なれば其の理由詳しく沖子の君に申して、いなみき。

斯くして日に月に沖子の君との交りは厚くなり行き君は又相も變はらず投書せよと勸め給ひぬ。

『始めより賞に入らんは覺束なけれども、昔より云ふが如く、古めかしくはあれど、精神一到何事か成らざらんとか。投書しては沒書せられ、沒書せられては投書を重ね、斯くして上達し、お互に本誌の特別壇とならばや』と、懇ろにも、いと懇ろに云ひ聞かせ給ひしに、妾も聊か心動きて、失禮乍ら拙文を投書しぬ。其の最も始めなりしは、八月の頃と覺えけるが、其れよりは歌に俳句に、詩に文に、只管に上達を願ひて、身の下手なるも憚らずあまた度投書しぬ。

斯くして九月の誌も來たりぬ。我が文の影だに見えず。十月來りぬ。幻にだに見えず。妾の心は愈狂ひぬ。十一月も來りぬ。未だ見えず、妾は依然として投書しぬ。妾は依然と記者樣を初め、誌友の諸姉孃樣方も、意くぢ無きをば笑ふかも知らねど、其の効ありてか、妾が心慰めは來りぬ。其は十二月の部に妾の文の見えし事なりき。あゝ、此時の妾が心は……又しても狂はんばかりなりき。そは他の諸姉樣方にも嘗ては經驗ありたらん事乍ち。妾は直ちに母上に見せぬ。

母が喜びは妾以上にて、驚きの一聲と共に、ガラスの大きやかなる老眼鏡取りよせ給ひて、とみかうみ賞め給ふ樣の妾には又一層嬉しかりき。母上のたまふには『父上逝き給ふ折、汝の成人せん事をのみ口にし給ひしが、げに早や九年の年月は去りぬ。あゝされど父上も地下に嬉び給ふらん汝が成人……』妾は泣きぬ。

妾は泣きぬ。母上も亦泣き給ひぬ。妾は一層悲しかりき。父上居給はんには、高等の學校にも出でゝ、女の道、學ばんものをと一度は思ひぬ。されど又思ひかへしぬ。女の道は只に學校に出でゝ、ハイカラとかになるのみには非じ。母上に孝養して、天晴れの者たらんには之れて世に云ふ孝女ならんかと。あゝさるにても、次の文壇の待たるゝ事かな。



君嫁して井筒古びぬ秋の暮　　横須賀　花舟子

【評】僅に十七字、無限の情を含みて吟誦幾度飽くを知らず。

大八洲八十島かけて霞みけり　　熊本　島田たけ子

【評】大幅の墨繪、技巧を衒はぬ所却て老手とす。

釣に來て見馴れし柳枯れにけり　　宮崎縣兒湯郡上穗北村　濱砂まさよ

【評】中七、枯柳を蘇生せしむる力あり。

春風や小石置いたる晒布　　香川縣大川郡白鳥村大字湊　鎌田みつぎ

【評】好い景なり、好い句なり。

秀逸

瑠璃寺や青葉に光る朝の鐘　相模　中里響花
布施僧の白き脚絆や夕時雨　越後　藤原宣子
牛曳て橋越す人や朧月　久留米　中原鐵子
關の灯や更けて鹿鳴く峠かな　本郷　いよ子
例年の大盃や弓はじめ　讃岐　鎌田みつぎ
蛇穴を出た〳〵と鳴く蛙かな　三河　柳子
五山の鐘牡丹くづして止みにけり　岩代　岸野常子
歌きゝに鹿も侍ふ月夜かな　伊豆　加藤清子
美しき鸚鵡かひけり花の宿　高山　山住愛子
掃除して寒き机の四隅かな　本所　恩田壽美禮

雁歸る耶馬は淋しき雨夜哉　福岡縣　まつえ
葉櫻やつぼれの人の倚すだれ　安藝　兒玉かけい
春の草今日は二寸の日さし哉　南越　柳人女史
梅白し月をいたゞく一孤村　恩方村　中島縫子
小弓引櫻の三位桃の二位　富山　小林芳枝子
はつ夢や我れ雲上の志　弘前　竹内信子
山吹や人なき庵の垣の下　弘前　華枝
月朧ろ白木蓮ししづく哉　麴町　原田花車
評判の娘見えけり桃の花　宇都宮　大嶋姫子

鐘の音や栗散る寺の薄月夜　尾張　野田露子
梭の音しづかにもれて椿ちる　埼玉　長澤秀子
遠乘の馬に水飼ふ柳哉　久留米　中原織子
木枯しや十戸の村もたそがるゝ　京都府　穴田松江
兼題はかすみなりけり人丸忌　奈良　白藤女
陽炎や椿落ちたる水だまり　奈良　祇園女史
さげてゆく紅葉にからむ夕日かな　牛込　燃子
春の水裾をむすびて渉りけり　岐阜　泉しげき
五月雨や繪端書濡れて着きにけり　江州　秀葉
美しき獵師が妻や雪の宿　和歌山　ゆり子
榾たいてかち／＼山の話かな　神奈川縣　高梨たか子
梅が枝を折る手に月の匂ひけり　千葉縣　鶴岡かつ子
掛稻の竹に霰やみぞれ降る　福島縣　鳳喜子
したゝるや柳絲に地を二寸　富山　小林芳枝子
洗濯の盥に散るや桃の花　秋田縣　とみ子
京人の白足袋寒き二月かな　相模　土筆
年の市女八分の人出かな　神戸　杉山俊子
井の水を貰ひに行くも梅見哉　群馬　あやめ
歌反古を鶴などに折りつ春の雨　伊勢　蘆の舍女史
燕のへさきに並ぶ汐干かな　近江　北川花枝女史
雪ちらり／＼人行く枯野かな　千葉　伊藤壯子
潮先にむるゝ小鯛や春の海　下總　たか子
山猿の折りては投げる氷柱かな　讃岐　いくえ女
海棠に雨細う降る夕かな　越後　五十嵐美津

僧ひとり雪の詩うたふ榾火かな　千葉縣　翠葉女史
朧ろなる八坂の塔や春の月　千葉縣　川奈部季佳
新しき土藏も見えて初櫻　高濱　大和田濟子
明星や鴉にまじる雁一羽　埼玉縣　西田露蕙子
蛇穴を出るや藁つむ畝ざかひ　埼玉縣　鵜澤薫子
眠さうに齒みがく人や春の雨　福岡縣　とよ子
鷄のなく十戸の村はかすみけり　千葉縣　小川くに子
臺からは鍬も重たし庭の花　明石　田舍娘
野櫻に夜明靜けき馬上かな　周防　小藤女史
金穀や從者もあらず月の道　讃岐　しげこ
楊震が四知の外なる火桶哉　周防　内山美子
新米の臼のひゞきの隣かな　芝　汀女
屠蘇汲むや宮女の眉の美しき　伊豫　伏見圭子
梅活けて雨枕の夜やなかし　渡邊穆哲子
菊苗を植ゑて好き茶を煎じけり　三河　柳子
花咲くやよき人とめて歌語り　羽後　前田ひさ子
翳りやみち峡にして菜の盛り　羽後　紅差女史
春の日を上棟式の遠音かな　豐前　秋吉初枝
いさゝかの物賣る店や花の雨　安藝　中村東雲
笹すしの笹とけば春小雨かな　京橋　梅浦松子
菜の花の靄靜かなり別莊地　芝　深川湖子
春の水紺屋の門を流れけり　阿波　犬伏やす子
草鞋賣る老母の門の緋桃かな　伊賀　山村りやう
鵯なくや八幡宮の花くもり　鵯來　美響

俳句

みどりなる山を抱いて春の虹　三河　長坂よし子
衣洗ふ盥に花のふぶきかな　神奈川　高梨歌子
紅桃や今年十四の雛の主　備後　松本菫子
うつむいた丈けが小供の御慶哉　福井縣　西野民子
嫁入や里に似合ぬ廂髪　上毛　五十貝すゑ子
繪だくみの花のみ門を叩きけり　常陸　酒葉花舟子
小春日や障子にうつる猫の影　滋賀縣　川島激子
夕嵐櫻か下の落馬かな　滋賀縣　藤野靜子
都府樓の春は荒れたり畑打　福井　美雄女史
水鳥の影踏む磯の長閑哉　恩方村　橋本しげ子
初雁や左遷のかこの薄明り　廣島縣　華溪
夕日さす森の烏や落椿　尾道　安保強子
黒髪の獻に湯茶を合せけり　福岡縣　芳江
いかぐりや昔比叡の山法師　咸田　波賤女天波
木枯の吹き殘したる月夜哉　岩代　岸野菊子
笹舟に蝶の乘り行く野川哉　鶴來　幸女
髭鬼やお襟めて度き男ぶり　熊野　木村とし子
流れ行く草に虫なく野川かな　下總　萩原花女
鳥さしの竿に宿かる蜻蛉かな　茨城　天谷とし子
山の田や足跡每に紅葉鮒　周防　岡部佐保子
舟の灯もいつしか消えて秋の雨　能登　天涙女史
搖籃に稚兒うつくしき菫花　越前　佐野よしを
冬三月文の林に籠りけり　上總　森久子
鶯の姿隱し梅の花　三重縣　奥阪まさし

寒紅梅野路の垣根に匂ひけり　鶴島　坂野白露
古雛に昔を語る夫婦哉　攝津　和久燕子
若水や檐〱の月明り　熊本　村岡みれ子
とぎすます出刄や夜寒の月あかり　京都府　野菊女人
夢さめて失せし子を泣く夜長かな　神田　三木眞子
朧夜や瀨にとらるゝ舟の魚　國山とき子
雨はれて木犀の月を見る夜哉　松江村　中村夢春
春の風長き手綱をわたりけり　茨城縣　石塚しづゑ
黄と白の蝶が越えたる土橋かな　熊本縣　島田たけ子
冬の夜の星に親む野山かな　千葉　岩井英子
打ち折りて何かにしたき氷柱哉　兵庫縣　近藤しん
探梅の素小袖寒き吹雪かな　備後　田邊節子
奈良に入つて鶯を聞く日和かな　熊本　島田たけ子
二三軒見ゆる谷間の案々子かな　美濃　柴田ぎん子
我が門の柳も青し春の風　伊豆　山口もん子
白桃やほの〱星の出でにける　下總　大崎山櫻
日章旗千里波打つ初日かな　桐生　野本まつ子
犬に藝教へて冬を籠りけり　越後　藤原よし
一村は草にうもれて春の館　上毛　かるかや
双六や障子にうつる松のかげ　西播　酒見むら子
鐘樓に大根干すや奥の院　紀伊　増美月子
空高く小島渡るや朝日和　保田　金木ふみ子
鶏鳴くや朝日射通す小倉山　安房　秀月女史
新しき笠の揃ふて春の旅　越後　村山芳枝

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

（三等）草庵より友へ

備後深安郡春日村　松本菫子

櫻匂はぬ片山里の草庵より、墨染の衣着る身の覺束なき手に筆とりて、懷かしき君の御許に一筆申上まゐらせ候。

妙貞！げにいぶかしき名よと思し召し候はん、君よ知り給へや、一年昔の春子は今は世に無きものに候ぞ、只頭丸めし妙貞なるもの〻、淋しくも春日の山奥に、浮世を外の木魚の音に、心にもなき儚なき命を長へつ〻あることを記憶し給へ。

今は世を捨て身を抛ち只管に佛守る身の、何をか思ひ何をか悶えむ、されど汚れ多き肉持ちたる人の心の、兎角に昔の夢忘れ兼ねて、又しても讀經の聲しめり勝ちに候。

君よ、妾の父は去年黄泉の客となり候、續いて母も亡き人の數に入り申し候、而して妾に一人の妹は：：：あ〻妹は生まれもつかぬ不具者――黑白も分たぬ失明の、あはれなる身と相成り申し候、妾の宅は人手に渡りて、親の奥津城にさへ石塔をも建て得ぬ淺間しさ、祖先の跡目絶つ悲しさよりも、失明のあはれなる妹を抱きて、兩親に先だ〻れたる果敢なき身の、慘酷なる浮世の風に揉まれて、熱き血の一滴だも剩さずと、汲ひ取らる〻ことの、より悲しくて、今の身とはなり果て申し候よ。

かくて殘る三十年の夢を、妹と共にこの草の庵に結ばんとするにて候。

君よ、古き妾の友なる花子の君よ、燈暗き佛壇の下に若き尼二人、數珠つまぐりて、悲しき鐘の音を相打に誦するみ經の聲は聞えずとも、せめても昔の夢繰り返して、君の御袖にもつれし可憐の妹があはれなる心の程、偲びたまはり度候。

あ〻妾は最早多く書くに忍び申さず候。

妾が去年故郷去るに臨み、妾が幼き時よりつき添ひたる老媼の、妾がいなむをも聞かで、つづらの底に藏め候小袖一重、今は何の用にも足らざるを、せめて世の果敢なき友の形身よと思し召して、常着にもせられんにはと、お送り申し候ほどに、お受け納め下され候はゞ、妾

の本望これに過ぎ申さず候。

さらば友よ、これにて筆うち止め申さん、いざさらば彌健かに世を過させ給へ。

（評）　御佛の前に經誦する姉妹の俤見えてあはれなれども、世を捨つるに至りしまでの描寫を省きたる爲、讀者をして同情の念を起さしむること少きは憾むべし。

○別れし友に

長門國萩十日市　孤　薑　女　史

發車の鈴に驚いて握りし手をはなち、飛び乘りし汽車は、やがて轟々とわれをのせて馳せ、次第に遠ざかる君が御姿は、遂に恨めしの烟にへだてられ、われは空想と共にいつしか茲故鄕に着して候。絕えて久しき歸鄕に都の便り聞かましと、とひくる友の懷しうて、互に手を握り、問ひつ語りつけふ迄を如何に過しつるか、只夢の樣にて候、君の御噂は、話頭第一に出でゝ、ありし事ども面白おかしう語りては、共に昔を偲び候、この地の友は皆々いとも平和の新生活に、けふを喜びあすを樂しみて、其昔共にかゝりし煩悶とやらの病苦も、今はあとなく癒えて、誰やらの理想を其まゝに暮し居られ候。

君よ、いかに變遷早き世の中とは云へ、暫しの間に我故鄕の變化は又驚く計りに候よ、昔ながらわれを迎へしは、只懷かしの山川のみ。妾は無量の感慨に打たれて候。

年と共に、月と共に、淋しうなりゆくわが故鄕、遂には如何になりゆくらんかと、いと〱心細う、荒れ果てしはにふの小屋のいぶせさよ。われを愛でにし彼の白髮の老翁は、いつか此世を去りて、あとは家もなく人もなく、草茫々の荒野と化して、記憶を呼ばんすべもなく、永年時めきし彼の白堊の高樓は、三とせの昔灰燼と化して跡なく、只赤土の中に、半ばこげたる立木の殘りて、當時の慘狀を思はしむるのみに候。さはいへ懷かしきは昔ながらの自然美にて候よ、落花をのせし前のせゝらぎは今も猶われに神秘を告げ、昔の詩を語りて、さすがに其かみ偲ばれて候。

峰の嵐か松風か、調べあはせし彼の老松、こよひしもひとり音立てゝ、君が妙なる音に、絕えて久しき合奏を待つものゝ如く、そゞろに往事を追懷致し候、あはれ我に才筆あらば、此感悉くうつして、感慨深き君に送らんものを。

月は今し老松にかゝりて、昔共に詠めし景其まゝに、四隣寂として耳に入るものは遠き川瀨の音と軒の松風のみ。破れし南窓のもとに筆とれば、白紙に落ちし水墨のあと斯の如くに候。余は又の便りと書きもらして候。

（評）　斯の文讀まば友の君がおもひは遠く故山に馳するなるべし。絕妙。

秀逸

○夢は樂し

加茂　佐藤たき

いつぞや或雜誌に誰やらが、夢とは樂しきもの既に逝かれし母が乳房をさぐるも夢、海山萬里隔たりし異鄉の友と語るも夢、夢は美しき樂しき自由の園生なりと仰せられし樣覺え申候が、誠夢とは樂しきものに候、學びやの業卒へてこゝに五年、日每〳〵のたづきに追はれ候へども今猶幼なりし其頃の偲ばれて、夜な夜なの夢に樂しかりし當時を追想いたし候、聖人に夢なしとやら申候が望みは一つもならで、日々懊惱に苦しめらるゝ今日此頃、覺めては悶の種となるとも夢は妾が生命にて候。

既に轉任遊ばされし木村先生も御嫁入り遊ばされし英子樣もおはさゞるなくさては石井の君澤田の君、クラスの全隊故人となられし御方々とまで御話もいたし遊戲もいたし申候、また或時は共々修學旅行に參り候てさめての後も其道々の忘れられぬ事も之あり候。

一度樂しき夢の園生に遊びなば、夏に雪をふらして冬に團扇尋ぬる滑稽もあるべく、秋に櫻を咲かして春に紅葉を散らすさかさま事も容易ならんと獨りをかしく存じ候。昨夜の夢のあまりに懷じく、嬉しきまゝに今宵も亦かくあれかしと念じての興そゞろ亂れし跡は、それが故と御推讀下され度候。

（評）結末の一節、畫龍點睛。



お人形　大阪　橋本賀壽尾

○雪中都の友に

鵜來町　美雪

別れたてまつりてしより、夏や秋やと行きかひて、冬の空となりはべりつるを、都わたりの御住居よ、いかに渡らせ玉ふぞ、こゝもとには、かた山里の習ひとて日每〳〵にすさぶ木枯の、落葉ふきまく聲すさまじく、ましてあした夕、窓うつ時雨ならでは、おとなふ人もつゆ侍らず、みな柴の戶さしたれば、人すまはぬ里めきて、あやしう色も香もなきながめなるに、たゞ炭がまのけぶり、峯のましらの聲のみ、二なき友とたのみて、明かし暮らし侍り、さるをよべより、雪ふりいでゝ今朝なほやまず、荒れたるかき根も築地のくづれも、玉しき渡し、さては前裁の木々も、中島の松も、ひとつ色に六つの花さ

きて、やり水の音も埋もれ、池の汀の氷、から書など打ちひろげたらんやうをかしう、日頃のさびしさ、忘らるゝにつけてもひたすら御許のみなつかしう、共に詠めたらましかば、いまひときは、興味も深かりなんなど、おぼしやられ侍るを、君には如何におはするか、都の空には、上野すみ田も、名だゝる所おほかれば、御こゝろゆく方にものし玉ひて、お手染のめづらかなるが、いとさはに侍らんに、雪は山川うづみてへだつとも、雲井のかりのこもづてに、そが二ひら三ひらを、示させ玉ひてよ、さらば親しう、うたげのむしろに伴はれたらん心地していと嬉しう侍らんに。

松かしはなでゝの木々に花咲きて
　雪おもしろし冬のやま里
村雀あさる聲さへうもれつゝ
　ふりてこそ積れ小田の白雪
荒れにける蓬が宿も玉しきて
　なれにし庭と見えぬ今朝哉

こは此朝げの口すさみに侍るを、御笑ひの種にもとてなん。

（評）典雅。和歌またよし。

○白的樣に　信濃　有賀まさ子

思ふてと云はぬは腹膨るゝ業とさる古への法師のいひけむも理にて、云はで獨り物案ずる胸の苦しさは、譬へば狹き箱の内に押し込められたらむにも類ふべくや、破りても出でむ想の抑へむにすべなく、をみなの身の烏滸がましく候へ共、いかで〳〵聞え上げむ言の葉に暫く耳傾け給へや、妾が愛讀措かざる本誌增刊菊花月を繙きて、嗜き好める新躰詩誦し行く内君が「金閣寺を逍遙ひて」てふ詩を見て、一たびは着想斬新に聲調整ひて老練の風丰章句の間に活躍せるを歎じ、再唱して我誌壇の雄鎭と仰ぎまつり、三唱して疑念胸裡の一角に閃き申し候、八六の調、修辭の具合、四句一聯にて最後を二句にしたる、何處かにて朧げながら見覺えあり、こは慥かに泣菫樣の御作と心附き、斯る詩形にてものせられし時代の集「行く春」を開き候に、同じ形式のは「小狐」以下「うたげ」「戀の矢」、など澤山に候が此詩は見當り申さず、さては有らぬ濡衣着せ參らせし罪の恐しさよ、嫉妬猜忌の憎々しき仕業にやと深く耻ぢ入り候ひつゝも、猶疑の霧れやらで古き雜誌明星（明治三十四年十二月十五日發行第十八號二十八頁）を繙き候處、「秋興」と題せる名こそ異れ假名漢字一句一句も違はぬにいといたう打ち驚かれ候、俳句和歌など短き詩形にはともすれば暗合やうのものも見受け申せど、斯る長き作物にさる事有る可しとも思はれず、否斷じて有るべき筈なしと覺え候、さばれ暗合か剽竊かそは妾が聞え上ぐる迄もなく、自ら省みて明明白々火を睹るが如けむ、内に疚しからざれは毀譽も

褒貶も惡罵も嘲笑も、何等人格の眞價を上下し得る者に非ず候、然れども想ひ給へ、剽窃の不德を敢て犯し徒に名題を替へて自作顏の衿らしう、選者を僞瞞し讀者を僞瞞し且つは原作者を辱しめし破廉耻罪は、到底觀過し能はざる所行と認むるに些の躊躇も許し候はじよ、苟も藝術の園に憧れ詩歌の花壇を濶步して、詩趣の美果を味はひ靈の慰藉を覓め崇高の情念を養ふべき此の偉大なる希望を抱いて發奮黽勉せむずる君の、却て藝術を賊し、一時の名譽に驅られ浮きたる雲の彩を喜び、永遠の不面目を負ひて闇なす谿に陷り行かむは、如何に悲しく歎かはしく候はずや、詩は感興に觸れてこそ奇しくたへなる響もすれ、剽窃して何の得る所か候べき、萬々發覺の憂なしとせむも胸裡常に不安の霧もて鎖されなば、何處に歡樂の泉を汲み何處に詩神の惠に浴し、何處に文藝研磨の實を擧げむとし給ふにや、君は詩才文才兩つながら兼備せる有望の投稿家として、相當の尊敬も拂はるゝに、かゝる不德より引いて心の臭がも見え透かされ候ては、下劣なる品性よ、貪汚なる物質欲者よ、文字の玩弄者よとのみ、麗しき彼の美文も信念ある彼の論旨も幽邃掬すべき彼の詩歌も、遂に意味なき活字の羅列とならむ、加之本誌の聲價を失墜すること尠少ならざらむは、返す返すも口惜しき極みに候へ共、亦如何とも致し難く甘んして此の厭ふべき僞瞞者――少なくとも――なる代名詞を享受し、謹んで責任を負はざる可からざる儀と存ぜられ候。君よ。藝術を樂しむ者は只藝術に忠實なれ、藝術に仕へて眞摯なれ。妾は茲に改めて此の數言を呈し申し候。想へば女の身の差し出がましくなめげなる節もいとさはに候はむ、何卒御免し下され度、君子は人の美をなし人の惡をあげずとか、敢て大聖の教訓に背くもの、一に現在を顧憂し未來に想到して、君が爲め、藝術の爲め、本誌の爲め、好んで斯くの如き苦言を憚らざる所以に候、御高見もあらば御伺ひ申度、先づは是れにて筆擱き申し候。あら〳〵かしこ。



墓參　讃岐[illegible]子

（評）徒らに嘲罵の辭を連ぬる事なく、諄々として教ふる所、作者の人柄見えてゆかし。

又曰、かくても猶改め悔ゆるなくんば、白的女は到底文藝にたづさはるの資なきもの也。

○師範學校へ入學を勸む

磐城　横塚まさゑ

此頃は餘りに强き寒さにて最も堪へ難く閨の戸を打つ吹雪の音を聞くだにいとゞ友戀しき心地の致され候ふ思へば過ぎにし去年の春まで御許様などゝ八年が間同じ窓に與に倶に學びの道にいそしみ居り候ひしに御袂を別ちまゐらせしよりはや一年を過し候ひぬ今となりて去年の事ども思ひ出されていと懐しく坐に昔の戀う思ひ居り候ふ、さて茲に御許様に本縣師範學校に御入學遊ばされん事を御勸め申上たき所存にこれ有り候ふ、御許様も御存知にて候はんがかの學校は他の普通中等の學校よりは學科の程度も高く學資金もさまで入用らず且つ修業年限も短く卒業後獨立の家計を御營みなされ候ても田舎にては優に中等以上に候ふ殊に戰爭後は世人一層普通教育の大切なるを說き又其の教員の半數以上までは女教師こそよからめと斯道に明き人々は談り合ひ候ふ由そは女性は何事も優しく丁寧に先天的に育兒及其の子の教育の任に當るべき自然の任務と天稟の資格を有せるものにて候へばこれ等の言は實にさる事に候ふ況して今後の世に立たんとする女子は中等以上の教育なくては叶ひまじく候ふ故本校入學の如きは且は職業を得且は良家の主婦たる資格を得るに一擧兩得にて候ふ教員と云ふ職務は世人の尊敬の度と云ひ待遇の點と云ひ國家に貢献する點と云ひ先づは現今他の婦人の職業と比較し遜色なきのみか却て首位を占むるものと確信致し居り候ふ、殊に御許様には御質と云ひ御家風と云ひ教師たるに最も適當と存じ候ふ其上同窓中にては秀才の譽を得られし事ゆゑ學力の點につきては十分に候へば何も御心配なく御入學の御所存に相成られ候うては如何に御座候ふ哉御勸め申上候ふ。理は理として情に於てかの無邪氣なる天眞爛漫なる可憐なる兒童を思ふがまゝに教育し己れ少年國の大王と仰がれエデン園も只ならぬ其の遊戲の有樣も思ひ來てば目のあたり見ゆる心地せられて候ふ私も素より志望の事なれば共に手を携へて入學致したき心底に候ふ只々御承諾の御返事のみ速ならん事を。

(評)　情理ひと通りは盡せり。

郵便用文

今迄の「書簡文」の欄を抒情文に合併して、更に「郵便用文」の欄を設けます、今迄の様な「書簡文」欄に投寄された文章の多くは、美文として扱ふても差支のないものですから、あゝいふ文體の書簡文をお作りになつた節は抒情文の方へ願ひます、代りになりました「郵便用文」の欄については大體は左の通り

▲手紙又はハガキの文章で實際の用事を主題として作ること▲文體は口語でも文語でもよろしい▲假りに題を設けて作つても素より差支えありませんけれど、或る場合には、ほんとうの用事で取り遣りした手紙文又はハガキ文を其まゝ投稿下さろなども面白いでせう

▲懸賞其他の規定は凡て他の諸欄と同じことです、

新歌謠

編輯局選評

一等 大和 しづ女

海の底にも電話がかゝるなぜにお母さんにもの言へぬ

たとへが新しい。

二等 大分縣大分郡日岡村三百三十四番地 平田つみ子

降れよ白雪氷もはれよ寒くなければ梅咲かぬ

濃志。

三等 茨城縣高濱町 小松崎なをえ子

鍋に煮らるゝ蠶の繭もわしがあやつりや踊りだす

新趣。

四等 豐後速見郡きつき町 ふぢのや

彌生卯月は木の芽もはるに可愛按摩の眼はあかぬ

同情。

秀逸

○雁が歸れば櫻が開く燕歸れば雪が降る　米澤 高橋縫子

○梅の木の間をよい日があたる獨活も芽をだす蕗も咲く　牛込 鶯子

○餅ものしますおそばも打つよ町場娘にも珍らしい　南多摩 金子信子

○天津御空の月姫樣は誰が泣かした雨が降る　熊本 やくづ生

○煙でる〳〵炭やくかまにお國自慢の謠もでる　上總 森久子

○沼津名物西風じやいやだ五日吹いてもまだやまぬ　沼津 渡邊とよを

○雪の綿帽子まぶかに冠りどこえ嫁く氣か姫小松　船津 萬殘月女

○小雨上りの小松が原は晝にて見られぬ化粧姿　京都府 穴田松江

○山は田舍に澤山あるが私しや富士山まだ知らぬ　和歌山縣 津田久子

○賤が伏屋も珠照るみやよ明星白露梅の花　信濃 有賀まさ子

○雪よふれ〳〵一丈も二丈も雪が積れば年が好い　秋田縣 佐々木園子

○千葉縣 伊藤壯子

私しや機織り籠に留守居樵る夫は雲の上
○　下總　相川みよ
秋は更けたりお庭の紅葉はいた後からハラハラと
○　上毛　紅葉子
貯めたお金で債券買つて當りましたよ五百圓
○　名古屋　佐野重子
鳥は梢にお米は倉に私しや小椽に針仕事

雄鹿啼く〳〵小山に登りや雌鹿見えずに雪がふる
○　麹町　大村絹女
蝶々可愛や花盗人を誰も知らぬに逐ふて行く
○　陸中　阿部とみ子
わけてさびしいこの冬空に月のそばにも星ひとつ
○　麹町　吉數里子
刈つた稲穂に朝日がさして鶏が鳴きます屋根のうゑ
○　讃岐　青葉女史
お下げリボンに被布着た寫眞見れば思ひ出す雛遊び
○　安藝　みどり
田舎田舎と町の者はいやる田舎有りやこそ町も立つ
○　周防　むらさき
夕日や淺間に悲しう入りて月は筑波に上る時
○　埼玉　江森雪江
紅のお猪口に若水掬んで姉と妹に繪端書を
○　牛込　しづ子
お前声の潮私しや不二の山姿見たさに伸びあがる
○　北越　菊枝
娘可憐や姿が窶れ今日もさゝらを賣りに來る
○　三河　ます子
上總　小川國子

東風はそよ〳〵のぼりを吹いて廣い野原に競馬する
○　常陸　大和田清子
誰れが飾るかあの雛様とすぐに故郷を思ひだす
○　岩代　ゆくえ
春のともし火小袖に映つる裾に千鳥の晴模様
○　大和　島田喜與子
星の花咲くみ空の野邊て月の手毬をついて見たい
○　淡路　紫蓮會
鈴の様なる聲よと見ればあれは花賣花娘
○　羽後　前田久子
雪は降る〳〵止まずに降つて通ふ學校は拾七丁
○　伊豫　伏見圭子
伊豫の石鐵旭に榮えりや峰の深雪が笑ふ様
○　備中　林百合子
薪樵る手に盃受けりや炭をやく手に屠蘇をくむ
○　筑前　菫枝子
笑顔可愛い嬰兒を乗せて花の下行く乳母車
○　滋賀縣　永田繁
富士の高峯は白絹召して三保の松原深緑り
○　愛知　渡邊稻香
君が住居は此の川上と聞いて嬉しき水の音
○　滋賀縣　辰井ふみ子
祇園舞子のかざしの玉のぬけて出たのか京の月
○　鹿兒島　木原しか子
今宵うれしや兄妹そろひ笛と箏との調べ初め
○　岡山縣　りん子
私しや十五で妹が十二末の妹も三つ違ひ
○　京都　しらまと女
妾は野原の小萩の露よ玉と亂れて身は消ゆる
○　伊勢　無知女
うつくしいとて手出しはならぬ山ほど針あるあざみ草

遠江　秀子

○西と東とふたつにわかれわたしやどうしてよいのやら　出雲　紅子

○都そだちの可愛い妹小袖あけぼのよくにあふ　相模　多賀子

○今年うれしや一人の孫が明けて七つの祝ひ歳　岩代　よれ子

○乙女可愛や羽子つく姿白のリボンをなびかせて　廣島縣　兒玉花瑛

○汽車はなうても田舍が好よいつも野山に花がさく　下總　橋爪天波子

○窓のあけたる裏戸の方に霧を吹き入る朝の風　大坂　白雲女

○喰べて御らんな此のオムレツをきつとおかわりしたくなる　箱根　霜葉

○さつと開いた緋緞の洋傘とならび立ちかる筑波山　美濃　柴田ぎん子

○起きよ〳〵とせきたてられて殘惜しくも朝の床　茨城縣　山下麗子

○雲雀歌へば胡蝶が舞ふてひらり〳〵と花の上　大和　吉元まさ

○雪を凌いだあの梅の花今日は嬉しき春を見る　長崎市　小笹かほ

○飴や蜜柑て泣きやむ身なら雁やきぬたて泣きはせぬ　上毛　金子埋れ木

○ゆうべ降つたる此初雪をとかしてつけましよ白粉に　近江　前野しず子

○寢覺めうれしい若葉の森に鳩もきて啼く朝手水　京都　野菊女人

○京は御苑よ左近の櫻右近たちばな色競ひ　伊豫　曉子

○此の世はかなみ夕空見れば淡い新星の影一つ　徳島縣　吉田雲花

○咲いて仕舞へばすぐ散る櫻なぜか待たるゝ花盛り　越中　北本歌子

○すゝけ障子に夕日がさいて赤い椿の影も見ゆる　福岡縣　松枝

○千代の松原名所で御座る千鳥鳴くのは磯つゞき　鳥取縣　門脇まさ子

○花の雫を小笠にうけてそつと鉦うつ小巡禮　群馬縣　芳山常盤子

○妾しや深山に妹と三人早く都へ歸りたい　京都　樋口波岡女

○花が咲ても鶯來てもいつもしほるゝ野のすみれ　越後　直枝子

○水の流や蘆荻のさゆれやんら覺ますな鳥の夢　豐後　このはな

○夫は獵りに出てわしや機を織る外は寒かろ雪が降る　横濱　あづさ

○京は八坂と淸水が塔に春の月夜の花ふゞき　常陸　大和田淸子

○野邊の草木の新芽はのびてのびる新芽に夜かつまる　丹後　鹽見千代子

○小雪積つた奇麗な景色見せてやりたや鶯に　安房　垂柳子

○東京通ひの汽船に乘つて妾し行くのよ遊學に　秋田縣　きさ子

○田舍めぐりて目にたつものはどこもお米の富士の山　紀伊　米田光枝

○川を隔てゝ今宵も母が無事の便りの遠砧　石川縣　館芳香

○友の下宿屋は好いところ甲斐の富士山窓越しに

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

○女性私論

上總千代田村 山田沖子

○現代趣味の濁流は黄河の洪水の如く滔々として世に漲り、末流愈々濁りて殆と掬するに堪えざらむとす。人は卑しき煩悩の犬に追はれて匆々として畦を走り、復、野の花の赤と紫とを問ふの遑なき也。行く水の漂ふ如き女性の運命の心細さよ、荊棘の鞭若し男性の手にあらば、落花狼藉銷魂の極みとや云はん。

○さはれこは必ずしも現代の罪にあらず、羅馬は一日にしてならず、我其の成る所以を求めて、之を我國の宗教道德に得たり。試に説かむ。

○儒佛兩教が邦上に植ゑられてより一千數百載、枝葉參差として天日を掩ひ、蟠根牢として抜くべからず、儒に三從の教あり、佛に女性の蔑視あり、彼に在りては獨り立たんに所なく、是に在ては女人は地獄の使と稱せられ、高野山の麓女人禁制の制札を見るに至る、斯くて男性は女性を賤みて時に夜叉惡魔を以てし、女性も自ら卑下して敢て人身御供となりて恥ぢず、今の兩性の相合して人の世を渡り行くの奇觀が、いかに猿の綱渡りに似たるかと見よ、男は猿也、女は綱也、綱は猿の用に供せらると雖も自ら存在の意義を有せず、猿は綱に縁りて彼岸に達すれども、恬として自己の微弱を顧みざるにあらずや。若し夫れ途半ばにして綱切れ、七轉八倒の滑稽を演ぜずんば幸也。危いかな。

○果物は枝上に實る、宗教の根底は個人信仰の地盤にあり、されば個人の權威を無視する宗教は其の存在を許さず、彼の弘法の爲めに口を忠君愛國に托して國家的宗教を説くものゝ如きは宗教界の奸人也。

○之を古の聖哲に見る、孔子は仁を説き、釋迦は慈悲を説き、耶蘇は愛を説きぬ、然かも孔子の所謂道は主として治國平天下の道、故に其の教や現在に止まり、また人生の未來を説かず、更らに現未の相關に及ばず、故に之を宗教といふは當らず、儒に在つて女性の威嚴殆んど零に近きもののあるは是が爲め也。

〇耶蘇に在ては則ち然らず。神の無花果の葉蔭に此の天使を降すや、偶像崇拜の迷雲はれ光明爛として五彩を放ちぬ、西歐の天、ナザレの神人が愛を説きし痕の光景に見よ、中古にナイトの美風あり、流韻餘風今に女性の地位甚だ尊きものありと聞く。

〇菩提樹の影に端座思念し、廓然として大悟し、一切種智を倶足して無上道を得たる一沙門は、婆羅門の差別觀に反抗の叫びを揚げる也。そは基督の其と等しく平等相の聲なりき。我未だ其教を知らずと雖も、釋迦自ら父王の妃及耶輸陀羅の出家を許して比丘尼となせし一事は、以て其女性觀の毫も偏頗ならざりしを想ひ得て餘りあり矣。

〇愛と慈悲と、等しく平等の光を浴びたる邦土にして方位の東と西と其女性觀に多大の懸隔を見るは何ぞや窃かに思へらく、我に在ては佛の儒に媚びて時流に投じ、功を凡俗の中に收めんとしたるに非ずんば、濁りたる末の流れの源の清きを知らざるに因すと。彼の五戒の一なる不邪婬を説いて女性を別天地に措かんとする者の如きは、盲目色を辨ぜざるの輩、斷じて佛祖の本懐に非ず、聞説佛陀の最後に説きしてふ法華經に於ては、有罪の女人も成佛を得べしと、是れ懺悔の道也、必ず然らざるべからず、若し夫れ御山の女人禁制の如きに至りては、佛光の遍照せる法界の怪事也。

〇底無き桶に水を汲まんとするもの、愚も、女性を卑めて賢母良妻を得んとするの痴に及ぶべからず、本を修むるの要茲に於てか在り矣。

〇げに個人の權威を沒却して公共の榮を期するは、灰を集めて城を築くに似たる哉、灰や之を盛ること長城の如くなるも、以て匈奴の弓を禦ぐは愚か、狂風一陣之を攘つてまた餘粉なけん。



文明の利器

喜多方町　花摘たい子

（評）儒を説き、佛を論じ、基を評し、女性の爲に氣を吐く萬丈、筆鋒鋭利、あたるべからず。

〇精神一到

岩代國伊達郡牛田村、玉川　松山薔薇子

彼も人なり、吾も人なり、前人の成し、所、何ぞ後人の成し得ざる理あらんや、蛟龍雲雨を得ずして、池中

にあるも、焉ぞ冲天の雄志を失はんや、潜むときは九地の下に潜み、動くときは九天の上に動く、伸びんとするものは、先づ屈す、屈するものは他日大飛躍をなすの實力を養ふものたるを知らずや、自ら顧みて疚しからずむば、千萬人と雖も吾行かん、神は宇宙の眞理に通じ、行は天地の正義に立つ、吾何をか憂へ、何をか悲まん。

起てよ、往け、非望を懷く勿れ、妄想に耽ける勿れ、一簞の食、一瓢の飮、陋巷に蟄居して、その樂を改めざりし顏回を見ずや、囹圄の中に靈魂不滅を說き、平然として、毒杯を仰ぎしソクラテスを見ずや、富貴は吾に於て、浮雲の如く、利達は吾に於て、泡沫の如し、何ぞ齷齪として、憂苦するの要あらむや、吾が能くする所を自覺して、自己の精力を發揮せよ。

憂ふる勿れ、斷ふる勿れ、眼を開け、耳を開け、手を開け、足を開け、而して大に心を開け、天は高くして窮むるに所なく、地は濶くして尋ぬるに由なし、取らんと欲するもの蒐めて玆にあり、收めんと欲するもの鍾めて亦玆にあり、吾此間に生を享け、幸ひにして健全なり、不朽の身躰、不滅の精神、これ天の賜なるか將に、大に用ゐんとするあるか、宜しく大志は、紅海の如く、大業は雲岳の如くなるべし、陽氣の發する處金石も亦透る、精神一到何事か成らざらん、烈火も踏むべく、洪水にも投ずべし、以て生くべし、以て死すべし、艱難も爲めに避け、困苦も爲めに逃るべし、盲者も爲めに明かに、跛者も爲めに起ちぬべし、聞かずや、北米合衆國三大統領の一人として、而も文明の理想的英雄として、歐米の天地に其の名嘖々たりし彼れセーム、ガーフヰルド氏を、滿目寂寞たるオレンヂの原野、憐む可き一小破屋の中に呱々のこゑを擧ぐるや包むに衣なく、與ふるに食なく、父母兄弟の外、祝するに人なかりき、然れども、彼が獨立特行自ら助くるの信念、彼が熱心忍耐、彼れが非常なる苦學は、遂に彼をして名を竹帛に垂れしめたりき、思ひ見よ、彼が大西洋岸波靜かなる所、ロンゲンプランチの別墅に於て、瞑目するや、合衆國民彼がために泣き、萬國彼れがために惜み、天地もために寂條として、また一微音の耳朶にふるゝものなかりしと、あゝ、彼元より門閥あるにあらず、將たまた富豪なるにもあらず、たゞ彼の誠意玆に至らしめたるなり、彼常に人に告げて曰はく、『凡そ何事にもあれ、一たび成し遂げんとの決心さへあらば、これより如何にしてよからんと踏み迷ふときにも必ず一すぢの道あり〳〵と分りて成し遂げ得らるるものなり』。氏の性行それ實に玆にあり、豈玩味すべき金言ならずや。

糸の如き點滴すら落つる事久しければ遂に石心を穿つべく、杵の如き鐵槌も磨き〴〵てたゆまずば、終に細針となりぬべし、學業未だならず、自棄して歸れる孟軻は賢母のためにはげまされて遂に大名を博せしにあらずや、志業中道にして折れなんとせし道風は蛙兒の柳枝に攀づるを見て、感奮遂に功名を遂げしにあらずや、悠久の天、厚遠の地、此間に存するもの、之を成すに於て何かあらん。

いまや日露の交戰は、終りを告げぬ、四海波靜かに、風穩かなり、吾が帝國の榮譽は、渾圓球上にかまびすし、燦爛たる新舞臺の關門は飾りに飾りて我が前に開かれたり、優なる哉、吾が前途や、悠なる哉、吾等が活動の天地や、徒らに逆境に泣くべからず、小事に戚々たるべからず、五尺の短身豈敢て自ら棄てんや、つとめんかな、はげまんかな。

（評）論旨斬新なるものあるにあらずと雖も、筆力雄勁、亦讀するに足る。

秀逸



朝　向島　林富士子

○常磐論　羽前　紅子

夫れ天下一日も禮なかるべからず。而して亦權なかる可からざるなり。禮は是常道にして五倫の道人類の法度。上は茫々三千年の往古より。下は渺々天地無究の末に至るまで。人類のあらん限りは遵守すべき大綱なり。而して權は、禮を守らんとするに方りて。其間種々の障害なき能はず干渉なき能はず。此時に際し萬巳を得さる者のなすべき手段方法なりとす。更に語を切にして云はゞ禮を守らんが爲めに權を行ふなり、權を行はんがために禮をなすには非ざるなり。

世人動もすれば斯の分別に迷ひ。遊蕩放肆。淫逸至らざるなき野獸的婦女を嘆賞賛美し、世道人心を毀損するもの鮮しとせず。豈歎ずべきの至りならずや。吾是を源義朝の妾常磐に於て観るあり。

史に稱す、（源義朝妾常磐を納れ、三子を生む、平治の敗に平清盛遍く源氏の遺類を求めて常磐併に三子に及ぶ、遯ず乃ち常磐の母を捕へて其所在を詰る、常磐之

を聞き三子を携へて自ら六波羅に詣り、刑に就かんとを請ふ、清盛其容色を悦び之を挑む、肯せず、其母涕泣説くに禍福を以てす、巳むを得ずして之に從ふ)と、歷史上より之を觀れば。蓋し常磐意へらく。常道を守り二夫に見えざるの禮を以て肯ぜずんば母子命危し。三子刑に就かん。三子刑せられば、源氏の興復亦未だ揣る可からず。事變に處する宜敷權以て行はざる可からずと。然れども吾人を以て是を見れば未だ最上の處置として異議なき能はず。

それ禮は人類の法度五倫の道。常磐既に是を破る。前途賴む所のものは今若乙若牛若の三子のみ。若し夫れ假りに三子にして否牛若にして慮なきの禍に罹り。或は群を援くの英傑に非らずんば。節を碎き操を破るの罪焉んぞ免るゝを得ん。僥倖なる哉不世出の英傑義經の風雲の機に會するあり、漸く前恥を雪く。豈實に危かりしならずや。吾人を以て是を見るに、蓋し深く此に考ふるありて清盛に妾事せしものならず。唯彼が網膜に映ぜし所のものは。目前の禍福あるのみ。目前の禍福の外何物も彼に於て望む所あらざりしなり。彼が清盛に妾事せし以來の歷史を觀すれば吾人の言の妄ならざるを知るべし。

若し夫れ常磐にして。源氏の興癈を慮りて節を破り操を碎きしものならば。機熟し、時來る、徐ろに謀を爲し以て日頃の大恥を雪ぎ、亡夫の靈魂を慰するの大決心なかる可からず。機熟し時來るとは何ぞや。曰く三子既に長じ。各膝下を辭して四方に流寓するの時をいふなり。如何ぞ其際に於て一身を犧牲に供し。不倶戴天の仇を報ずるか、或は自ら潔うするの覺悟に出でざりしか。常磐にして先に能く一片貞操の心事ありて去就を決せば。豈斯かる前後曖昧なる、否不思議なる手段あらんや。吾人常磐の心事を推して疑なき能はず。史上常磐が清盛に妾たる歲月を詳にせず。三子の長じて四方に流寓するの年月ありしや否やは之を知るに由なしと雖。吾人は左に記する一事を以て益々常磐の貞操なきことを證して餘あり。史に稱す(常磐寵衰へ出でて人に嫁すと)。嗚呼何ぞ夫れ持操なきや。知るべし胸襟些の貞操なく。遊蕩放肆所謂一の姦婦淫婦たるに過ぎざりしを。觀じ來れば以上論ずる所の如し。徒に權變をとなへ獸欲を逞しうし世人の眼光を眩惑するも。豈何ぞ神祇の明を眩することを得んや。吾人妄りに一片の好奇心に馳られて斯の如き言をなすものにあらず事實は吾をして斯の言を發せしむるを如何せん。聊か感ずる所ありて茲に常磐論を作る。

(評) 題は陳腐なれども、正權兩道を說けるあたり、筆致整然たり。

短文

編輯局選評

第一 ○雪のそり橋

下總 濱子

裏の門へ雪の反橋がかゝつたと弟が云ふ、行つて見ると成程青々たる竹山には眞白な雪が枝もたわゝに、中で大きなのが一本廣い門一ぱいにゆつさりと出つて居る見事な反橋で、下をくゞるとお白粉のえりにさらさらとこぼれて。

靜かに渡れ。

第二 ○炭坑

筑前 夕雲

澤山の男女朝薄暗い間に鶴嘴を携へ、安全燈の明をたよりに千有餘間の地下に降りて、命掛に働いて午后には印度人の樣になつてあがつて來ます、斯うして堀出した石炭こそ眞に活動の基礎です。

地に埋もること五千年。

第三 ○嗚呼夢

本郷區弓町一丁目廿五番地 朝井千とせ

淡紫の裳豊かに引きませる詩の神が我に春の歌授け給ふと夢む、夜明けなばとく認め置かんと思ふ程にいつしか又夢に入りぬ、眠醒めて刧筆取ればあはれ賜はりし歌も又夢とは消へて。

獏や食ひし。

第四 ○女の子

鹿兒島市池上町 是枝とく子

姉樣に一人の可愛い女の子が出きました、私と姉樣とよろこんで居ると、父上や兄弟が又女の子が生れたか、男子であればよいのに、女の子は眞にいくじなしだと口々に云われるのです、私、はらが立つてならないの。

女子文壇記者は女の子の生れるのを大いに讃美します。

秀逸

○私の讀書

神奈川縣 木村はる

私の家は手が少いから夜てなければ讀書が出來ないのですそれて夜の用を早く終した

いかため床を日の内にのべると母からお小言以日何なつたらゆつくりと一日女子文壇が見られるかと思つて居たら羽の音が聞えて來た文壇も來た朝から晩まで讀みつゞけ。

時節到來。

○朝のつとめ　多度津　神原石子

五時頃に起きて身じまいをすますと、ポン／＼と、東へ西へ南へ北へ二つづゝ手をうつて、大きくなつたら作文がよく出來るようにとおがみます、そして庭へいつて、大きないきを三つ程しまして、植木に水をやります、これが私の朝のおつとめてあります。

文の神、詩の神、彼女を守れ。

○友　達　秋田縣　佐々木園子

私友達七人います、都に二人と北海道に一人と京都に二人、それから九州と臺灣にも一人つゝ居るのよ。だから私こんな僻地な田舍に住んで居ても、日本國中の事は概略此の人方より聞いて知つて居るわ。

日本國中には驚きました。

○風の色　南多摩　乙幡もん子

私は、繪畫を描く所から、理想には風に色をつけますれば、先づ、春の風は黄土色、夏の風は赤色、秋の風は薄黑き色、冬の風は黑色なる樣に想はる、扨て私の家庭の風は暖色なり。

繪ごゝろある人の觀察は又違つたものです。

○異性の家族　岩代　岸野常子

白斑の洋犬と、虎毛の小猫と、五羽の鷄と、一羽の山雀、是が小さな家族てあります。お父さんは洋犬を、姉さんは小猫を、妾は鷄を、弟は山雀を可愛がるのよ。だけど、妾は皆可愛い。

山雀の奇術、虎子のカツポレなど。

○天　然　安藝　手島まさ子

新舞子と名ある戸田浦の朝景色、模糊たる霧の中に、小山三つ、少し隔てゝ白帆五つ、おだやかなる海の綠靜なる山の綠――噫天然の景絶佳なるかな。

眼に浮ぶ、瀬戸内海。

○霜の朝　美作　日笠千萬子

顏を洗つて居室へ歸て來とばつと朝日が射て居た、障子を開けると椽の上には早や玉が快よさそうに寢轉んて居る、庭を掃てゐた爺は「晝は溫かうなりますよ」手水鉢に近い山茶花が音なく散つた、新築の離座敷の方では鑿の音が聞える。

鑿を知らぬ作の山。

○冬の植物園　岩代　岡美都子

園中の女王を氣取つた寒菊も、あはれ、甚くやつれて了つた、柳は赤茶の蕋を破つて銀色の穗先を、ヅックりと現した、圍り損ひの玉菜は今朝の霜てゆでた樣、南天、梅もどきの實は、霜どけに一入あざやかに見える。

花は冥想に入れり。

○小隧道の成功者　陸中　柳架女史

昨日からの大雪て二間離れた物置との連絡が絶えました、今年十一になる弟が設計で朝から隧道の掘鑿作業やつと正午頃出來上りました、落成式には手製の裝飾旗や小提灯、私もシムプロン隧道成功者に因んで『祝小ルイ、ファブル成功』と記した旗を送りました。

成功の流行。

○二つの河　上毛　紅葉子

妾しの宿の兩側には急流が二つ有つて、一は淸潔な物と、一は不潔物を洗ふので、それは〳〵便利のよい事、河上を見れば赤城山は一面に白雪を覆ひたる景などは、實に何ん共云へぬ感じが致します。

滑きは赤城の雪の水か。



かるた　麻布　近藤てる子

○福壽草　滋賀縣　永田繁

去年地へ下した福壽草、忘れていたので、とう〳〵雪の下になりました、萬一や芽を痛めてはと思つて微溫湯をかけてやりましたら、出てました可愛い芽が然も五本、去年は三本てしたのよ。

黄金の珠を捧げて。

○琴の主　越後　中村直枝子

窓先きの淸い菊のかほりに醉ひそめて、歌書の集、閉ぢもせずに、まどろむと、何處かで琴の音がしましたので、頭を靠げる途端、又調子低く私の背后に、響きました、驚いてふり返へつて見ると、一匹の鈴虫が立て掛けて置いた琴の糸にとまつて居りました。

つまやこもれる。

○秋蒔　牛込　しづ子

裁縫のひまに藁で霜除けをしてやつた甲斐があつて、妾の畑はこんなに寒くても、黄金蕪、長根白菜、山東菜さてはいたづらに植ゑた三つ葉まで青々して居ります。が秋蒔は何につけ面倒ですから來年からはやめやうと思ひます。

やめずにお蒔きなさい。

○夕方　群馬縣　芳山常盤子

私は夕方が大嫌ひ、亡き父の事、一人都に在る母の事を思ひ出して悲しくなるのも夕方、嗚呼、懐しいは都の空、田舍の夕方は殊に淋しくッて嫌、何所を見ても山ばかりですもの。

嫌おほんとうでせう。

○好きな香　東京　芝野吉江子

新らしき墨の香と、薔薇の香と、いつも机の端にある白梅の香と、福壽草の香と、海苔の燒きたる香と、それから姉さんのハンカチ。

蝶の翼にたきものす。

○敎育　播磨　正井愛子

私は何も不自由は有ませんが兄も姉も弟も妹もなく只一人ですので他人の貧しき家の子を貰ひ、自分の力の限り敎育して見たいのです。

德、孤ならず。

○御飯焚き　足利　田野廣子

始めて御飯を焚く時にはふき始まると二度も三度も蓋を取て見て、其れでも燒きついたり柔か過ぎたり、私は母から女と云ふものは何んでも出來なければ嫁いでから困ると云はれたので、此頃は毎日私が御飯焚き、いつも柔かによく出來ると云て母に譽められます。

是も修養の一つ。

○小さき家庭　八王子　井澤菊江子

霜どけの畑道を小さき手籠さげて歸り來りし妹、見れば、かごは若菜と土筆が一ぱい、あゝ今日は之でお雛樣のお賄を、後はやがて、人形へお伽ばなしのお講義が初まりぬ。

讀んで聴く。

○造花　群馬縣　星野すみれ子

學校でお休の時間に、初めて先生の敎へられた造花を家へ歸てから母さんの前で（あぢさい）の花束を、こしらへて、見せましたら、母さんが、おほめなさつて、ごほうびに、造花の材料を下されました。

次は牡丹。

○血しほの雪　鳥取　山根綾江

裏の小山の雪間に起るけたゝましきつゝ音に、障子開けて見れば羽毛破てなゝめに墜來る小鳥一羽、血しほは雪にしみて紅をなし、鳥はもだへて死しぬ。

傷ましき哉。

○わが妹　盛岡　白桃

夕餉のしたくも出來たのに妹は未學校から歸て來ない如何して此樣に遲いてあろう、若雪に埋まつて凍えて居るではなかろうか、と心も心ならず門口にと出て見た、がやつぱり影も姿も見えぬ、雪は益々降つてくる許り、あゝ妹は如何したろうと妾は其まゝかけ出した。

車て通學する人もあるに。

○妾しの手　飛騨　田口専津子

冬の間に大分女らしゅう成つた妾しの手。あゝもう暫らく過てば又、例の鋤鍬を持ち、掌に作る豆の痛さよ。

それもしばらく。

○韓人の物賣　韓國　兒玉鶴子

韓人のお野菜を買ふと、それは面白いのよ、大根一つも七錢位に云ひます、そして後では一錢に賣ります、今私に一錢に賣つても同じ連れの人にはやはりかけねの七錢を云ひますよ、何んでも韓人はかけねを云ふのは規則のやうですよ。

別嬪さんには負けるてせう。



友達から　萩　小國敏子

○散步　大阪　陰山れい子

私は病氣勝故、散步にも出なかつたが今年は例の七日正月のお祝ひにするなづなを野らへ摘みに行つた、わづか二三丁位の道が物の十里も走つた程足が重く覺ゑた息はづませつゝやうやう歸つて來るとなつかしい〳〵友から手紙が來て居た。

我衣手に雪はふりつゝ。

○水汲　秋田　ちゑ女

私は此程寒國に參りました、日々の吹雪に戸外にある水を汲むのですが、釣瓶は車ではなく竿で引上げるので大變力を要します、内へ運ぶに足は雪に埋もれてそれはそれは骨が折れます、けれども私はいつも「艱難汝を玉にす」を思ふて、氣を勵まして居ます。

生れて一杯の水も汲んだ事のない女は女でない。

○綾さん　能登　天浪女史

半ば落ちたる壁、破れたる格子、戸の隙間から吹き込む風が身にしみて何となく淋しい晩である。オヽ懐しい從妹の綾さんが上京してからもう半月、いつも二人並んで勉強したこの机、あゝ今頃はどうして居られるであらう、外には梟の聲も聞える。

綾さん、綾さんと呼んで見る。

○貧　松江　古、志益子

益すまるゝ心配なく、燒る憂なく、失る事なく減る事なく、そして誰にても分つ事の出來る最も安全な寶はそれこの手先にあります。

七珍萬寶、其處より出づ。

○お針の競爭　備後　松本蘆子

妾は今日お母さんと、お蒲物ん縫ふ競爭をしました。そして妾負けたのよ、でも、四時頃夫が歸つたので、その方のお召し換へ何かに、手を取られましたもんですから。

○思はぬ涙　牛込　櫻花女史

寒月梢にかゝり、吹き荒む北風に林は騒く今宵の殿。讀み行く御中に、延喜聖帝の、寒けき夜に御衣をぬがせ給ひ、民の貧苦を思ひやらせ給ふとあり、そは斯る寒き夜なりしかあゝ一天萬乘の君にして、かく途民を思はせ給ふ忝けなさに思はず袖を濕しぬ。

○妾の朝　神奈川　矢島瀧女

妾は毎朝起きると、直ぐに前の小川へ降りて顔を洗ふのです。川の底には青い美しい石を敷き詰めたよう、水は大層奇麗で靜かに流れ、何事か囁くかの如く想はれて、得も云はれぬ心地です。

○雪消　山口縣　椰良みな子

夜べふりつもりし三四寸の雪も今日の日和におちの山々鹿の子斑らになりてゆきばかり眼を射る、日ありよきゑんに腰かけて文よみおれば、すや〳〵と三毛ひざに眠る。

○井戸端會議　德島　坂野白露

今朝も早くから釣瓶の音が聞えると、例の裏長屋のお松さんからお隣さん丁度五人のお新造が蛙の如く、がや〳〵喋ぎ出した、お松さん大聲揚げて内のお父さん儲けず呑みやがると、言葉の荒いのに驚きました。

○緣談　但馬　春蝶女史

此間からの、妾を嫁にやるの何のと云ふ話は、今日も又、奥座敷で開かれてある、妾未だ今年十七に漸くなつたのよ、嫁入なんか大嫌いよ、けれど親の命令なれば詮方もない事よと、思ひ煩らふ夕方、白髪の爺さんが歸つた、今日の話は、如何極まつたか知らん。

○古き仁王　加賀　三井幸女

觀音山て崩れかゝつたかやぶきの門の内を見たら、それはそれはどん栗眼玉の恐ろしい仁王樣が……。其の凄いお顔の鼻の邊に、まー平氣て蝸牛が二疋。

○入日の光　伊豫　曉子

入日の光は綠葉を透して金色の光をさつと我が臥す病床に投げた。あゝ漸く薄命にして苦悶になやむ我が身の上にもこの榮光は照ると十九年來未だ知らざる温みが心の底に起るを禁じ得なかつた。

○人の心　越前　佐野よしを

お叔父さんの臨終の際には村の學校へ二百圓、宮へ五十圓、寺が願寺へ五十圓、貧民救濟團へ五十圓寄附されました隣の父さんは、利息の取り不足をせぬなとて不歸の途に就かれましたが、何んとまあ。

○紅葉　兵庫　常木まさ子

秋風に誘はれてか、ヒラヒラと紅葉が妾の讀んて居る詩集の上へ散つて來ましたほんとに美しい事栞の代りにはさんて置きましよアラ又一つこんどは小川の中へ、此流れの末はあの可愛文ちやんの家若し着いたら紅

琛の樣な文ちやんの手に捨はれるてあろーか。

○わがのぞみ　京都　植木野薫

姉の君ちやんの理想の人は岸影女史弟の腕白の勝坊は早稻田の河野さんだと、そして妾は理想も何もないわ只酔茗調の美しい詩を誦すのが大すき、それも荘厳な、くれてゆく夕映色を眺めつゝ——。

○私の友　讃岐　藤　子

私の眞の友達と名がつく人は廣い〳〵此日本中は愚か支那天竺迄捜がしても只一人しかありませんそれは〳〵信實て兄弟も及ばぬ程私の事を思ふて呉れるのですあゝ私は此恩をどうして返したらよいのでしよう、

○私の家庭　岩手　さゝれ石

私は内はお母樣と姉樣と私と唯三人靜かな山中にわび住居なして居ます、姉樣と私は毎朝遠い遠い道を學校に通ひます、夜は好きな女子文壇を讀んだり又お琴をひいたりしてお母樣を慰めてあげます。

○金一錢　羽前　白　薫　子

私の弟が生れた日から毎日壹錢づゝ貯金したら、利息共に拾八圓五拾八錢貳厘となりました、塵も積れば山となるの諺の如く壹錢の金も見さげたものてはありません私は此後も引き續き貯金し、いくら貧乏しても、其金を學資金とし、中學校に入れる考へてす。

○蝶　長門　伊藤榮壺

里の女が卯の花を折つて歸ると其跡を白蝶が一羽慕ひ行く、ナヽ可哀相に蝶は宿を取られたのう、今宵は休む所もあるまい、私は不憫に思つて其花を貰ひ、其庭に挿して置いたら、蝶は舞ひ戻つて其花に止まつた。

○春日和　上毛　柳澤愛子

麗らかに晴れ渡つたほの暖いのどけき春日和り、妾は妹をつれて散歩に出ました、おゝ見渡す野邊は青み踏ちになつて、居る中に愛らしげなるはたんぽゝすみれさてはれんげ草などである、向ふの村の梅林より屋根が二つ三つ、折柄すさまじい音をたてゝ汽車が梅林にかくれた。

○妾が妹　下總　大崎山櫻

妾に一人の妹がある、年は十三、名は靜子、うぬ惚れか、顔かたちより、體かつこうまでが、十人すぐれて居るので、妾は早く靜子が、お嫁さんになつたのを、見たいと思ふて居るのです。

○好き〳〵　根濱吟子

お父樣は魚釣りがお好き、お母樣は料理がお好き、兄樣は銃獵がお好き、弟は百合をつくるが好き、姉樣は茸狩がお好き、妹は汐干狩が好き、チンは鬼おひが好き、私はこれらを食べるが大好き。

○妾の袴　山形縣　鈴木とく

世に貧程つらい事はない親しいお友達がおそろいて一月一日につけるべく紫紺カシミヤの袴を新調して喜んて居らるゝ中に妾の袴は五錢の紫色素と五厘の明礬とて授業時間の餘暇に染め上げた古袴之は妾が一月一日の式場に着けるのです。

○嬉しき聲　安藤さとなみ

幼き時よりの目的を遂して女教師となれる今日此頃愛らしき兒童より先生〳〵と呼ばるゝ聲の神々しさは我が敬愛せるイエス神のお聲に接する樣てす。

○繪はがき　沖繩　ふさ子

一枚開けてまあ美くしい實にいゝ事又開けて、オヤ、をかしい一枚一枚にきれいな人あゝ可愛オヤ、いゝ事へんな人だといちいち〳〵何とかかんとかいつて又一寸後の方をくつて、好なものを一枚これ妾に頂戴とぽんと取る。

○蝶　横濱　折部色子

庭の櫻の木から軒下に、大きなくもの巣が張てあります。其れに黄い小さな蝶がかゝつて居たので、可哀想にと取てやりましたら、嬉れしさうに飛て行きました。巣へは蝶の代りに、蠅を取てつけて置きました。

○成績順番　尖藤涙女

去年三月赤十字社看護婦生徒志願者は百十五人、内て合格したのが唯十八名私は末席てした、然し何事も熱心一つれ、隙を見て勉強した勢が最初の試驗て六番次が御覧の通り三番てしよふ、來試驗には屹度首席になりたいと思ふのです。

○十四俵　尾道　安保照子

父上と母上と妾と三人して植ゑ、三人にて草を取り、三人て刈りし稻、今や奥庫に積みし十四の俵、其中の三俵が妾の裁縫の學資とやらなので、殘りの十一俵を三人一つの食盤て食す。

○シンチンノマツ　上野　大沼徽音子

前庭の中程に、やうやく五尺ばかりの松がある。裏の河から顔を洗つて來ると、誰がつるしたのか、緑濃い松の枝に、赤い短册が飜つて居る。近よつて手にとつて見ると「シンチンノマツ…あや子」と書いてある。

○歡　入　麹町　田中小夜子

一月の小學校同窓會に行つたが、皆樣お達者で、お揃で、色々、先生の有益な御講話があつたのち、茶話會を開いて、無邪氣なお話で一日を、樂しく暮しましたが、妾はなんだかお里へでも歸つた樣な氣持がいたしました。

○南　天　越後　居城忠子

妹等がまゝごとのお菓子にと赤い南天の實を用ひてお爲には其葉を使ふ。日當のよい窓下に今なほ青い葉赤い實其まゝの南天がある、其根元から雛がぞろ／＼と出て來たので、ゆれて、赤く美くしいがはら／＼と散つたそばにいた妹は、まあ、お菓子がこぼれた。

○雪の朝　滋賀縣　川島嶺子

朝起きて見ると、見渡す限り雪に埋れているので、父上と母上とは、直ぐ火鉢によられる、するとお兄樣は寫生にかゝられる、弟は雪だるまする、妹は塀の上の雪をたべる、そこで妾は東の窓を開けて、お庭の雪見をするのです。

○元日の朝　南多摩　加藤百合子

今朝は私は四時半といふに起きました、そして、顔を洗はうと思つて外へ出ますと、十八日の月が西の空に殘つて居て、天も地も未た睡つて居るやうでありました、若水で顔を洗つて内へ入ると、弟の次郎がもう目をさまして、ニコニコしながら奥から出て參りました。

○梅　伊勢　中村てつ子

丁度私が十三歳の春のことでした、初午の日に五六寸程の梅を買つて來まして、私の精神をこめて庭に植ゑ朝な夕なに水をそゝぎましたが今は四尺程になつてそれは／＼美しく赤麗はしい紅の花、あゝこれで私の希望は達したのです。

○桃の宿　鳥取縣　門脇まさ子

どこからか子守唄がきこえて、草屋の軒の紅白の桃の花が微風に散つて居る、里娘が白手拭を首に卷いて、ちよいと笑つて通つた。

○兄の手紙　石川　讃美女史

私の最も嬉しいのは朝鮮の兄から手紙の來るのです、其中に色々面白いお話や優しいお言葉が數々もらしてあります中で花子や家のことは少しも心配はいらぬ、折角はげみなさい將來の大なる成功を祈るとの仰せが必ずあるのでいつも言ふに言はれぬ感が起ります。

○元日の朝　澁谷　貞枝子

私が仕立た新年の松の袖模樣は一寸五分の大丸み。それに三越仕立の褄とを、今年十五の妹に着せた、今日の私の心？前に立つたり、後にまわつたり「よく體になつくわれ」それとなくホヽヽヽても自慢では有りませんのよ。

○未だ子供　印旛　細谷さかえ

母樣と針仕事を爲て居りました處、叔父樣が來て、四方山の話の末に一寸母樣にと、四疊の間に入て御話なさつた。私は聞くとはなしに耳を傾けると、あら私な御嫁に世話するつて、私まだ十七、小供ですは。

○怪　物　印旛　立原菫花

夜も晝も、夏も冬も、雨が降つても、風が吹いても年が年中、全身眞黒になつて、或は新式に眞赤になつて、路傍に佇づみ人の子の運命を載せたるペーパの數限りなく、絶えず其口より吐く怪物之れを是れ何とか爲す、名をポスと名附く。

○春の朝　群馬縣　小暮たつ

長閑な東風が吹いて來て庭の梅もそろ／＼蕾が色づき初めると毎朝何處よりか一羽の鶯が飛んで來て枝より枝へとあの奥床しい聲で鳴きうつるそれが樂みで妾は早起が出來るのです。

○お屋敷　京都府　穴田松江

本家を離れて東は茫々とした田圃道、裏に廐と雪隠とがありまして北は三十坪程の竹藪、西は柴小屋ですが今は再建中で立つて居るのは鷲除札ばかり南は〱屋で其すぐ下の小川に水車がせつせと動いて居ます妾の勉強室は茲なので。

○甥　金澤　中泉石竹

大坂の博覧會の時父上は母上と弟をつれ此次は必ずお前をつれてゆくと

おいひてした、本年東京にある故試験休みに行きたく思つて父君に伺つたら子供が生れたりしたから又今度と。可愛い甥だけれど憎らしいわ。

○一夜の積雪　秋田縣　貧家女史

北風の鳴る音も、いと荒く、何んだか、物淋しい心地して寝に就いた、朝、鷄の鳴く頃に、起き出て見たら、こは大變な大雪、妾は道をつけるに閉口した、鍬も無いのに。

○平和の家　若狹　津田青嵐

桼の花に圍れたる平和の家、そこに稚兒を中央に、嬉々として語れる若夫婦、その景その人、嗚呼これ活ける詩では無いか、春の精は此處に集まるかとばかり。

○こゝろもち　四谷　河野紅露子

大好な兄樣から優しい歌そへていたゞいたこの墨、お母樣が上手におなりとおつしやつて下すたこの筆、私がこれを使ふのはお淸書のような大切なものを、書く時だけてございます。

○冬　京都　嘉勢靑柳軒

どうやら雪起らしい、寒風が障子へ絕えず當つて、裂目から遠慮なくピューと入る、炬燵には目鏡をひれくりながら爺が新聞紙を拾讀してる、其上に猫が身體を縮めて眠つて居る、婆は梅の木に大根干て急がしい。

○二人て自炊　山梨縣　鶴田とみの

私は森田さんと云ふ方と一しよに自すいして居るの一週間はわたしの番又一週は森田さんの番とかうかわる〲にきめとくのそしてかつぽー番でない人はそーじ番そーじがすむぜんがすえられる二人はたのしくごはんをすますのそして學校へ出勤するのです。

○松の雫　廣島　友江

時雨がやんで　夕日がさつと松の樹にさした。葉末に落ちそうになつて、眞珠の樣に燦爛としておる雫が光線のため、紅、靑、橙、紫、金色、銀色、瑠璃色、瑪瑙色、と變りて、誠に髭麗しい。此儘て消滅ればよいが。



わら打　但馬　春蝶女史

○淚　神田　小澤みつ枝

嬉しきに出づるあり、悲しきに出づるあり、出てて溫きあり、冷きあり、老いし婆の孫の世に出てしを、泣くは嬉しきなり、若き女房の愛子を、うしなへるを泣くは悲しきなり、驚の淚は冷かるべく、血に鳴く杜鵑の淚はいと熱かるべし。

○嬉しきもの　さぬき　しげ子

幼き時うれしかりしは新玉の年のはじめ、雛まつりする桃の節句、七夕祭り、盂蘭盆、土產の神の祭典等なりしが、此の頃の嬉しきものは日曜、運動會、花見、紅葉狩、文章の入選、學校にて優等となりし事などなり。

○雪の時　信濃　小林みつゑ

待ちに待つた雪の時が來ました。今朝の雪はいゝ雪だと云ふて兄さんは兎狩りに行きました。幾羽も取つて來た時の顏は凱旋將軍の樣。私が料理して母さんに煮て戴いて晩には家内皆で舌皷を鳴らします。

○文反古　三河　ますみ子

お裁縫の暇々に書いては納ふた文反古が、今では文庫に充滿になりました、其が皆妾の力の及ぶ限美しく作つた物です。人樣に見せる樣なのは一もありませんが、日永の徒然に繰返しますと、其折々小い胸に咲出た花の、薫が今に殘つて居て、恍惚夢の心地になります。

○夏冬の朝起き　青森縣　三浦愛子

冬の朝は寒いけれども、我慢していつも早く起きますが、夏の朝は涼し

から、早起きが出來さうに、却つて毎朝雀に笑はれてばかり……、ほんとにどう云ふ譯かしら。

○過ぎたる害　　滋賀縣　野一色きし

仁過ぐれば弱くなる義過ぐれば固くなる禮過ぐれば諛ひとなる智過ぐれば虚言となる信過ぐれば損をする金も過ぐれば禍多く思案も過ぐれば脳をいため年を過ぐれば腰曲がり雑煮も過ぐれば胃を害するなるほど過ぎたるは猶及ばざるに如かずと今悟つたも遅きに過ぐ。

○雄物川の鮭狩　　秋田　苅盆とみ子

薄氷を張つた雄物川の眞中に一の小舟『エーカ熊公寒いぞ』『大丈夫さ』ザブン、暫らくして『メた』聲明りに熊公の手にした鮭は鋭鱗潑溂、『ヤアどうしたつて一枚半俄たぞ』『そうだ二人で先づ五日は充分だナ……』

○水仙　　三重縣　帆山靜子

鏡臺の上の水仙が咲きました。何といふ神々しい美しい花。必然清い冷い水の精でしやう。折柄氣高い香が身にしみてホロリと露が零れました。之を集めて御化粧の水にしたら水仙姫の様に美しくなるでしつうか。

○庭の白菊　　岩代　松山薔薇

あまり今宵は身に泌む様な寒さだから明朝は霜でもふるまいかと思つて、一寸庭になり立ち清き月の光でたつた一本の愛らしい白菊に屋根をかけてやつた。

○禽鳥社會　　奈良縣　島田清子

雲雀は雄辯家の如く鶯は音樂家の如し、鶏は孝子にして雀は忠義の軍人なり、鴉、鷺は漁師の如く、百舌鳥は歴制家の如し、木突鳥を彫刻師とすれば燕は建築家なり、金翅雀鳥を琴の先生とすれば鶸はかるわざ師なり、鶴は三つ子の如く鶉は盗人の如し。

○我が家　　薩摩　水仙

お父さまは陸軍大佐でお兄さまは工學士、そして姉様は文學博士の奥様で、來年のお正月にはもひとり姉様がふえるはず、そして私は來年女子大學に……つもり果して遂し得やうか。

○妹の親切　　羽前　幸子

手柄顔に、梅の一枝差出せし妹の手は赤く縮み上り、被布にさへ腎の猜れるに、とくいらへの音楽さへ出でず、凍れる其の手を握りて、やさしき其の心根を謝しぬ。

○背戸の小川　　群馬　浅月

妾は投書文を作る時には背戸の小川のほとりに行きますそして清い〳〵水の面を眺めて居ますと自然に心が清くなつて立派な作をつくる事が出來升。

○機織娘　　京都市　庭くれなゐ

三匯！長総裨！帶！と春の裳に取り〳〵思を凝す人も多き折からに縫縒身に寒く、終日織機に操る小娘は、某が手に織り出てし綾錦の模様を、如何に見る。

○古郷の祖母　　備中　井上直枝

離やに一人いらつしやる祖母様よ、妾が寒休に歸つた夜から休中お宿しましたが此頃は嘸淋しうございましよう、夜すこしの物音にさへ眼がさめてれれらぬと仰有つてゐらつしやつたに今宵の様に風の強い夜は殊に

○三色　　越後　五十嵐美津

あの枝にせうか、この枝にせうか、と姉さんが庭の紅梅を仰ぎ見て居る後から、白（洋犬）が長い袂をくわいたら、驚いて持つた花鋏を地に落して、たぢ〳〵とよろめけば、丈なす絲の下髪は美しう波を打つた。

○今一ッ　　埼玉　戸張とめ子

今一ッ御願があるのよ、私の方では、戸張の姓を、なのる人は、代々の家令でして、御正月の、一、二、三の三日間は、御雑煮を食べないで、五六、七、と三日食べるのよ、ですから、私は此の家令を、取消したいのが私の第二の御願ひですの

○春の宵　　安房　忍足ふじ子

あなたのお名前、花學さん——ちごうの、じや春野さんの！、じや花月さん！、呼ばれた私ははづかしさに立ち上つてつと歌窓開けば袂に落ちくる月の香朧ろに、匂ひこぼるゝ白桃の花。

○田舎の小春日　　成田　波鏈女天波

日向の椽端に、坐蒲團二枚と、切干大根が干してあつて、蒲團の上に横着な玉が、長々と寢そべつて、折々片耳を微妙に動かして居る、傍には母上が背を日に向けて、針仕事をして居られる傍に、妾は女子文壇。

○楓　　周防　岡本かやべ

庭の片隅に一尺許りの美しい楓が少さな鉢に植ゑてあつた、いつの間にやら葉も色づいだ、終に一つ二つと散つて頂上に只一つを殘した、妾は毎日それを見るのが一番樂みてあつたが寸時の嵐に散つてしまつた。

○心をよせてか　　本郷　萍花女史

畑畦を過ふ白髮の村老翁、右肩には鍬を擔ひ、左手には牧土瓶を携へて切りに微笑せり、そも黄金の花に隱れる白き胡蝶に心よせてか、將た踏の穗波を見やりてか。

○石山寺より　　岐阜　泉しげき

風和ぎ朝來の雨もやみ空晴れて、いつしか雲間をもるゝ月一輪、島山の松を透して瀬戸の流に映じては、先づ盃をおきて句吟抑へがたくて候、あゝ斯る夜源氏かく筆すてゝ明月を眺しに候はずや。

○初旅の夜　　周防　はる子

宵の間をとろりとしたきり、どうしても眠れぬ、其箸だは今日よりは寄宿舍住ひ、四方八方知らぬ人ばかりと——そうよ昨日迄は、あゝ!!。ふと見遣れば硝子障子に明月の光が——。

○とつをいつ　　本郷　朝井松子

私裁縫は先天的の大きらひ、試驗ではいつも乙許り、て父樣は小學校を卒業仕たら直女學校へ入れやうつて、處が母樣は裁縫のお稽古許りさせるつて、呼私はどう仕たらよかろ——?。

○雪の夜　　下野　鈴木雪子

そつと小窓の扉ふ押すと、豆洋燈の灯影がさすと、積雪の庭を走しつて破れ垣の南天の紅いの玉にゆらめいた、とさらくくと樹の枝の雪が落れてどこかで竹の折れる音、雪はまだ降り止まぬ、山寺の鐘寂寞を破つた

○口惜しい事　　茶のはな

漸く一輪咲きたる白菊をヒスが折りたる、秋姫が心盡の紅葉を風の散したる、折角書上た書にメマの足跡を附たる、そして一番口惜しい事は兄樣の日記の中に度々泥て書てある獨乙文字の讀めぬ事。

○寸緘日記　　奈良　島田繁子

十月廿一日、日曜、晴。今朝初めて薄き霜を見る、椽側に出て行くと向ふの土橋の上、水車の屋根、杉垣の家までがうす白く、朝日をうけてきらくくと美しい午後庭の菊を内へ入れ頁いのを床の間書齋へ、どこからか投せし古櫟が菊を辱れてひらくくいとあわれに。

○朝をき　　群馬　あやめ

妾は朝寢が好きて、日の差し込まぬ内は一朝ても、起きた事は無かつたのですが、此頃は妾の理想の方が、每朝運動場へ遊びに來るので、知らずくく朝寢の癖が癒つて、今度は早起きになつてしまいました、

○白梅より露へ　　岐阜　谷川すみ子

妾が冬籠の夢は、くる春に破られて、戀しき君の來ませるを待ちつゝあるものを、雪や妾の窓を閉じて見へざりしが、それとも同じ色にそれと分き難ね給しか、されど香は匂ふべきものを、君とく來ませ雪はまだ深かけれど春は早や來にけるに。

○のぞみ　　安藝　福永靄子

泣き相な綠さんを色々賺して、祖母樣の宅に着いたのは暮方、母の用で大森へ行いた事、雪の爲に計らずも立ち寄つた事等を話すと、祖母樣は何時に變らず孫が來たと大喜び、妹は嬉し相に挨拶を濟まし小走りに來て、姉ちやん我家にも祖母樣があれば好いと思ふわ。

○運　命　　淡路　伊藤紫浪

春子樣は冬休てまた歸省なされたか、朝方から琴の音が白壁越しにきこゆる……北風がさつとふいてくる妾は母樣と二畝の畑に鍬とるのである

○手のぐひの匂ひ　　橫濱　源　勝子

お父さんの手のぐひはちゝいくさく、おかあさんのはおしろいくさく、赤ん坊の孫の君んぼくさく、兄さんのはあかくさく、弟のは土くさく、そうして私しのは……。

○あゝ妹　　見附　しらゆき

盤はと問へば妹は病臥し給はれとうつむく「さあれ母のかたみの硯箱を……。」ある日硯が居間をのぞき見れは盤には、紅白の花瓣をうづたかく架せ、花の底に一枚の母の寫眞を埋めてすやくくと整臥。あゝ

○指穴が一ッ　　京城　奥田まい子

用事が濟んて茶の間へ來て見ると、まあ可愛い黄白の茶が、筧束に東擱した、床の牡丹にキッスして居る、閉め切つた障子を何處から。「オヤまあ誰がしたのだろう殘月窓に小さい指穴が一ッ。

新笑話　編輯局選

（三）○赤帽　青森　絹子

八ツ許りになる近衛士官の子供今一人の男の子に向ひ（軍人の子）「僕の御父さんは赤い帽をかぶつて毎日隊に行くよ」（男の子自慢げに）「僕の御父さんだッて赤い帽をかぶッて毎日停車場に行くよ」

（四）○遊びの手傳ひ　尾道市向島西村安保岩五郎方　安藤強子

旦那「君松貴樣は店の忙しひにそこて何して居るか」君松「何もして居ません」旦那「甚吉お前は何をして居るのだ」甚吉「君松さんの手傳して居ます」

（五）○作文とは　滋賀縣犬上郡八坂　西村悦子

女教員「作文とは何の事か御存じの方はお答へなさい」少女「やさしい事をむつかしく云ふ事です」

○難所　和泉　花子

旅行人「こな危險い所に何故柵でも作つて置かんのだ」案内者「いえ人が辷つて落ちる程此處は名高くなりますから」

○去年の暦　紀伊　北村みち子

子「御母さん、暦が安かつたので來年のも買つて來ましたの」。母「おや、まあそんなに澤山買はんでも未だ去年のも殘つてあるんですよ」

○日と月　三河　早川千代子

今日私が生徒に、お日樣とお月樣とて、どちらがよいかネ。と聞きましたら、生「先生。私しお月樣がよい」妾「ナゼですか」生「お日樣はあかるい晝をてらしてくださるがお月樣は暗い夜をてらしてくださるから」

○桃山式の時計　石川　積む露

ハイカラ女學生時計屋の店へ來て、女學生「婦人持の懷中時計を見せておくれ」番頭「へイ米國式ですか英國式のですか」女學生「アノ桃山式のを」

○半可通　熊谷　和久井きん子

下女「奥樣此の肩掛は大さう立派で御座い升事ネ——」妻君「お鍋や是れは肩掛ではありませんショールと言ふものですよ。」

○不調法　播磨　正井愛子

主人「何だれまた不調法したの、朝つから縁喜でもないよ」下女「アノ奥さん不調法もちようほうの內ですよ」

○竹馬　上田とき子

母「坊やお前そんなに針を粗末にすると死んでから針の山に登りますよ」坊「母樣そしたら僕れ竹馬にのつて行きますよ」

○手拭　陸奥　三浦愛子

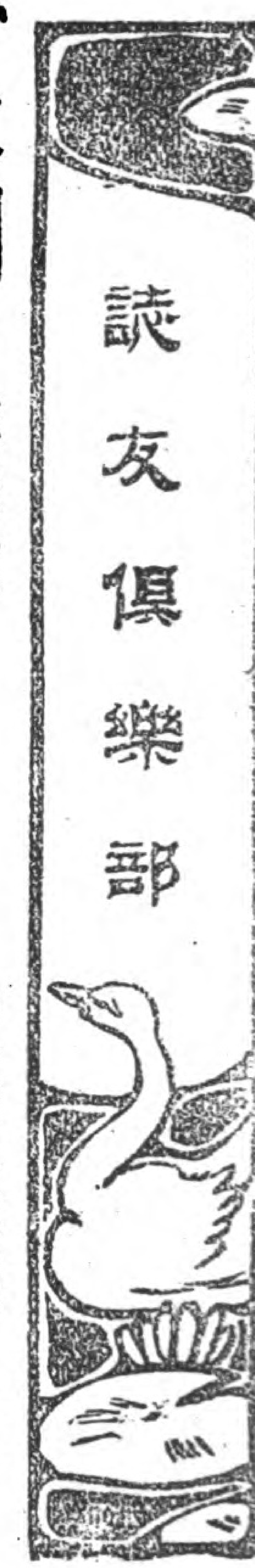
娘「お母さん、今の客さんから戴いた手拭の、地の惡さつたら無いわ、豆も漉れそうよ、どうして用ひませうネー」母「矢張外へお使物にするのさ」

○五厘錢と壹圓　尾張　渡邊紫川

奥樣「三や大急ぎてお醫者を呼んでおいて坊が五厘錢を呑んだから」下女「奥樣そりや考へものです」奥樣「どうして」下女「醫者を呼べは一圓位は取られます」、

○藪醫者　備後　松本節子

令孃「藪井さん私は昨日から幾らお飯を食べてもお腹がすいて困りますが一寸診察を願ひます」藪「して貴君は何かお變りものをお上りましたか」令「左樣てすれ變つた物とては蓮根位なものでせう」藪「ハ…… それなら診察するまでもありません食物がみんな蓮根の穴には入つたのデす」



本欄の擴張！

讀友倶樂部が本誌唯一の娛樂機關である事は讀者諸孃も御存知でせうが猶ほ娛樂以外、實用上にも利益のあるやうにいたしたいと思ひまして

紹介欄

と云ふのを設けます、此欄には諸孃の必要の事なら何でも紹介いたします、最も從來の繪葉書、圖書、編物、寫眞等の交換記事以外です、學校の問合せ、事業の案內、求むるもの、應ずるもの、要するに用事は何でもよろしい、諸孃の便利の爲なら紙面を惜みませんが、文章の長いのは困ります、それから住所氏名も明記して下さい。

○課題と文藝遊戲

讀友倶樂部が追々增加するに就いて、新課題を載せる場所を縮少されますから、文藝遊戲と新課題を合併し更に新しい問題を出して、諸孃のお答へを願ふ事にいたしませう、つまり新課題は文藝遊戲として募集する事になりました。

○郵便雜感（課題）

○　ふくしま　若子

妾の地方は雪が深くて、冬の半頃には、七尺八尺と積るのは珍らしくありませぬ。こんな時に、途も分らない雪の中を、えーおーの懸聲勇ましく、山のやうな行囊負ふて往復する、郵便脚夫を見ると、待ち焦れて居る雜誌や新聞や、はがき書狀を、僅少の料金で持運むでくれるのだと思つて、そゞろに感謝の念にうたれるのであります。

○　豫州　得能光惠

今から十年前私の古鄕（道後から三里半）字南野田と申地方は配達夫が村の百姓で木綿の縞の着物にへコ帶而して下駄をはいてコツ〳〵やつて參り升、エー今日は好いお天氣で御座り升る左樣ならモシ、ー郵便が參りまして御座り升るエこー云ふ樣でしたが只今ではやはり村の者では有升が各町方のと少しも異りません之を思ても時代の進步が分りましよう。

○　能登　天涙女史

郵便ほど大切なものはないと思ひます、今日本全國てたつた一時間郵便を停止するならば其の一時間に於て受けとるべき何千人、何萬人の中には一親の死日に遇へない人もあらう、或は大失敗をする人もあらう、或は無駄に大金を費す人もあらう、と數へ來れば限りがない、と云ふのも僅一時間の郵便停止、之を思へば實に郵便は國家に大影響を及ぼすてはないかと思ひます。

○　下野　鈴木雪子

『郵便』の一聲を聞くと妾はいつも胸が躍ぐので、急ひて取り上げて見るのが常です。

それて最初に目をとめるのが自分の宛名です、中には栃木縣と書く人と、下野國と書く人とあるのです、それて妾は下野と國名を書く人は、おとなしくして眞面目な人のように思はれて奥床ゆかしく思はれ、栃木縣と書く人はなんとなくハイカラのように思はれるので、國名を書く人を好みます。

○　羽前　安達ひさ子

妾は郵便受函で受けて居ます着した月日時刻と御住所氏名は必ず手帳に記して置ますして私しの發信した繪葉書の品種を附けて一人のお方に二度同じなのが上げぬ樣にして居ます返事の遅れぬ樣に雨が降つても雪が飛んても村中一町余の道は必ず投函に參ります ふた親樣からは度々言はられましたが涙にかけても お交はりだけは止められぬ樣で御座います。

○　群馬縣　芳山常盤子

今は如何てすか私が佐倉へ參りました時異樣に感じたのは集配人が足駄をはいてゆツくり配ツて居た事又當地へ來ては度々驚かされました大きな聲して今日は今日はと云ふので誰かと思つて出て見ると郵便なのです。

○　秋田縣　千葉みつ子

妾は郵便ほど賴みなものはありません近頃は非常に雪が積りまして郵便もなかなか、なんぎで

す或は電文のために幸便を以て屆くると、いふ様な事なぞがあれば人々が郵便を様々に惡く云ふので妾は若しも、あの郵便に止められたら、嬉しい御友だちの便りも聞く事が出來ない、だらう、と思へば何時も、吹雪などの時は悲しくて、たまらないのよ。

○下總　駒井野　笑奈子

妾の家の店の柱に郵便箱が有ります、配達さんが來て、戸の開く音が妾の居間へ聞えると、妾は針も筆も捨てゝしまつて、店へ飛び出すのです、そうして自分のが無いと何だか氣拔けがして、それが配達さんの科でも有るかの様に思はれまして、若し有つた時には大變に嬉しくて、楽しさを配達さんから得た様な氣がします、そうして袍の中を探して居る時はもどかしくて、自分から探してやりたい程です、笑奈さん、ありましたよと配達さんが云ふた時は、其言葉には、云ふに云はれぬ趣味が含て居ります、まして妾の様な姉も妹も無い獨り身には、郵便によつて得る樂は誠に多いので有ります、此原稿が本誌へ掲げられるのも郵便の力で其雜誌が妾の所へ屆くのも又郵便であります。

○岐阜　花村浪子

郵便！この聲を聞く時私はどんなに嬉しいでせう、玄關へ走つて行きます先づ第一に宛名を見るのです、私の名で無いとほんとに失望します折角走つて來た張合が拔けてしまいます、それから一番嬉しいのが寫眞に本に繪葉書ですの、その次ぎが封書次ぎが郵便葉書です。

○陸前　千葉はま子

私はいつも切手を右の方にまげて、はるのお辭てありますが、或雜誌を見て驚いたのです、それは切手のはり方です正しくはるのは人を敬する意て左にまげるのは甚た失禮て私の得意な右にまげるのは其人を愛する意だと書いてあつたのでそれからは正しくはる事に致しました。

○千葉縣　牧野環顔女史

毎月の今日は、女子文壇が屹度來る日なので、窓に待ち焦れて居た處、丁度郵便配達が前を通るので、開て見たら、何にも來ないと云つたまゝ、后をも見ず、ズン〱と行つて終つた。妾は此時、大なる落膽と共に、若し、配達が取り落しはしないかと、疑ひました。

○大坂　滿壽榮

郵便！、何と言ふ嬉しいそして懐しい聲でせう當地え歸りましてからは時間定めず參りますからそうても御座いませんが田舍に居りました間は日に二回と配達數が決つて居るのですから私は何時もその時間か來ると窓に立つて配達夫の參るのが今か〱と待ちました、幾枚かの郵便を持つて我家の方え近きます時の愉快さは實に言葉や筆に盡せません。

○川越　白菫生

郵便は正月と暑中休か一番多く出し又多く來ます本年の正月には宅のをのぞき私の出したのはばかり七十二通内一通は受取人ないとてもどつて來ました私に來たのは六十八通です私は毎月郵便の往復は日記に書て月のをわりにどちらか多いかしらべますいつも出ます方が多いのです

○香川縣　綠田美津起

妾が昨年高松市て撮影した妾の寫眞を本月九日寫眞店から送付して來た時妾は急いで其を受取りましたがこは如何に妾の頬の上に郵便の消印が押してありまして顔が眞黒になつて居ました其の時妾は非常に悲しく又腹立ちましたですから皆様に寫眞の交換を願ひましても御送り致す事が出來ません。

○佐世保　薰浪子

懐しい父母兄弟をあとにして一人海上に一日の休みなく武術を練磨する海軍々人の最大なる慰籍は故郷の便りだと申します遠洋航海の時などは別して故國の通信が何よりの生命だそうですそが父母の慈愛にあふれた文や愛らしき弟妹の無邪氣な手紙は浪路のうきも忘れしめて新しき愛國の血汐を漲らせると申します。

○しらうめ

始めて女學校に入學して寄宿舍に入つた時未だ知らない人のみて思ひを明す友もなく唯さびしく故鄕の事ども思ひつゞけてゐると舍監の先生から「あなたお手紙が參りましたよ」と云はれた時の嬉しさ開いて見るとお父様と御母様、弟や妹から皆自筆て、御父様は養生して勉強せよ、御母様からは内の事などには心配はいらないと、弟は姉さんと競と勉强のかけくらべをしやうと、妹は姉さんが御歸り時のお土產には人形を、――皆ねんごろにやさしく可愛らしく無邪氣に。

○埼玉　朝露子

郵便配達夫が、向方から、勢よく、來ましたから、わたしは、自分へ來たのだと、喜て門にたつて、居ると怡や、平氣て、通りぬけてしまいます、そして私を不思議そーに見て、居りますから、私はあつけにとれて居ります、しかし、又、月に十七八回ぐらゐまいりますのよ。

○　出雲　世良むらさき

妾は、古切手を集めて、金箔や、銀箔のかはりに、扇額の周圍に、貼つて居ます、一寸變つた趣向て具合もいゝのですよ。

○　本所　すみれ子

月氷りすきもる風のいと寒き夜、古き郵便をとり出して見た時は、あゝそゞろに過ぎたことが思ひだされ今更昔の夢をくり返す樣て實に何とも云へない感じがした。

○　長門　中尾てつ子

慕はしい父母樣や、懷かしいお友達樣から、郵便と云ふて玉章のきたおりの嬉しいことゝいふものは筆紙に盡されません、けれども若も其中に不幸なことや、なんぎなことなどがあつたときには夜のめもねられぬやうに悲しう御座います、昔し此郵便の設けがなかつた頃はどの位不自由てありましたろうか、ところが今は僅に數錢を投じますれば我國は申に及ばず外國迄も意を通ずることができ、それのみならず電信、電話等もありまして數時間のうちに遠方の事情もわかり、居ながらにして話しもなす樣になりました、これにつけても治まる御代に生れしものゝ幸福なることではありませんか。

○　土佐　高橋白ばら

千屋さんは十數年來なじみある六十近き配達夫、勤務中の勞苦をさつして時に來客用に供へた朝日に火をうつしてあげると得もいへない嬉しげな色を浮べていく度も禮をいふのです。

○　大阪　東柳子

妾は、繪葉書を交換し、毎朝起床の時枕元に、有るのが一番樂みです、郵便配達夫が通りますと、あの郵便屋は來ないかと待つばかりです、妾の一快樂は郵便夫を待つ、貴社の女子文壇の紙上を、けがすのも、郵便夫、此原稿も郵便夫が持參する、何も彼も郵便に限ります、言ふに及ばず。

○　高槻　赤松春子

雨降りに集配人が葉書を持てきてくれる時は常日も文面が消へて居る、東京から送つてくる雜誌は常日もしわくちや不平千萬てす、然し御正月の樣な嬉しい時に唯一つ苦い顔する者は、年賀狀を山の如く脊負ひ行く、實に商賣柄とは言ひ物の哀れなり、亦夜が更けて通る人もない淋しい我家のやうな處ても失張持てきてくれる、實に氣の毒と言つても良い。

○　上毛　紅葉子

手紙を出すのに自分の宿所姓名を葉書のわからない樣な事を書いて出すものが有りますが、未だ始めてゞ差出人の宿所を能く見なければ、返事を出せぬ場合には受取人は不明の爲どんなに困るか知れない、文面もよくわからなければいけないが、第一は宛名第二が自己の宿所を充分明瞭に認める事が肝要だと思ひます。

○　福井　水蝶花

日記に記し留いた昨年中の音信を調べて見ましたが一昨年よりは余程殖えて居りました發信て封書が四十四通端書が百五十七枚着信ては封書が二十四通て、端書が六十五枚半分しかありませんこれて私しは人は手紙もらつても うれしくはないのかとおもひました 私しはすぐ返事出すの大好き。

○　　鈴木ちよ子

今年のお正月に福岡縣のお友達に出す年始状を福島縣福島市として出しました、ところが肩書の方がお出にならぬので戻つてきました、妾には、富士の裾野なる百合子よりとしてありましただけですから別らぬはずですのが 沼津といふ消印がありましたので沼津局へ歸つてきました 沼津の郵便局に妾の知り人があります 其人から沼津鐵道官舎として名前まで書いて戻つてきました 間違ひた妾は少しぬけて居ますれーホホホ……

○　白杵　木の葉

私は郵便の内ても封じて來たのが一番樂みてすわ、それは繪葉書だつて、よい事はよいが水壁の跡美しく、丁度實地に見聞したやうに書てある、友よりの玉草を見ると、もう自身は其處へ遊んて居るやうて、その樂しさ加減たらありませんわ。

○　金澤　山田政子

郵便！おゝ單なる聲なり、勇なる聲なり。簡單にして千里の馬を凌駕するの勇あり。郵便！お懷しき聲なり、優なる聲なり。戀ひしき友、惡き友、あらゆる人にめてらるゝ聲。

○　赤坂　梅津治英

妾いと幼き時よりの友、今は二百里も遠く離れし地より月かわる毎に二度三度と土地の風景のおかしきなどを書きて送りこす 妾も都のかわり樣々を思ひのまゝに書送る此便利實に郵便あればなり多くの手數をかけ猶も何千里隔歐米迄も僅かの金にで行屆くことはあゝ便利なるは郵便なり。

○　羽後　後藤せい子

妾は日々樂しみにして居るのは 配達夫のよぶ一聲ほど嬉しいのはありません 朝學校に通學致て

退校後一番に姉さんの室に參て今日姉さん郵便は如何と問ふのですからいつも姉さんより笑はれるのだ其れから次の間に參つて御兩親樣に只今と申ますほんとうに誌友の君より下さる郵便程うれしいのは御座ません。

○　三重　澤井鎰子

一年度はいる郵便の數は先づ一日三本とならして千九拾五本出すのは受取るのと殆ど同樣位てす田舍の事てすから配達は一日に貳度午前八時と午後三時とてす妾は去年の三月小學校を卒へてからは宅の母の許てお仕事をして居るのてすが郵便は昔妾が認めるのてす先日も母が學校へ登る時分とは餘程好いれと誉められました是れも郵便の御蔭だと思いますの。

○　土佐　潔子

田舍のことゝて、夜に入りて夕飯などすませし折柄、郵便！　妾は弟と競つて玄關に出た、待ていた花子樣のては無い、すくなからず失望した、同時！「澤田馬次樣は何所て御座いましよう？……」郵丁はかく問ふた、妾はその端書を取て、弟の持てる燈火にすかした……方にて友之助……ヘテ何所だらう、母樣！澤田樣て何處？それはお前君子樣の御内よ。アヽ其れては、あの向ふに白い塀が見えるてしよう、あそこてすよ……ヘア難有御座います何分始めなのてどうもこまりました……歸り行く郵丁の後姿！妾は多大の同情を寄せずには、居られなかつた。

○　かれ子

私郵便が來るのが何より一番嬉しいのよ慕はしい友垣からやなつかしい故郷の御兩親からの便りほど嬉しいものはほんとに外にないと思ひますわそれに此頃は誌友倶樂部のおかげてたくさん姉樣方が出來て毎日二三通は郵便が來ない日がないのよほんとに郵便ほど嬉しいものはありません。

○　藤本てつ子

いつも郵便と一聲高く云ひはなして投げてゆく配達夫けふの樣に雪降りてはお寒いてせうと云ふと火鉢て手を暖めつゝヘエけふはチト手紙の數が多いのにこの寒さてはと顏をしかめる妾は此樣な日郵便の多く來るのが嬉れしいわ。

○　上毛　金子春月

友の音づれ待ち詫る時郵便の一聲はうぐひすの初音よりも嬉しく候それに反し素通されし時の口惜しさ皆樣の御賢察に任せべく候亦當村は不便此上もなく日一回の配達の程に候へばよろずに不都合を來し候さるが故に妾は借金は之なく候もお音りの返すべき借りは堪へず候誠に心苦しく候、もはや今日も午後と相成候へば妾が最も戀しと樂しむ足音其いせいよき聲近づき候。

○　東京　溪玉

あゝ吾が第二の友の郵便よ。汝と交を結びて早十數年、今に至りて益々親密なり。夏冬を論ぜず、音を持ち來り、吾れをして坐して遠きを知り、臥して友と語るの幸を得しむるは只汝のみ、中にも病苦に惱めるなりの音は一としほ嬉しく限りなきものなり。斯く盡くしくるゝ汝に對し何を以て報ひんや、只々深く汝の勞を謝してなほ永久に吾れと苦樂を共にせん事を願ふのみなり。

○　千鳥子

實に郵便は悲喜交々世に有りとあらゆる事が、通信出來る誠に貴ればならぬから私は感謝に堪られません只不平なは其役員が大層官員振て不親切で困ります知らぬお方はお氣毒で私は是ばかりが、恨みてす。

○　武藏　あづさ

私しは郵便局の人々がある雜誌を友に送るとあけてみて繪葉書に墨をぬり、そればかりてなくよごし／＼しておそく送るのてす、實に無責任にてこまるのてす、これが何によりの郵便に就いての事てす。

○　上總　舘川艷子

女子文壇原稿と花子さんに送る手紙の、郵便切手代は僅少の樣だが、今年は元日から日記帳へ記載して見たら、今迄て二十九錢、是れては父上より戴いた、三十錢のお年玉てはロクに買ひものも出來ぬ。

○　上野　千鳥子

當地のやうな片山里に居て三十里も遠くてこしらへる女子文壇を讀む事が出來たりお友達の御文を拜見したり又海山遠くへだてた兄樣とも御文通出來るのは皆郵便のおかげと私は實に有難く思つて居ります。

○　福井縣　秀美

妾は月給テン圓を貰らつて、小學校の敎員を奉職して居る者てすが、至つて繪葉書が好きて、いつも女子文壇の繪葉書交換欄に出てある、諸孃に交換を申し込むのてすが、返信を下さるのは十中の四、此は女子文壇の讀者の多い事を證明したもので、澤山の讀者中には妾等の樣な道樂者も從つて多い爲、用意して置いた百や二百てはとても足らぬ故、止むを得ず返信中止、だ

と思ふと大に氣の毒に思ひますが、然し……

○　京部　松井靜枝

世に同情の涙を灑ぐべき者があるとすれば、それは郵便配達夫であらう、日曜となく、休日となく、天地を燒くが如き炎日も、萬象を凝結せしめんとする寒日も、數多人民の爲めに盡し、吉凶禍福淸濁潔汚の差別を分たず、熱汗全身に流して愈々國家進運の要を盡せど、現今の人心其を歡迎せずして冷遇するに於てをや。

○選者より一言

右の「郵便雜感」も原稿は非常に澤山ありまして、なほ此處に載せ切れないのもありました、誠にお氣の毒てすがそれ等は五月の增刊に廻して餘地があつたら載せることにいたしませう。又「誌友くらぶ」の課題は次の「花」を以て一先づ終りとし、「文藝遊戲」の方へ全力を擧げたいと思ひます、課題に投稿して下さつた方は何うか今後「文藝遊戲」の方へ盛んに投稿して下さい、なほ三月五日しめきりの「花」も課題の終として澤山投稿して下さい。

○花（三月五日しめきり）

▲少女は人生の花、花は天然のうちても最も美しいものてす▲花に就いて諸孃は何を感ずるてせう▲好きな花と嫌ひな花とはありませんか▲諸孃の家には何んな花がありますか▲珍らしい花や變つた花を御存知てすか▲花の色、花の香、花の姿を何と思ひますか▲山に咲く花、野に咲く花、庭に咲く花、何れを愛しますか▲花を見ると何んなことを思ひ出しますか▲花實は何んな風俗て、何んな花を持つて來ますか▲今諸孃の室には何んな花が咲いて居ますか▲まだ〳〵花に就いてお尋ねしたい事は山ほどあります、一一申しません▲諸孃は何ても彼ても花に就いて言つて御らんなさい、何んな事てもよろしい、花についての事なら▲園藝上、花の養ひ方の心得などもよろしい▲原稿は例の通り半紙半枚に七八行以内『花』と題を書いて其下に姓名雅號を認めること。

諸孃と記者

○記者樣に一寸伺ひますあの和歌は半紙半枚に姉妹二人のを並べて書いてはいけませんか（さぶ子撫子）（記者曰、別々に）○記者さん先の日は誠に御手數をかけ申してどをも相濟みません御送り下されました朝晴と美文作法、言文一致文範は南窓の下なる本箱の上に飾られてお針したひま〳〵見て居ます、記者さん當地は、片田舍の事とてお正月は舊てありますのよそれ故今が一番忙はしい時てすのお正月樣が來たらこんなお本を樂しく讀まんものとそれのみ惜しい月日も早く〳〵とまつて居ます、それから女子文壇は只今は前金切となつて居ますけれども文明の有難きには此田舍にも女子文壇がお出て下さる樣になりましたから妾が身の此世にある限り友白髮の生ゆる迄永久の愛讀者となつて行く覺悟てすの（大分縣にて河畔なるみれ子）（記者曰、女子文壇は何處へても參ります、何うか愛して下さい、茲のお正月頃には確か中國、四國、近畿一帶大雪てあつたやうに思ひます、あなたの方も積つたてせうが、雪ても降れば猶ほ靜かて本を讀む時てす）○妾の里は武生驛から一里足らずの處て、車も通りますが、夏になると每年郭公が啼くのてすよ、今年も啼く樣になりましたら、御報知申上まずから、是非御光來くださいまして、妾しの下手な田舍料理を召し上がつてくださいませんか。和歌新體詩の作方が委しく書いてある書籍はありませんか（越前丹生郡吉野村余田秀美）（記者曰、越前まて郭公を聞きに行くやうな身になつて見たいものです、それは扨て置きお尋れの和歌作法書はいくらもありませう）○記者先生私は岩木山のふもとにすんで居る淺學の者てすがあまり淋しいので此一月から愛讀する事になりました、私何がうれしいつて女子文壇みる程うれしい事がありません私一月から望みの學校へ入學したよーな心地いたしますのこれからつまらないものばかりでも投書いたしたいと思ひますから何分よろしくお願ひ申上げます、それから投書は原稿在中と書いて三錢の切手をはつて上げるとよろしいのてすか次號て御敎へ下さい（靑森縣死蝶）（記者曰、切手は二錢て宜しいのてす）○記者さん妾は一昨年俳句て特別三等賞を頂いてから一生懸命に拙なきをも顧す投書して居りましたところ僥倖にも昨年の十二月又もやはがき文て入賞を頂き妾の身にとつては此上もない名譽何とも記者さんに對して御禮の申樣もございません どーぞこの後も投書いたしますから御目を通して下さい 尙申兼ますが俳句を學ぶに月々發刊する新派俳句專門の冊子がありませんか御敎示を願ひます（越後堀川弘子）（記者曰、當選は貴孃のお力てあつて記者のせいてはありません、御禮は忝く受けまし

た、さておたづれの俳句を學ぶ雜誌は『ホトトギス』てせう）○記者樣お寒いのれー、お障りもなくつて？あの草村北星つて小說家がおありてせう？あの方のおところを敎へて頂戴な、それから花守をお作りになつた方のお處もよ、どうぞ〳〵お願ひいたします（須磨の閼守）（記者曰、草村君は東京市京橋區尾張町一ノ一　草村北星、　花守の作者橫瀨夜雨君は茨城縣眞壁郡大寶村橫瀨虎壽）○記者さん甚だ恐入ましけれ共あの佐々木信綱先生の住所　と與謝野晶子先生の公所を御知らせください御願てすよ（八戸町さよ）（記者曰、佐々木氏は神田小川町一番地、　與謝野氏は東京府下千駄ヶ谷村五四九）○記者樣暫く御無沙汰致しました悲しい事がありましたの一人しかない姉に別れましたわ　大坂府の女子師範卒業なされ某地に奉職　していらつしやいましたのほんとよ惜くつてよ　左の歌は餘りの悲しさに口吟みしものどうかのせて下さい　又共に送りし私の一葉はづかしいてすけれとおくります（丹波篠山町石原糸子）（記者曰、姉さんをお失ひなされてさぞお力落してせう、　殊に敎職にありなさつたと聞きますと一層お氣の毒）○記者樣もお風召して、御養生遊ばせ、　私もお正月早々伏りましてよ、　ほんとうにわるひ風てございますのれ、どうぞ御大切に遊ばしてくださへれ、　私之から折々投書致しますからどうぞ　おなほし下さへれ、　時節柄自愛遊ばせ、　さよなら　（麴町康子）（記者曰、ありがたう、都會の人を全體に苦しめた風の神も、何うやら東の海へ逃たやうてす）○記者樣あの歌集（みだれ髮）にはどんな事柄が書いてあるのてすか　又歌は舊派てすか新派てすか御敎へ下さいませ（千葉町春野子）（記者曰、日常詠歌をあつめしもので著者は新派の　與謝野晶子女史）○妾は希臘羅馬史を深く研究致し度く存じますが、近刊の本があるのでしようか、尙ほ新派歌學の通信敎授が東京にありましようか、佐々木さん晶子さんのより金子さんの方面白しくハイカラ的てすネ（亀戸鶴澤スミレ）（記者曰く早稻田大學から出版になつたものは　どうてす、それから第二の　方は別に聞き及ひませんが傳手を求めて添削をお願ひなさい）○記者兄上樣、男女交際とは善い事てすか惡るい事てすか、どーぞ御懇說ください。私は女學校三年生てす、誌友女學生徒諸孃に相變らず御手紙や　繪端書などをくださる樣に云つて頂戴。（香川縣三本松町今田淸平方山本與子）（記者曰、　交際なさつても差支ないてせう）○女子文壇の記者樣に御伺ひします、　私しも昨年の二月から本誌受讀者の一人となりました、　誌友面影に出來て居らるゝ御方と交際を致し度う御座います、　何卒明治四拾年一月一日發行の誌友面影の內一の方て　名古屋の林田美根子さん、　青森の角田きし子さん御二人の住所を可成く委しく本誌て　御知らせ下さい（羽前米澤市の西北の村嶽遊女史）　（記者曰く御用によりては御知らせ申します）○記者樣私は學校へも行かんふつゝか者て　ござひますがこれから御誌を師として勉强するつもりてす　何卒何卒御見捨てなく御敎導下さいますやうれがい上ます此度初めて投書して見ましたが　書き方はこれて宜しいてしよか　お恥かしのは字が大變へたですから吳れ〳〵も御笑いなされぬやうに　（備中國萬喜子）（記者曰、　差支なし）○記者樣に一すと御聞き申します誠に　申し兼れたる事て御座いますが今まて私の出した作文は　一つも出て來ませんのはまだ〳〵下手のせいだと思ひますが又字の書き方も亂雜だらーと思います　それて今迄書いて出した文や詩を今一度作りなほし猶又きれいに書いて出そーと思いますが　宜敷御座いますか是非々々次號て御答を願ひます　（長野縣失名女）（記者曰、　承知いたしました）○記者さん妾は昨年の初號から本誌を愛讀して居りますが未た一度も投書した事はないのてす　てこん度初めて和歌を上げて見ますから　どーぞよろしくお願ひいたします、　こんな風てよいのなら妾每號に上げたいとおもひますからさようなら　（仙臺市北晝番町古川淑子）（記者曰くどうか每號御投書下さいませ）

諸孃の交際

誌友の御姉さんたちへ私はごく身のいやしい淺學者てすが何うか文の上てなりとも　御交際下さいませそして繪はがき交際も御賴みます　天父の御慈愛の天御氣元よろしくさよなら　（大阪市南區天王寺逢阪上之町二四〇一辻梶子）○誌友の姉樣方よ私は女學校も中途てやめまして只今は　淋しい片田舍に住んておるものてすがよろしく　御交りの程をれがいます又繪はがきや　御玉章うつくしい御寫眞の交際も願ます　たゞし男の方はおことはりを致します　（茨城縣東茨城郡中妻村中山美智子）○誌友の姉さま方、妾は戰捷笛の不用のを持て居りますから手風琴の不用の　を持ちの方と換へて下さりまし　最も價の低いものてすから、手風琴と換へますには　紅葉全集一卷より三卷迄三册（價四圓八十錢）を添へます、　亦いづれも不

用でありますなら相當價で讓り下さい、手風琴を送り下さる時に申添下されば直に送金亦は送品します（群馬縣利根郡片品村大字土出廿七區野みれ子）○誌友の姉樣私は周防の片田舍に住む不束な者で御座いますが御葉書や玉章の御交際を願ます御返事はきつと致しますさ（周防國熊毛郡三丘村和田瀞文子）○皆樣私は去年横濱から城南の一週に居を移した者ですが何卒御見捨てなく御交り下さい（東京南品川町二日五日市三百九番地風間方韶綠漪韶子）○お慕わしき誌友の諸孃樣方よ、妾は隅田のほとりに獨り淋しく日々を送り暮して居る者ですが何卒ぞ永久的に繪端書、玉章等の交換して下さいませな、御返書の程はいはずもかな、（東京市本所區向島小梅町一九五、林富士子仝芳江子）○誌友鹿兒島市の村岡菊子樣に私は昨年十二月樺太島から歸りましたので貴女に手紙を上ようと思ふて鹿兒島市山浦町三入として送りました所（町名無し）と云ふ附紙で戻りましたが何卒今一度委しく御知らせ下さい（岩手縣稗貫郡湯口村字二ツ堰藤山斌子）○諸女子繪葉書手紙雜誌寫眞の交換いたしましよう御贊成の人は下記の所へ（武州川越石原町川岸旅館佐久間支店内白菫生）○妾事今迄皆樣に御交際を願ひ升たが今後都合に依り御交際を致事出來難く不惡本欄を以て御斷り申ます（尾道市土堂町五丁目藤野峰子）○私はふつゝかな田舍者ですが天下の姉君どうかあはれと思ふて御てがみ下さい、ことに第二卷の入獎の鹿兒島の一女學生樣なつかしく御ざいます私も縣立の女學校の二年しかも同じ年よどうかよろしく御みちびき下さいませ（青森縣弘前市丸本方西谷きし子）○妾は本年十五才に成りまして小學校を卒業するのですが、貧家に生れて此上高等女學校へゆく事も出來ませんから、片田舍で裁縫を習ふ傍ら本誌を購讀して、稀れに投書しようと思ひます、什麼か皆さん何も識らぬ不束な田舍娘ですが、御見捨なく親密に御交際を願ひますよ（上總君津郡環村寺尾館川藍子）○我も愛讀者の一人です以後御交際を乞ふ（越中國滑川町水野鎮子）○大阪の金森よしゑ樣不相變御勉强ですな私宅左の所へ轉宅しましたのよちとお遊びに被入いな貴女の御住所をお知らせ下さいなお便なし度んですから而して和歌がお好きなお方々何卒お交際して下さいな（大阪市北區上福島北一丁目村瀨内露子、浪花子）○誌友の姉樣私も愛讀者の一人となりました何卒永久に御交際を願ひます私は只今四日市の高等女學校に居ります又レッターの交換及繪端書の交換をも御ねがひ致します貴き姉上樣方も繪端書及レッターの御交換をして下さいな（三重縣四日市市上新町日中とく方堤照子）○陸中遠野の若生なか子樣、私も遠野の生れよ、お國の方と思ふと、なんだかなつかしいのよ、何卒御交際下さいな（東京本鄕區眞砂町二十二穎川みさ子）○秀才なる誌友諸姉樣私は山陰の山谷に住て居る淺學無才の乙女ですが今後は何卒御敎訓と御交際を願ひます又御交際永久に親切てなひと御免です（因幡國八頭郡智頭宿西尾長職方貞枝子）○皆樣私みたひな字の下手なものも御かまひなく御玉章の交換してくださつた、諸孃に厚く、御禮申上ます、私事、此度、腦をわづらひ、病床に、居りますやうな次第、醫者より、手紙の交換をきんじられました、それで、投書を、やう／＼ゆるされましたやうな次第、この後、交換を御斷り申ます、たゞでなく、病故、ゆるしてくださいよ（赤坂區青山高木町十四高木留子）○皆さん私しれ酒葉花舟子さんの家へ來まして愛讀者となりました是れからお仲間入りを願ひます繪葉書交際並びにお寫眞造花あみもの〻交換も願ひます宜しく（常陸國高濱町東大橋九十一番地酒葉花舟子樣方谷田きく子）○一月以來繪葉書を下さつた方に御禮を申します厚情なる諸姉樣達御自作の詩又は新體詩集ありましたら（新古不選）御送り下さいませ屹度相當以上の書物で返禮致します繪葉書もどし／＼交換を（越前三國町平木入十二番地朝居方新保勝子女史仝じく光子女）○妾は埼玉の片山里に住むで居る誠に不幸の身の上で五才の時兩親に別れ今では姉妹もない只一人者です諸孃方よあわれと思召永久に御交り下さいませ終りに諸孃方の幸福を祈る（埼玉縣比企郡七郷村初雁信子）○數ならぬ私をも親しき友の内にとて御あわれみ下され御美しきゑはがき又は御玉章なぞ御めぐみ下さいまして誠に有がたう御座いました早速御返事申上ぐるはづで御座いますがいまだ學問にいそがしき身の差上ぐべき處へすら御無沙汰がちの私何とぞあしからず思し召し下さいまして誌上にて永久に御交はり下され度都へと御のぼりの節は是非御立より下さいませ（赤坂齋藤茂子）○なつかしき誌友の姉樣方私はいなかの者ですがどうか御玉章下さいましな又繪葉書の交換もね（福井縣敦賀郡粟野村野神山本久子）○懷かしき誌友の姉よ妾はすぎつる去年の春花さく故鄕を振り捨て

ゝ今滿洲の片岬に面白からぬ思ひに月日を送り居るのよ何卒以後親密なる御交際をナヤ忘れて居た玉章や繪はがき眞寫の交換をなすつて頂戴交換くださる御方樣には清國風景繪はがき幷に妾の寫眞は屹度御返送致しますよ（清國營口元神廟街九ヵ榔野百代）

○皆樣、私は田舍生れの不束なものでありますが、おみすてなく御交際を願ひます、別して京都淑女高等女學校に御在學の諸孃樣にお交りを願ひます（金澤市新堅町二丁目六番地山田方稲田式部）

○親愛なる御姉上樣方よ妾は片田舍にすむ至つて淺學の者てありますが何卒御文通を希ひます（伊勢河藝郡明村字楠原澤井いつ子）

○皆樣私は誠にふつゝかな者てすが御交際をねがいます又繪葉書の交換をもねがいますよ（山城國宇治郡宇治村茂壁山内天野きよ子）

○誌友の姉君よ私は音樂が一番好きて終生樂器を友としてくらしたいと思つて居る者てすが何卒同じお志の方は一時的てなく永久に御交際を願ひます又唱歌を御敎へ下さればきつと御禮狀を差上げます（岩代若松市融通寺町筱内元子）

○皆樣お交際下さいまして誠に有がとうよ、私ね皆樣のお懷しいお便りてほんとうに此頃は樂しく暮して居りますのよ、どうぞ又相變らず御交際のほどお願ひ申ますわ、皆樣少しお遊びにお出て下さへれ、左記へ越しましたから（麴町區上六番丁八番地船津康子）

○證は繪葉書又は切手て致しますから都の春須磨の曲離れ小島進行曲閉塞隊洋樂の譜其他新曲の面白いものゝ略譜付て敎へて下さいな（芝區愛宕町二の一四沼田方椎野榮子）

○誌友の姉上樣マッチの商標或は色々の商標や又は面白い印影を御持ちの御方は何卒澤山送つて下さい妾必ず編物て御禮いたします（長野縣下高井郡日野村三七三番豐田たかの）

○私は昨年一月よりの愛讀者てありますが猶ほ〳〵皆樣御交際下さいれしかし一時的の交際わいやよ（松江市松江分五二八の四賢豆紀道子）

○誌友の姉さま、私も女子文壇の愛讀者の一人てあります、何卒地方の名所繪葉書や、地理、歷史の參考になる樣な繪葉書等と、永久的交換を願ひます（滋賀縣野太郡物部村大字大門字野田美子）

○誌友の皆樣、私も本年から文壇の愛讀者となりましたからよろしく御交際願ひ申上ます（岡山縣勝田郡高取村爲本治郎丸むつよ）

○誌友おもかげに居らしやる青森角田きし子姉上樣よ貴女は產馬地妾は產牛地の產れて同じく天下の畜產地てす其好て御地產馬事業の狀況を委しく直接音信を以てお知らせ下さいませんか伏して御依賴致します若しお望なら美しい中のしやしんを送呈致します（備後比婆郡帝釋村市岡まさ子）

○女子文壇の御愛讀の妾の親愛なる未見の諸姉樣方よ妾は筑紫の果に住んて居る十八歲の名もなき賤しきものてありますが和歌や圖畫が非常な好てありますの片田舍て良師がなくて困りて居ます幸に女子文壇の御陰て其等を習ふことが出來て喜んて居ます希くば四方有情の姉樣方よ此薄幸な妾を憐んて御玉章及繪葉書和歌等の御交換が願はしひ以後は宜敷賴みます（熊本縣菊池郡菊池村北宮六四佐藤なほ子）

○誌友の皆樣妾は片田舍の淋しい所に住むものてすがあはれと思召になつて行末長く交つてやると云ふ御方があつから御手紙下さい必ず御返禮致しますそして寫眞の交換を願ひます永久御見捨なく御交際を願ひます當地て出來た雜誌ありますから御入用の方は美しい繪葉書て申こんて下さい必ず差上ます先着十人迄おくれし御方はなにか送ります（山口縣大島郡蒲野村小山田中谷孝子）

○本誌愛讀の諸孃樣方妾は田舍の淋しき所に住むふつゝか者なれど今回より皆樣の御仲間入をゆるされましたからなにとぞ末長く御交際を願ひます（群馬縣佐波郡玉村町角淵村山田さく子）

○私事此度女子文壇談話會に入會致したく存じ候まゝ何卒よろしく御願ひ申上候（福井縣武生町先織さだ子）

○私しは先達て記者樣にお賴みして交際欄へ載せて戴きました處が四方のお情け深きお方より繪葉書、菓、又は寫眞などお送り下され誠に難有御禮申上ます一々御禮狀を差出した積りてありますが數多き事なれば洩れなきも計りがたくに付き紙上てお詫び致しますまた筆蹟を見て男の方と思つたものへはお返事を差上なかつたから惡しからずお赦しを願ひます（滿洲大連關東都督府郵便局官舍第三號福長高子）

○宇都宮旭町にいらしやる江面柳花子樣同町柏崎喜久子樣方よ私も昨年の今頃は宇都宮大寬町に居りましたよだから何だかお懷かしふ御座いますよどうぞ此の後繪葉書御玉章の交際を願ます（甲府清水もとじ子）

○私事每年春と夏とには海濱又は溫泉の方へ參りますんてすが何卒諸孃樣の中に其土地又は其所に住在の御方に限り御願致し申ますがなるべく京都より近國を望み候繪葉書の交換を願申ます（京都市小川二條上ル安田初子）

○誌友の姉樣方よ妾は昨年の十二月より病氣の爲め病院のベッドに呻吟致し漸く本年の一月中

仰に退院しましたので有難き姉樣方より送られし玉章や繪葉書に御返禮するのがもれたので誌上て御わび致します何卒惡く御思召下さらない樣願ひますよ（福岡縣嘉穗郡穎田村木浦岐山田よし子）〇諸孃樣私は潮風荒き筑紫のかたほとりに住むふつゝか者てすが文壇愛讀者となりましたから行末永き御交りを願ます編物や細工物が好なので種々雛形が取つてありますから何卒御交換なし下さい（大分縣西國東郡吳崎村護城憩代子）〇記者樣私は昨春より愛讀者となりましたが元より投書致したう御座いますから直して下さい又諸姉樣の仲間入なれがひます私は先月迄郡の學校に居りましたけれど卒業して今は田舍にて淋しく暮して居ますから出雲大社の近くてすから諸姉樣御連れ立ちて御越し下さい（出雲國簸川郡灘分村兒玉威子）〇本誌愛讀者諸孃よ私は音樂が一番好むの、とうぞ、いろ〳〵の歌の交換を私はペイナリンを習つて居りますの御諸孃て寫眞繪はがきの御交換を願ひます寫眞先着五名へ美しき子供博覽會のスタンプ付エハガキ一組、繼の夫人氣質、糸女近著通俗治療法を御送りいたします、何れの交際も永久の御方にかぎりますよ（大阪市北區西堀川町濟三側筋叶つる方木枯女史）〇誌友諸姉樣より朝顏の種子を御申越し遊ばした御方の内に開封に親書を入れて下すつた方が應々御座いまして迷惑に存じました一寸御注意までに！、まだ澤山殘りてゐますから御望みの方は郵劵三錢御封入遊ばして御遠慮なく御申越しを（岐阜縣安八郡木村逸）〇諸友の姉樣妾くしは高等女學校に通學して居る不束者てすが何卒諸姉樣の御寫眞や御玉章繪琴書等の御交換を願ひます送くつて下さつた御方にははづかしながら妾くしのをすぐ返禮致しますから亦第二號短文秀逸の丹後の春子樣妾しも丹後の者てすから何卒貴女樣の御住所を知らして頂戴よ（丹後國加佐郡由良町一九〇中垣露子〇滿天下の姉樣方妾は父も母もない憐れな境遇な者てす只今から誌友のお仲間入りを致します何卒よろしく御交際を願ひます（神奈川縣都筑郡中里村市ケ尾杉浦裕子）〇皆樣の内て新歌謠のすきな方が有ますならば書いて送つて下さい又寫眞やお文もお願ひ申ます私も新歌謠や寫眞や玉章や御返しいたします（福島縣嘉穗郡穗波村大字秋松林まつゑ）〇皆樣不束なものですが何分よろしく末長く御交際願ひます繪はがき玉章の御交換御願申ますよ必ず〳〵繪はがきて御返事致しますそれから福井市の梅田正子さんあなたは彩畫おすき私も少しばかりならいましたのよ末長く御交際して下さい（東京市日本橋區本石町三の十五金子染子）〇朝顏の種子三十二人の方へ差上ました、まだ五十人程の方へ差上げる分を持つて居ますから盡きない限り差上升からドシ〳〵御申込遊ばせ、こは獨り朝顏の面目のみかは、こを培ひし我妹の本意になむ、但郵劵四錢御封入を、かしこ（美濃大垣局下森はなか）〇皆樣暫く御無沙汰しましたれどうもすみません實は私れ去年の十一月に上京して今本鄕の湯島四丁目に居りますのどうぞ皆樣以前通り御交際を御願ひ致します（本鄕湯島四丁目廿番地菁莪園内山田千代子）〇京都の岩淵國子樣御住所くはしく本欄へお教へ下さいあなたの御芳名はかれ〳〵誌上て承りましたどーぞ永久に交り下さい諸姉樣もよろしくれ手許にある晴香疎影文藝倶樂部新小說菊花壇歷史辭典學生社會等と露姬亂髮枕草紙講義藤村詩集はつ姿等と交換下さいお送り下さらば直ぐ送附致します（千葉縣印旛郡富里村中澤佐藤ひて春子）〇誌友諸姉よ私は本年一月からの愛讀者て此の南信の僻地に自然の景を友として居無學のものですがあの渺々たる諏訪湖？炊煙雨に迷ふ湖邊の夕漁舟の霧に咽ぶ湖上の曉ましてや曇りがちなる他鄕にうらぶれし私何卒諸姉の雪の朝日の夕床しき文の御便りを御願致します皆々樣と御文通を願います終りに記者樣の御健康を祈ります（諏訪郡下諏訪町淺野蕗子）〇誌友の皆樣に、あの關東下行の落花の雪にふみまよふ、「かた野の春の櫻がり」を御存じてゐらしやる方がございましたら何卒致へて頂戴絹の栞て御願申上げます（日向國兒湯郡木城村吉原登美子）〇女子文壇は女子がお互に文章を磨く機關てあるに男子の人が女名てこれに掲載されることがありますが小說をよく出される日本橋小林櫻花さんなんと云ふ方は二十六七にもなる男の方てす女の群へ假空をつかつて顏出しをなさるのは卑怯てすわ（日本橋小林君子）〇お手紙や地方新聞の交換をお願ひ申外五者迄に（工業の花）一部差上升（伊豫溫泉郡道後湯之町三〇七得能光惠）〇私淋しさの餘り交際求めましたら記者樣の御隆樣にて直さま御信切な同情深い方々が端書にて御慰め下さいましたほんとに嬉しくて今迄の厭世なさまは何へやら消へて希望の光胸に滿ちました茲此後何卒願ひます（越後三島郡深才村稲田樣山傚子）

寫眞交換

○寫眞御送り下さいました方には先着十三名を限り詩集塔影玉蟲白玉姫花がたみ不如歸の歌金色夜叉の歌耶蘇の戀暮笛集二十五絃夏花小女悲戀悲歌七ッ星青海波の十三册を順次差し上げます但し男子の方は御斷り（近江國甲賀郡泉村百貳拾五番地杉田あや子）○妾は淋し〳〵片田舍の貧乏娘て御座りますが、天性編物が好きてすから御交換を願ひます又御寫眞造花の類も但し男の人は御斷り（下總印旛郡富田村大和萩原はな同濟宮きわ）○編物、栞、寫眞、繪葉書の交換を願ます、寫眞の裏に皆さんの御名前を認めて送つてくだされた御方には妾の寫眞に編物を添へて御返禮申上ます。そして永久に信書の往復を願ます（新潟縣南蒲原郡見附町高野平之介方山田哲子）○女子文壇誌友諸姉様、妾は父母なく、姉妹なき世に薄運極まる悲しき孤女てすが、永久の親友として御交際下さる御方を尋ねるのてす、何卒情を籠められし御寫眞を惠まれ、親愛なる御交際を願ひます（京都市下京區本町新六丁目吉田玄蕊方松井靜枝）○編物雑誌ても何てもよろしくございます故何卒御交換下さいませ（山口縣阿武郡萩町中津江照子）○皆様どうぞ造花をお送り下さい編物も交換致します、當地の繪葉書五組ありますから先着の方へ差上ます、以後とはに御交際を願ます（横濱根岸町三、一、三、一井上久子）○手製のロザッキ、シチリ其他種々の編物を御惠送下さい妾よりは文藝雑誌にて御返禮致します又繪葉書玉章などの御交換を願ひます（下野國那須郡烏山町字仲町小林平右衛門樣方藤井よし子）○四方の諸嬢よ妾は昨年初月よりの愛讀者てすが今後永久に御交際を仰ぎたいのよ就きましては本月二十六日丁度妾の生日に當りますが諸嬢様方の御寫眞を飾りて祝儀致さんと思ひ居まして今度正月寫影しました妾の寫眞二十枚出來上りて居ますが諸嬢方の御寫眞を送くつて下さつた方へは妾の寫眞に美麗な繪葉書一組と編物一個宛添へ返禮致します妾の寫眞が二十枚丈てすから先著の順に二十名丈てすよ尚以後永久に御願ひ致します（肥前國杵島郡北方村樋口御幸）○若し島根島取廣島岡山兵庫縣の諸嬢の中て十五六才の方て高等女學校の一二年の方々御寫眞を御惠み下さい御禮には先着五人の御方には松江名所繪葉書一組に醜い私の寫眞とを進上します（松江市奥谷町小林繁樹様方永原たけ）○誌友の娘様よ私しは今寫眞が六枚に編物が澤山種類を持て居りますから美はしき寫眞か繪葉書を下さい先着の御方から順に差上ます（山城國綴喜郡奈島藤本龜吉方藤本千代子）○全國の諸姉上様妾は山深き寒村に住する不幸者てす友もなく其月の本誌を只一の友て否師てす姉上様憐れと思召何卒〳〵自己の御寫眞御送り下されよ伏て願ます先着指名に妾の寫眞小説雛子か夏子を一册そえて御禮申ます後著の姉上様には妾の寫眞に婦人世界一册つゝそゑて御送り申ます何卒どし〳〵御惠みを決して決してとりがちは致しません神にちかつて（京都府綴喜郡草内村山岡秀子）○妾は愛讀者の一人てす諸嬢様宜しく御交際を願ひます、そして私の寫眞が十枚只今御座います故十六七才の誌友の諸嬢と寫眞交換しとう御座ひます妾の生れは新潟縣てす在東京の御諸姉と御交際したし（小石川區第六天町五四鈴木方淺井濟）○私は女子文壇愛讀者の一人て明けて十七歳てすがお同年の諸姉さん交際深く交換を願いますよ寫眞もすト繪葉書もサー（長野縣下高井郡日野村更科三○四中村まさじ）○天下の諸姉様、妾も今年から本誌愛讀者となりましたから、よろしく御願申上ます。ついては寫眞、繪はがきの御交換を願ひます寫眞の分て先着より四番まで妾の寫眞御禮として差上ます其他の諸姉様にも相當の御禮いたします（岡山縣岡山市富田町三宅三平内小川仁子）○妾は寫眞交換と繪葉書交換とは何より好くのてあります、て之れ迄は種々の事をして見ましたが如何にも自分の思通りに成つた事はありません其れは外てもありません、交換をする人毎に一葉ぎりて後は交換をしなかつたり或は返事が無くたり致しましてこれを一年或は二年三年もつづけて居る者は一人もありません、て妾は非常に之れを殘念に思ふのてす、若愛讀者の中に寫眞繪葉書或は玉章編物等の交換を二年三年或は永の旅の後迄もつゞけて、くれる御方がありますれば妾は喜ぶのてあります、若し御同意の御方の望みなれば不動尊の御みくじ、を戴いてあげます（下總不動成田局内日吉倉石橋濟子）

圖書換讀

○私し琵琶歌小説不用てすから皆さんの中て澄子と御寫眞とを御送付下されば必ず送付致します（近江國丈上郡稲端村平田別院平田道子）○諸友諸姉の内て。牛月集。銀鈴。みだれ髪。春草。夜容花。離れ小島の曲譜。及び他少々、詩集何んても宜しいから私所持の舶來綺譜書や。アルバム

ヤウオブチースの詩。不如歸。いざさらば。平和の羅音。ヘガキ文學。慷慨家列傳。俳諧萬葉集。星。墳墓。等と交換して下さいませんか（伊勢龜山東町二二〇山川すい子）○皆様のお手許に「伯爵夫人」「不如歸」「夏子」「鋒子」及び三十五年より前の年の女學世界増刊 以上いづれのものにてもよろしいがお持の方ございませぬか お送り下したお方には三十六年後此月迄の 女學世界及び婦人界、女鑑、婦人世界、女子文藝、文藝倶樂部、少女界各一册づゝ ありますがいづれなりともお好みの書て御禮致します （近江蒲生郡安土村佐々木ひで）○左記の書籍御入用の御方は極上等の端書にて御申越下さい 夏子、伯爵夫人、澄子、相思怨、露子夫人、病戀愛、寃黑戀風、幻影、新生涯、女學生、コブシ、祖國怨、鋒子、青春、緣不緣、金色夜叉、破戒の何れか一册づゝ（山口縣玖珂郡高森櫻木君子）○皆様の中に、新聲（何號でもよし）みだれ髮、戀衣、舞姫等御持ちの方は相當代價或は私所持の、小說都の花、文藝倶樂部數册、近、戰時畫報數册と御交換下さいませんか御照會は下名へ何卒 （横濱市根岸町地藏坂上吉川香都子）○大分縣東國東郡西安岐村の宮野直子さん、私も音樂が大すきですから、どうか唱歌の御交換を願います （備後國雙三郡君田村香川内にて住田政子）○諸姉様の內女子文壇第二卷第十號御不用におはさば何卒妾のおみなへし月と御交かん遊ばして被下ませ （兵庫山陽官舍柳田白百合子）○皆さん妾、作文新辭林、會玉篇、不用てすから金色夜叉、寃黑戀風、詞海と御交換下さい、また草若葉、詩美幽韻、無弦弓があります、外の詩集と 交換下さい、又給葉書も（名古屋市赤塚町板橋方あや子）○皆様の中て金色夜叉の歌思ひ出の記小公子 お持の方は內國史略、女子文壇、美文作法、東京遊學案內、未だ見ぬ親文藝倶樂部の內何れとても お取換下さい相當に差上げます （岩代國耶麻郡鹽川村字仲町佐藤古登）○誌友の皆様、私は朝晴、玉蟲、聖書婦人、小說後の戀、楓の下かげ、才媛 文集四册持て居りますから皆様の青海、 造花指南の本なれば何にても御交換下さいまし （神戸市脇の濱久野柾子）○誰方様ても藤村詩集花光月影文學全書の第二編及び十六夜日記悲劇ォルレアンの少女御不用の方は御惠送下さいませんか 私は貧家に生れましたので 充分の御禮は致しかねますが書籍雜誌か拙けれども 編物又は寫眞名所給はがきいづれにても 御好みにより差し上げます（伊豆三島町長谷加藤爲子）○手許に不用になつた、 中學文壇十四册轉がつてゐますから去年發行の秀才文壇七册お送り下さつた方に 悉皆差上げますわ （和歌山縣海草郡西和佐村大字岩橋池見俊子）○諸孃様エハガキ交換の仲間に入れて下さい （兵庫縣武庫郡灘大石三木次助方小田垣利子）○皆さんの中で伯爵夫人、花紅葉、青山白雲、日曜講壇お持の御方は不如歸、肉彈、我と人、家庭と學生等と御交換を願ひます 其他大家の著書の倫理歷史地理書や いろ〳〵の御書物送つて下さい御損はかけず 必と相當以上のもの送ります妾に書が澤山ありますのよ （越前國坂井郡三國町玉井參方梅垣香子）

剽竊詩文の注意

▲第二號の分 ○京都、大津こう子、の二等賞新體詩「煩悶」は新聲六卷五號（三十四年）所載折竹蓼峰氏の作 ○京都、白的女史（同人）の評論文三等賞「自殺と道德」は 大町桂月の文集『筆の雫』より ○栃木縣、榮谷德子の三等賞新笑話 『初奉公』は 本年一月の文藝週報一口話より何れも剽竊 ○白鎖の秀逸和歌は薫園選の『凌霄花』より○平子の秀逸書簡文『人への返し』は第二明治才媛文集第一八六頁より剽竊

▲第壹號の分 ○安房、暮の山の二等賞和歌『花の魂』は薫園選 凌霄花より、○同 白百合、水哉子、夢の家の秀逸和歌『春の女神』始め四首とも同上萬朝報に掲載の作より剽竊せるものにて何れも大井秋月なるものゝ變名 ○藤野靜子の秀逸俳句『掛取り』はヘガキ文學より、又抒情文三等賞『失明の跡』剽竊なる旨報告

○今回の注意者芳名は ○上毛 谷の水○牛込
手島花帆 ○中國 一賤女○芝 愛讀者○茨城
林六花 ○大阪 いな子○上總 さゝ舟○膽振
白雪女 ○飛騨 二帝會○上總 天肥通女○石
狩 雪染女 ○茨城 なでしこ

記者通信

▲注意 郵便用文欄の 新設、誌友倶樂部に紹介欄を置いたことなどそれ〳〵 別項を見て注意して下さい又原稿しめ切其他の事について、お尋ねの方が澤山ありますが懸賞品目と共に 投書規則は裏表紙の內側にありますから是も見落さないやうにして下さい。

新出版

▲『呪はれたる女』　題して現代生活の裏面觀察と云ふ、著者元祿姉さんの何人なるやは知られど、其觀察には奇警なる點あり、文章は神出鬼沒、讀者を掌上に弄して或は泣かしめ、或は笑はしめ、或は怒らしむ、亦之れ一個の覆面せる女武者、舌の切味を試すに似たり（定價三十五錢、博文館）

▲『若き日』　著者平野萬里は新詩社の秀才にして長短詩を善くす、本卷には短詩のみを蒐めたり試みに其中の一二首を拔かむ「子安貝底つ岩根の新室に波の音きく春は來りぬ」「一月や障子を引きつ君とあること」には寒き風入れぬこと」「君を抱きふたゝびあらぬ歡樂を怖れ身ふるひまた今に慣る」など、全册四百十一首、亦盛なる哉（製本費四十五錢、銀座佐久良書房新版）

▲『新式漢文捷徑』　文字、音韻、語句、文章、漢學の五章に大別し、漢文を習得せんとするものに便宜を計りたる書なり、條理整然、順序好く編纂したる處は新式の名に背かず、著者は竹內松治（定價六十錢、日本橋本石町寶文館）

懸賞品に就いて

懸賞價格に就いては四等五等の外變りはありませんが、其品物に就いて範圍をひろくしました、成るべく宜しい品で、諸嬢の御入用になるやうなものを選んで差上やうと思ひます、別項裏表紙の懸賞項目を御覽下さい

文藝遊戲　女子新聞

（第二を募集す）

文藝遊戲として募集した「女子新聞」は本號に發表してある通りですが、次の文藝遊戲は「花ことば」で四月の紙上に發表します、其次の文藝遊戲は又「女子新聞」ですが今度は第二とします、本號に發表した「女子新聞」の原稿も澤山餘つてありますから第二の時、是も加へて其中から選拔します、扨て原稿の種類は論說、文苑（和歌、俳句、新體詩、川柳等）小說、通信、短評、雜報、廣告など本月の「女子新聞」を見て下さらば大抵は分るでせうから詳しく申しません、雜報と小說には假名をつけて、一行十五字詰、餘り長くならないやうに氣をつけて下さい、（〆切は本月二十日です）

女子新聞懸賞當選者

○「運動界」　大阪北堀江橋北　小山　漣子
○「雉の鳴き聲」　陸奥田名部町　菊池みつ子
○「賣家廣告」　小石川　翠　子
○「解羅廣告」　京都神泉苑　英　香
○「縣道の修覆」　但馬　早崎　芳月

右の五名には豫定の通り懸賞として東京で發行する新聞紙一ヶ月分、贈呈いたしますから、お望みの新聞紙を申込んで下さい、住所姓名の判明しない方は其時併せて本社へ明かに通知して下さい。

雜報

▲文藝同好會の景況　豫定の通り去月十一日、本社の河井醉茗が會主たる文藝同好會は芝浦て開かれた當日面白かつたのは磯萍水のお伽噺、可笑かつたのは喜劇の一幕、美しかつたのは胡蝶の活人畫、うまかつたのは小島烏水の演說、寒かつたのは會場、よく雪が積らなかつたのです、本社よりは野口社長及記者坂下類花の二人が出席しました。

▲女子大學の新計畫　實驗實習の設備を完うせん爲め今回理科敎室二棟を增築し又生徒の增加に伴ひ新たに七棟の寮舍を建築するの議を決し既に化學敎室と寮舍二棟は落成し其他は目下工事中なるが尙來學年よりは國文學科を文學部と改稱すると。

▲奧村女史叙位　故奧村五百子女史に對し特旨を以て正七位の位記を賜はりました。

▲模範的寄宿舍建設計畫　日本基督敎靑年會にては目下男女學生墮落の原因が不規則なる下宿生活にありとし萬國基督敎靑年會總幹事モットー氏の寄贈金十萬圓を以て東京大阪神戶等十ケ所に模範寄宿舍を建設すと

▲地方女學校風聞　靑森縣立第三高等女學校を靑森市內に設置し明年四月より開校の件認可、三河岡崎町に町立高等女學校を設置したき旨文部省へ申請の件は近日許可の筈、又京都淑女高等女學校は田島校長の熱心なる經營に依り本年四月には更に擴張して生徒百三十名を入學せしむる由因に同校の敎師は凡て女子にて同校卒業生は無試驗小學正敎員たるの特典を有すと、次に府下淀橋町角筈なる精華學校は四月より高等女學部一年生三十名二年生二十名三年生二十名其他の諸科に若干名を募集す尙同校には軍人遺族の爲めに特科の設ありと。

When they came to the home of their father-in-law, he gave them beautiful gifts and he said, "No one ever had such marvels before as the lantern and the fan, but in my home there are two more precious things than these, and they are my two dear daughters." (end)

彼等二人が嫁した家へ歸りましたら，舅は美しい贈物を二人に與へて申ますには,『此提燈と扇程珍らしいものは誰も持つて居ないが,併,此家には此等の寶より尙遙に貴重なる二つの者がある，即ち我愛する二人の嫁だ』

（終）

An Honest Answer.

The teacher was trying to explain the meaning of the word "conceited," which had occurred in the course of the reading lesson. "Now, boys," he said, "suppose that I was always boasting of my learning—that I know a good deal of English, French, German, for instance, or that I were very good looking—what should you say I was?" A straightforward boy stood up from his seat and said; "Sure, sir, I'd say you were a liar, sir!"

正直なる返答

某教師が讀書の授業中に「自負」と云ふ言葉がでゝきましたゆゑ子供等に說明を試みて,

「皆さん,假令ば,私が常に自分の學問を鼻にかけて,英語,佛語,獨乙語が非常に上手だとか，或は，自分を美男子とか云ふ樣なる事があれば，私を何んと云ひますか』と問ふと，正直な男の子が席より立つて「慥に,先生,私は先生を虛言者(ウソツキ)だと申ます」と答へました。

In a certain school a class was studying irregular plurals of nouns, when it was asked by the teacher to give the plural of "child." Then it was that little Mary who knew how it was at home, promptly answered, "Twins."

某學校て，不規則複數名詞を勉强して居る組がありました. 其受持教師が，子供の複數を問ひましたら，小いメリーは自分の家で實見して居るものですから，直ちに雙子と答へました。

They watched eagerly. Another piece of paper came all by itself and lay on the ground between them. There was a picture on it of a tree covered with white blossoms. Two women stood under the trees, gathering the blossoms.

ぬから．御覧なさい」。

熱心に眺めて居ると，又紙が自然に出てきて二女の間に擴がりました．其紙上には白花の咲て居る木の下に，二人の女が花を集めて居る繪があります。

"The two women are yourselves," said the voice, "and the blossoms an the gifts that the father-in-law will give you when you go home."

「其繪の婦人は貴女達て，花は家に歸ると舅殿が貴女方へ下さる進物である」と聲が云ひました。

"But I cannot go home, "the younger wailed, "for I cannot carry wind wrapped in paper."

「併私は家へ歸られません．紙に風を包む事が出來ませんもの」との若き女の言葉。

"Here is the paper, and there is always plenty of wind. Why not take them?"

「爰にチャンと紙があり，何時でも風があるのですから，何故利用しないのです」

"Indeed, I do not know how,' the younger woman answered sorrowfully.

「本當に如何利用したらよいのか存じません」と悲しそうに女は返事しました。

"This way," said the voice. Some long, light twigs flew to the paper. It folded itself, over, under, together. It opened and closed, and it waved itself before the tearful face of the younger woman. "Does not the wind come to your face?" asked the voice, "and is it not the fan that has brought it? The lantern carries fire wrapped in paper, and the fan carried wind wrapped in paper."

「こうすると宜いのです」と聲が云ひますて，長細い輕い小枝が紙の中に飛び入つたかと思ふと，紙は自然に幾重にも疊まり，開たり閉たりして，女の泣顏をあほいていました．「風が顏にあたりませんか」と聲が尋ねます，「扇が其風を持てきたのでしよう？提燈は紙に火を包むし，扇は紙に風を包みました」。

And scarce she lifted
a wondering look,
And with childish scorn
she answered,
"Nay!
I am too old, too old to play!"

The Lantern and the Fan.

(Continued)

"It is easy enough to wrap fire in paper," answered the voice. "Here is a piece of paper. Now watch." They watched, and the strangest thing in the world happened right before their eyes. There was no one to be seen, but a piece of paper appeared on the ground and folded itself into a Japanese lantern. "Now put a candle inside," said the voice, "and you have paper holding fire. What more could you ask?"

Then the older woman was happy, but the younger was still sad. She saw now that fire could be carried in paper, but surely no one could carry wind. "O dear voice," she cried, "can any one carry wind in paper?"

"That is much easier than to carry fire," replied the voice. "for wind does not burn holes, Watch."

顔さへ上げて
輕蔑の
色をば聲に
あらはせり，
「否我遊ぶ
歳去ぬ」と。

提燈と扇

（つゞき）

「火を紙に包む位な事は容易な事だ」，と同じ聲が返事をして，『サー爰に紙の切端があるから，見て居りなさい』と云ひました。觀て居ると實に不思議な事が眼前に起りました。誰も姿は見えないのに地上に紙が現はれて，それが自然に日本の提燈に化しました。『サー蠟燭を中へ御入れなさい，直に火を包んだ紙が出來たのでしようさ，此上何がいりますものですか？』との聲がありました。

其處で，年長の婦人は喜びましたが，若い方はまだ悲みに沈んでゐました。彼は今火を紙に包む事が出來るのを見は致しましたが，風は到底誰も持つて行く事が出來ぬと思ひ，『ヲー難有い御聲樣，紙に風を入れる事の出來る人間がありましようか』と呼びました。

『其は火よりも容易である，風ならば燒け穴を造る心配も入ら

英　文（三）

津田梅子閲　河井道子述

Old and Young. 　　　　老　幼

Long ago, on a bright spring day,	いにし昔の	春の日に
I passed a little child at play;	遊べる童子に	我逢へり。
And as I passed,	過ぎ行く我を	
in childish glee,		樂しげに
She called to me,	共に遊べと	呼び止めぬ。
"Come and play with me!"		
But my eyes were fixed	然ど我目は	
on a far-off height		暮れぬ間に
I was fain to chinb	昇らん山を	
before the night;		みつむれば
So, half-impatient,	稍々うるさげに	
I answered, "Nay!		いらへけり。
I am too old,	「否我遊ぶ	
too old to play."		歳去ぬ」と。
Long, long after,	幾春過ぎし	
in Autumn time—		秋の頃
My limbs were grown	昇るもかたき	
too old to climb—		老の身の
I passed a child on a pleasant lea,	我は牧場に	
And I called to her,		小女（ワラベ）みし。
"Come and play with me."	共に遊べと	
But her eyes were fixed		我呼べど
on a fairy-book;	彼は讀書に	餘念なく

此社告は愛讀諸孃の精讀を望む

懸賞募集課目（第參卷より改定）

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

甲種 ◎叙事文 ◎抒情文 ◎評論文（各半紙廿四字三十行以内）◎短篇小說（半紙總かな付廿四字六十行內）◎新體詩（半紙總かな付十句以內）

乙種 ◎郵便用文（半紙廿四字詰）◎和歌（半紙一首）◎俳句 ◎新歌謠（全上）◎短文（半紙かな付廿四字五行）◎新笑話（半紙半分十六字詰）◎圖畫（一寸の二寸風俗景色）（但日本紙の薄きもの）

別種 ◎文藝遊戲（半紙十六字詰）◎誌友俱樂部（半紙二十一字詰に認めらるべし）

「此賞品は甲乙種以外のものを呈す」

▲都て各項とも課題は隨意▼

↓（毎月十五日投稿〆切）↑

奬學懸賞品

（品目改正す）

甲種	第一等	賞金屬品類……價格金拾圓
	第二等	吳服物類……價格金參圓
	第三等	小間物類……價格金八拾錢
	第四等	便利の圖書切符……金五拾錢
	第五等	同……金三拾錢
乙種	第一等	絹張洋傘……價格金五圓
	第二等	帶止、半襟類……價格金壹圓
	第三等	文房具類……價格金五拾錢
	第四等	便利の圖書切符……金貳拾錢
	第五等	同……金拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ懸賞品贈呈すべし、右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を明細に通知ありたし

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ゐ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は「原稿在中」の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年四回 二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

册數		郵税共
一册（大増刊號）	前金拾錢	前金拾壹錢
八册（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二册（一年分増刊除く）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六册（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

郵券代用は必ず壹割増

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は壹七貳九番です
○爲換料、通信料、書留料其他一文も入らず安全の送金法
此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年二月廿六日印刷
明治四十年三月一日發行

無比廉價 金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍
發行所 東京市京橋區大鋸町十、十二番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社
特約賣捌元○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂



醫學博士
瀬川昌耆先生賞詞

幾多賣藥中内外に名聲を轟したる中將湯の婦人諸病に偉効ある事は產科婦人科專門醫學博士諸氏の證明に徵して明なり余も本劑に關して多數の子宮病「ヒステリー」月經不順等諸症者に服用せしめし結果着着良好の成績を得たることを實驗せり故に余は「中將湯」は婦人藥として最良の者たるべきを確信す

中將湯

見よ

主治功能

●子宮病　●血の道　●逆上痛頭　●腰足冷込
●下腹痛み　●胸先差込　●白血長血　●こしけ
●婦人神經　●氣ふさぎ　●癇高ぶり　●夜眠られず
●產前產後　●古血の滯　●難產流產　●水腫
●月經不順　●月經滯り　●月經痛み　●血ぶとり

此外

凡て子宮血の道產前產後月經不順より起りし諸症に用ゆれば血のめぐりを調へ帶下を止め鬱を開き自ら心氣を爽快ならしむ



定價

一日分十錢	二週間一圓十錢
四日分卅五錢	三週間一圓六十錢
一週間六十錢	五週間二圓五十錢

本舗へ御注文の方は病人の御容體詳しく御申越あれ

注意　持藥として御服用の御方は五週間分御求め被下候得者至極御德用に候

中將湯本家　東京日本橋通四丁目　振替貯金口座壹六八〇　津村順天堂本店

中將湯本家　大阪堺筋大寶寺町南　振替貯金口座參壹六貳　津村順天堂支店

（東京秀英舍印刷）